御徒町樹里ちゃんがゆく

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
御徒町樹里ちゃんがゆく

【Ｎコード】
Ｎ２７６２Ｊ

【作者名】
神村律子

【あらすじ】

メイドの御徒町樹里ちゃんの集大成です。一話完結なのでどこからでもお読みいただけます。樹里ちゃんの職歴をご堪能下さい。そして、サブキャラ達の右往左往振りもお楽しみ下さい。そして第二部が始まります。「名探偵杉下左京」ですが、あの漫画のパロディではありません（汗）怪盗ドロントというキャラが登場しますが、決して「猫目三姉妹」のパクリではありません。樹里ちゃんの元ネタの主人公です。そして遂に樹里が出産。子供の名前は瑠里です。

どうぞよろしく。

主な登場人物

御徒町樹里（おかちまち　じゅり）
　このお話の主人公。時空を超え、活躍（？）する。超美少女。但し極度の天然。

杉下左京
　元警視庁の警部。今は探偵。

亀島　馨
　警視庁の刑事。杉下の部下だった。その後いろいろあり。

神戸蘭（かんべ　らん）
　警視庁の警部。杉下の元彼女。目に特徴あり。

宮部ありさ
　警視庁の女性警察官だったが、退職。杉下とは高校の同級生で、何か弱みを握っているらしい。

船越なぎさ
　樹里の友人。友人だけあって、かなり似ている。

ドロント
　世界的大泥棒を名乗る、謎の女性。年齢、国籍、スリーサイズ不詳。実は樹里の元ネタの主人公だったりする。部下にヌート、キャビーの二人の女の子がいる。決して娘ではない。

その他
　樹里の家族。母は由里、姉は璃里（りり）、妹達は真里（まり）、希里（きり）、絵里（えり）。

警視庁の同僚で加藤警部。名前は真澄だと最近判明。
璃里の夫は竹之内一豊。なぎさの従妹の大村もみじ、その母親の大村美紗。
樹里の雇い主の五反田六郎。妻の澄子、娘の麻耶。

特捜刑事「相方」　樹里ちゃん登場

俺の名前は、杉下左京。

警視庁特別捜査班の班長だ。

肩書きは長いが、要するに「雑用係」である。

もう長く犯罪捜査に加わった事がない。

何故なら、大失態をやらかしたからなのだ。

その大失態はいつの日かお話することもあろう。

そんな暇な特捜班には、たった一名だけ部下がいる。

彼の名前は亀島馨。

「私の名前は、かめしまかおる。動物の亀に普通の島、そして、与謝野馨の馨です」

それが彼の口癖であり、自己紹介である。

何故与謝野馨を引き合いに出すのか、どうも意味が分からない。

と言うより、彼の行動自体が意味不明だ。

彼は特捜班の部屋では、必ず烏龍茶をわざわざ一杯ずつ作る。

茶葉を専用の急須に入れ、適温に冷まされたお湯を注ぐ。

茶葉は最高級、それも「黒烏龍茶」でないといけないそうだ。

俺から見れば、実に下らない拘りだ。

そんなどうでもいい事に気持ちが行ってしまう「お荷物」的存在の特捜班に、遂に捜査参加の時が来た。

有名芸能人が殺害され、その屋敷で働いていたメイドが容疑者として逮捕されたのだ。

俺達は、そのメイドの取り調べを命じられた。

どうしてそんな仕事が回って来たのか、その時はまるで見当がつかなかったのだが、彼女を取り調べてみて、捜査一課の連中の底意地の悪さに気づいたのだ。

容疑者の名前は御徒町樹里（おかちまち じゅり）。

「私は天然です」

とプラカードを持って練り歩いていそうなくらい、殺人とは縁がなさそうな容姿だ。

こんな大人しそうで、屈託のない笑顔をしている少女のような娘

が、本当に殺人犯なのか？

俺は納得がいかないまま、彼女の取り調べをした。

「氏名は御徒町樹里。間違いないね？」

「はい、多分」

「多分て、どういう意味かね？　自分の名前がわからないのか？」

「いえ、自分の名前は自分でつけた訳ではないので、多分です。断言は出来かねます」

何だ、この女は？　どうしてこんな笑顔全開で、これほど人をバカにした事が言えるんだ？

俺はたった一度のやり取りで、御徒町樹里に苛ついてしまった。

するとその様子を見ていた亀島が、

「左京さん、ダメですよ、そんな怖い顔をしては。女性への接し方が間違っています」

と頼みもしないのに勝手に自称「助け舟」を出して来た。

亀島はニッコリと微笑んで、樹里を見た。

「では、次の質問です。貴方の職業は？」

「多分メイドです」

「多分？　どうして多分なのですか？」

亀島は俺と違い、苛ついたりはしない。微笑んだままで尋ね返した。

「私、メイドの意味がよく分からないのです。ですから、多分なのです」

「なるほど。それは正しい判断です」

亀島は更に尋ねた。

「貴方は、被害者の近藤睦美氏の屋敷に、近藤氏が殺害されるわずか3日前に来ていますね。何故ですか？」

御徒町樹里はニコッとして、

「呼ばれたからです」

俺はもう少しでこの女をぶん殴ってしまいそうだった。

俺の怒りに気づいた亀島が、素早くそれを押さえてくれた。

何とか始末書を免れる事が出来た。

「いえ、そういう事をお尋ねしているのではないのです。貴方は何故、近藤氏が殺害される3日前になって、急に屋敷に来たのですか？」

さすがの亀島も、顔を引きつらせていた。御徒町樹里の「天然」は後ろに「記念物」が付きそうな勢いである。

しかし、その程度で苛ついている場合ではなかった。

彼女はもっと凄い「天然」を炸裂させて来たのだ。

その「天然」が、これだ。

「急にと言われましても…。だんだん来るなんていう器用な事は出来ませんので」

今度は俺が亀島を止めた。

亀島がここまで取り乱したのを見たのは初めてだ。

奴は呼吸を整えて椅子に戻り、御徒町樹里を見た。

「質問を変えます。では何故貴方は、近藤氏の屋敷に急に来る事になったのですか？」

そして、俺達は御徒町樹里の真の凄さを知る事になる。

樹里は再び笑顔全開で、

「前にいたメイドの方が、だんだんやめないで急にやめてしまったからです」

俺と亀島は、互いを止めた。

さすが長年同じ班で仕事をして来ただけの事はある。

まさしく間一髪で俺達は御徒町樹里を殴るのを回避した。

畜生。一課の連中が、こいつの取り調べを俺達に回した理由がわかったぜ。

いつか仕返ししてやる。

そう思った。

ところが、だ。

数日後、実に意外な事が判明した。

真犯人がわかったのだ。

真犯人は、御徒町樹里が近藤睦美氏の屋敷に来る前にいたメイドだった。

彼女は近藤氏の金品を無断で持ち出し、闇ルートで売りさばいていたのだ。

それを近藤氏に知られ、首にされた。

せめてもの温情で警察に通報しなかった近藤氏を逆恨みしての犯行だった。

今回は我が特捜班の大金星。

御徒町樹里の証言を元に、亀島が極秘に捜査をして、前のメイドの正体を暴いたのである。

俺達は、刑事部長に呼び出された。

俺は、誉められると思って、ウキウキしながら部長室に入った。

しかし、全く違っていた。

亀島の捜査を独断専行と罵られ、御徒町樹里の重要証言を一課に報告しなかった事を叱責された。

俺は呆然として部長室を出た。

亀島が声をかける。

「左京さん、落ち込まないで下さい。今夜、祝杯を2人だけであげましょう。樹里さんの無実を証明できた事、真犯人に一番に辿り着けた事を」

「ああ」

俺は亀島に作り笑いで応じ、特捜班室に向かった。

樹里ちゃん、警視庁へゆく

御徒町（おかちまち）樹里（じゅり）は世間一般で言うところの「メイド」です。

しかし当の本人は、自分の事をメイドとは思っていないようです。

彼女は先日、無実の罪で逮捕され、大変な目に遭うところでした。

しかし、運良く優秀な刑事に助けられ、冤罪を免れたのです。

樹里はその時助けてくれた刑事を忘れられない自分に気づきました。

何故忘れられないのだろうと考えてみました。

でも、わかりませんでした。

ある日、素直が服を着て歩いているような性格の彼女は、その疑問を解消するために、警視庁に赴きました。

そしてまた、樹里の「天然」が炸裂し、警視庁は大騒ぎになるのです。

御徒町樹里は、警視庁の前にいました。

挙動不審な彼女を警備の警官が見つけ、近づきました。

「何か御用ですか？」

「いえ、用はないのです。ただ、亀島さんに会いたいだけです」

警官は、この妙な娘の言動にイラッと来ましたが、前にも顔を見た事があるので、

「亀島？　特捜班の？」

「あ、確かそうです。そこです。その人に違いありません」

「わかりました。今連絡してみますので、そのままお待ち下さい」

「はい」

警官が無線で連絡を取ります。

その間中ずっと、樹里は瞬きもせず、ジッと待っていました。

「？」

警官はその異様な行為にギョッとし、無線を切ると樹里に尋ねました。

「どうしたんですか？」

樹里はゼイゼイと呼吸を荒立てて、

「そのままお待ち下さいと言われたので、そのまま待っていました。結構大変です」

「……」

まさしく目が点になる警官でした。

そんな事がありましたが、樹里は無事警視庁の中に入れてもらい、ロビーで亀島を待ちました。

「御徒町さん。どうされましたか？　何かあったのですか？」

亀島が現れました。樹里はようやく顔見知りに会えたのでホッとしたのか、

「ああ、亀島さん。この前の夜は凄かったです」

と驚愕の言葉を投げかけました。

「えっ？」

周囲の職員達が一斉に亀島を「不埒者」というレッテルを張り付けるように睨みました。

「いえ、あの、何の事ですか？」

亀島は冷たい視線を四方八方から感じ、慌てた様子で樹里に言いました。

「忘れたんですか。私は忘れられませんよ」

ますます冷たい視線が亀島に集まります。

とうとう人だかりまで出来てしまいました。

「御徒町さん、ここでは何ですから、特捜班の部屋で話しましょうか」

「えっ、2人きりになるのですか？」

亀島は汗まみれになり、樹里を連れて奥へと進みました。

黒烏龍茶を飲み、樹里はまるで温泉にでも浸かったかのような顔になり、ソファに沈み込むように座っています。

「御徒町さん。ロビーであんなことを言われたら、妙な誤解をされてしまいますよ。勘弁して下さい」

亀島も黒烏龍茶を一口飲み、樹里と向かい合って座りました。

「5階？　ここは1階ですよね」

「いや、そういう事ではなくてですね…」

亀島は、いっそこの女を真犯人として逮捕するべきなのではないかとまで思ってしまいました。

「ところで、私に御用なのですか？」

「ああ、はい。そうなんです」

「どんな御用です？」

亀島は真顔になって尋ねました。樹里はニッコリして、

「わからないんです」

「はァ？」

杉下さんなら撃ち殺しているな。亀島はそう思いました。

「私、あれからずっと貴方の事が忘れられなくて。どうしてなのかわからないので、ここに来ました」

「私の事を忘れられないのですか？」

何となくニヤける亀島。樹里は天然娘ですが、美人なので、そんな事を言われれば、大抵の男、特に亀島のような独身男性はニヤついてしまいます。

「はい。どうしても忘れられなかったのです」

「そ、そうなのですか」

照れる亀島。端から見ると、少し気持ち悪いです。

「亀島さんにお会いして、ようやくその理由（わけ）がわかりました」

「はい」

亀島は居ずまいを正して、樹里の次の言葉を待ちました。

樹里はまた笑顔全開で言いました。

「私の携帯電話、返して下さい」

その後、亀島馨は、杉下左京に一週間の休暇願を出したそうです。

樹里ちゃん、吸血鬼に襲われる

御徒町樹里（おかちまち　じゅり）はメイドです。

本人にはその自覚はありませんが、間違いなくメイドです。

彼女は警視庁を混乱に陥れてから数日後、とある古びた洋館に住む一家のところで働く事になりました。

「行ってらっしゃいませ、旦那様」

一部のコアなマニア達が一番言ってもらいたい言葉で送り出されるのは、洋館の持ち主である傘井氏です。

年齢は不詳で、子供はなく、妻と２人暮らしです。見た目は５０代といったところでしょうか。

珍しい苗字ですが、本名だそうです。

彼はある企業の経営責任者だとの事ですが、樹里は傘井氏が何をしているのか知りません。

彼はいつも夜になると出かけ、明け方前に戻ります。

樹里は傘井氏が帰宅するのを出迎えた事はありません。

それはもう１人のメイドの仕事なのです。

もう1人のメイドと樹里は、今のところ顔を合わせた事がありません。

彼女は樹里が起きる前に帰り、樹里が寝てからやって来るという不思議なシフトで勤務しています。

今日もまた、日が沈んでから出かける傘井氏を送り出す樹里。

彼女は傘井氏が見えなくなるまで深々と頭を下げていました。

「樹里さん、お夕食の支度はできまして？」

傘井氏の妻である絹子さんが声をかけました。樹里は絹子さんの方を向いて、

「はい、出来ております」

「そう。ありがとう」

樹里はずっと疑問に思っている事を尋ねてみました。

「旦那様はいつもお夕食を召し上がらずにお出かけですが……」

「ああ、会社で食事をしながら会議なのよ。貴女のお料理を食べられないのをいつも残念がっているわ」

絹子さんは微笑んで答えました。

「そうでございますか。ありがとうございます」

樹里はニッコリ笑ってお辞儀をしました。

普通のメイドなら、何故いつも旦那様は夜出かけて明け方前に戻るのか疑問に思うものですが、普通でない特殊なメイドの樹里は、そんな事は全然疑問ではないようです。

彼女は、傘井氏が自分の料理を食べたくないと思っているのではないかと心配していたのです。

ちょっとズレた感覚の樹里らしい反応です。

「樹里さん、主人の事、他所では話してはいけないわよ」

絹子さんは食堂に向かう途中で言いました。樹里はまたニッコリして、

「はい、奥様。誰にも話しません。ご安心下さい」

「いいお返事ね」

絹子さんは微笑み返しました。でも、何故か目が笑っていません。

そして、ある日の明け方前の事です。

「いつまで我慢させる気だ？　私はもう気が狂いそうだ」

傘井氏は血走った眼で絹子さんに怒鳴りました。

「そんな大声を出さないで。あの子が目を覚ましてしまうわよ」

絹子さんは冷静です。しかし傘井氏は、

「もういいだろう。あの子の身体には、十分我が一族の秘伝の薬が巡っている。その血が一段と美味になる薬がな」

と舌なめずりして言いました。

「はいはい。好きになさって。私は後3日は我慢した方がいいと思いますけど」

「もう十分さ！」

絹子さんの呆れ顔をものともせずに、傘井氏は樹里の眠る部屋へと駆け出しました。

「まさしく生娘の生き血よ。あの娘、間違いなく男を知らん」

傘井氏はどうやら吸血鬼のようです。

危ない。樹里が危ないです。

樹里は熟睡していました。

多分出川〇朗が来ても起きないでしょう。

彼女は生き血を吸われ、吸血鬼の眷属となってしまうのでしょうか？

「フフフ」

傘井氏は低い声で笑うと、ドアを開きました。

不用心な事に、樹里は鍵をかけていないようです。

「その首筋に……」

傘井氏が樹里のベッドに近づき、枕元に顔を近づけた時です。

「ぎゃあああああッッッッッ！」

叫び声。

「ひっ、ひっ、ひーっ！」

ベッドの脇に腰を抜かしている傘井氏の姿がありました。

どうやら叫んだのは傘井氏のようです。

「はむ？」

目をこすりながら樹里がムックリと起きました。

「おはようございます、旦那様。どうなさいましたか？」

まるで状況を把握していない樹里は、ホンワカした雰囲気で尋ねました。

傘井氏はヒクヒクと顔を引きつらせて、

「な、何で、枕元に、ニンニクが、置いて、あるんだ？」

「はい、よく眠れるようにです」

樹里は笑顔全開です。傘井氏は引きつったままで、

「そ、それはタマネギだろう！」

「そうなのですか？　さすが旦那様は博学でいらっしゃいますね」

樹里はまだこの状況の異常さに気づいていないようです。

「ええい、そんなもの、気合いではね除けてやる！」

傘井氏はニンニクを枕で払い落とし、樹里に襲いかかりました。

「うごわぁぁぁぁぁッッッッッ！」

傘井氏が樹里の首筋に噛みつこうとした時です。

「どうなさいました、旦那様？」

傘井氏は思わず樹里から離れました。

「な、な、な……」

言葉になりません。

樹里は首に十字架を下げていたのです。

傘井氏は危うく十字架に触れてしまうところでした。

「お、お前、クリスチャンなのか？」

傘井氏が驚愕して尋ねると、もっと凄い驚愕の答えが返って来ました。

樹里はポッと頬を赤くして、

「いいえ。私は樹里ちゃんです、旦那様」

「……」

傘井氏は戦意を喪失し、しゃがみ込んでしまいました。

「あっ！」

樹里がベッドから出て、窓に駆け寄ります。

「旦那様、今日もいいお天気ですよ」

「や、やめ、やめ……」

しかし遅かったのです。

樹里はカーテンを開け放ちました。

途端に降り注ぐ朝日。部屋の中が見る見るうちに明るくなります。

「ひーっ！」

傘井氏は太陽の光をこれでもかというくらい浴びて、断末魔をあげ、灰になってしまいました。

そして、樹里は職を失いました。

でも命は助かったのでした。

樹里ちゃん、喫茶店で働く

俺の名前は杉下左京。

警視庁特別捜査班の班長だ。

本当は雑用係のような事をしているのだが。

先日、あの真面目な亀島が突然休暇願を出した。

「別に俺達には仕事がある訳ではないから、好きなだけ休んで楽しんで来い」

そう言ったのだが、何故か奴の顔色は冴えなかった。

何かあったのだろうか？

確か、経理の連中の話では、女性が尋ねて来て、それから様子がおかしいようだ。

誰だろう？

あいつに彼女はいないはずだが。

俺と違って、内向的でモテないからな。

今度所轄同士の合コンがあるらしいから、誘ってあげよう。

きっとあいつの事だから、振られて落ち込んでいるのだろう。

亀島が休暇でいないと、只でさえ暇な特捜班は更に暇になってしまう。

俺は庁舎を出て、行きつけの喫茶店に向かった。

カランコロン。

喫茶店のドアらしい音がする。

俺はこういう古めかしいところが好きだ。

もう何年も通い詰め、すでにマスターとはすっかり顔なじみだ。

いつもの窓際の席に着く。

外を忙しく歩くビジネスマンの姿を見るにつけ、自分の仕事のあまりの情けなさに悲しみがこみ上げそうになる。

そばにあるラックから新聞を取り、四コママンガに目を向けた時、ウエイトレスが水を持って来た。

「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりですか？」

俺はその声に何となく聞き覚えがあったのだが、マンガのオチを見ている最中だったので、顔を上げずに告げた。

「いつもの」

「いつものですか？　そのようなものはメニューにございませんが」

ウェイトレスはイラッと来るようなおっとりした声で答えた。

「いつものって言えば、いつものだろ？」

俺は堪りかねてウエイトレスを見た。そして凍りついた。

「やはりそのようなものはこのメニューにはございませんが」

と言って笑顔全開でこちらを見たウエイトレス。何でこいつが？

「あ、あんたはあの時のメイドさんじゃないか！」

俺は場所柄も弁えずに叫んでしまった。

店内の全員が俺を見た。

「お客様、私をご存じなのですか？」

そのウエイトレスは、つい先日、冤罪になりそうなところを我々が助けた御徒町樹里だった。

「忘れたんかい！」

俺は彼女の記憶の片隅にも残っていない事を知り、ムカッとした。

言ってみれば、俺はこの女の命の恩人同然の存在なのだ。

それなのに、覚えていないとは……。

情けない。

「俺だよ、俺。杉下左京。警視庁の特捜班の」

樹里はニコッとして、

「ああ、亀島さんの部下の方ですね」

「違ーう！　亀島が俺の部下なの！」

「そうなんですか」

何で喫茶店でこんなにイラつかなければならないんだ。

面倒臭い事になりそうだ。俺はここでいくら主張してもラチが開かないと思い、

「ブレンド。マスターに杉下左京だと言えば、わかるよ」

「はい」

見た目は可愛い分、あの天然は致命的だ。

世の中には不思議な人間がいるもんだ。

マスターはどうしてあんな女を雇ったのだろう？

この店、潰されるぞ。

……。

しかし、その心配はないようだ。

バカはたくさんいる。

店内は、あの女の容姿に騙されて、たくさんの若い男達がいた。

お前等、一度でいいからあいつとサシで話してみろってんだよ。

思い出すだけでイラつくあの取り調べの日。

「お待たせ致しました」

樹里が戻って来た。

「おう」

俺はカップを受け取り、口に運ぶ。

「あれ？」

コーヒーがいつものと違う。

「何だこれ、缶コーヒーみたいな味がするぞ」

俺は匂いを嗅いだ。やっぱり以前と違う。

「むっ？」

いつもの喫茶店のつもりで入ったので、内装をよく見なかったが、今良く見てみると、怪しさ満点だ。

何だ、この雰囲気は？

喫茶店じゃないぞ。

奥の席は囲われていて、中の様子がわからない。

まさか？

おいおい、いつの間にカップル喫茶になったんだ？

俺は席を立ち、カウンターに近づいた。

「お客様、お帰りですか？」

樹里が笑顔で近づいて来た。

「おい、あんた、悪い事は言わない、この店をやめろ」

「えっ？　それはもしかしてプロポーズですか？」

樹里は顔を赤らめて突拍子もない事を言ってのけた。

「そんな訳ないだろ！　怪しいからやめろって言ってるんだよ」

俺は小声で言った。しかし樹里は俺の話を聞いていなかったようで、

「コーヒーとテーブルチャージで五万円になります」

とコンビニのレジのように軽く言った。

「ご、五万円？」

ボッタクリバーならぬボッタクリ喫茶かよ。こんな昼間から、何て事してるんだ？

「おい、ここはボッタクリの店か？」

俺がカウンターの向こうにいる男に尋ねると、

「お客さん、妙な事言わないで下さいよ」

と凄んで来た。

虫の居所の悪い俺の、ストレス解消の標的に丁度いい。

そいつは俺を締め上げようとして近づいて来たが、逆に腕をねじ上げた。

「いてて！」

「警察だ！　静かにしろ！」

その途端、様々な格好をした男女が飛び出して来て、逃亡した。

何なんだ、ここは？

結局、俺は応援を呼び、店を捜索した。

どうやら薬も売っていたらしい。

樹里は大丈夫なのだろうか？

何故か心配している自分に驚いた。

彼女は確かにど天然だが、美人だし、性格は良さそうだ。

心配したくなるのも仕方ないだろう。

薬物検査の結果、彼女は陰性だった。

勤め始めてまだ三日目だそうだ。

もう少し遅ければ、薬漬けにされて売り飛ばされていたかも知れない。

「助けて頂いてありがとうございました」

警視庁のロビーで、俺は樹里に礼を言われた。

「警察官として当然の事をしたまでさ。礼なんていいよ」

「そうなんですか？」

間近で見ると、やっぱり可愛い。

度を過ぎた天然でなければ、間違いなく口説いている。

「あの」

樹里は何故かモジモジしながら、小さな紙切れを俺に差し出した。

「今度お電話下さい。これが連絡先です」

「お、おう」

俺は酷くドキドキして、それを受け取った。

「失礼します」

樹里は笑顔で立ち去った。

俺はしばらく彼女の後ろ姿を見ていたが、紙切れの事を思い出して特捜班室に走った。

ロビーなんかで見ていたら、誰に覗かれるかわからないからな。

「さてと」

はやる気持ちを抑えながら、俺は紙切れを見た。

「……」

それはキャバクラの名刺だった。

源氏名はジュリー。写真付きだ。結構可愛く撮れている……。

いや、ダメだ。

もう本当に知らん。あいつがどうなっても関係ない。

俺は呆れ果てた。

……。

しかし、もう一度名刺の住所と電話番号を確認してしまうのは、男のサガであった。

樹里ちゃん、キャバ嬢になる

御徒町樹里は「メイド」でした。

彼女はある夫妻の屋敷でメイドの仕事をしたのを最後に、点々と仕事先を変えました。

彼女が次に勤めることになったのは、「キャバクラ」です。

樹里はそこがどんな仕事をするところなのかよくわからないまま、面接に行く事になりました。

そして面接日当日です。

樹里は面接場所であるキャバクラへと行きました。

「お名前は御徒町樹里さんですか？」

面接の相手は店長です。彼は履歴書を見ながら尋ねました。

「はい、多分」

樹里は笑顔フルスロットルで応じました。店長はギャグでも言ったと思ったのか、

「真面目に答えて下さいよ。貴女は御徒町樹里さんですね？」

「はい、多分」

「何で多分なんですか？」

店長はイラッとして尋ねました。樹里はそれでも笑顔満載で、

「名前は親がつけましたので、私には確証がありません」

と妙な返答をしました。

店長は職業柄、ワケありの女性達をたくさん見て来ています。

きっとこの子も過去を知られたくないのだろうと勝手に思い込み、それ以上は突っ込みません。

「わかりました。それで、今まではメイドをされていたようですが、当店のようなところに勤務経験はないのですか？」

「はい」

「勤められそうですか？」

「はい」

「よし、採用です」

店長は、樹里を見た瞬間採用を決めていました。

（この子は化けるぞ。ナンバーワンになる）

店長はそう確信していました。

そして数日後、樹里は出勤しました。

「これに着替えて」

店員に手渡された衣装は、とんでもなく肌が露出するものでした。

店員はニヤニヤして樹里を見ていましたが、

「はい、わかりました」

と樹里はいきなりその場で服を脱ぎ始めました。

「お、おいおい、更衣室で着替えてくれ。こんなところで服脱ぐなよ」

「そうなんですか」

店員は樹里の突然の「爆弾投下」に仰天し、心にもない事をつい言ってしまいました。

本当はこっそり着替えを覗こうと思っていたのです。

まさか目の前で服を脱ぎ出すとは夢にも思いませんでした。

「止めなきゃ良かった……」

後悔する店員でした。

「あのー」

早くも着替えを終えた樹里が登場です。

「ブッ」

店員は鼻血が出そうでした。

樹里の着替えた衣装は、チューブトップの超ミニスカートで、肩も胸の谷間も太腿も丸見えです。

さっきまでのどちらかと言うとダサい普段着からは想像ができない程、樹里は色っぽい身体をしていました。

「これはちょっと……」

樹里はモジモジしながら言いました。

店員は顔を真っ赤にして、

「そ、そうだな。露出が多過ぎだな」

と言って、別の衣装を取りに行こうとしましたが、

「ちょっと寒いです。おしっこが近くなってしまいます」

と突拍子もない事を返して来ました。

「お、おしっこ？」

恥ずかしいんじゃないのかよ！

店員は嬉しいような嬉しくないような複雑な気持ちでした。

そして開店時間になりました。

店長の読み通り、樹里は大人気でした。

来店客のほとんどが、樹里の大胆な衣装に釘付けです。

エロ親父達が、次々に彼女を指名します。

しかも樹里はお触りされても全く怒りません。

笑顔全開で対応します。

樹里の全開の笑顔にやられ、エロ親父達はエロを封印し、お触りをやめてしまいました。

男とは不思議なもので、嫌がられないと触らなくなってしまうようです。

でもその屈託のない笑顔に親父達はノックアウトされ、樹里は指名ナンバーワンになりました。

そして時々、

「ごめんなさい、おしっこ漏れそうです」

と立ち上がり、親父達を妙に興奮させてしまいます。

そんな樹里人気を快く思わない他のキャバ嬢達がいます。

それはまた別のお話で。

ある日の事です。

「いらっしゃいませー」

キャバ嬢達の声に迎えられて、懐かしい顔が現れました。

「あ」

樹里は席を立ってそのお客のそばに行きました。

「来て下さったんですね、刑事さん」

そう、現れたのは杉下左京。警視庁特捜班の刑事です。

店内全体がギョッとして左京を見ます。

「刑事さんはやめてくれよ。客が驚いてるよ」

左京は樹里の衣装の過激さに驚き、顔を背けてしまいました。

「ご指名は？」

店員がすかさず尋ねます。

「ジュリーさんで」

左京は顔を真っ赤にして答えました。

「ありがとうございます、刑事さん」

樹里は左京の手を取ると席に案内しました。

「だから刑事さんはやめろって……」

左京はまだ樹里を見られません。

半分夢のような状態で、左京は樹里との時間を過ごしました。

樹里はその時店長に言われていた事を思い出し、左京に尋ねました。

「刑事さん、明日同伴して下さいませんか？」

「だから、刑事さんはやめ……ど、同伴？」

左京は鼻血を吹き出し、その場に倒れてしまいました。つい、樹里を見てしまったのです。

「刑事さん、大丈夫ですか?」

樹里の声が遠くに聞こえます。

左京は意識を失いかけながら呟きました。

「俺は杉下左京……。刑事さんはやめろ」

「はい、刑事さん」

樹里は笑顔全開で答えました。

樹里ちゃん、いなくなる

俺の名前は杉下左京。警視庁特捜班の刑事だ。

とは言え、実際は捜査に参加させてもらえない情けない立場にある。

確か今日から只一人の部下である亀島馨も休暇を終えて出勤のはずだ。

いつものように俺は何も用がない特捜班室に行った。

「おはよう」

俺は先に来て大好きな黒烏龍茶を飲んでいる亀島に声をかけた。

「おはようございます」

亀島は何故か俺の方を見ずに挨拶を返した。

俺は少しだけカチンと来たが、奴が失恋したばかりだという事を思い出し、文句を言うのをやめた。

「杉下さん」

亀島は向かいの席に着いた俺に声をかけて来た。

「何だ？」

俺は落としたてのコーヒーを一口飲んでから応じた。

「私に隠し事していますよね？」

まるで浮気をした夫を問い詰める妻のようなセリフだ。

「何の事だ？」

俺は何も疾しい事がないので、亀島の顔を真っ直ぐ見たままで尋ね返した。

「トボケるつもりですか？　全部知っているんですよ」

一体何のゲームだ？　俺は何の事を言われているのかさっぱり解らないので、

「意味がわからないぞ。そんな奥歯にモノが挟まったような言い方するなよ。はっきり言え」

と椅子にふんぞり返って命令口調で言い放った。

すると亀島は、離婚届を書き終えた古女房のような顔で、

「では単刀直入に訊きますが、最近キャバクラに行きましたよね？」

俺はもう少しでコーヒーを全部吹き出してしまうところだった。

あっ、あの時の事が走馬灯のように甦って、鼻血が出そうだ……。

「そ、そんなの、俺の勝手だろ。俺がキャバクラに行ったら何か法に触れるのか？」

本当に浮気をした夫のような開き直り方だ。何を焦っているんだ、俺は？

「別にキャバクラに行った事を責めている訳ではありませんよ。問題はどうして貴方が今まで一度として行った事がないキャバクラに足を運んだのかという事なんです」

亀島が何を言いたいのかまるでわからない。

何となくだが、こいつを振った彼女はキャバ嬢だったのかと思った。

もしかして亀島は俺が元カノと仲良くしているのではないかと勘ぐっているのか？

一体どういう事なんだ？

「おい、何を誤解しているんだ？　俺はお前の元カノなんか知らないぞ」

俺は混乱のあまり、全くワケの分からない事を言ってしまった。

「元カノって何ですか？　私には彼女なんかいませんよ。杉下さんもそれはよく知っている事でしょう？」

亀島は何時になくムッとした調子で言い返して来た。

「これが動かぬ証拠ですよ。貴方の机の下に落ちていました」

亀島が机の上に叩きつけるようにして置いたモノを見て、俺は息を呑んだ。

「そ、それは……」

それは御徒町樹里のキャバクラの名刺だった。

写真入りなので、トボケる事ができない。

「貴方を見損ないましたよ。一度容疑者として顔を合わせただけなのに、いつの間にそんなに仲良くなっていたのですか？」

亀島は相当苛ついているのか、顔をプルプル震わせていた。

「刑事として最低です。これは刑事部長に報告させて頂きます」

「ちょっ、ちょっと待て。どうしてそこまでされなきゃならないんだ？　俺は何も問題を起こしていないぞ」

「起こしてからでは遅いんです」

亀島は本当に怒っているようだ。

俺はそこでようやく全てを繋ぐ事ができた。

なるほど、そういう事か。

「この前、お前を訪ねて来た女が、御徒町樹里なんだな？」

「えっ？」

亀島は、

「はいそうです」

と言っているのと同じくらいの顔色になった。

真っ青なのだ。

「そういう事か。何だ、そういう事なのか」

「な、何ですか？」

亀島は動揺していた。非常に解り易い奴だ。

「お前、御徒町樹里に惚れてるのか？」

「な、何を言うんですか！？」

まただ。

「はい、惚れています」

と言っているのと同じくらい、亀島の顔は真っ赤になった。

「誤解だよ。俺は別に彼女に好意を持っている訳じゃない。たまたま名刺を貰ったので、行ってみただけだ」

「……」

亀島はそれでもまだ俺を疑いの眼差しで睨んでいる。

「よし、今度一緒に行こう。そうすれば、お前が誤解している事が解るから」

「はァ」

やっとわだかまりが解けたようだ。亀島は落ち着いた。

「でも杉下さん」

「うん？」

亀島は容疑者を問い詰める時のような顔で名刺を俺に突きつけ、

「名刺を貰ったくらいでキャバクラに行きますか、普通？　彼女とは一度ここで取り調べの時に会っただけですよ」

「あ、ああ……」

俺は動揺していた。

御徒町樹里に惚れているのは俺も同じだ。

只、それをこいつにだけは見抜かれたくない。

「それにいつどこで名刺を貰ったんです？　どこかで会ったのです

か？」

「いや、それはだな……」

いつの間にか立場が逆転している俺は、とてつもなく焦っていた。

そしてその夜、俺達は樹里のいるキャバクラに行った。

ところが樹里はすでに店をやめていた。

俺達が自棄酒に走ったのは言うまでもない。

樹里はどこに行ってしまったのだろうか？

俺達は樹里にすっかり翻弄されている自分に気づき、ショックだった。

樹里ちゃん、新宿に現る

俺の名前は杉下左京。警視庁特別捜査班の刑事だ。

今まで役職が不明だったが、俺は警部補。

で、特捜班の班長でもある。

俺とよく似た名前の刑事のドラマがあるらしいが、モデルは俺ではない。

「杉下さん！」

まるでうっかり八兵衛のようなトーンで、只一人の部下である亀島馨が特捜班室に飛び込んで来た。

「何だ、騒々しい」

俺はモーニングコーヒーを楽しんでいる最中（さいちゅう）だったのでムッとして言った。

亀島は呼吸を整えてから、

「新宿副都心に爆発物らしき紙袋が…」

「そんなの、俺達の出番はないだろ？」

俺は亀島を一瞥して言った。しかし亀島は、

「そうでもないんです。紙袋は駅構内、都庁周辺とかなりの数発見されています。中から時計の秒針の音が聞こえているそうですよ」

「何!?」

随分と眠っていた刑事の血が沸き立つのを感じた。

「愉快犯かよ。一番許せねえ」

「防犯カメラに犯人らしき人物の姿が映っているそうです」

「そうか」

俺は革ジャンを右手に持つと、

「取り敢えず鑑識だ。その映像を見せてもらおう」

「はい」

俺達は鑑識課に向かった。

「ヨネさん、例の映像見られますか?」

鑑識課の最古参である米山さんに亀島が声をかけた。

「はい。これです」

ヨネさんが慣れた手つきでマウスをクリックすると、モニターに映像が映った。

「これが犯人のようです」

俺と亀島は凍りつき、思わず顔を見合わせた。

犯人らしき人間の映像。

その犯人と思われる人物は「メイド服」を着ていた。

顔ははっきりしないが、体型と髪型からすぐに誰なのかわかった。

「そんな……」

亀島が思わずそう呟いた。

俺も同じ気持ちだ。

惚れた女が「爆弾魔」かも知れないのだ。

「あの、どうしました？」

ヨネさんが俺達の様子が変なのに気づいて言った。

「ああ、何でもないんだ、ヨネさん。忙しいのに悪かったね」

俺は亀島を急き立てて逃げるように鑑識課を出た。

「杉下さん、あれ……」

「言うな。裏を取りに行くぞ」

「は、はい」

俺も亀島もテンションが下がってしまい、捜査に行く気力を失いかけていた。

だからこそ、自分に鞭を入れた。

まだ犯人と決まった訳じゃない。

もし犯人なら、俺達の手で止めたい。

そして、俺達の手で確保したい……。

以前彼女が容疑者となって逮捕された時、住所が記録されたはずだ。

俺は亀島にそれを警視庁のホストコンピュータから探させた。

他の連中が気づく前に何としても……。

俺は改めて思った。

こんなに心を奪われた女は今までにいないと。

「彼女の住所はそのままですね。でも、ここにいるかどうか……」

亀島は後ろ向きだ。しかし俺は、

「そこにいなければ、犯人の可能性が高まる。ならば尚の事俺達で確保するんだ」

「わかりました」

ようやく俺の思いが通じたのか、亀島はいつもの顔に戻った。

俺達はあるマンションの最上階に来ていた。

彼女がこんな高級マンションに住んでいるなんて驚きだった。

インターフォンのボタンを押す指が震えた。

もし、ここに住んでいなかったらと思うと正直怖かった。

「はーい」

彼女の声だ。俺はホッとしたが、

「警察です。ちょっとお話を聞かせていただけますか？」

と続けた。

「そうなんですか」

いつものトーンで彼女は応じた。

ロックが解除され、ドアが開いた。

「どうぞ、亀島さん、刑事さん」

何となくその言葉に怒りがこみ上げたが、隣でニヤついている亀島を見て抑えた。

玄関に入ると、そこに御徒町樹里（おかちまち じゅり）がいた。

以前と全く変わらない笑顔で。

「どうぞお上がり下さい」

「いや、すぐ済みますから」

俺は折れてしまいそうな心に活を入れて言った。

「そうなんですか」

樹里は心なしか寂しそうに見えた。いや、思い過ごしだ。

「今、新宿近辺で爆発物と思われる紙袋が多数発見されています」

亀島が切り出した。

「そうなんですか」

「現場にある防犯カメラの映像にメイド服の女性が映っていました」

亀島は悲しそうに言った。

「あ、それ、私です。カメラで撮られていたのですか？　恥ずかしいです」

「はあ？」

俺はこうもあっさり犯行を自白するとは思わなかったので、ショックというより、脱力してしまった。

「あんたが爆弾を仕掛けたのか？」

俺は遂に一番訊きたくない事を尋ねた。

「爆弾？　ハンバーグですか？」

「違ーうッ！　あの紙袋の中身の事だ」

俺は一瞬デジャブかと思った。

「あれは時給八百円で配ったものです。ハンバーグではないです」

樹里は笑顔全開で言った。俺はカッとして、

「ふざけるな！　ハンバーグの話なんかしてない！　配っただと？　誰に頼まれた？」

俺の剣幕に樹里はビックリしたようだが、

「今度開店する時計屋さんにです。皆さん、置いて行ってしまったですね。悲しいです」

「……」

俺達は脱力した。

誰も悪くない。

こんな偶然があるのかと思う。

時計屋は新装開店のために販促品として時計を配ろうとした。

御徒町樹里は雇われて時計を配った。

受け取った通行人はいらないのでその辺に置いて行ってしまった。

しいて言えば、ところ構わず紙袋を放置した連中が悪いのだが。

それでも逮捕するほどの事でもない。

とにかく何事もなくて良かった。

そして何より、樹里が爆弾犯でなくて本当に良かった。

しかし、俺達は本当にこのままでいいのだろうか？

それが一番の心配事だった。

樹里ちゃん、キャバクラを辞める

元メイドの御徒町（おかちまち）樹里（じゅり）はある町であるキャバクラに勤めていました。

ある日、彼女は店長室に呼ばれました。

「失礼致します」

樹里は妙なところでメイドの頃の習慣が抜けず、ドアを開けるなり深々と頭を下げました。

「悪いね。そこに座って」

店長はソファを指差しました。樹里は、

「はい」

と返事をし、ソファに腰掛けました。

何故か店長は辛そうな顔をしています。

「君がこの店に来てくれるようになってから、売上が二倍に増えた。この不況下では信じられない数字だ」

「そうなんですか」

樹里はニコッとして応じました。店長は樹里の向かいに座り、

「君には本当に感謝している。今の給料の二倍出しても惜しくないと思っている」

「そんなに頂いても、私二倍は働けません」

樹里は笑顔フルスロットルで言いました。

「いや、そういうことじゃなくてね……」

樹里の変化球には慣れたはずの店長でしたが、まだ慣れ切っていないようです。

「それで、非常に言いにくい事なんだが……」

店長は俯いてしまいました。

「早口言葉は私も苦手です」

樹里の危険球まがいの返しに店長はより辛そうな顔になりました。

彼は樹里を見て、

「早口言葉なら良かったのだが、君にとっても嫌な話なんだ」

「注射は嫌です」

樹里は何を勘違いしたのか、突然そう言いました。

「そういう嫌なのではなくてね」

店長は樹里の笑顔を見ていられなくなり、立ち上がって樹里に背を向けました。

「君にこの店を辞めてもらいたい」

「そうなんですか」

樹里のトーンは変わらないままです。店長は樹里の顔を見ることができません。

「君の人気をやっかんだ他の女の子達が、君を辞めさせないのなら全員で辞めると言って来たんだ」

樹里の返事がありません。店長はさすがにショックで言葉も出ないのだろうと思い、

「本当に申し訳ないと思う。しかし、いくら君が指名ナンバーワンでも、他の女の子二十人と同じだけ働く事は不可能だ」

樹里は何も言いません。店長は続けました。

「給料の他に慰労金として同額を支給するので、今日で辞めてもらえないだろうか？」

店長は意を決して樹里を見ました。

樹里は目をウルウルさせていました。

店長は罪悪感に押し潰されそうになりました。

「承諾してもらえるかな、御徒町さん？」

店長はそれでも店の将来を考え、心を鬼にして尋ねました。

しかし、樹里の答えはメガトン級の破壊力でした。

「ごめんなさい、店長さん。寝てました。もう一度お話して下さい」

店長は幽体離脱してしまったようにしばらく動きませんでした。

こうして樹里はキャバクラを辞める事になりました。

樹里を追い出した女の子達は大喜びしました。

でも次の日に凍りつきます。

樹里がいないと知った多くのお客達が、そのまま帰ってしまったのです。

あの刑事も帰ってしまいました。

結局そのキャバクラはそれから一ヶ月で閉店してしまったそうです。

樹里ちゃん、アルバイトをする？

俺の名は杉下左京。警視庁特別捜査班の警部補だ。

俺は精神的に酷く疲れていた。ある事件とある女のせいで。

少しでもこの疲れを癒そうと思い、休日を利用し、ＥＴＣを使って普段は来ないような群馬県の山奥に釣りに出かけた。

嘘だと思われるだろうが、群馬県の士似神村（しにがみむら）という村に「女神湖」という湖がある。

その湖には幻の魚である「千麻千香緒（ちまちかお）」がいると言われている。

俺はその魚を釣るつもりはないが、釣れたら面白いなと思い、その湖に行く事にしたのだ。

唯一の部下である亀島馨は同行していない。

どうもあいつと一緒だと不愉快になるからだ。

奴に言わせると俺の思い過ごしらしいが。

遂に俺はその女神湖に着いた。

想像以上に遠かった。そして誰もいない。

ここまで辺鄙な場所とは思わなかった。

途中で「この先ガソリンスタンドありません」の看板にギョッとし、一リットル百五十円というボッタクリまがいの料金で給油し、

「この先には、コンビニもないですよ」

の脅し文句にビビり、大量の食料と飲み物を買わされてしまった。

だから田舎は侮れない。

「ほお」

俺は湖の透明度に驚き、持っていた高級ライターを落としてしまった。

「あああ！」

人が聞けば笑うだろうが、そのライターはそれなりに高く、それなりに使い心地がいい代物だったのだ。

俺は沈んで行くライターがしばらく見えているという残酷さに耐え切れず、湖面から目を逸らし、車のライターで火を点けようと歩き始めた。

その時だ。

ザザザザーッと水の音がした。

「何だ？」

俺は河童でも現れたのかと思い、振り返った。

するとそこには、金色に輝くローブを身にまとった美しい女性が金の斧と銀の斧を抱えて空中に浮遊していた。

だ、誰？　どこかで見た事がある気がするが？

「貴方が落としたのはこの金の斧ですか、それとも銀の斧ですか？」

何言ってるんだ、この女は？　頭がおかしいのか？

俺は仕方なく、

「いえ、私は斧を落としてはいません。私が落としたのはライターです」

「そうなんですか」

あ！　今の一言でわかった。

「おい、あんた御徒町樹里（おかちまちじゅり）だな？　こんなところで何してるんだ？」

するとその女性はニッコリ笑って、

「貴方は何と正直な方でしょう。ご褒美として、この金の斧と銀の斧を差し上げましょう」

「いや、いらねえって」

俺は即答した。

「そうなんですか」

そう言うと御徒町樹里と思われる女はザザザザーッと湖の中に戻ってしまった。

「おーい、俺のライターは？」

返事がない。

何だったんだ、今のは？

あの女じゃないのか？

バイトで女神のカッコしてるのかと思ったのだが。

俺はバカらしくなって車に戻った。

「ああ！」

更に気づいた。

幻の魚「千麻千香緒（ちまちかお）」も反対から読むと「おかちまち」だ。

バカにしやがって！

癒されに来たはずが、もっと疲れてしまった。

誰か助けてくれーッ！

樹里ちゃん、未来へゆく

西暦二万千九百九十年、人類は絶滅の危機に瀕していた。

アンドロメダ星雲から突如飛来した謎の宇宙人の大艦隊が地球に対してスベール爆弾による無差別攻撃を開始したのだ。

地球上のお笑い芸人はこの攻撃で全く面白い事が言えなくなり、次々に芸能界を引退してしまった。

このままでは人類から「笑い」が失われてしまう。

あらゆる関係がギスギスしたモノになり、嫌な雰囲気が地球を席捲した。

謎の宇宙艦隊は地球人類の絶滅を宣言し、次々に地上に精鋭部隊を降下させ、爆弾の影響を逃れたお笑い芸人達を探し出し、ツマラナーイ光線を浴びせて、面白い事を言う人間の駆逐作戦を展開した。

地球人類はその情け容赦のない攻撃になす術もなく、武力でも完全に圧倒され、希望は消えたかに思われた。

ところが。

宇宙艦隊の総司令部に驚愕の報告がされた。

「何？　スベール爆弾も、ツマラナーイ光線も効かない地球人がいるだと？」

総司令部の指揮官である将軍は激怒していた。

「そんな事があるものか！　サンプルで捕獲した地球人には百パーセントの確率で効果があったのだぞ。嘘を吐くな！」

報告をした士官は恐れおののきながらも、

「嘘ではありません。全く効き目が見られません。そのため、多くの精鋭部隊が、その人間の攻撃で倒れました」

「何と？　その者の映像はあるか？」

「はい。地球人類としてはごく普通の姿ですが、その中身は恐るべきものでした」

総司令部の巨大スクリーンに映像が映った。

「こんな地球人ごときに我らイナワラワ星人が負けるものか！」

将軍は激怒のあまり、立ち眩みがしたようだ。

「閣下、大丈夫ですか？」

「心配ない。その者の所に選りすぐりの精鋭部隊を差し向けろ！何としても地球人類を攻め滅ぼすのだ！」

「はは！」

仕官は大慌てで退室した。

地球人類の救世主的存在となったのは、若き女性。その名はジュリー・オカチマチ。メイドである。

イナワラワ星人の精鋭部隊が、彼女が働く近藤氏の邸宅に侵攻した。

「ツマラナーイ光線発射準備」

「準備完了しました！」

「連続照射！」

近藤邸をツマラナーイ光線が蔽い尽くした。

「今度こそ」

精鋭部隊は一斉に突撃を敢行した。

「いらっしゃいませ。どちら様ですか？」

ジュリーは笑顔全開で彼らを出迎えた。

「な、何で笑っている？　こいつ、何者だ？」

精鋭部隊はジュリーの笑顔に恐怖を感じた。

「我々はイナワラワ星人精鋭部隊だ。地球人類は地上のノミ同然。死に絶えろ！」

部隊の隊長がジュリーを威圧した。

「そうなんですか」

「何ーッ！？」

思ってもいない返しに、イナワラワ星人達は完全に意表を突かれ、大爆笑してしまった。

「な、何て兵（つわもの）なんだ……」

精鋭部隊は次々に気を失い、近藤邸侵攻軍は全員捕縛された。

ジュリーの活躍（？）により、イナワラワ星人の弱点が判明した。

彼らは笑いという感情を出すと、気を失ってしまうのだ。

だからスベール爆弾やツマラナーイ光線で地球人類を攻撃したのである。

弱点を知られたイナワラワ星人は地球侵略を諦め、太陽系から撤退した。

こうして地球は救われた。

イナワラワ星人の最大の敗因は地球人類には「天然」がいるのを知らなかった事だった。

ジュリーは地球人類の救世主となった。

彼女の口癖である「そうなんですか」は人類最高の預言として長く人々に愛されたという。

樹里ちゃん、事件に巻き込まれる

俺の名前は杉下左京。警視庁特別捜査班の警部補だ。

何度も言っているが、俺はテレビドラマのモデルではない。

全く無関係だ。断言する。俺の方がずっとかっこいい。

あ、すまん、それは嘘だ。申し訳ない。

俺は休日の疲れが抜けないまま、出勤した。

「おはようございます、杉下さん。これを見て下さい」

特捜班室に入るなり、只一人の部下である亀島馨が書類を差し出した。

「何だ、朝っぱらから。コーヒーくらい飲ませろ……」

そこまで言ってから、俺はその書類に目が釘付けになった。

「な、何だ、これは？」

それはまさに殺人の瞬間を捉えた一コマだった。映像はかなり鮮明で、ガイシャの顔もホシの顔もよくわかる。ホシはメイド服を着ていた。

「殺人事件の容疑者の指名手配写真です」

亀島の声が暗い。それもそのはず。その容疑者に見覚えがあったからだ。

「氏名不詳のまま指名手配とは、随分とお粗末だな？」

俺は皮肉交じりにそう言った。

「犯行の一部始終が防犯カメラに映っていたのだそうです。しかも犯人はそれを承知だったようです」

「大胆不敵と言う奴か」

お察しの通り、写真の主は元メイドで元ウエイトレスで元キャバ嬢の「御徒町樹里（おかちまちじゅり）」だった。

同じネタは使わないんじゃなかったのかよ？

俺は誰にともなく毒づきたかった。

「裏は取ったのか？」

「彼女はあのマンションにはいませんでした」

「そうか」

俺は何もかも吹っ切る事にした。

あいつは今までずっと俺達に対して嘘の自分を見せていたんだ。

これがあいつの本当の姿。あいつは殺人鬼だった。

そう思う事にした。

そうでなければ、俺は自分が崩壊してしまいそうだったのだ。

「行くぞ」

「行くってどこへですか？」

亀島の疑問は当然だ。しかし俺は、

「現場百回って言うだろ？　殺人事件の現場だよ」

と言い返し、特捜班室を飛び出した。亀島が慌てて追いかけて来た。

「今回は捜査の参加を認められていませんよ、杉下さん」

「そんなの関係ねえ」

俺は寒いギャグを言ったつもりはなかったが、亀島は俺をほんの一瞬だけ蔑むような目で見た。

俺達は処分覚悟で現場に出向いた。そこはあるビルの地下駐車場だ。

思った通り、そこには捜査一課の連中がいた。

「何だ、杉下？　お前らに協力要請は出ていないはずだぞ？」

同期の加藤が早速絡んで来た。まるで脱獄囚みたいな顔の男だ。

「お前らに協力するつもりはねえよ、バ加藤さん」

「てめえ、俺の小学校時代のあだ名をよくも言いやがったな！」

「やめろ、加藤」

割って入ったのは一課の良心である峯岸さんだ。

「杉下、いるのは構わんが、邪魔をするなよ」

「はい」

俺は峯岸さんに敬礼してから加藤にあかんべーをし、

「おい、亀島、こっちだ」

と亀島と共に防犯カメラに近づいた。

「角度的に言って、これか？」

「そうですね。しかし、考えてみると、あの映り方、カメラアングルを考えたとしか思えませんね」

亀島のその一言がきっかけだった。

「それだ！」

俺の疑問は氷解した。犯行の一部始終がそれほど見事に映るには、犯人の意志だけでは不可能だ。

ということは？

「トリックだ。これは偽装だ。管理人室に行くぞ」

「はい」

俺は神の声が聞こえたかのごとく、走った。

謎は全て解けた。犯人は管理人だ。被害者をうまく丸め込み、御徒町樹里を使って殺人現場を偽装したのだ。

そして改めて自分で被害者を本当に殺し、推理ドラマの定番であるいわゆる「何食わぬ顔」で犯行を目撃したふりをする。

どうだ、俺の推理は？

ところが、管理人室に行くとすでに管理人は逃亡していた。

しまった、防犯カメラで見ていたのか！

俺はすぐに峯岸さんに俺の推理を連絡し、管理人の確保を頼んだ。

こうして地下駐車場殺人事件は無事解決した。

しかし俺達は刑事部長に呼び出され、こっ酷く叱責された。
峯岸さんが取り成してくれたおかげで始末書は免れたが。
「あのな」
俺は特捜班室に戻る道すがら、亀島に言った。
「何ですか？」
俺は苦笑いして、
「俺達の仕事に対する意欲の源が、彼女に支配されてる気がしないか？」
「彼女？　ああ、御徒町さんですか？」
「ああ」
「何だ、杉下さんもやっぱり彼女に惚れているのですね？」
亀島が事件が解決した時より嬉しそうな顔をした。
「バ、バカ言うな！　あんなド天然女、誰が惚れるか！」
と言いながら、顔が茹でダコのようになって行くのがわかる。
「わかりやすいですね、杉下さんは」
亀島はニヤリとした。お前にだけは言われたくないし、知られた

くなかったのに！

何で俺ばかりこんな目に遭うんだ！？

俺が何したって言うんだよ！？

樹里ちゃん、昆虫になる

「最近、キリギリスさんを見かけないが、どうしたのかな?」

「アリさんはよくテレビに出ていますよね」

「いやいや、そのお笑い芸人の話ではなくてね」

私はアゲハ蝶のお蘭。この森一番の美しさを誇っている。

今私の問いかけにおかしな答えをしたのは働きアリのジュリー。

バカなのか天然なのか、それとも人を食った、あいや、虫を食った奴なのか?

かなり謎めいている。

「キリギリスさん、冬も近いというのに毎日バイオリンを弾いて遊んでいたからさ。食事大丈夫なのかと思ってね」

私は姿形はどこかの国の女医と一緒で派手で優雅だが、本当はとても心優しい性格なのだ。

しかし、多くの仲間が誤解をしている。

特にコメツキバッタのりったんは酷い。

私を魔王にした紙芝居をして、一儲けしているのだとか。

今度見かけたら肖像権侵害で損害賠償請求の訴訟を起こすと言ってやろう。

「そうなんですか」

ジュリーは会話のほとんどを「そうなんですか」でやり過ごす。

確かに便利な言葉かも知れない。

「で、ジュリーは知らないの、キリギリスさんの事は？」

「ヤギさんのことなら知っています」

そのヤギさんがキリギリスさんなんだけど。もしかして私は、からかわれているのだろうか？

「そのヤギさんの事を聞きたいのよ。知ってるの？」

「はい」

「で、どうなの？」

「ヤギさんは毎日バイオリンを弾いていました」

「うんうん。それで？」

私は少しイラついて来た。それは私が話したことでしょ！

「昨日はベートーベン、一昨日（おととい）はメンデルスゾーン、一昨昨日（さきおととい）は……」

「そんな話、聞いとらんわい！」

私は遂に怒鳴ってしまった。でもジュリーはニコニコしたままで、

「そうなんですか」

この女に尋ねた私がバカだった。

「もういいよ、他の誰かに聞くから」

「そうなんですか」

まだ笑顔だ。考えてみると、この子の笑顔以外の表情を見た記憶がない。

「でも今日は聞いていないんです。どうしたのでしょう？」

「え？」

私は飛び去りかけたが、着地し、ジュリーを見た。

「今日は見かけていないのね？」

「はい。バイオリンを弾くお時間なのですが」

嫌な予感がした。あのヤロウはいけ好かない嫌味な奴だが、バイオリンの腕だけはこの森一番だ。

そして何より、あいつが日課のバイオリンを忘れるはずがない。

何かあったのかも知れない。そう考えるべきだ。

私はジュリーを伴い、ヤギのところに行った。

「おーい、ヤギ。いるか？」

私は奴の家の薄汚れた玄関のドアを力任せに叩いた。

誰だ、今壊れるって言った奴は？

「ひーい」

何だ？　妙な返事だな。

「いるのか？」

「ふーい」

「？？？」

どうしたんだ？　私はジュリーに目配せして、ドアを開いた。

鍵はかかっていなかった。

そのオンボロなドアはギイイとヤギのバイオリンが壊れたかのような情けない音を立てて開いた。

「げっ」

私は思わず目を逸らせた。目の前にはこの世の物とは思えない光景が展開されていた。

ジュリーはどうしたことか、マジマジと見ている。

「ホーイ、ダメだよ、いきなりドア開いちゃ」

ヤギはこちらに尻を向けた態勢で、持病の「痔」の治療中だった。

「ヤギさんはお尻に可愛いプチトマトを三つ着けてます」

ジュリーの実況を私は笑いを堪えて聞いていた。

樹里ちゃん、家族を紹介する

私は亀島馨。警視庁特別捜査班の刑事。

肩書きは立派だが、実は仕事がない状態だ。

今の時代の流れだと、近い将来退職させられるかも知れない。

クビにされる前に転職先を探した方がいいかも。

そんなある日。

私は非番で、あの偏屈な杉下左京さんと顔を合わせることのない一日を過ごしていた。

自己中な杉下さんと行動していると、本当に疲れるのだ。

先日も「殺人予告状」が届いたせいで、遠く群馬までつき合わされた。

本当に「お騒がせ」な人だ。

私の事を陰で、「ガラッパチ」と呼んでいるらしいが。

どちらが騒がしいのかは一目瞭然だろう。

私は新宿を歩いていた。

恥ずかしい話だが、非番の日になると、私は彼女の行方を追っていた。

その子の名は、「御徒町樹里（おかちまち じゅり）」。

美人で、性格は穏やか。一つ難を言えば、天然の度が通常の人とかけ離れている。

でも、私は彼女の事が好きでどうしようもない。

杉下さんも好きらしいのだが、何があってもあの人にだけは負けたくない。

そして、杉下さんには彼女を好きな事を知られたくない。

私は今日も繁華街を歩き、彼女の情報を求めていた。

「え？」

うそ？　いた。彼女だ。遂に巡り会えた。一体何日ぶりだろう。

私は路地の先に立っている彼女に向かって走った。

「御徒町さん！」

彼女は私の声に反応して、こちらを見た。

え？　何か違う？

「誰だよ、あんた？」

顔は御徒町さんなのだが、言葉遣いが違う。それに何、この殺気？

「何の用だい？」

その人は凄みのある顔と声で言った。人違いだったのか……。

言われてみれば、彼女はこれほど派手な服装ではない。

「も、申し訳ない。知り合いに似ていたので……」

するとその人は驚愕の言葉を口にした。

「知ってるよ、あんた。亀島馨だろ？」

「え？」

完全に意表を突かれた。誰だ、この女は？

「何だい、その顔は？　そんなに私の事が不思議かい？」

「……」

驚き過ぎて言葉が出ない。

「ついて来な」

その女は私にアゴで指図し、歩き出した。

私は何が何だかわからないまま、女の後を追った。

女はどんどん狭い路地に入って行き、遂に袋小路に出た。

「樹里！」

女が大声で言った。え？　どういう事？

「はーい」

袋小路の一角の店の扉が開き、今度こそ間違いなく、あの御徒町さんが現れた。

「ああ、亀島さん。お久しぶりです。どうされたのですか？」

私は嬉しくて涙ぐんでしまった。

「ああ、御徒町さん、会いたかった」

「そうなんですか」

御徒町さんはいつもの笑顔で応じてくれた。

それにしても、ここに連れて来てくれた女、御徒町さんにそっくりだ。

「で、この方は？」

私はさっきからの疑問をぶつけてみた。

「母です」

「よろしく」

相変わらず、目つきが鋭い。

私はアゴが落ちそうなくらい驚いた。てっきり双子の姉妹かと思ったのに！

「お姉ちゃん、誰か来たの？」

御徒町さんの背後から現れたミニ御徒町さん三人。彼女達もそっくりだ。

「私の妹達です」

御徒町さんが笑顔で言う。同じ顔が五人……。

ここは「御徒町パラダイス」？

よし、杉下さんには御徒町さんのお母さんを紹介してあげよう。

私は冷静な思考ができなくなって、意味不明な事を考えていた。

でも、幸せだ。たくさんの御徒町さんに囲まれて……。

樹里ちゃん、就活する

御徒町樹里はメイドでした。

その後、ボッタクリ喫茶やキャバクラ等を勤め先にし、苦労をしていました。

彼女の母は占い師で、新宿で占いをしています。

忙しい母の代わりに幼い三人の妹達の面倒を見ながら、樹里は仕事を探していました。

そんなある日、突然現れた警視庁の刑事である亀島に、樹里は言われました。

「よ、よろしければ、私と付き合って下さい」

樹里はどういう意味がその言葉に含まれているのか考えずに、

「はい」

と言ってしまいました。

亀島の喜び方は異常でした。

「あ、ありがとうございます」

亀島は何故か泣いていました。樹里は不思議に思って、

「どうされたのですか？　悲しいのですか？」

「と、とんでもない。嬉しいのです」

「そうなんですか」

樹里も亀島が悲しくて泣いているのではない事を知り、ニッコリしました。

「亀島さん、ご相談があるのですが」

「はい」

亀島もニコニコしています。

「私、お仕事を探しています。何かないでしょうか？」

「仕事なんてしなくても大丈夫です。私が全部何とかしますから」

「そうなんですか？」

樹里は、亀島が何を言っているのかわかりませんでした。亀島は急に思い直したように、

「でも、御徒町さんが働きたいのを止めるのは間違いですよね。わかりました。私が探します」

「ありがとうございます」

「携帯の番号を教えて下さい」

「はい」

どうやら亀島は、すでに恋人気分のようです。

「見つけたら連絡します。あ、あと、メールアドレスも教えて下さい」

「はい」

樹里は操作がわからないので、亀島に携帯を渡しました。

「うん？」

亀島は、携帯の待ち受けに杉下左京が写っている事に気づきました。

「あれ？　これ、杉下さんですよね？」

「杉下さん？　どなたですか？」

樹里は未だに杉下の名前を覚えていないようです。亀島は心の中でガッツポーズしました。

「それは、私が働いていたお店に来た刑事さんです。杉下さんという名前なのかわかりません」

ブラボー！　亀島は心の中だけで叫ぶのが惜しいくらい喜んでいました。

御徒町さんは杉下さんの事を何とも思っていないのだ。

勝った。完全に勝った。

亀島の妄想は暴走していました。

「では、私はこれで。すぐに仕事見つけますからね」

「はい」

亀島はスキップをしながら去って行きました。

「この人、杉下さんなのですね」

樹里は携帯の待ち受けに写る杉下を見て、嬉しそうに微笑みました。

そして翌日。

樹里は杉下に会いに警視庁を訪れました。

「杉下はG県警のM警察に移動になりました」

受付でそう教えられた樹里は、ビックリしてしまいました。

「杉下さん……」

樹里は自分のこの気持ちがわかりませんでした。

そして、彼女は、G県に行く決心をしました。

幼い妹達を残して行けませんから、彼女は母に許しを得て、三人の妹達と共にG県に出発しました。

「G県でお仕事を探さなくてはなりませんね」

樹里はすでに亀島の事をすっかり忘れていました。

杉下がG県に移動（左遷）されたと知った亀島は、狂喜乱舞しました。

そして、樹里のために探した警視庁の近くのコンビニのバイトの事を話そうと、樹里の携帯に連絡しました。

「御徒町さん、亀島です」

「はい」

電波状態が悪いようです。樹里の声がよく聞き取れません。

「今どちらですか？」

「G県です」

「え？」

亀島には、「地獄にいます」の方がまだショックが少なかったで

しょう。

亀島はそのまま何も言わずに携帯を切り、昔のボクサーのように真っ白になって椅子に座りました。

「燃えた……。燃え尽きたよ……」

樹里ちゃん、G県にゆく

俺は杉下左京。警視庁の警部補だった。

今、俺はG県M署にいる。しかも副署長として。

「閑職だよ」

そんな事を聞いていたので、骨休め気分で来た。

ところがだ。

とんでもなかった。

とてつもない仕事量だ。今まで特捜班でサボっていたツケが回って来た感じだ。

俺は生まれてこの方、この日ほど判子を押し、自分の名前を書いた日はない。

指にはタコができそうだし、右手は腱鞘炎になったかと思う程痛かった。

ようやくその日の業務を終え、誰も待つ者がいない寮に向かった。

普通副署長クラスなら、運転手つきの車があってもよさそうなのだが、昨年で廃止になったそうだ。

それならついでに「副署長」も廃止にしてくれれば良かったのに

……。

俺はそんな愚痴を呟きながら、トボトボと暗い夜道を寮に向かって歩いた。

寮に到着して気づいた。

誰もいないはずの俺の部屋に明かりが点いている。

どういう事だ？

俺は走った。まさかとは思うが、泥棒か？

思えば鍵を閉めた覚えがない。

いろいろな事を想定しながら、俺はドアを開いた。

鍵がかかっていない。やばいぞ。寮長に知れたら、大目玉だ。

「誰かいるのか？」

そっとドアを閉じ、中の様子を伺う。

何故かうまそうな匂いがする。

一体誰だ？

俺は奥のダイニングキッチンへと進んだ。

「お帰りなさい、杉下さん」

その声と姿に、俺は唖然とした。

嫌な記憶が呼び覚まされる。あれは確か、士似神村（しにがみむら）の女神湖……。

「な、何であんたがここにいるんだ？」

そこにいたのは、御徒町樹里（おかちまちじゅり）とその妹三人だった。

樹里は相変わらずの笑顔で、

「寮長さんが鍵を開けてくれたので」

「そんな事を聞いているんじゃない！」

そうか、鍵は閉め忘れていなかった、と妙な事にホッとしてしまう。

「杉下さんに会いたくて、ここまで来ました。ご迷惑でしたか？」

……。

俺は気を失いそうなくらいの衝撃を受けた。

樹里が俺の名前を覚えてくれた。

いや、そこに感動したんじゃない！

「杉下さんに会いたくて、ここまで来ました」

に感動したんだ。という事は？

「ここに居させて下さい。妹達も一緒に」

「え？」

衝撃の展開だ。あの亀島が知ったら腰を抜かして一生入院だろう。

俺ははっきりわかった。

俺は樹里が好きだ。いや、愛している。

もう、隠す事はない。正直に言える。

樹里が告白してくれたんだから、俺も嘘偽りのない言葉で答えるべきだ。

ただ、妹達は少々邪魔だが。

「そ、そうか。お、俺に会いたくて来てくれたのか」

「はい」

樹里は眩しいくらいの笑顔で答えた。

「仕事が見つかったら、すぐに出て行きますから」

「あ、そ、そうなの」

でも嬉しい。樹里と暮らす。

夢に見た事はないが、想像もしなかった事だ。

「やっと、俺の名前を覚えてくれたな」

「はい」

樹里の笑顔は最高だ。ざまあ見ろ、亀島！　お前の負けだよ！

俺は得意の絶頂だった。

といいところで、まずはこれにて。

樹里ちゃん、杉下左京に告る

俺は杉下左京。

今はG県M署の副署長だ。

とんだ事になったと意気消沈していたのだが、一つだけいい事があった。

いや、今までの悪い事を全て帳消しにするくらいのいい事だ。

あの御徒町樹里（おかちまち じゅり）が、俺の住んでいる寮に現れたのだ。

一瞬、ドッキリかと思った。

しかし、そうではなかった。

樹里は俺に会いたくて来たのだそうだ。

それでもドッキリ疑惑は解けなかったが、そこまでして俺を騙しても誰も得はない。

そう思い、信じる事にした。

樹里がやって来た当日は、俺は眠れなかった。

彼女とその妹達には寝室で休んでもらった。

俺はダイニングキッチンの隅にあるソファに寝た。

それでも胸の高鳴りは収まらなかった。

あの樹里が、同じ部屋にいるのだ。

さっき、妹達と風呂に入った時は、俺は自分の中の悪魔を押さえ込むのに苦労した。

警察寮の中で覗きなんてしたら、俺の人生は終わりだ。

俺はどうして彼女にそこまで惚れ込んでしまったのだろう？

そんないい思いはした事はないのに。不思議だ。

きっと、あの子の純粋さだ。

樹里には、全く「悪」の要素がない。

完全な善人だ。

そこに惹かれたのだと思う。

そんな事をあれこれ考えているうちに、俺はいつの間にか眠り込んでいた。

俺は、またいい匂いを感じ、目を覚ました。

半身を起こすと、樹里と妹達が朝食の準備をしていた。

「おはようございます、杉下さん。朝ご飯ができましたよ」

樹里はまた眩しい笑顔で言った。俺は頭を無造作に掻きむしり、

「あ、ありがとう。顔、洗って来るわ」

と起き上がった。

今まで味わった事のないような幸福感。

こんな幸せを想像した事がなかった。

両親を早くに亡くした俺は、家庭の温かさを初めて感じた。

ありがとう、樹里。

俺は涙ぐんでしまった。そして、それを誤摩化すために顔をがむしゃらに洗った。

「杉下さん?」

俺がなかなか戻らないので、樹里が見に来た。俺は慌てて顔を拭き、

「あ、すまん、今行くよ」

「はい」

樹里は嬉しそうに微笑み、戻って行った。

俺も嬉しかった。

通じ合えている。一方的な思い込みなんかじゃない。

もう一度言ってやる。

ざまあ見ろ、亀島！　俺の勝ちだ！

「杉下さん」

樹里が食事の後、言った。俺は取り出したタバコをハッとしてしまい直し、

「あ、すまん。妹達に毒だよな」

「そうなんですか」

樹里はその事を言いたかった訳ではなさそうだ。

「もう一つ、お願いがあります」

「おう。何だ？」

もうどんなお願いでも聞くぞ。樹里はニッコリして、

「私達の母に会って下さい」

「えっ？　お母さんに？」

それは早いぞ、樹里。いくら何でも、早い。

「そんな急に会っていいのか？　もう少し時間をおいてからの方が……」

亀島に見せられたあの待ち受けの写真。樹里に瓜二つの母親だ。

「そうなんですか？」

樹里は不思議そうな顔をしている。俺はそれに気づき、

「どうしたんだ？」

と尋ねた。樹里は、

「母に会って下さらないと、困ります」

「えっ？」

樹里の悲しそうな顔に俺は胸を抉られたような思いがした。

「わかったよ、樹里。お母さんに会いに行こう。それで、きちんと話をして……」

「はい。それで、杉下さんとお母さんが結婚してくれれば、杉下さんは私のお父さんになるのですよね？」

何？　今のは幻聴か？　今、樹里は俺の事を「お父さん」て言ったのか？

全身から嫌な汗が噴き出して来た。

嘘だ。

俺は勝者ではないのか？

「私、杉下さんの娘になるのが楽しみなんです」

樹里のその言葉は、地獄からの誘いの言葉のように聞こえた。

俺の苦難はまだ続くようだ……。

樹里ちゃん、スーパーで買い物する

私の名は亀島馨。警視庁特別捜査班の刑事だ。

先日、御徒町（おかちまち）樹里（じゅり）さんがG県にいると聞いて、危うく失神してしまうところだった。

しかし、私はエリートだ。あの役立たずの杉下左京さんとは違う。精神的にも強いのだ。

あの人は本来なら首のはずだったが、私の進言で、転属ですんだのだ。

土下座して感謝して欲しいくらいだが、もう顔も合わせたくないのでどうでもいい。

ただ、気になるのは、杉下さんがG県に転属になり、その直後に御徒町さんがG県にいた事だ。

御徒町さんは何故G県に行ったのか？　それは非常に気になる。

そんな中、私達特捜班に初の大仕事が入った。

連続強盗事件の主犯と思われる男の目撃証言を得たのだ。

その証言に基づき、我々は行動を開始した。

男が目撃されたのはG県。何かの因縁だろうか？

その証言の確認を私が命じられた。

私は気が重かったが、それでも御徒町さんがそんな軽い女性ではないと信じ、G県に赴いた。

目撃されたのはG県M市内だ。ますます憂鬱だ。

あの杉下さんが副署長をしている所轄の管内だ。

一応挨拶に行かないといけない。

嫌だったが仕方がない。私は菓子折りを手に、M署に行った。

嬉しい事に、丁度杉下さんは非番でおらず、署長に挨拶してM署を出た。

これからが本番だ。仕事に入る。

M市の中央町だ。M署から歩いて五分くらいのところにある。

目撃者の家は比較的わかりやすいところにあり、付近の交番の巡査と共に訪問し、何事もなく証言を得、裏付けのために付近を聞き込みに回った。

主犯の男がこの付近をうろついていた事は確実で、つい昨日も目撃した人がいた。

これは収穫だった。やはり、刑事は足だ。靴底をすり減らしてナ

ンボなのだ。

私はすぐに本庁に連絡をとった。

電波状態が悪い。建物のせいか？

私は大通りに出て、通話を続けた。

あれ？　今のは？

スーパーから出て来た三人の女の子。

ミニ御徒町さん？　奇遇だ。

これは御徒町さんもいるぞ。

私は自分の中の高揚感を押さえ切れず、スーパーに歩を進めた。

その時、私はハルマゲドンが起こったような衝撃を受けた。

ミニ御徒町さんの後ろから、御徒町さんそのものと見たくもない杉下さんが連れ立って現れたのだ。

頭の中が真っ白になった。

「燃えたよ。真っ白な灰に……。燃え尽きた……」

まるで走馬灯のように頭の中をあのボクシング漫画が駆け抜けた。

「終わった……。何もかも……」

樹里ちゃん、メイドに戻る

俺は杉下左京。G県M署の副署長だ。

しかし、仕事と言えば決裁決裁。俺は判子突きか、と思うくらいだ。

しかも、縛りがきつく、サボる事ができない。

その上、誰かのように事件に首を突っ込んで解決するほどの熱血漢でもない。

俺の唯一の楽しみは、束の間の樹里との「同棲」。

彼女は母親と俺が結婚するのを望んでいる。

でも俺は負けない。いつか必ず樹里と……。

仕事が見つかるまでいさせて欲しいという樹里。

仕事が見つからないように祈っている俺。

毎日が忙しかったが、それでも穏やかだった。

東京の喧騒から比べれば、G県は別天地だ。

ところが、そんな平和な日常がかき乱される事件が起こった。

東京で起こった連続強盗事件の主犯の男が、俺の勤務するM署管内で目撃されたのだ。

署内が一気に緊迫したムードになった。

普段の長閑（のどか）な雰囲気は消滅した。

署長が陣頭指揮を執り、刑事課だけでなく、生活安全課まで動員しての聞き込みが始まった。

どうやら、警視庁から担当刑事が来るらしい。

俺は嫌な予感がした。

広域捜査で活動すると言えば、特捜班だ。

あの無能な亀島馨がいる。もしかすると、奴が来るかも知れない。

俺は担当者が来る日を聞き出し、休暇をとった。

すんなり取れたのは、普段の行いがいいからだ。

そして、予想通り、M署に来たのは亀島だった。

休んで正解だった。顔を合わせれば、何を言われるかわからない。

きっと奴は自分が勝ち組だと思っているだろうから。

亀島は俺の事には全く触れずに帰ったようだ。

何となく悔しいが、仕方ないだろう。

また元ののんびりした毎日に戻る。

そう思った。

ところが。

どうやら、俺の辛抱もこれまでかも知れない。

主犯の男を、刑事課の連中が後一歩で取り逃がしてしまったという。

とんでもない失態だ。

署長は激怒し、何故か俺に当たった。

おいおい。俺は捜査にはタッチしてないぞ。

陣頭指揮を執ったのは署長だろう？

と、書類を見ると、何故か責任者の欄に「杉下左京」と書いてある。

あの腐れ署長め。

俺は怒りに震え、刑事課に乗り込み、へまをやらかした班の連中を引き連れると、署を出た。

あのキャリア組の署長の鼻を明かしてやる。

昔の血が騒ぎ出した。忘れていた闘争本能が燃え上がった。

そして数日後、俺達の執念が身を結び、主犯の確保に成功した。

何故かその会見は、満面の笑みの署長が行った。

俺の活躍は、見事なまでに闇に葬られた。

官僚制なんて大嫌いだ。心底そう思った。

疲れ果てて寮に帰ると、樹里が出迎えてくれた。

「疲れたよ、今日は」

「そうなんですか」

樹里の笑顔で俺は癒された。ずっとこうしていられたら。そんな事を考えてしまう。

「あれ？」

何故か、樹里達は荷物をまとめていた。まさか……。

「仕事、見つかったのか？」

「はい。住み込みのメイドの仕事がありました」

「そ、そうか。良かったな」

「はい」

樹里は嬉しそうだ。仕方ない。夢から覚める事にしよう。

「お世話になりました、杉下さん」

樹里は、三人の妹達と同時に頭を下げた。

「お、おう。俺の方こそ、楽しかったよ」

あれ？　何だ？　樹里が歪む。どうしたんだ？

「杉下さん？」

樹里が不思議そうな顔で俺を見る。

あ。俺、泣いてる。涙で樹里が良く見えないんだ。

「わ、悪いな。目にゴミが入った……」

そう言って誤魔化そうとした俺に、樹里と妹達が抱きついて来た。

「ありがとうございました、杉下さん」

もうダメだ。俺は号泣してしまった。樹里達の体温が俺に伝わって来る。

しばらく俺は、樹里達を抱きしめ返したまま、泣いた。

やがて、樹里達は笑顔で出て行った。俺も笑顔で送り出した。

住み込みの仕事は、隣のT市だそうだ。いつでも会いに行けるさ。

こうして俺の束の間の同棲生活は終わった。

明日からは一人か。

寂しくなるな。

ううん、また泣きそうだ。

樹里ちゃん、杉下左京に惚れられる

俺は杉下左京。G県M署の副署長だ。

「若いのに、凄いですね」

事情を知らない署の刑事連中は、俺を大出世だと勘違いしている。

違うんだよ。警視庁の刑事部長の嫌がらせで、出向という名の「左遷」だよ。

でもそれを言ってしまうと、M署の人間に非常に失礼な気がするので言わない事にしている。

そして、夢のようだった御徒町（おかちまち）樹里（じゅり）との生活。

彼女は隣のT市にメイドの仕事を見つけて、去って行った。

正直言って、落ち込んだ。樹里は本当にいい子だ。

だから、彼女の母親と結婚して欲しいと言われると、そうしてもいいかな、と考えてしまう。

彼女の望みを叶えるのが、俺の幸せのような気さえした。

そんなある日。

強盗事件の主犯を逮捕したのをバカ署長に横取りされ、俺は腐っていた。

ふと周囲を見渡すと、何やら騒がしくなっている。

「どうしたんだ？」

俺は総務の女の子に尋ねた。

「強盗事件の容疑者の護送らしいですよ。警視庁から担当の人が来るそうです」

「え？　いつ？」

「今日です」

うわあ。調べとけば良かった。あいつが来るに違いない。

まさか小学生ではないから、急に頭が痛くなって早退という訳にもいくまい。

「署長がお出かけなので、副署長が会って下さい」

「何ーッ！？」

あのバカ署長、今日に限って出かけてるのか。

どうせ出かけるのなら、主犯の男を逮捕した日にしてくれれば良かったのに。

くっそう。亀島と顔を合わせなければならないのか。

気が重いな。

かと言って、中学生ではないのだから、逃亡するなどという選択肢はない。

「副署長、警視庁の方がお見えです」

刑事課長が呼びに来た。

うへえ。とうとう来たか、あいつが。

俺は死刑台に向かう囚人の心境になって廊下を歩き、ロビーに行った。

「あれ？」

しかし、そこにはミスター年金ならぬ、ミスター無能はいなかった。

代わりに、険のある目つきの、俺と同年代くらいの女がいた。

分類すれば美人だろうが、どうにも目の力が強過ぎて俺にはお付き合いは無理だ。

「あらあ、左京。久しぶりね」

女は昔からの知り合いのように声をかけて来た。

誰だ？　自慢じゃないが、俺は人の顔を忘れる名人五段だ。

「忘れたの？　あんたって、昔から人の顔を忘れる名人だったわよね」

女は俺の表情を読み取り、そう言った。

そこまで言われれば、こいつは間違いなく知っている女だ。

こんな目の力が強い女を忘れるなんて、俺ももうおしまいか？

「忘れるのも無理ないか。私が強烈な振り方したんだもんね」

ええ？　俺はこの目だけ女に振られた過去があるのか？

むむむ……。全く思い出せないとは、トラウマになりそうな経験だったのだろうか？

「警視庁捜査第一課の神戸蘭（かんべらん）です」

女はそう言って敬礼した。

あああああ！！！　やっと思い出したぞ。

「思い出せたようね。良かった」

蘭はニコッとした。あれ、何か雰囲気が変わったな。

「ああ。久しぶりだな。十年くらい経ったか？」

「そうね」

積もる話はなかったが、取り敢えず俺は蘭に容疑者の引渡しをすませ、応接室に招いた。

「お前、特捜班だったのか？」

俺は出し抜けに尋ねた。蘭はフッと笑って、

「亀島君が退職しちゃったのよ。で、後釜って事でね」

「あいつ、辞めたのか？」

それは良かった。日本の治安のためにも、あいつは警察を去るべきだ。

「嬉しそうね。かつての相方が辞めたのに」

「いや、別に嬉しくはないさ」

そう言いながらも、俺は顔が綻ぶのを止められなかった。

「で、話を本題に移すわね」

蘭は居ずまいを正し、真剣な顔で俺を見た。

「特捜班に戻らない？」

「え？」

その言葉、ここへ来たばかりの俺だったら、天井に届くくらい飛び上がって喜んだだろう。

「刑事部長には、私から話を通したわ。承諾済み。あとは、貴方とここの署長の返事次第よ」

バカ署長は俺にいなくなって欲しいのだろうから、諸手を挙げて賛成だろう。

「いい話だと思うんだけど。それと、私も貴方とまた仕事がしたいの」

十年前だったら、感動のあまり、俺は蘭に抱きつき、大喜びで警視庁に戻っただろう。

しかし、今は事情が違う。

「悪いな、俺はもう齷齪働くの、嫌なんだ」

「そうなの」

心なしか、蘭は寂しそうな顔をした。あの射るような目も、鳴りをひそめていた。

「わかった。無理強いはしないわ」

蘭は立ち上がった。そして、右手を差し出した。

「頑張ってね」

「ああ。お前もな」

こいつの手、こんなに小さくて柔らかかったのか……。

俺は蘭を見送るため、署の車寄せまで行った。

「では、失礼します」

彼女は敬礼して、車に乗り込んだ。俺も敬礼を返した。

「好きな子ができたのね」

蘭の去り際のその一言に、俺はギョッとした。

そうさ。もうお前は俺にとっては過去の女さ。

今は樹里がいる。

グッバイ、俺の青春。

グッバイ、神戸蘭。

でも、今更ながら惜しい事をしたと考えてしまうスケベな俺がいた。

樹里ちゃん、ワインを嗜む

御徒町樹里は、様々な職業を経験して、また元のメイドに戻りました。

今度はG県T市の会社経営者の田町耕造氏の家に、住み込みで働く事になりました。

幼い妹達も一緒に住ませてくれるという好条件で、樹里は田町家に行きました。

それまで居候していた杉下左京には、連絡先と携帯の番号を教えました。

将来、占い師の母と結婚してくれる、樹里達のお父さんになる人だからです。

「今日からお世話になります、御徒町樹里と申します。よろしくお願い致します」

樹里は田町氏に会い、挨拶しました。幼い妹達も頭を下げました。

「ほォ、本当によく似ているね、君達は。まるで四ツ子のようだな」

田町氏はまるで十年来の親友をもてなすかのように樹里と嬉しそうに握手しました。

「そうでございますか」

樹里は笑顔全開で応じました。田町氏は樹里の肩にスッと手を回し、

「後で君だけ私の書斎に来なさい。話がある」

「はい、旦那様」

妙にボディタッチが多い田町氏ですが、樹里は全然気にしていないようです。

樹里は宛てがわれた部屋に妹達を残し、何の不安も抱かずに田町氏の書斎に行きました。

「失礼致します」

樹里はノックをしました。

「どうぞ。入りなさい」

田町氏の声が答えました。樹里はドアを開き、中に入りました。

「さ、掛けたまえ」

田町氏は部屋の中央にある黒革張りのソファに腰を下ろしていました。

「はい」

樹里は田町氏の向かいに座りました。すると田町氏は樹里の隣に移動し、

「ささ、極上のワインだ。飲みたまえ」

「お仕事がありますので」

樹里はにこやかにお断わりしました。しかし田町氏はニッとして、

「かまわんよ。これは君の歓迎会なのだ。飲みたまえ」

「はい、旦那様」

田町氏の顔がエロ親父の顔になりました。実は樹里のグラスには睡眠薬が入っているのです。

「いただきます」

樹里はワインを飲みました。彼女は見かけによらず酒豪らしく、一気にグラスを空けてしまいました。田町氏は心の中でガッツポーズをとりました。

「どうかね、味は？」

田町氏は樹里が眠ってしまうと思い、答えをまたずに彼女の服のボタンを外そうとしました。

「はい、大地の芳醇さがしっかりと根付いていて、まるで天使の涙

のように高貴な味です、旦那様」

樹里の答えに、田町氏はビックリして手を止めました。

（どういう事だ、こいつ、何故眠らない？）

「そうかそうか。ではもう一杯」

田町氏は、量が少なかったのかと思い、更に樹里にワインを勧めました。

そして、

「あ、あれは何かな？」

と古めかしい手で樹里の気を逸らせ、睡眠薬をさっきより多く流し込みました。

「何もございませんが、旦那様」

「そ、そうか。私の見間違いだったかな」

田町氏は苦笑いして、

「さ、またグーッと空けてくれ」

「はい、旦那様」

また樹里はまるで牛乳でも飲むようにグラスを空にしてしまいました。

田町氏は目が点になりました。樹里は眠るどころか、欠伸もしません。

「いい飲みっぷりだね。そろそろ休みなさい。明日も早いからね」

「はい、旦那様」

田町氏は睡眠薬を間違えたと思い、計画を断念しました。

「お休みなさいませ、旦那様」

樹里が退室した後、田町氏は睡眠薬を取り出し、眺めました。

「バカ者が、睡眠薬と何かを間違えたのか」

手配をさせた田町氏の配下が薬を間違えたと思ったようです。

「一体何だ、この粉は？」

彼はその粉を一つまみ取り、舐めてみました。

「……」

田町氏は、そのままコテンと倒れ、朝まで目覚めませんでした。

一方樹里は、部屋に戻ると妹達と一緒にベッドでぐっすり眠りました。

そして次の日、とても清々しい朝を迎えたのでした。

樹里ちゃん、セクハラされる

御徒町樹里（おかちまち　じゅり）はメイドです。

今は三人の幼い妹を連れて、G県T市の田町耕造氏の家に住み込みで働いています。

田町氏はボディタッチが過ぎるエロ親父ですが、決して悪い人ではありません。

樹里達が田町邸に来て一週間が過ぎました。

田町氏には一人息子の栄一がいます。まだ高校二年生です。

彼も田町氏と同類で、悪い人ではないのですが、ボディタッチが好きな所謂（いわゆる）エロ男子です。

彼は樹里の事を気に入ったらしく、何かにつけて樹里を誘惑して来ます。

「おはようございます、ぼっちゃま」

樹里はいつものように笑顔全開で挨拶しました。

栄一はすかさず樹里に近づき、彼女の肩を抱きます。

「おはよう、樹里さん。今日も綺麗だね」

「ありがとうございます、ぼっちゃま」

樹里は栄一の手を振り解く事もなく、ニコニコしたままで応じます。

「今度デートしない？　東京フレンドランドに行こうよ」

「ありがとうございます。でも、私はお仕事がありますので」

樹里は笑顔で断わりました。栄一はそれでも諦めません。

「大丈夫だよ。親父に言って、休暇を取らせるから。ね？」

「はい……」

さすがに樹里も困ってしまいました。樹里からすれば、栄一は雇い主の息子。それに相手は高校生です。

場合によっては、逆援交です。いえ、樹里はそんな事は思いませんが。

「よし、決まりね。親父に掛け合って来るよ」

栄一は田町氏の書斎に走って行きました。

しかし、田町氏は許しませんでした。

息子に樹里を盗られると思ったのです。

そもそも樹里は田町氏のものでもありませんが。

怒った栄一は、家を飛び出してしまいました。

「あのバカ息子が」

そう毒づく田町氏は、息子より樹里との交際を優先させたろくでなし親父です。

結局栄一はその日は姿を見せませんでした。

田町氏は奥さんを早くに亡くし、肉親は栄一ただ一人だそうです。

本当はとても心配だったのかも知れません。

しかし、彼はその夜もまた、懲りもせずに樹里を書斎に呼びました。

「さ、かけたまえ」

「はい、旦那様」

樹里はソファに腰掛けました。田町氏はまた、ワインを取り出して、

「これも値の張る逸品なんだよ。飲んでみるかね？」

「ありがとうございます」

田町氏はワインをグラスに注ぐ時、今度は自分で買った睡眠薬を

流し込みました。

（これなら必ず眠る。そしてこの女は私のものだ）

エロ親父全開です。

「グッと空けてくれたまえ」

「はい」

樹里は並々とワインが注がれたグラスを受け取ると、またしても銭湯の牛乳のように一気に飲み干してしまいました。

「おお」

田町氏は今度こそ成功したと思い、ガッツポーズをしました。

「どうされましたか、旦那様？」

グラスをテーブルに置いて、まるで何事もなかったかのように樹里が尋ねました。

アングリと大口を空けて驚く田町氏。

「大変おいしかったです。でも私は、先日のワインの方が上質で高貴な香りがしていたと思います」

「そ、そう」

「では、失礼致します」

「あ、ああ」

田町氏は樹里が退室した後、睡眠薬の瓶を眺めました。

「くっそう、これも効かないのか？」

この前、そう思って舐めたら、翌朝まで眠ってしまった事を思い出し、熱帯魚の水槽に入れてみました。

すると熱帯魚達はたちまち眠ってしまいました。

「一体どういう事だ？」

田町氏は、樹里の事が怖くなりました。

一方退室した樹里は、栄一の部屋を掃除するために掃除用具を持って彼の部屋に向かっていました。

実は栄一は、こっそり部屋に戻っていて、樹里が部屋の掃除をしに来るのをクローゼットの中に隠れて待っていたのです。

彼女が入って来たら、隙を突いて襲いかかり、あんな事やそんな事をしようと企んでいました。

どうしようもない親子です。

しかし、いつまで経っても樹里は来ません。

栄一は痺れを切らせてクローゼットを出ようとしました。

ところが、悪い事はできません。

クローゼットの前に立てかけてあった栄一のテニスラケットが、何かの拍子に傾き、クローゼットの取っ手に引っかかってしまったのです。

そのため、扉が開かなくなり、栄一は閉じ込められてしまいました。

「助けてくれー！」

しかし、その声は誰にも聞こえませんでした。

さて、狙われていた樹里は、栄一の部屋に行く途中、眠くなってしまいました。

「ぼっちゃまのお部屋のお掃除は、明日しましょう」

彼女はそう考え、また妹達と一緒にグッスリと眠り、清々しい朝を迎えたのでした。

こうして彼女はまたピンチを知らないうちに回避したのです。

樹里ちゃん、人質になる

俺は杉下左京。

G県M署の副署長に収まり、すっかりのんべんだらりとした生活になっていた。

かつて愛した女、神戸蘭が警視庁の特捜班復帰を持ちかけてくれたのに、俺はそれを辞退した。

それもこれも、あの御徒町（おかちまち）樹里（じゅり）のためだった。

俺は昔のように正義感に燃える事もなく、不正に対して怒りを爆発させる事もない。

若い頃の俺が今の俺を見たら、多分唾を吐きかけているだろう。

こんな事を考えているのは、決して評価欄で「ダメな人」と書かれたからではない。

このままではいけないと自分で思ったからなのだ。

俺は蘭に連絡を取った。

「あの時の話なんだけど」

俺は恥を忍んで蘭にもう一度警視庁で頑張りたいと告げた。

しかし。

「ああ、その事なんだけど、貴方が辞退したので、その足で亀島君を説得しに行って、復職してもらったから」

死ぬより辛い現実を突きつけられた。

あのミスター無能が復帰したというのだ。

俺はまたしても安全な道を進もうとしていた事に気づかされた。

間違っていたのだ。

人が用意したレールを走るのは、杉下左京の流儀に反する。

俺は俺のやり方で生きる。

副署長なんて関係ない。

現場第一。何よりも現場だ。

俺は官僚主義の署長に願い出て、捜査の陣頭指揮を執れるようにしてもらった。

あの署長がよく了承してくれたものだ。

何かあるのかも知れない。

俺は常に背後に気を配りながら、署内を歩いた。

そんな決断をした数日後。

M署管内で、殺人事件が起こった。

俺は早速副署長権限で、捜査班を編成し、指揮を執った。

犯人は多数の目撃者がいたため、すぐに特定できた。

そして捜査班の中から選りすぐったメンバーを選び出し、犯人の元へと向かった。

犯人は俺達の動きを察知し、逃走。

隣のT市に逃げ、ある富豪の屋敷に立て籠ってしまった。

「まさか……」

俺はその富豪の屋敷の表札を見て唖然とした。

「田町耕造」

それは、俺の最愛の女、御徒町樹里が住み込みで働いている家だったのだ。

しかも、あろう事か、犯人はサバイバルナイフで樹里を脅し、人質にしてしまった。

田町氏とその一人息子の栄一は、涙を流しながら、

「彼女を助けて下さい」

と俺に懇願した。

相変わらず、男共を虜にしてやがる。さすが、俺の愛した女だぜ。

俺は嬉しかったが、そんな感情は押し殺した。

最優先すべきは人質の命。

「彼女の妹達はどうしました?」

「わかりません。逃げ出した時、樹里ちゃんとは一緒にいませんでした」

栄一が答えた。

「何て事だ……」

あの幼い妹達は、まだ屋敷の中なのだ。

場合によっては、容疑者の標的になってしまう。

俺は一計を案じ、夜を待つ事にした。

そして夜になった。

俺達は夜陰に紛れて屋敷に突入し、犯人を確保する事を計画した。

突入部隊は皆息をひそめて屋敷の庭を進む。

時折、

「キャーッ！」

と叫び声が聞こえる。

思わず焦りかける。しかし、人の命がかかっているのだ。

何としても無事に助け出さなければならない。

「イヤーッ！」

まただ。あの声は妹達か？　まさか、見つかってしまったのか？

俺は計画を変更し、突入開始を早める事にした。

幼い子達はそれほど逃げ回る事はできない。

「突入！」

俺達は裏口のドアを蹴破り、屋敷の中に入った。

「キャーッ！」

「イヤーッ！」

また声が聞こえる。どっちだ？

俺はその叫び声を頼りに、部隊を率いて屋敷の廊下を走った。

「ダメです！」

あっ。今のは樹里か？　まずい、犯人め、妹達を追いかけるのをやめて、樹里を！

気がついた時は、俺は先行していた。

頭より早く身体が反応する。

かつて「動物的勘」と評された俺の研ぎ澄まされた感覚が甦った。

「樹里ーっ！」

俺は声のした方へと全力疾走した。

「あの向こうか？」

俺は長い廊下の果てにある部屋の扉に気づいた。

明かりがわずかに漏れている。

「樹里ーっ！」

俺は状況判断をせずにその部屋に飛び込んだ。

「杉下さん」

そこには仲良く七並べをする御徒町姉妹がいた。

「……」

全身から闘争本能がまるで水蒸気のように消えてなくなった。

俺はホッとすると同時に、

「おい、犯人はどこだ？」

「犯人さんですか？　キッチンですよ。ワインをお召しです」

樹里はキョトンとした顔で俺に言った。

「ワインだと？」

俺達はキッチンに走った。

犯人はキッチンのテーブルの上に大の字になって眠っていた。

ワインは一口くらいしか飲まれておらず、酔い潰れたにしては妙な状態だった。

「どういう事だ？」

俺には全く意味が理解できなかった。

何はともあれ、犯人は確保でき、人質は無事救出できた。

俺は任務完了を署長に報告し、署に戻った。

後でわかった事なのだが、田町氏は何故か大量の睡眠薬を購入しており、それをワインに混ぜていたようだ。

何を考えていたのか、大方の予想はつくのだが、樹里が無事だったので何も言わなかった。

「そこは危険だろう。また俺のところに戻って来い。お前達を食わせるくらいの稼ぎはある」

俺は樹里に連絡し、そう告げた。

そして。

ある日、勤務を終え、寮に戻った俺を、樹里達が迎えてくれた。

そして俺は改めて樹里にプロポーズした。

樹里は頬を染めて頷いてくれた。

それからしばらく後。

俺と樹里と妹と、そして彼女達の母親は、仲良く一緒に暮らしていた。

「杉下さん」

「左京」

集中治療室の外で、亀島馨と神戸蘭が祈るように座っていた。

治療室で器具だらけになっているのは俺だ。

あれ？　何で俺があんなところにいるんだ？　ここにいる俺は何だ？

ああ。思い出した。俺は田町邸に突入し、犯人と格闘して、サバイバルナイフを腹に刺されたんだ。

で、意識を失った。

そうか。俺は死ぬのか。そうだよな。この作者は登場人物の幸せが一番嫌いだった。

俺が樹里と結婚できるはずがない。

そう思うと泣けて来た。

その時だった。

「杉下さん！」

樹里と妹達と母親までもが姿を現した。

これはますます俺が死ぬパターンだ。もうダメなんだな。

何て最期だ。でも、樹里達が無事で良かった。

本当に良かった。

あれ？　俺泣いてるのか？　畜生、なんで泣いてるんだよ！？

樹里達は医師の止めるのも振り切り、治療室に入って来た。

「杉下さん、目を開けて下さい」

「杉ちゃん！」

妹達も叫んだ。

「左京ちゃん。このまま終わったら、人生つまらないよ」

一度も会った事がないが、ありがとう、お母さん。

「杉下さん！」

樹里が俺の手を握った。それを端で見ているはずなのに、俺はその手の感触を感じていた。

「何だ？」

次の瞬間、俺はベッドの中から樹里達を見ていた。

「杉下さん！」

樹里が涙声で俺に呼びかけた。

「聞こえてるよ。そんな大声出すな……」

俺は力なく微笑み、樹里を見た。

樹里ちゃん、幽霊と会う

御徒町樹里（おかちまちじゅり）はメイドに戻りました。

しかし、G県M署の副署長である杉下左京が彼女と妹達を助けるために重傷を負ってしまいました。

その事でとても驚いた樹里は、事件があった田町氏の邸を出る事になりました。

田町氏は樹里を必死に止めましたが、樹里の決意は変わらず、彼女は田町邸を去りました。

そして今、樹里は東京の世田谷にある大富豪の家にメイドとして入りました。

今度は妹達を母親に預け、樹里は一人で住み込みです。

その屋敷は以前殺人事件が三回起こったところでした。

持ち主は変わりましたが、建物はその当時のままで、噂だと幽霊が出るという事です。

そのため、メイドがたびたび辞めてしまっているのでした。

屋敷の持ち主の名前は、五反田六郎氏です。

彼は超現実主義者で、心霊現象など全く信じていません。

家族は幽霊を何度も目撃していて、あまりの怖さに家を出てしまいました。

奥さんも子供達も去ってしまったので、五反田氏はメイドを雇って身の回りの世話をさせていたのですが、幽霊騒動で次々に辞められてしまったのです。

そんな中、樹里はメイドの面接に来ました。

そして、五反田氏は樹里がすぐに辞めてしまうのは困るので、真相を打ち明けました。

「実はね、この屋敷には幽霊がいるのだよ」

「ユウ・レイ様ですか？　中国の方でしょうか？」

樹里は大真面目な顔で尋ねました。五反田氏は、

「いや、人ではないのだ。心霊現象が起こるのだよ。私は信じていないのだがね」

「新郎新婦ですか？　ご結婚された方ですか？」

樹里のボケに、五反田氏はイラッとしました。

「違うよ。君は私をからかっているのかね？」

「とんでもないです」

樹里は笑顔全開で答えました。

五反田氏は、この娘なら大丈夫だろうと判断し、樹里を採用しました。

こうして樹里は五反田邸で働く事になりました。

ある日の夜です。

樹里は五反田氏の夕食を給仕し、後片付けを終えて、自分の部屋に戻りました。

すると、部屋のドアの前に大柄の女の人が立っています。

「あの、どちら様でしょうか？」

樹里はその女性に声をかけました。

「私よォ」

女性は頭から血を流し、白目を剥いていました。

樹里は、

「まあ、大変です。お怪我をなさっているのですね。今手当て致します」

と全く動じる事なく部屋に入り、救急箱を持って来ました。

「あら？」

何故か女性はいなくなっていました。

「どこへ行かれたのでしょうか？」

樹里はしばらく付近を探しましたが、どこにもその女性はいませんでした。

そしてまたある日の夜です。

樹里はキッチンで洗い物をしていました。

すると今度はメイド服の女性が頭に包丁を突き立てたままで現れました。

「痛い……。痛いわ。助けて」

樹里はそれを見て驚き、

「大変です。今救急車を呼びますね」

とキッチンの隅にある電話に駆け寄りました。

ところが、電話は通じません。

「痛い。痛いわ。早く助けて」

女性は喚き散らしながら、樹里に近づいて来ました。

「痛いのですか？　大丈夫ですか？」

樹里は喚き散らす女性を宥めようと声をかけました。

するとその女性はスーッと霧のようになって消えてしまいました。

「？」

樹里には何が起こったのかわかりませんでした。

「手品だったのでしょうか？」

結局その女性も姿を消したままでした。

そして更にある日の深夜です。

樹里は屋敷に知らない人がいるのを不思議に思い、戸締まりをし忘れたのだと考えました。

彼女は屋敷中の窓やドアを点検して回りました。

でもどこも鍵が開いているところはありません。

樹里は安心して部屋に戻りました。

すると今度は、階段のところに、首にロープを巻き付けられたおばあさんが立っていました。

「く、苦しい……。助けて。助けて……」

おばあさんは絞り出すような声で樹里に言いました。

「まあ、大変です」

樹里は階段を駆け上がり、おばあさんのそばに行きました。

「大丈夫ですか？」

樹里はおばあさんの首に巻き付けられたロープを解きました。

「……」

おばあさんもまた、スーッと霧のように消えてしまいました。

「？」

樹里はまた人が消えてしまったので、ビックリしてしまいました。

そして翌朝、樹里は五反田氏に今まであった三人の女性の話をしました。

「そうか。わかった」

五反田氏は、全く怖がらず、そして大袈裟でもなく話をした樹里を信用し、知り合いを通じて高名な霊能者を呼びました。

その霊能者は、確かに腕はいいのですが、とにかくお金に汚い事で有名でした。

「おう、来たで。おっさん、どこに幽霊がおるんや?」

その女性は、以前樹里がキャバクラで働いていた時に着ていた衣装より際どい服を着ていて、酷く下品な言動でした。

「どこにもおれへんがな。ウチをからかっとるんか、おっさん?」

その霊能者は五反田氏に抗議しました。そこへ樹里がお茶を持って現れました。

「御徒町さん、先生にあの時の話をしてくれたまえ」

五反田氏は、霊能者の迫力に困り果てて、樹里に救いを求めました。

「はい、旦那様」

樹里は霊能者に近づき、話をしようとしました。

「ああ、もうええ。この姉ちゃんがみんな祓ってくれとるがな。どういうことやねん、おっさん?」

霊能者の目には、三人の霊達が、樹里の後ろで微笑んでいるのが見えたのです。

樹里が彼女達を怖がらず、心の底から心配し、助けようとしてくれた事で、彼女達のこの世への未練が消え、怨嗟と憎悪が解消され

たのです。

「あんた、どこで修行したんや、メイドさん？　ウチも知りたいんやけどな」

その下品な霊能者は、ガハハと大口を開けて笑い、五反田邸を去りました。

それ以降、五反田邸に心霊現象は起きなくなったそうです。

樹里ちゃん、左京と再会する

俺は杉下左京。

G県M署の副署長だ。

先日起こった殺人事件の犯人を確保する時に重傷を負い、入院した。

あの御徒町樹里（おかちまちじゅり）が人質に取られたため、俺は焦っていたのかも知れない。

自分の命に代えても守りたい女が現れるとは、正直思わなかった。

警視庁時代に好き合ったあの神戸蘭ですら、そこまでは感じなかった。

俺は只、彼女の身体に惚れていたのかも知れない。

今更ながら、若かったとしか思えない愚かさだし、蘭に対しても申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

樹里は違う。

確かに彼女は可愛いし、若いし、素敵な女性だ。

しかし、俺は樹里の外見に惚れたのではない。

こんなにも惹かれるのは、彼女のその信じられないくらいの純粋

さなのだ。

あの純粋さの前では、俺の男としての野生はなりを潜めてしまう。

それくらい樹里は透き通った女性だ。

その樹里が毎日俺の世話をするために病院に来てくれた。

恥ずかしい事に俺は身体を動かす事ができなかったので、樹里が下の世話までしてくれた。

彼女は看護師の資格を持っていて、介護士の資格も持っていて、調理師の資格も持っているのだそうだ。

「こんな事までしてもらって、悪いな」

俺は顔を真っ赤にして礼を言った。

樹里は尿瓶を片づけながら、

「大丈夫ですよ、杉下さん。私は慣れてますから」

「そ、そうなのか」

看護師としても働いていた事があるらしいから、別に何とも思っていないのかも知れない。

多分、ナメコか何かと思っているのだろう。

そんな評価は嫌だが。

「早く退院できるといいですね」

「ああ」

樹里は俺の顔を見て、

「この度は助けて頂いてありがとうございました」

と急に畏(かしこ)まってお辞儀をした。

「どうしたんだ、急に？」

俺は嫌な感覚に襲われた。

「杉下さんにこれ以上ご迷惑をかけては申し訳ないので、私は東京に戻る事にしました」

「えっ？」

樹里はニッコリした。

「世田谷に住み込みのお仕事を見つけたんです。そこに行く事にしました」

「そうなのか……」

俺はガッカリした。

「今日でお別れです。お元気で」

「……」

樹里はあっさりとそう言うと、病室を出て行ってしまった。

「樹里……」

俺は知らないうちに泣いていた。

俺はそれからリハビリに全力で取り組んだ。

一刻も早く復帰する。そして、桜田門（けいしちょう）に帰るんだ。

そして一ヶ月後。

俺はもう一度神戸蘭に連絡を取り、警視庁特捜班に復帰した。

あの亀島馨がいるのは気になったが。

それから俺はあるところに向かった。

「行ってらっしゃいませ、旦那様」

世田谷の豪邸に住む五反田六郎。

かつてそこは、世間を震撼させた殺人事件が起こった。

その事件は女子大生探偵（なかつのりこ）の活躍で解決したと聞いている。

更にその後「幽霊屋敷」としても噂になったが、あるメイドがその幽霊を祓ったという話も聞いた。

それがどうやら樹里らしい。あいつらしいな。

きっと幽霊達も、彼女の純粋さによって天国に行けたのだろう。

「久しぶりだな」

俺は五反田氏を送り出した樹里に声をかけた。

「杉下さん」

樹里は嬉しそうに微笑み、俺を見た。

樹里ちゃん、遊園地にゆく

俺は杉下左京。警視庁の敏腕警部だ。

そう、昇進した。決して試験で不正をした訳ではない。

事件で重傷を負って入院中に勉強もしたのだ。

必死だった。

元恋人の神戸蘭から突きつけられた特捜班復帰の条件は、昇進試験に合格する事だったからだ。

そんな簡単に昇進試験に受かるはずがない、と陰口を叩いたのは、万年警部補のバ加藤だ。

あの脱獄囚顔のブ男は、刑事部長にまで俺の不正を訴えやがった。

とんでもない奴だ。

まあいい。あいつは負け組、俺は勝ち組だからな。

いかん、嫌な奴になりそうだ。

そんな時はあいつと過ごすのが一番と思い、御徒町樹里（おかちまちじゅり）に連絡した。

彼女はまだ世田谷の五反田邸に住み込みで働いているはずだ。

「樹里か？　久しぶりだな」

「どちら様ですか？」

「は？」

またあいつ得意の天然ボケかと思ったが、声が違う。誰だ？

「ああ、左京ちゃんね。お久～」

うわ、どうして母親が出るんだ。

そう言えば、この人の名前、由里なんだよな。紛らわしいよな。

おまけに妹達は、真里、希里、絵里で、非常にややこしい。

未だに妹達は区別がつかない。

三つ子かと思ったのだが、年子だそうだ。

何であれほど皆そっくりな家族なのだろう？

鑑識のヨネさんに遺伝子を調べてもらいたい。

きっと強烈な配列だろうから。

「お、お母さんでしたか。失礼しました。樹里さんは？」

「お母さんだなんて、他人行儀だね、左京ちゃん。由里でいいわよん」

妙に色っぽい声で言われると、ゾッとする。

「はあ」

取りあえず、樹里に変わってもらった。

「何だ、今日は実家にいたのか？」

「はい」

「じゃ、遊園地に行かないか？」

「え？　事件なんですか？」

相変わらず惚けた応答だ。そこがまたいいんだけどな。

「事件の捜査にお前を誘ったりしないよ！　遊びに行かないか？」

「ああ、そうなんですか。はい、喜んで」

「じゃあ現地集合でいいか？」

「はい。どちらですか？」

「今から一時間後の午前十一時に、東京フレンドランドで会おう。水道橋で降りてすぐだ」

「わかりました」

よし！　今日は樹里とデートだ。気晴らしに思いっきりアトラクションを楽しむぞ！

そして俺は、自分のアパートから徒歩五分の、東京フレンドランドに行った。

「来ないな」

待つという事は非常に苦痛だ。三分前に姿が見えないと、ソワソワしてしまう。

「杉下さん」

俺は水道橋の方から来ると思っていたので、後ろからいきなり現れた樹里に仰天した。

「お、おお、来たか……」

凍りつきそうになった。樹里は母親同伴。

それだけなら、ありがちな展開。俺もそれほど驚かない。

二人の後ろに、どうした事か、ミスター無能が立っていたのだ。

「杉下警部、おはようございます」

亀島は、これ以上はできないというくらいの笑顔で挨拶した。

「お、おはよう」

俺は完全にうろたえた状態で応じた。何でこいつがいるんだ？

「神保町からの帰りに、歩道を歩いている御徒町さんを見つけて、ここまでお連れしたんです」

「ああ、そうか。それはご苦労だったな」

俺はさっさと帰ってもらおうと思ったが、

「さ、左京ちゃん、行きましょ」

と由里さんに腕を組まれ、強制的に入り口へと移動させられてしまった。

「では参りましょうか、御徒町さん」

「はい、亀島さん」

うおーっ！　悪夢だ！　亀島が樹里と腕を組んで歩いて来る！

畜生！　どうして俺の人生は、ずっとこんな感じなんだーっ！？

樹里ちゃん、お化け屋敷を体験する

私は警視庁特捜班の刑事、亀島馨。

また、あの杉下左京さんと同じ部署になってしまった。

しかも杉下さんは、警部に昇進。捜査一課の加藤さんは、

「絶対に不正があった！」

と息巻いている。

私は、杉下さんは好きではないが、あの人はそんな事をする人ではない。

むしろ、昇進試験を受けた事が驚きだ。

出世とは無縁の人。

尊敬はしていないが、凄い人だとは思う。

考えてみると、私と杉下さんは御徒町樹里さんが現れるまでは、それなりにいいコンビだった。

女が絡むと、事件も悲惨になる事が多いが、まさか私と杉下さんが「女」で仲が悪くなるとは思わなかった。

そんな事を思いながら、休日を利用して、私は神保町の古本屋巡りをした。

掘り出し物がいくつか見つかり、得々として帰路に着いた。

ＪＲ水道橋駅の高架をくぐった時、見たことのある後ろ姿の女性二人に気づいた。

私は車を路肩に寄せて停め、助手席の窓を開いた。

「御徒町さん」

そう、樹里さんがお母さんと歩いていたのだ。

「ああ、亀島さん」

「あら、亀ちゃん」

二人は私に気づき、近づいて来た。

「お出かけですか？」

「はい。杉下さんと東京フレンドランドで待ち合わせです」

隠し事ができない樹里さんは、あっさり話してくれた。

「では、そこまでお送りしますよ。乗って下さい」

「ありがとうございます」

私はニンマリして二人を乗せ、フレンドランド近くの駐車場に向かった。

途中、アホ面をして、御徒町さんが来るのを待っている杉下さんに気づいたが、無視した。

そして、水道橋方面に気を取られている杉下さんの後ろから現れた。

杉下さんは可哀相なくらい驚き、樹里さんのお母さんに強引に腕を組まれてフレンドランドに入って行った。

「では、参りましょうか、御徒町さん」

「はい、亀島さん」

私は思い切って樹里さんに腕を出した。すると樹里さんは躊躇う事なく腕を組んでくれた。

おお！　まだ希望はあるぞ！　心の中でガッツポーズをした。

前方に、恨みがましい顔で私を睨んでいる杉下さんが見えた。

まず私は、樹里さんのハートをガッチリ掴んでおこうと思い、

「お化け屋敷に入りませんか？」

と提案した。

「おお、入ろう、入ろう！」

お母さんが大乗り気で、杉下さんを引き摺るようにして進んだ。

「御徒町さん、大丈夫ですか？」

「はい」

樹里さんはニッコリ笑って言った。

大丈夫なのは困るが、まあ、ここは日本で三番目に怖いお化け屋敷らしいから心配いらないだろう。

「イヤーッ！！」

お化け屋敷に入り、絶叫しまくるお母さん。その声にうろたえる杉下さん。

私はおかしくて仕方なかった。

そして、私と樹里さんがお化けゾーンに入る。

「ふあああああ！」

いきなり上からゾンビがぶら下がった。私は危うく腰を抜かしそうになったが、樹里さんの事を考え、耐えた。

「今日（こんにち）は」

樹里さんは笑顔でゾンビに挨拶している。全く驚いていない。

「大丈夫ですか、御徒町さん？」

私は膝をガクガクさせながら尋ねた。樹里さんは、

「大丈夫ですよ」

と答えた。ふと気づくと、後ろでゾンビが落ち込んでいた。

「俺、向いてないのかな、この仕事……」

涙を誘う一言だった。

そして。

「ヒヤーーーッ！」

今度は物陰から血だらけの幽霊が現れた。私はもう限界に近かったが、なんとか踏ん張った。

「大丈夫ですか、血が出てますよ」

どう見ても普通の女の子なのに、全く驚かない上に怪我の心配までする樹里さんにその幽霊も落ち込んでしまった。

「転職しようかな……」

そんな呟きが聞こえた。私は彼らを哀れんだ。

そんな事で、私達はお化け屋敷を出た。

「御徒町さん、怖くないんですか？」

「怖くないですよ」

笑顔全開で答える樹里さん。失敗だ。

「女の子はみんな怖がるんですけどね……」

「そうなんですか。申し訳ありません」

素直な樹里さんは私に謝った。

「私が怖がった方が良かったのですね、亀島さんは」

「え、あ、いや、決してそういう事では……」

樹里さんの発言に、周囲の女性達が不潔な物を見るような目で私を見た。

「今度は怖がりますので、もう一度入りましょう」

「い、いえ、もう私は……」

樹里さんが怖がってくれるのなら、もう一度入りたいが、多分もう限界を超えてしまう。

「さ、行きましょう」

「は、はい……」

樹里さんの言葉に逆らえないようになってしまった私は、もう一度お化け屋敷に入った。

そして、樹里さんが怖がってくれるのを確認できないまま、気絶した。

樹里さんが本物の幽霊をお祓いした事を杉下さんに聞いたのは、それからしばらくしてからだった。

樹里ちゃん、浮気する?

俺は杉下左京。警視庁の敏腕警部だ。

先日、御徒町(おかちまち)樹里(じゅり)をデートに誘ったつもりが、母親ばかりでなく、ミスター無能の亀島までついて来て、酷い目に遭った。

それでも何とか溜飲が下がったのは、亀島がお化け屋敷に入って気を失ったからだ。

俺はそれをしっかりデジカメで撮った。奴が調子に乗った時のために使うつもりだ。

あいつの弱点がわかったのは大きな収穫だった。

そんな事があってから数日後、俺達特捜班は、銀座を中心に立て続けに起こっている宝石強盗の捜査をしていた。

「トラックで店に突っ込んで、そのまま盗み出すなんて、日本にも手荒な強盗団が現れたものだな」

俺は新しくて古い相方、神戸蘭と共に車で移動中だった。

「恐らく中国の窃盗団の仕業ね。東南アジアを中心に、各地を荒し回っているという噂よ」

相変わらず目のやり場に困るミニスカートを履き、何のために着

ているのか尋ねたくなる程胸の谷間が見えているVネックのセーターを身に着けている。

「何よ、ジロジロ見て。嫌らしいわね、左京」

蘭は何故か嬉しそうにそう言う。

俺はよりを戻すつもりは全くないし、もう蘭のような強烈な女には興味が湧かないのだ。

「見ちゃいねえよ。お互いいくつになったと思ってるんだよ、蘭」

「いくつになっても、男も女も色気を忘れないようにしないと老け込むわよ、左京」

「そんなものかな」

「そんなものよ」

往年の日本映画か、というような臭いセリフを言い合い、俺達は犯行現場に向かっていた。

「えっ？」

俺は目を疑った。こんなところにいる訳がないだろう？　そう思った。

「どうしたの？」

蘭が俺の動揺に気がつき、尋ねて来た。

「いや、何でもない」

俺は咄嗟に誤摩化し、車を停めた。

「ここか」

「ええ」

俺達はある宝石店の前に立った。ここが一番最近強盗団に襲われた店だ。

しかし、俺の頭はそんな事はどうでもよくなっていた。

一刻も早く、ここから去りたい。

そして、さっき目に入ったものが、見間違いだった事を確かめたいのだ。

そんな後ろめたい思いが、逆に俺を突き動かし、事情聴取は熱を帯び、捜査は核心に迫る勢いを見せた。

俺と蘭は犯行現場に残された遺留品から、強盗団と繋がりがあると思われる古物商を割り出した。

「蘭は古物商を当たってくれ。俺は付近に目撃者がいないか聞き込みをしてみる」

「了解」

蘭は車に乗り込み、現場を去った。

俺は蘭の車が見えなくなったのを確認してから、走り出した。

どこへだって？　決まってるじゃないか、そんなところにいるはずのない人物がいたような気がしたんだ。

それを確かめるために、ある喫茶店に立ち寄った。

「げっ」

見間違いではなかった。俺の視力は2・0なのだ。いや、今はそんな事を自慢しているときではない。

そこにいたのは、間違いなく御徒町樹里だった。

いや、別に樹里が喫茶店にいるのは不思議ではない。

以前は勤めていた事すらあるのだから。

問題は、樹里と向かい合って座っている男だ。

かなり年齢が離れているようにも見える。

楽しそうだ。樹里はいつでも楽しそうな顔をしているが、俺にはあんな笑顔を見せてくれた事がない。

嫉妬している。そう、ジェラシーって奴だ。

まさか？　「男」か？　そんな……。俺と樹里は気持ちが通じ合

えたのではないか？

俺の思い過ごしだとしても、何か悔しい。

あっ、いかん。二人が店を出るぞ。

俺は店員に思いっきり不審の目で見られているのを感じながら、慌てて外に出た。

そして、物陰に隠れる。

二人が出て来た。

おお、抱き合ってる。何て事だ！　まさか、キスした！

ああ、気を失いそうだ。

ああ、男が去って行く。樹里は手を振っている。男は人混みに紛れた。

俺は意を決して樹里に近づこうと物陰から出た。

「杉下さんですか？」

はっ？　思わぬ方向から声が聞こえた。

「えっ？」

振り返るとそこに樹里と由里さんがいた。

ど、ど、どういう事？

「あーら、左京ちゃん。偶然ね」

いつものトーンで由里さんが言う。俺はしばらく何が何だかわからなくなってしまった。

そして、さっきの喫茶店。

事情は由里さんから聞いた。

さっきまで喫茶店にいたのは、樹里の姉の璃里（りり）。そして、彼女と会っていたのは、璃里の夫。年の差婚なのだそうだ。

「にしても、よく似てますねえ、ホントに」

由里さんと璃里さんと樹里は、ほとんど見分けがつかない。

この三人が事件を起こしたら、捜査は難航するだろう。

「ははーん、左京ちゃん、さては勘違いして嫉妬してたなァ」

由里さんがとんでもない事を言い出す。璃里さんがニッコリして、

「まあ。誰に嫉妬していましたの？」

とおっとりした口調で尋ねる。俺は璃里さんを見て、

「い、いや、別に嫉妬なんかしてませんよ」

「またまたァ。無理しないの」

由里さんは本当に面白がっている。

「いくら私と璃里が似ているからって、私が浮気しているなんて思わないでよ、左京ちゃん」

由里さんの途方もなく自分に都合のいい解釈だった。

由里さんと璃里さんは笑っていたが、何故か樹里は笑っていなかった。

もしかして、樹里が俺に嫉妬？　まさかね。

俺は捜査の途中だったので、喫茶店を出る事にした。

「杉下さん」

由里さんと璃里さんが先に出てしまい、俺が支払いをしていると、樹里が近づいて来た。

「何だ？」

樹里は何故か怒っているようだ。今まで彼女が怒っているのは見た事がない。

「浮気はダメです」

「いでで」

俺は樹里に思い切り右の二の腕を抓られた。

樹里はそのまま出て行ってしまい、三つ子みたいな三人は歩き去った。

「いてえよ、樹里……」

俺は何となく嬉しくてニヤついてしまった。

レジの店員が気持ち悪そうに俺を見ているのには全く気づかなかった。

樹里ちゃん、スカウトされる?

御徒町樹里(おかちまちじゅり)はメイドです。

現在は、世田谷の大富豪である五反田六郎氏の屋敷で働いています。

五反田氏は、樹里のおかげで幽霊騒動が収まり、家族が戻ってくれたので、ご褒美として彼女に有給休暇を一週間取らせました。

「ゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます、旦那様」

樹里は五反田氏に礼を言い、屋敷を出ました。

彼女は母親の由里がいる新宿の実家に向かうため、小田急線に乗りました。

「やあ、君、可愛いね。モデルさん?」

いきなり怪しい中年男性が話しかけて来ました。

「違います」

樹里は笑顔で応じます。男性はニヤリとして、

「そうなの、それは驚いた。こんな可愛い人が、モデルさんじゃないのか」

「はい」

樹里は全く警戒する事なく、応対します。

この男性、どうやら怪しい仕事をしている人のようです。

（こいつは上玉（じょうだま）だ。その上、全く俺を疑ってない）

男は、樹里を騙して一儲けしようと企んでいます。

「それじゃあ、私の事務所に遊びに来ない？　お茶とケーキくらいなら出せるけど？」

「ありがとうございます。でも私、母のところに行く途中ですので」

樹里はニコニコしながら断りました。

「ああ、そうなんだ。お母さんはどこにいるの？」

「新宿です」

男はニヤッとしてから、

「なら大丈夫だよ。私の事務所も新宿だから。すぐにお母さんのところに行けるよ」

「そうなんですか」

樹里は少し遅くなると由里に連絡し、その男について行く事にし

ました。

男の事務所は、ビルの三階にあり、きれいなフロアです。

但し、従業員は一人もいない、ガランとしたところでした。

「さ、かけて」

男は樹里にソファを勧め、奥へ行きました。

「ムフフ、こいつはいい」

男は冷蔵庫からケーキを取り出し、紅茶を入れます。

「ヒヒヒ」

彼は狡猾な笑みを浮かべ、睡眠薬を紅茶に落としました。

「これで明日までおねんねで、明後日（あさって）には東南アジアか香港さ」

男は人身売買のブローカーでした。

「お待たせ」

男はニッコリして、樹里に紅茶とケーキを出しました。

「さ、食べて食べて」

「いただきます」

樹里はケーキをパクッと一口で食べ、紅茶もグッと一息で飲みました。

「……」

その豪快さに、男は唖然としましたが、

「お、早いねえ。もう一杯飲む？」

「いえ、これでお暇（いとま）します」

樹里は笑顔全開で答えました。男はニヤリとして、

「でも、眠くないかい？」

「いえ、全然。ご馳走様でした」

樹里はお辞儀をして、ソファから立ち上がりました。

「あ、ああ」

男は状況が把握できないのか、呆然として樹里が帰るのを見ていました。

「どうして眠らないんだよ！　くそ！」

男はようやく我に返り、樹里を追いかけました。

「あんな上玉、逃がしてたまるか！」

男が樹里に追いついたのは、ビルの前の歩道でした。

「待って、お嬢さん」

彼は樹里に呼びかけました。

「誰だ、お前？」

樹里の向こうに、どこかで見た事がある男が立っていました。

「げ、杉下……」

そう、樹里のそばにいたのは、敏腕警部の杉下左京でした。

男は、以前左京に逮捕された事があり、顔を覚えていたのです。

「ハハハ、何でもありません」

彼は一目散にビルに逃げ込みました。

「誰だ、あいつ？」

杉下警部は、人の顔を忘れる名人です。逃げなくても大丈夫でした。

「私にケーキと紅茶をご馳走して下さった方です」

「ほお。そうか。礼を言えば良かったかな？」

杉下は、男が走り去った方を見て呟きました。

「とにかく、乗れ。由里さんのところまで乗せてくよ」

「ありがとうございます」

樹里は笑顔で応じました。杉下も運転席に戻ると、助手席に相方の神戸蘭の髪の毛が落ちていないか確かめて、樹里を乗せました。

「どう行くんだっけ？」

「そこを右です」

「あ、そうだったな」

杉下はアクセルをゆっくり踏み込み、車をスタートさせました。

「次はどっちだっけ？」

尋ねても樹里の返答がありません。

「え？」

杉下は、肩に何かが寄りかかるのを感じて左を見ました。

「は……」

樹里が居眠りをして、彼の方に倒れて来たのでした。

「こういうの、いいなあ……」

杉下の鼻の下が伸びたのは言うまでもありません。

樹里ちゃん、代理をする

御徒町樹里はメイドです。

先日、一週間の有給休暇をもらい、実家でマッタリしました。

途中、変な人に攫われそうになったり、杉下左京の車で居眠りしたりしました。

また、幼い妹達を連れてファミレスに行ったりしました。

亀島も樹里が休みなのを知り、実家に顔を出しましたが、あいにく樹里が出かけていた時で、その直後緊急指令が入り、彼は泣く泣く去りました。

そして、休暇を終えて樹里が五反田六郎氏の邸に戻った日の事です。

「御徒町さん、悪いんだが、今日一日、会社に来て私の秘書の代わりをしてほしいのだが」

五反田氏の秘書が、インフルエンザで休んでしまったのです。

「かしこまりました、旦那様」

樹里はこうして、いつものメイド服を脱ぎ、ＯＬの制服に着替えたのです。

「今日は税理士事務所の人が、監査に見える日なのだ。秘書に全部

任せていて、私には何もわからない。対応してくれたまえ」

どこかの政治家みたいな事を言う五反田氏です。

普通、五反田氏の会社くらいになると、税理士ではなく公認会計士を頼むはずなのですが、今回は子会社の監査ですので、税理士事務所のようです。

五反田氏の秘書は優秀で、子会社の経理をいくつも掛け持ちしていました。

でも、経理の経験が全くない樹里に、そんな仕事が勤まるのでしょうか？

そんな心配をしているうちに、税理士事務所の人がやって来ました。

「小宮山税理士事務所の者です。会計監査に参りました」

その人の名は福山雅夫。誰かの名前に似ています。長崎繋がりなのでしょうか？

「いらっしゃいませ。臨時秘書の御徒町樹里と申します」

樹里は深々とお辞儀をしました。

「どうもご丁寧に」

福山さんも深々とお辞儀をしました。

「それでは早速、帳簿の方を見せて頂けますか」

福山さんは仕事熱心なので、お茶を飲んだりとかしません。すぐに監査に入ります。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で、

「こちらになります」

と山のような書類を福山さんに渡しました。

「おお」

福山さんは、そんなにいっぺんに渡されるとは思わず、抱え切れずに落としてしまいました。

「ああ、すみません」

樹里は帳簿を拾いました。

「机をお借りできますか？」

福山さんは取り敢えず場所を決めないといけないと思い、お願いしました。

「はい。後で返して下さいね」

樹里が型通りのボケをかましました。福山さんは苦笑いです。

「さてと」

福山さんは机の上に帳簿を広げ、中身を確認し始めました。

「証憑書類を見せて下さい」

「はい」

樹里はスクラップブックの束をドスンと机の上に置きます。

「請求書、領収書、納品書を見せて下さい」

「はい」

段ボールが一つ、ズンと福山さんの足下に置かれました。

「この会社は、電子帳簿で処理されていますか?」

福山さんが尋ねます。樹里はニコッとして、

「パソコンに全部入力しています」

と応じます。福山さんは頷き、

「財務処理をしているパソコンはどれですか?」

「こちらです」

福山さんは、パソコンがある机に行き、

「起動させて下さい」

と言いました。

「はい」

樹里はパソコンの電源を入れました。

「ありがとうございます」

福山さんはモニターを見て、財務ソフトを開きました。

「現金を確認させて下さい」

「はい」

樹里は金庫のダイヤルを回し、扉を開きました。

「いくらありますか？」

「二千五百九十九万五千七百五十五円です」

「はい」

現金出納は一円単位まで正確でした。

「先月、仮払金七百万円を持ち出していますが、摘要に何も書かれていません。何の支出ですか？」

「土地の代金の手付けです」

樹里は笑顔で答えます。

「わかりました」

福山さんは請求書と領収書、そして証憑書類をチェックし終えました。

「毎月棚卸しをされているようですが、棚卸しの原簿はありますか？」

「はい、こちらです」

福山さんは仕入れの請求書と付き合わせながら、在庫の確認をしています。

「通帳を見せて下さい」

「はい」

樹里は金庫から通帳の束を出し、福山さんに渡します。

福山さんは通帳と財務ソフトに入力された金額を付き合わせます。

「先月は乗用車を入れ替えたようですが、その契約書はありますか？」

「はい、こちらです」

樹里は金庫から自動車の売買契約書を出し、福山さんに渡しました。

「下取車がありますが、前期の決算書のどれを下取りにだしたのでしょうか？」

福山さんは事務所から持参した前期の決算報告書を取り出し、樹里に見せます。

「こちらです」

樹里は減価償却資産の中に載っている乗用車の一台を示しました。

「はい」

福山さんは、財務ソフトの処理内容が契約書通りか確認します。

こうして、税理士事務所の監査は終了し、福山さんはようやく樹里の出したお茶を口にしました。

「貴女は今までどちらかの税理士事務所にいらしたのですか？」

福山さんは、お世辞ではなく、樹里の対応が素晴らしかったので、そう尋ねました。

「いえ、私はメイドですので」

「そ、そうなんですか……」

経験がないのにあれほどの対応ができるとは、と福山さんは感心しました。

そして、彼は不覚にも、樹里に惚れてしまったようです。

「またお会いできると嬉しいです」

「ありがとうございます」

樹里は福山さんのさり気ない口説きにも気づかず、彼を送り出しました。

こうして、樹里は無事に会計監査に対応できたのでした。

「何故メイドにそんな事を任せたのですか？」

五反田氏に、子会社の社長が尋ねました。彼は入室を禁じられ、別の部屋で監査が終わるのを待っていたのです。ですから、樹里の待遇には怒りを感じていました。

「彼女は、一回秘書に電話で手順を確認しただけで、全部覚えたのだ。お前よりずっと優秀だよ」

五反田氏は、不満そうな顔の子会社の社長に言いました。社長はシュンとしてしまいました。

「彼女は手放したくないな」

五反田氏は、ニヤリとして呟きました。

樹里ちゃん、刑事になる

御徒町樹里はメイドです。

でも時々、冒険をしたり、湖の女神になったり、虫になったり、未来に行ったりと、大忙しです。

そんな樹里が、遂に念願の刑事になりました。

敏腕警部杉下左京との絶妙なコンビネーションをお楽しみ下さい。

俺は杉下左京。警視庁が誇る名警部だ。

今日は俺の所属する特別捜査班に新人刑事がやって来る事になっている。

しかも若い女性らしい。

その事を知り、ミスター無能の亀島馨は浮き足立っている。

そして、昔の相方である神戸蘭はイライラしている。嫉妬だろう。

「失礼致します」

その新人が、特捜班室に現れた。

おお！　若い。しかも可愛い。しかもスタイルもいい。

何一つ蘭には勝てる要素がない。

「特別捜査班に今日付で配属になりました御徒町樹里巡査です。よろしくお願い致します」

新人はそう言って敬礼した。俺と亀島は敬礼を返したが、

「ケッ」

と言って、蘭はそっぽを向いた。仕方のない奴だ。

しかし、だ。

「御徒町君」

俺は咳払いしてから言った。

「はい、警部」

御徒町巡査は俺を見た。

「メイド服はまずいだろう？　スーツか、制服に着替えたまえ」

どんなボケだ、全く。

「そうなんですか」

御徒町巡査は、いきなりその場で服を脱ぎ始めた。

俺は飲みかけのコーヒーを吹き出し、亀島は湧かしたての黒烏龍茶を膝の上にこぼして大騒ぎだ。

「な、何やってるの、貴女は！　更衣室で着替えなさい！」

蘭が顔を赤らめて御徒町巡査を止めた。

「大丈夫です、お気になさらずに」

彼女は全く気にせずに服を脱いでしまった。つい、凝視ししてしまう俺と亀島。

「ああ」

俺と亀島は溜息を吐いた。何の事はない、メイド服の下にスーツを着ていたのだ。

期待させやがって、じゃなくて、驚かせやがって！

でもまあ、それでも可愛いから許す。コホン。

そして、早速俺達は今取りかかっている殺人事件の現場へと急行した。

現場は、八王子市の富豪の邸宅だ。

その家の持ち主である夕日奈熊五郎（ゆうひなくまごろう）氏が殺されたのだ。

熊五郎氏は、大きな壷で後頭部を殴打され、頭骨陥没で死に至ったらしい。

容疑者は三人。

長男の浩二。熊五郎氏の後継者と思っていたが、実は隠し子がいて、その隠し子が社長に就任したため、熊五郎氏を酷く怨んでいる。

長女の礼華。会社の重役になれると思っていたが、使い込みが発覚し、免職にされ、やはり熊五郎氏を怨んでいる。

そして、次女の裕香。彼女は遺言書で熊五郎氏の財産の半分を譲り受ける事になっていた。そのために殺害した可能性がある。

三人共、それぞれアリバイはなく、動機も十分過ぎる程ある。

全員が怪しかった。

俺は早速事情聴取に取りかかろうとした。

「警部」

ミスター無能の亀島が話しかけて来た。

「何だ？」

こんな時に五月蝿い奴だ。置いてくれば良かった。

「御徒町巡査に、犯人がわかったそうです」

「何ィッ？」

嘘だろ？　今来たばかりだぞ？　どうしてわかったんだ？

「御徒町巡査、犯人がわかったのか？」

「はい、警部」

御徒町巡査は笑顔全開で言った。

「一体誰が犯人なんだ？」

俺は彼女に近づいて尋ねた。うーん、いい香りがする。コホン。

「浩二さんです、警部」

「どうしてだ？」

浩二が怒りの形相で御徒町巡査に詰め寄った。

すると御徒町巡査はニッコリして、

「私、見てました」

「はあ？」

一同が一斉にそう叫んだ。

「意味が分からん。どういう事だ？」

俺が代表して尋ねた。

すると御徒町巡査はメイド服に着替え、

「私、昨日までここで働いていたのです」

「何ーっ！？」

驚天動地の結末だった。

御徒町巡査は、この屋敷に以前から潜入し、浩二が熊五郎氏を殺害するところを見ていたのだ。

「証拠の動画もあります」

御徒町巡査は、携帯で撮った殺害現場を見せた。

「おお！」

これこそまさに動く「動かぬ証拠」だった。

こうして、難航するかと思われた八王子の殺人事件は、呆気なく解決した。

その功労により、御徒町巡査は警部補に昇進し、亀島の上司になってしまった。

亀島が翌日休暇願を出したのは、言うまでもない。

樹里ちゃん、小旅行にゆく

御徒町樹里はメイドです。

今日は有給休暇を利用して、G県のH湖にやって来ました。

一人旅は初めての樹里ですが、いろいろと楽しい事がありそうです。

「こちらが、G県が誇ります、H山のH湖です」

バスガイドさんが、解説してくれました。

「随分Hが多いのですね」

何気ない樹里の一言に、その場の空気が凍りつきます。

「は、はい、では次です。H富士に登ります。ロープウェイを利用しますので、移動になります」

バスガイドさんは顔を引きつらせて言いました。

そして、H富士の頂上にロープウェイで登りました。

「こちらは標高千百三十三メートルです。あちらの方角に、天候が良い時は富士山が見えます」

バスガイドさんの説明に皆さんは「おお」と頷きました。

「今日は生憎天候が悪いので、見えません」

バスガイドさんが残念そうに言いました。

確かに遠くの山は霞んでしまって見えません。

「いつだったら見えますか？」

樹里が尋ねました。バスガイドさんは苦笑いをして、

「それは私にはわかりません」

「では、誰ならわかりますか？」

樹里が重ねて尋ねました。バスガイドさんは困った顔をして、

「そうですねえ、気象庁の方ならわかるかも知れません」

「そうなんですか」

樹里はニッコリして言いました。

「でも今日は見えないのですね、てんこうさんのせいで」

「いえ、てんこうさんという人のせいではないです。お天気のせいですね」

バスガイドさんはイラッとして言いました。

「そうなんですか」

樹里は全く気づかず、ニコニコして言いました。

「ではそろそろ麓に戻りましょう。次はM沢うどんを食べます」

喚声が上がります。M沢うどんは、日本三大うどんの一つに数えられる有名なうどんです。

うどん屋さんに着きました。地元で一番来客が多いと言われてるO沢屋さんです。

「ではこちらで、天ぷらうどん定食をお召し上がり下さい」

ガイドさんの案内で、樹里達は座敷に通され、そこでうどんを食べました。

「こちらがこのお店の社長さんです」

ガイドさんが恰幅のいい男性を紹介しました。

「本日はようこそおいで下さいました。当店自慢のうどんをどうぞご堪能下さい」

社長さんは、皆さんのそばに来て、いろいろと話をしています。

そして、樹里のところにも来ました。

「どうですか、お嬢さん。おいしいですか?」

社長がにこやかな顔で尋ねました。すると樹里は笑顔全開で、

「天ぷらがおいしいです」

「そ、そうですか。うどんはどうですか？」

やや顔が引きつり気味の社長が、もう一度尋ねました。

「この漬け物もおいしいです」

「そ、そうですか」

社長もイラッとして来ました。でもお客様なので、怒る事はできません。

「う、うどんはどうですかね、お嬢さん？」

社長は顔をヒクヒクさせて尋ねました。

「私、うどんアレルギーなんです」

樹里は全開の笑顔で言いました。社長はそのまま気を失ってしまいました。

「そ、そろそろ移動時間ですので、バスにお戻り下さい」

運ばれて行く社長を見ながら、皆さん移動です。

「では最後に、M沢寺にお参り致しましょう」

バスガイドさんは何故かもの凄く疲れた様子で言いました。

樹里達はM沢寺にバスで移動しました。

ここは、観世音菩薩を本尊とするお寺で、造られたのは平安時代です。

「ここでは自由行動となります」

樹里はそれを聞いて、境内を散策し始めました。

「一時間後にバスにお戻り下さい」

バスガイドさんがそう付け加えたのを聞いていませんでした。

そして一時間後。

「お客様の一人が戻っていません」

バスガイドさんが運転手さんに言いました。

「迷子になるような年の人はいなかったよな」

運転手さんは首を傾げて不思議そうに言いました。

「ええ。一人、気になる人がいましたが、多分いないのはその人です」

バスガイドさんは頭痛がして来ました。

そう、いないのは樹里なのです。

しばらくガイドさんは辺りを探しました。

でも樹里は見つからず、会社にその報告をした上で、バスはM沢寺を発ちました。

樹里はどこへ行ってしまったのでしょう？

「M沢寺で観光客が行方不明になったらしいぞ。さっきラジオのニュースで言ってた」

警視庁の敏腕警部である杉下左京は事件の捜査でG県に来ていました。

そして偶然通りかかった道で樹里を見かけ、車に乗せたのです。

「あんなところで行方不明って、どんな奴なんだろうな。顔が見てみたいよ」

「そうなんですか」

樹里はニコニコして言いました。

左京は実はその見てみたい「観光客」を自分が乗せている事を知りませんでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、チョコをプレゼントする

俺は杉下左京。言わずと知れた、桜田門（けいしちょう）の敏腕警部だ。

今日は二月十四日。バレンタインデーだ。

普通の連中は、その日が日曜日だと悲しむらしいが、俺は違う。

日曜日の方が嬉しい。

何故なら、心も愛情もこもっていない義理チョコなんぞを渡され、ホワイトデーのお返しを強要されずにすむからだ。

同僚の神戸蘭には、金曜日に、

「義理の義理のチョコ」

と渡されてしまい、

「お返し、楽しみにしてるわ」

と言われてしまった。

何て腹黒い女だ。あのシリーズに掲載して欲しいくらいだ。

そう、タイトルは「ホワイトデー目当ての女」。

絶対仕返ししてやる。心に誓った。ホワイトデーを楽しみにしてろ、蘭！

そんな事で、今日は休み。

俺は何をするでもなく、近所を散歩していた。

「う！」

嫌な光景に出会った。公園で、バカップル共がチョコを渡したり受け取ったりしている。

「ふお！」

寒くて入った喫茶店も、そんな連中でいっぱいだ。無言のまま出る。

「くそ」

つい、毒づいてしまう。その時だった。携帯が鳴った。

「おお！」

何というタイミングだろう。御徒町樹里からだ。

「お、どうした？」

何か期待していると思われたくないので、俺は極めて普通に話した。

「杉下さん、家に来てください。差し上げたい物があります」

心の中でガッツポーズをした。しかし、言葉は冷静だ。

「そうか。わかった。用事をすませてから行くよ」

「早く来て下さいね」

携帯を切ると、俺は猛ダッシュでアパートに帰った。

そして、服を選ぶ。タキシードか？

いや、それはおかしい。そんな大袈裟な格好はまずい。

心待ちにしていたと思われる。

だからと言って、ジャージ上下という訳にもいかない。

結局、革ジャンにジーパンという、いつもの服装に落ち着いた。

この方が、期待してる感がなくていいだろう。

そして車を駆り、新宿の樹里の実家に向かった。

「いらっしゃい、左京ちゃん。待ってたわん」

由里さんが出迎えてくれた。

嫌な予感がする。もしかして、由里さんと二人きりとか？

「杉下さん、お待ちしてました」

樹里と妹達が出迎えてくれた。ホッとした。

しかし、それも一瞬だった。家に入ると、そこには目を疑う光景があった。

「おはようございます、杉下さん」

何故かそこには、ミスター無能の亀島がいたのだ。

俺はフリーズしかけた。

「さあさ、座って、左京ちゃん」

由里さんが俺を強引に隣に座らせる。

亀島はちゃっかり樹里の隣だ。あのヤロウ……。

食事会が始まる。料理がたくさん並べられ、ケーキが出て来た。

「お誕生日、おめでとうございます！」

そのケーキには、「すぎちゃん」と歪んだ字で俺の名が書かれていた。妹達が書いたのだろう。

「え？」

俺はみんなを見た。

「忘れてたんですか、杉下さん？　今日は貴方の誕生日ですよ」

「あ」

俺はすっかり忘れていた。

全国的にバレンタインデーなので、自分の誕生日だという事を記憶の奥底に封印していたのだ。

涙が出そうなくらい嬉しかった。

亀島が俺にマフラーをプレゼントしてくれた。

今まで無能呼ばわりして悪かった。心からそう思った。

樹里達が、全員で作ってくれた手編みの手袋とセーターをくれた。

「ありがとう」

俺はぼろ泣きしていた。蘭に復讐するのはよそう。あいつからは何ももらっていないけど。

そして、サプライズな俺の誕生日会は終わった。

「さてと」

亀島を送り出し、俺も帰る支度をした。

「杉下さん」

樹里が笑顔全開で声をかけて来た。

「何だ？」

「はい」

樹里がチョコを差し出した。そうか、そっちもあったのか！

「お、おう、ありがとう。今日はバレンタインだったな」

俺はチョコを受け取りながら言った。すると樹里は、

「え？　バレンタインってなんですか？」

「は？」

まさかそんなオチが来るとは……。

さすが樹里だな……。

樹里ちゃん、訪問販売を受ける

御徒町樹里はメイドです。

今日は屋敷の持ち主である五反田氏は、家族と旅行に出かけて不在です。

樹里は留守を任され、一人であちこちの掃除をしていました。

そこへ訪問販売のセールスマンが来ました。

五反田氏がいる時はどんな営業も全部門前払いです。

しかし、樹里はそうせずに、彼を屋敷に入れてしまいました。

「いらっしゃいませ。本日は五反田は不在です」

樹里は会心の笑顔で言いました。

するとセールスマンは、

「私は化粧品のセールスマンですので、旦那様はいらっしゃらなくても大丈夫です」

「そうなんですか」

セールスマンは早速鞄を開き、中からたくさんの化粧品を出しました。

二十個くらいビンがあります。

「これだけ揃って、何と全部で二十万円という破格値です。天然由来成分のみで作られているので、通常価格は四十万円です」

「そうなんですか」

樹里はニコニコして聞いています。

セールスマンは、何も不審に思っていない樹里を絶好のカモだと思いました。

「どうですか、メイドさん。貴女もそのお美しいお顔を維持するために、たくさん化粧品をお使いでしょう？　今お使いの化粧品より、私のお奨めする化粧品の方が、遥かに貴女のお肌にいいですよ」

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔全開です。セールスマンは、あと一息と思ったようです。

「今お使いなのは、どちらの化粧品ですか？　こちらの化粧品とお比べになって下さい」

「ありません」

「は？」

セールスマンは、樹里の答えの意味がわかりません。

「今、お持ちではないのですか？」

「化粧品はありません」

樹里は笑顔で答えます。セールスマンは戸惑いながら、

「ああ、ここにはないのですね。では、こちらの化粧品で、貴女がお使いのものと同じ種類のものがありますから、それをお試し下さい」

「ありませんよ」

樹里は笑顔で言いました。セールスマンはさすがにイラッとしました。

「いえ、貴女の化粧品ではなくてですね、この化粧品の中で……」

「ですから、化粧品は使っていません」

樹里は更に満面の笑みで答えました。

「はあ？」

セールスマンが樹里の答えの意味を理解するのにしばらく時間がかかりました。

「えっと、もしかして、全然お化粧していないのですか？」

「はい」

「口紅も？」

「はい」

「眉も？」

「はい」

「ファンデーションくらいは塗ってますよね？」

「いいえ」

セールスマンはからかわれていると思いました。

でも樹里の顔を間近で見ても、全く化粧っ気がないのです。

そして、それ程の美人に接近して顔を見ていた事を思い出し、赤面しました。

「し、失礼しました！」

彼はビンを慌てて鞄に詰め込むと、逃げるように屋敷を出て行ってしまいました。

「お気をつけて」

樹里はドアを開けて彼を見送りました。

その時、携帯が鳴りました。五反田氏からの定時連絡です。

「変わったことはないかね？」

「はい。化粧品屋さんがいらっしゃいました」

「ほお。何か買ったのかね？」

「いえ」

「そうか。わかった。明日の午後六時に帰宅するから」

「わかりました」

樹里は携帯を切りました。そして、やりかけの掃除を再開するのでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京とデートする

俺は杉下左京。警視庁の敏腕警部だ。

今日は非番。そして、今日は待ちに待った御徒町(おかちまち)樹里(じゅり)とのデート。

前回は、母親の由里さんと、無能な部下の亀島に邪魔されたが、今日は二人きりだ。

樹里にはくどいくらいに一人で来るように言い含め、また東京フレンドランドで待ち合わせた。

「杉下さん」

俺が約束の一時間も前に到着し、手持ちのタバコを全部吸い尽くした時、ようやく樹里が現れた。

正確に約束した時間だ。

「おお、相変わらず、時間に正確だな」

「そうなんですか？」

樹里はニコッとして言った。その相変わらずのずれっぷりもいい。

「どうしたのですか、杉下さん？」

俺は変な付属がついて来ていないか心配で、周囲を見渡した。

「ああ、いや、何でもないよ。さ、入ろうか」

「はい」

どうやら由里さん達はいないようだ。

「あれ？」

期待していたお化け屋敷はなくなっていた。

「都合により閉鎖しました」

と張り紙がある。どうしたのだろう？

「残念でしたね、杉下さん。私に怖がって欲しかったのですよね？」

樹里の満点笑顔のその言葉に、周囲の女性達が俺を変なものを見る目で睨んだ。

何か、俺、悪い奴に思われてる？

「ハハハ、そんな事はないよ、樹里」

俺は慌てて樹里を違うアトラクションに連れて行った。

次は観覧車。行列ができていた。

俺はこういうのが一番苦手だが、樹里と一緒なら我慢できる。

そして俺達の番。

「わーい！」

何故か俺を差し置いて五歳くらいの男の子が樹里と乗ってしまった。

「はい、お父さんもどうぞ」

「……」

俺はそう言った係員を睨みつけてから、観覧車に乗り込んだ。

一周する間、樹里は男の子と楽しそうに話していた。

これじゃ、本当に親子で観覧車みたいだ。

つまらん。

そして俺の企みはガキのせいで見事に潰され、観覧車を降りた。

「バイバーイ！」

そのガキは嬉しそうに樹里に手を振って走り去った。

親はどこにいる！？　腹が立った。

次に俺は、メリーゴーランドに乗る事にした。

またあのガキが現れないか見回し、いないのを確認して乗り込む。

今度は樹里と二人で馬車に乗れた。

狭いので身体が密着する。

「ごめんなさい、杉下さん。きついですよね」

樹里は申し訳なさそうに俺を見た。

「全然。大丈夫だよ」

と言うか、この狭さを待っていた俺。

変態と言われてもいい。

ようやく樹里とのデートという感覚を得られたのだ。

メリーゴーランドを降り、次のアトラクションを目指していると、さっきのガキが一人でベンチに座っていた。

「？」

刑事（デカ）の勘が働く。これは妙だ。

「おい、どうした？」

俺はそのガキに近づいて声をかけた。

「ああ、さっきのおじさん」

「お兄さんだ！」

ついムキになって言ってしまった。

「一人なんですか？」

樹里が隣に座って尋ねる。ガキは泣きそうな顔をして、

「うん」

「よし、お兄さん達と一緒に遊ぼうか」

「ええ？　いいの、おじさん？」

「お兄さんだ！」

俺はその子を連れ、いろいろな乗り物に乗りながら、親らしき人物がいないか、探した。

しかし、見つからなかった。

もうアトラクションも乗りつくし、俺の財布も悲鳴を上げていた。

その時だった。

「貴明！」

一人の女性が走って来た。ガキが反応した。

「ママ！」

二人はしっかりと抱き合い、泣いた。俺ももらい泣きしそうだ。

「おかしな事を考えるな。何もなかったから良かったけどな」

俺は小声で母親に言った。

「すみませんでした。私、もう少しで……」

母親はそこまで言って泣き出した。おいおい、俺が泣かしてるみたいだぞ。

「俺は警視庁の刑事だ。何か困った事があったら、相談くらい乗れるぞ」

俺は名刺を渡し、母親を励ました。

「ありがとうございました」

母親はガキに頭を下げさせながら、自分も何度もお辞儀をした。

「おじさん！」

ガキが駆け寄って来た。

「お兄さんだ！」

「ごめんね、お姉さんとデートだったのに」

ガキめ。子供が変な気を遣うな。ガキは手を振りながら走って行った。

「あ、ああ」

俺は手を振り返した。樹里も手を振った。

「いい子ですね。私もあんな子が欲しいです」

その発言に、俺は心臓が飛び出そうになった。

「お母さんに頼んでみます」

「は？」

俺はマジマジと樹里を見た。

そう言えば、由里さんの元旦那はどうしているのだろう？

そんな事を考えていた俺に、樹里の「天然爆弾」が炸裂した。

「杉下さんとお母さんが結婚すれば、あんな可愛い弟ができるかも知れませんね」

由里さんが幾つなのか知らないが、まだ生ませるつもりなのか、樹里？

それより、俺はまだ「お父さん候補」なのか……。

樹里ちゃん、メイド喫茶で働く

御徒町樹里はメイドです。

成城の大富豪である五反田六郎氏の屋敷で働いていました。

ところが、五反田氏が事業の拡張のために渡米する事になりました。

家族全員移住するのです。

「本当は、君にも来て欲しいのだが」

五反田氏は樹里が同行してくれる事を切望していましたが、彼女の家の事情も知っていたので、無理強いはしませんでした。

「しばらくしたら日本に戻る。その時はまたここに来てくれたまえ」

「はい、旦那様」

こうして樹里は五反田家を去り、仕事を探す事になりました。

そして「メイドさん募集」の広告を見て、どんなところなのかも確認せずに履歴書を送ってしまいました。

面接日当日です。そこは、「メイド喫茶」でした。しかも、かなりきわどいところのようです。

「御徒町樹里さん、ですか?」

店長が面接官です。目が危なそうで、普通の女子なら逃げ出しそうですが、樹里は笑顔全開です。

「はい。そのようです」

「は？　もしかして偽名？」

「いえ、違うと思います」

店長はからかわれているのかと思い、イラッとしました。

「こういうお店で働いた事はないみたいだけど……。この、『カワイコちゃん』て言うお店、どんな店だったの？」

「楽しいお店でした」

相変わらず笑顔全開の樹里です。

「いやいや、そんな事を訊いているのではなくてね」

またイラッとする店長ですが、

（こいつ、面白いな。雇ってみるか）

「わかりました。一応採用です。いつから来られますか？」

「今日からでも大丈夫です」

「わかりました」

樹里はそのまま奥に連れて行かれて、制服を渡されました。

それは、あのキャバクラの衣装を上回る凄さでした。

「これは……」

樹里は衣装を手に取り呟きました。

「着られないのなら、採用は取り消しですよ」

店長はニヤリとして言いました。

「可愛いですね」

樹里の反応に店長は昭和並みのこけ方をしました。

そして試着です。

「ブッ」

店長は鼻血が出そうになりました。樹里のスタイルの良さに驚愕しています。

（やった！　ライバル店に勝ったぞ！）

彼は心の中でガッツポーズしました。

「やっぱりちょっと小さかったですね」

樹里はおへそが見えているのを気にしていますが、他は気にならないようです。

「ハハハ」

それはそういう衣装なの。店長はそう思いましたが、何も言いませんでした。

店長の目論見通り、樹里は大人気になり、他店を圧倒してしまいました。

キャバクラ同様、お触りされても怒らない樹里は、エロ親父のアイドルです。

そして本当にメイドをした事があるのを知り、熱狂的なマニアが着きました。

そしてある日の事。

「いらっしゃいませ、ご主人様」

樹里が席に着くと、そこには見覚えのある顔がありました。

「わわ、御徒町さん！」

何と警視庁の亀島馨がいたのです。彼は樹里の服を見て、鼻血を

垂らしてしまいました。

「ああ、亀島さん。今日は警察はお休みですか？」

樹里は笑顔全開で尋ねました。一瞬にして店内を緊張感が走ります。

「お、御徒町さん、警察の話はここではまずいです」

亀島はハンカチで鼻血を拭って言いました。

「そうなんですか？」

結局亀島は居辛くなり、帰ってしまいました。

そして何故か樹里も首になりました。

そのお店が警視庁に風営法違反で捜査に入られたのは、それからまもなくでした。

樹里ちゃん、居酒屋で働く

御徒町樹里はメイドでした。

しかし、雇い主の五反田六郎氏が渡米したので、失業中です。

一度メイド喫茶に勤めましたが、そこはクビになってしまいました。

樹里はまた募集広告を見て、ある店の面接に行く事になりました。
そこは居酒屋でした。

そして面接日です。いつものやり取りがあります。

「御徒町樹里さんですか？」

店長が尋ねます。

「はい、多分」

いつもの樹里全開です。店長はイラッとして、

「今まで、どんなところで働いていたの？」

「履歴書に書いてありますが」

店長はそれもそうだと履歴書の職歴欄を見ました。

（げ。五反田六郎の家だと？　この女、ホラ吹きか？）

免許・資格の欄には、調理師、介護士、看護師、行政書士、宅地建物取引主任者と様々なものが書かれています。

（妄想癖があるのか？）

疑いの眼差しで樹里を見る店長です。

「料理ができるのですね？」

「はい」

笑顔で応じる樹里。店長は意地悪してやろうと思い、

「じゃあ、何か作って下さい」

「はい」

樹里は厨房に案内され、あり合せの材料で一品料理を作る事になりました。

「どうぞ」

一体どうすればそんな料理ができるのか、と眼を疑うようなものが店長の前に出されました。

「う、うまい！」

死ぬ前にこれを食べたい。そう思ってしまうほどおいしい料理です。

「採用です！　明日から来て下さい！」

店長は感動の涙を流して言いました。最初と大違いです。

「ありがとうございます」

樹里は笑顔で答えました。

「制服は後で渡すから、明日は私服で来て下さい」

「どんな服でも良いのでしょうか？」

店長はニッコリして、

「あまりケバケバしくなければいいですよ」

と答えました。

そして次の日です。

樹里はメイド服を持って現れました。

「これでもいいですか？」

店長はちょっとビックリしましたが、

「いいでしょう」

「ありがとうございます」

樹里はメイド服で仕事をしました。

手が足りなくなり、厨房だけでなく、注文にも出ました。

樹里のメイド姿はたちまち評判になり、お客が増え出しました。

そして、以前勤めていたキャバクラやメイド喫茶の客も、樹里が働いている事を聞きつけ、やって来ました。

「本物のメイドがいる居酒屋」は、樹里の笑顔と、その魔術のような料理で大繁盛です。

中でも店長お奨めの「樹里ちゃんスペシャル」は、前日までに予約を入れないと食べられません。

店長は天下を獲った気分でした。

ところが一年後の事です。

五反田六郎氏がアメリカから戻り、樹里を呼び戻しました。

店長は樹里を引き止めたかったのですが、五反田氏が相手ではどうする事もできません。

彼はガッカリし、店を閉める決意をしました。

その時、携帯が鳴りました。樹里からです。

「土曜日だけ、働かせて下さい」

店長は泣いてしまいました。

樹里も、居酒屋の仲間や、常連のお客さんと会えなくなるのが悲しくて、五反田氏に頼んだのです。

こうして、樹里は、五反田邸のメイドと、居酒屋のメイドを兼任する事になりました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、危機一髪？

俺は杉下左京。警視庁の敏腕警部だ。

今日は、人身売買組織の窓口になっているらしい風俗店に強制捜査に入る。

看板はメイド喫茶だが、裏では売春も斡旋しているらしい。

しかも、風営法にも触れている。

突破口としては、風営法違反。

そして容疑者を締め上げ、あ、いや、問い質し、人身売買の組織とそのルートを解明する。

「よし、行くぞ、亀島、蘭」

俺は特捜班のメンバーである亀島馨と神戸蘭に声をかけた。

「ええ」

蘭はすぐさま反応したが、亀島は何故か机から離れない。

「どうした、亀島？　具合でも悪いのか？」

「あ、その、ちょっと嫌な事がありまして」

嫌な事だと？

そんな事を言えば、俺は毎日お前に会うという嫌な事を経験しているんだぞ！

しかし言えない。それではパワーハラスメントになってしまう。

「つまらん事を言うな！　行くぞ」

「でも、杉下さんもショックを受けると思いますよ」

「何の事だ？」

俺は意味がわからず、亀島に詰め寄った。

「と、とにかく、行けばわかりますよ」

亀島は自棄（やけ）を起こしたように立ち上がると、先に部屋を出て行った。

俺達はまもなくメイド喫茶に着いた。

「警察だ。そのままで動くな」

一気に飛び込む。万が一に備えて銃も携帯しているのだ。

「キャアアア！」

うお、もの凄い格好の女の子が出て来たぞ。

「あんた達はここ！」

蘭が事務所から従業員を追い出し、女の子達を押し込む。

「何なのよ、あの格好。水着だってもっと肌が隠れているわ」

蘭は忌ま忌ましそうに毒づいた。

確かにそうだが、蘭の僻みも加わっている。

あいつは若い女の子が大嫌いなのだ。

「良かった」

亀島がそう呟いたのを俺は聞き逃さなかった。

「良かったってどういう事だ、亀島？」

「え？　そんな事言ってませんよ」

もの凄い汗が額から流れているのに、まだシラを切る亀島。

「確かに言ったわ。私も聞いたから」

蘭まで参戦し、亀島は追いつめられた。

「おい、隠すとためにならんぞ」

まるで容疑者扱いだ。亀島は壁に追いつめられ、観念したようだ。

「その、御徒町さんがいたんです」

「えっ？」

俺と蘭は仰天した。いた？　樹里が？

「何でそんな事を知っている？」

俺は亀島の襟首を掴んだ。

「こ、この前、この店に来たからです」

「……」

俺は呆れた。蘭は完全に亀島を軽蔑の目で見ている。

「その時、御徒町さんが僕についたんです」

それは聞き捨てならなかった。

「お前、まさか！」

俺はもう少しで亀島を絞め殺してしまいそうだった。

「やめなさいよ、左京！」

蘭が止めに入り、俺は亀島を放した。

「何もしてませんよ。まさかあの人がこんなところにいるなんて思

いませんでしたから、本当に驚いて、すぐに帰ったんです」

亀島は項垂れて言った。

なるほど。それでここに来たくなくて、あんな事を言っていたのか。

ガキめ。刑事失格だ。しかし、俺は大人だ。

「亀島」

亀島は俺の声にビクッとし、

「は、はい」

「今度潜入捜査をする時は、前もって俺に言え」

俺の温情だ。そうしないと、こいつは始末書ではすまなくなってしまう。

「あ、ありがとうございます」

返事としては正しいのだが、端で見ている蘭には奇妙な会話に見えただろう。

こうして捜査は無事終了し、従業員達の証言から売春と人身売買の実態がわかって来た。

全部まとめて片づけてやるぞ。

それよりもだ。あいつ、ホントに危なっかしい。

もう少し、仕事を選ばないといけない。

この前だって、何も知らずにキャバクラ勤めてたんだから。

そうならないように、説教しなければ。

俺は樹里の携帯に連絡した。

出ない。何してるんだ、こんな時間に!?　もう夜の十一時だぞ。

俺は知らなかった。

樹里がその時間は居酒屋で「樹里ちゃんスペシャル」を作っているなんて。

樹里ちゃん、マルタイになる

俺は杉下左京。警視庁特捜班の警部で、班長だ。

とは言っても、班には三人しかいない。

俺と、同期の神戸蘭（かんべらん）と亀島馨。

あまり忙しくない班なのだからそれで十分だろう、と刑事部長に言われてしまった。

確かに、暇だ。あまり仕事がないのは以前と変わりない。

俺達が暇なのはいい事だ。そう思い、仕方なく納得する。

そんなある日の事。

捜査一課の課長に呼び出された。

「何しに来たんだよ、杉下？」

一課に入ると、相変わらず脱獄囚顔のバ加藤がいた。

「お前こそ、まだここにいられたのか？　よくクビにならないな、その悪人面で」

「うるさい！　刑事は顔でするもんじゃない！」

バ加藤は本気で怒り出した。俺はそれを無視して、課長の席に近づいた。

「お呼びでしょうか？」

課長は俺を見上げて、

「実は、あるマルタイの護衛をしてもらいたいのだ」

マルタイというのは、犯罪の目撃者や重要な証言をする人で、犯人等に命を狙われている者を指す。

「マルタイ？　護衛？　それは特捜班の仕事ではないでしょう？」

「ＳＰが足らんのだ。それにマルタイはお前の知り合いだぞ」

「え？」

どこのどいつだ、マルタイになんかなりやがったのは！？

そしてそのマルタイが待つ部屋に案内され、マルタイに会って腰が抜けそうになった。

「ああ、杉下さん。お久しぶりです」

そこにいたのは御徒町樹里（おかちまちじゅり）だった。

「お前、何を仕出かしたんだ？」

俺は心が折れそうになるのを何とか防ぎ、樹里に尋ねた。すると課長が、

「その子は、箕輪組の組長を射殺した犯人を見たんだ」

「え、箕輪組？」

箕輪組と言えば、G県を本拠地にして、都心までその勢力を伸ばしている新興暴力団だ。

「この子はその犯人に狙われている。護衛の任務に就いてくれ。二十四時間、片時も離れるな」

「は、はい」

俺は樹里を見た。

「よろしくお願いします、杉下さん」

樹里は笑顔全開で言った。

しかし、何とも複雑な心境だ。樹里とずっと一緒にいられるのは嬉しいが、仕事で一緒なのは嫌だ。

俺は樹里を伴ってひとまず特捜班室に戻った。

亀島は大喜びだが、蘭はムスッとして不服そうだ。

「御徒町さんは、必ず私が守ります」

「ありがとうございます、亀島さん」

亀島は勘違いしているようだ。

「亀島、この仕事は蘭に担当してもらう。お前は狙撃犯の方を調べてくれ」

「そ、そうですか」

あからさまにガッカリする亀島に同情する者はいない。もちろん、金をくれる者もいない。

当然だ。女性には女性のＳＰが就く。でなければ、守り切れない。

「私は嫌よ、左京。あんたがやりなさいよ」

蘭は剥れた顔で言った。

「あのな、ふざけた事を言ってるなよ、蘭」

「その子の事は、あんたが誰よりも知ってるでしょ？　同棲もしていたようだし」

「えええ！？」

亀島が騒ぎ出す。

「同棲ってどういう事ですか、杉下さん！？」

「あー、五月蝿い！　もういい、頼まん！」

俺は自分で樹里を護衛する事にした。

「お前は俺が守るよ、樹里」

「ありがとうございます、杉下さん」

杉下さん、か。左京さんて呼んで欲しいと思う俺だった。

俺は樹里を車で送りながら、今は居酒屋で働いている事を知った。

あの大金持ちの五反田氏は、更に大金持ちになるため、アメリカに行ったのだそうだ。

どこまで欲深い奴なんだ。

樹里は居酒屋の仕事が終わり、由里さんのところに戻る途中で、箕輪組の組長が射殺されるのを見たのだ。

「それで、何度か狙撃されているんだな？」

「はい。これがそうです」

樹里はバッグを見せた。弾痕（だんこん）がある。

「危なかったな。それだけか？」

「いえ、ここもです」

今度は被っていた帽子を見せられた。それは天辺に弾痕があった。

「えええ？　こんなところを撃たれたのに、無事だったのか、お前？」

「はい、おかげ様で」

樹里はニッコリして言う。それにしても、全然怖がっていないのは理解に苦しむ。

お化け屋敷の比ではないはずだ。やっぱり樹里はズレてるな、感覚が。

「何！？」

銃声がした。前タイヤを撃たれたようだ。

「くそ！」

ハンドルが効かない。俺はすぐに車を停め、辺りを窺った。

狙撃犯はどこから狙ったのか？　そして、どうして俺が樹里を乗せている事を知ったのか？

まさか！　警視庁に奴等に通じている者がいる？

「樹里、伏せてろ」

「はい」

俺は拳銃を出し、車から降りた。

「うお！」

また銃声だ。どこからだ？　もう一度辺りを見た。

ライフルで狙われているのなら、勝ち目はない。俺は只の標的だ。

「わ！」

また撃たれた。ちい！

逃げるので精一杯だ。しかも周りには隠れるところがない。

「杉下さん」

「え？」

ああ、おい、樹里、そいつ誰だ？　何で嬉しそうにそいつについて行くんだよ！？

狙撃は囮だったのだ。別の奴が、樹里を連れ出してしまった。

まずい、大失態だ！

俺は撃たれるのを承知で、樹里を追った。

また銃声。しかし、角度が違う。

「左京、狙撃犯は私が仕留めたわ！　樹里ちゃんを！」

蘭がいた。彼女はライフルを持っていた。

「こうなるってわかっていたのか？」

蘭は嬉しそうに、

「課長の作戦よ。あんたは囮だったの。連中に情報を流して、わざと狙わせたのよ」

「……」

くっそう。俺はピエロかよ。

「樹里！」

俺は走った。

「あれ？」

樹里がニコニコして立っている。周りに三人、大男が転がっていた。

「何だ、どうしたんだ？」

俺はそいつらが気を失っているのを確認し、樹里に尋ねた。

「皆さんが柔道をしようとしたので、投げさせていただきました」

「何ーッ！？」

樹里が資格マニアだという事は知っていたが、そういう資格も取っていたとは……。

しかも半端ではない強さだ。

護衛はいらなかったってか？

俺は思いっきり脱力した。

樹里ちゃん、バイトを掛け持ちする

御徒町樹里はメイドでした。

今は「本物のメイドさんがいる居酒屋」というお店で厨房と接客のアルバイトをしています。

彼女のおかげでその居酒屋は地域一番店になり、似たような店がたくさんできては潰れました。

本当のメイドはそう簡単には見つからず、偽者を使って客を呼ぼうとした浅ましさはすぐに見抜かれてしまいました。

メイドマニアをなめてはいけないのです。

ある日、樹里は店長に呼ばれました。

「昼間も働けませんか？」

「はい、大丈夫です」

樹里はどういう仕事なのかも確認せずに返事をしました。

「お前は無用心過ぎる！　もっと慎重に仕事を選べ！」

警視庁の杉下警部に叱られたのを思い出した樹里は、店長に尋ねました。

「どんなお仕事ですか？」

「メイドさんのいる喫茶店だよ」

「そうなんですか」

樹里はニッコリとして言いました。

こうして、樹里は喫茶店でも働く事になりました。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

昭和の香りが漂う喫茶店です。

でも、樹里が本物のメイドだという事は知れ渡っていたので、居酒屋にはいけない人達が訪れました。

「ご注文はお決まりですか？」

樹里がある席に行くと、そこには杉下警部と神戸蘭警部がいました。

「何だ、ここでも働いてるのか？」

「はい」

気のせいかも知れませんが、神戸警部が樹里を睨んでいるようです。

「俺はコーヒー」

「じゃあ、私もコーヒー」

突然神戸警部は杉下警部の隣に移り、ベッタリと張り付きました。

「わかりました。ご注文を繰り返します。コーヒーがお二つで」

「急がなくていいわよ、ちょっとこうしていたいから」

「おい、蘭！」

杉下警部は嫌がっていました。でも神戸警部は離れません。

「……」

樹里はモヤモヤしながら注文をマスターに伝えました。

「お客様、お急ぎでないそうです」

樹里は二人の様子が気になって、遠くから見てしまいました。

まだ神戸警部は杉下警部に張り付いていました。

「……」

樹里にはモヤモヤの原因がわかりませんでした。

やがて喫茶店の仕事を終え、樹里は居酒屋に行きました。

その時、携帯が鳴ります。杉下警部からでした。

「今どこだ?」

「これから居酒屋に行くところです」

「そうか。さっきの事、誤解するなよ」

「喫茶店は一階ですよ、杉下さん」

「そういうボケはいらん!」

樹里はボケたつもりはありません。

「とにかく、また会って話そう。蘭とは何でもないんだから」

「はい、わかりました」

樹里はどうして杉下警部がそんな事をわざわざ言って来たのかわかりません。

でも、モヤモヤはなくなりました。不思議です。

「私、もしかして……」

樹里は携帯をしまいながら思いました。

「花粉症?」

杉下警部がいたら、昭和並みのこけ方をした事でしょう。

樹里ちゃん、取材される

御徒町樹里（おかちまち　じゅり）は居酒屋と喫茶店で働くメイドです。

本当のメイドなので、その人気は絶大です。

とうとうテレビ局の取材が居酒屋に来ました。

「貴女が本物のメイドさんですね？」

アポなし突撃取材で有名な芸人が言いました。

「打ち合わせではそうですと言えばいいと言われました」

樹里のネタばらしの答えにいやな汗がドッと出る芸人。

生放送なので取り直しができません。

「あはは、面白いメイドさんだなあ。俺、弟子入りしようかなあ」

芸人は何とかボケてその場を誤魔化しました。

「誰に弟子入りするのですか？」

樹里は大真面目な顔で尋ねます。

「貴女にですよ、メイドさん」

芸人が嫌らしい目つきで樹里に近づき、手を握りました。

「ありがとうございます。では明日からよろしくお願いします」

「あ、いや、そうではなくてね……」

ここで手を振り払われて切れるのがこの芸人の「鉄板」でしたが、樹里は手を握り返して来ます。

「お、お、お……」

芸人は、よく見るともの凄く可愛い樹里に手をギュッと握られているのに気づきました。

「リアルに」狼狽しています。

「あはは、今日は四月一日だから、思い切って言っちゃいますね。俺と付き合って下さい」

樹里に「遊ばれている」原状を何とか打開したい芸人は今度こそ拒否されると思って言いました。

「いいですよ」

芸人は耳を疑いました。「リアル」には嬉しいですが、「芸人的」には致命傷です。

「あはは、メイドさん、俺を芸能界から抹殺したいんですか？でも、本当に付き合ってくれる訳じゃないですよね？」

芸人は何とか樹里の「冗談」に持って行こうと必死に目で合図を

して言いました。

「目にゴミが入ったのですか？」

「違うって！　もういい加減にしてよ！　何だよ、そんなに俺の事が嫌いか！？」

とうとう芸人は追い詰められて、滅茶苦茶な切れ方を決行しました。

これで樹里が泣き出したり、逃げ出したりしたら「汚名（？）」が挽回できそうです。

「嫌いではないですよ。どちらかと言うと、好きです」

笑顔全開でそう言われ、その芸人は天然爆弾にやられてしまいました。

全面降伏です。

ＣＭに入り、廃人のようになった芸人が居酒屋から運び出されました。

「困りますよ、店長。段取り通りにしていただかないと」

ディレクターが店長に言いました。すると周りにいた客が、

「お前、樹里様に文句があるなら、俺達が相手になるぞ」

「おまえんとこのテレビ局の視聴拒否運動をネットで立ち上げるぞ」

「ホームページを改竄するぞ」

「そうだそうだ」

ディレクターの一言が、樹里信者の怒りを呼んでしまいました。

「いや、あの、その……」

ディレクターは、甲子園で巨人を応援している人の心境です。

ここは完全にアウェーです。

テレビ局は逃げるように居酒屋を出て行きました。

「樹里様、貴女はやっぱり素晴らしい」

樹里信者達は、自分達で作った歌を合唱し始めました。

「ありがとうございます」

樹里は笑顔全開で言いました。

そして次の日です。

何故か昨日来たテレビ局の編成局長がディレクターと来店しました。

「昨夜は大変失礼致しました」

編成局長は店長に頭を下げました。

「どういう事ですか？」

店長は事情が飲み込めません。

「実はですね、昨晩の視聴率が、番組始まって以来の好成績だったのです。つきましては、メイドさんに番組のレギュラーになっていただいてですね……」

「お断りします」

昨日ディレクターに因縁をつけた樹里信者が、店長の代わりに勝手に返事をしました。

「樹里様は、俺達のメイドさんなんだよ。お前らのような欲の皮の突っ張った連中に渡すものかよ」

「な、何という事を！」

編成局長はムッとして店を出て行きました。店長は泣きながら、

「ありがとう、皆さん。これで樹里ちゃんはこの店のアイドルでい続けられます」

「わー！」

皆、抱き合って涙しています。気持ち悪いです。

「一番テーブルの方、スペシャルお待たせいたしました！」

何も知らない樹里が厨房から現れました。

更にヒートアップする信者達です。

こうして信者の集いは閉店まで盛り上がり続け、開店以来の売上を記録しました。

樹里ちゃん、左京を助ける

杉下左京さんは警視庁特捜班の敏腕警部です。

しかし大泥棒（ルパン）を追いかけている訳ではありません。

今追っているのは、巨大な利権に群がる人達です。

大手ゼネコンが受注したダム工事に絡み、政治家が動いているという密告がありました。

当事者と思われる政治家の元秘書だった男からです。

東京地検が捜査に乗り出し、男を保護しようとした矢先、その人は死んでしまいました。

ビルの屋上からの転落死。

転落死と言うのは、自殺か他殺か不明だからです。

残念な事に、警視庁には凄腕の検視官がいません。

「俺のとはサイズが違うな」

とか言う人は存在しないのです。

「絶対にこのヤマ、片付けるぞ」

杉下警部は特捜班のメンバーである神戸蘭（かんべらん）警部と亀島馨警部補に

言いました。

「はい」

捜査一課との合同本部が立ち上げられ、会議が開かれました。

「どうしてくれんかと一緒に仕事しなくちゃならねえんだよ？」

皮肉たっぷりに、脱獄囚顔でお馴染みの加藤警部が言います。

「それはこっちのセリフだ、バ加藤」

杉下警部も負けていません。

「俺の小学校時代のあだ名を言うな、杉下ァ！」

加藤警部は鬼の形相で叫びました。哀れな人です。

こうして元秘書転落死事件の捜査が開始されました。

聞き込みは国会内部にまで及びます。

そして大手ゼネコンのダム建設工事関係者も事情聴取を受けました。

何人か、事件当日のアリバイが不明の者が浮かび上がり、捜査も大詰めを迎えます。

そんなある日の事です。

「どういう事ですか、部長!?」

珍しく杉下警部と加藤警部が二人で刑事部長に噛み付いています。

「どうもこうもない！　今回の転落死は、自殺で決着だ！」

刑事部長は二人に負けないくらいの大声で言いました。

「そんなバカな……。容疑者まで現れて、あと一歩なのに、自殺？　納得できません！」

杉下警部はそれでも諦めません。

「そ、そうです。自分も納得できません！」

加藤警部が同意します。二人の意見が一致するとは、天変地異の前触れかも知れません。

「うるさい！　それ以上文句を言うなら、お前ら二人共捜査本部から外すぞ！」

杉下警部と加藤警部は仕方なく引き下がり、捜査本部に戻りました。

「圧力か？」

加藤警部が呟きます。

「だな。卑怯な奴らだ。てめえ達の襟を正すのは後回しで、こうい

う事だけは迅速に動きやがる」

杉下警部は忌ま忌ましそうに言いました。

「畜生！」

加藤警部はテーブルが割れるのではないかという勢いで叩きました。

数日後の夜、杉下警部は樹里のいる居酒屋に現れました。

「杉下さん、いらっしゃいませ」

樹里はいつものように笑顔全開です。

「よう。いつも明るいな、樹里は」

「はい、ありがとうございます」

樹里は嬉しそうに答えます。そして、杉下警部の顔色が冴えないのに気づきました。

「どうされたのですか、杉下さん？」

杉下警部は苦笑いをして、

「俺の愚痴、聞いてくれるか、樹里？」

「はい、喜んで」

樹里は満点笑顔で言いました。

杉下警部は、時折笑顔を見せましたが、いつもの陽気さはなく、早めに帰りました。

「杉下さん……」

暗い杉下警部を樹里は心配しました。

そして翌朝になりました。

樹里は、アメリカに行っている大富豪の五反田氏の出迎えで成田空港に来ていました。

五反田氏は、一時帰国して、大きな合併を進めるようです。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

樹里は五反田氏に言いました。すると五反田氏は、

「どうしたね、御徒町さん？　元気がないようだが？」

「はい。私の大切な人が辛そうでしたので、心配で」

樹里の顔が暗いのを初めて見た五反田氏は、

「良かったら、私に話してくれないか？　何があったのかね？」

樹里は五反田氏に促されて、杉下警部の愚痴を話しました。

「そうか。なるほど」

五反田氏は樹里を見て微笑み、

「私は貴女の笑顔に何度も救われ、家族も助けられた。だから貴女の笑顔が見られないのは寂しい」

「ありがとうございます」

樹里は微かに微笑んで応じました。五反田氏は、

「また笑顔を見せて欲しいから、ちょっとだけ力を貸そう」

と言いました。

「どういう事なんですか、部長！？」

再び杉下・加藤の迷コンビが刑事部長に噛み付いています。

「私だってわからんよ！　総監から突然捜査の続行を命じられたんだよ！　文句があるなら、総監に言ってくれ！」

「はあ？」

杉下警部は加藤警部と顔を見合わせてしまいました。

こうして元秘書転落死事件は殺人事件と判明し、被害者の元の雇い主である大物政治家が事情聴取を受けました。

「こんな事をして只ですむと思うなよ！」

ヤクザ顔の政治家は捨てゼリフを吐きました。

「残念ですが、貴方の後ろ盾だったゼネコンの本体である商社はもう貴方の支援者ではありませんよ」

杉下警部はニヤリとして言いました。

「何！？」

政治家がヤクザになったのか、ヤクザが政治家になったのかわからないような顔のその人は仰天しました。

「観念しろよ、悪党！」

杉下警部はクールに決めました。

「かんぱーい！」

その日は呉越同舟で祝杯を上げました。特捜班と捜査一課が樹里のいる居酒屋で飲み会です。

「杉下さん」

樹里が料理を運んで来ました。神戸警部は途端に機嫌が悪くなり、亀島警部補はにやけます。

「良かったです。杉下さんが元気になって」

「おう。ありがとうな」

その時、杉下警部はハッとしました。

(樹里にあの話をした翌日に事件の捜査が再開された……。まさかな)

いくら樹里が不可思議な女の子でも、そんな事ができるはずがない。

杉下警部は考えるのをやめました。

「可愛いな、あんた。俺の嫁にならないか?」

酔っ払った加藤が樹里を口説きます。

「こら、バ加藤、樹里を口説くんじゃねえよ」

杉下警部もほろ酔いです。

そしてその次の日の朝です。樹里は五反田氏の見送りで成田空港

に来ていました。

「お疲れ様でございます、ご主人様」

樹里は笑顔全開で言いました。五反田氏は微笑んで、

「良かったよ、御徒町さん。貴女の笑顔がまた見られて」

「ありがとうございます」

「いい事があったようだね」

樹里はニコッとして、

「はい。大切な人が、また笑顔を見せてくれたのです」

「そうか。私はその大切な人が羨ましいよ」

五反田氏はそう言うと搭乗口に歩き出しました。

「行ってらっしゃいませ、ご主人様」

樹里は深々と頭を下げ、五反田氏を見送りました。

樹里ちゃん、神戸蘭に嫉妬される

御徒町樹里（おかちまち じゅり）は、居酒屋と喫茶店で働くメイドです。

但し、大富豪の五反田六郎氏がアメリカから帰国したら、メイドに戻る事になっています。

ある日、樹里が喫茶店で働いている時間に、あの神戸蘭（かんべらん）警部が現れました。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

樹里が応対します。すると蘭はムッとして、

「その『お嬢様』って嫌味、メイドさん？」

「いいえ。ご挨拶の決まりですので」

樹里は笑顔全開で言いました。

「フーン。そうなの」

神戸警部は窓際の席に勝手に座ります。

「今日はお一人ですか？」

樹里が尋ねました。杉下警部の姿がないからです。

「ええ、私はどうせ独り者ですよ！　この歳まで結婚もせずにね！」

何が気に食わないのか、神戸警部は荒れ気味です。

独身の三十代後半女性には、「お一人ですか？」は禁句のようです。

「ご注文は？」

でも樹里は全然それに気づかず、オーダーを取ります。

「コーヒー。一番高い奴を」

「かしこまりました、お嬢様」

樹里は深々と頭を下げてから立ち去りました。

「……」

神戸警部は寂しそうに窓の外を眺めます。

先日、この喫茶店で樹里に当てつけて杉下警部に張り付いた自分が情けないのです。

（あれで左京に完全に拒否されたからなあ）

後悔する神戸警部です。

（あんないい子に嫉妬するなんて、バカよね）

樹里は神戸警部に何を言った訳ではないのですから、完全に神戸警部の独り相撲です。

（それに、あの子、左京の事を男として好きという訳ではないみたいだし）

杉下警部は以前酔った時に、

「樹里は俺を母親と結婚させたがってる」

とぼやいていたのです。

（一縷（いちる）の望みはあるって事よね）

神戸警部はそれに懸けてみる事にしました。

「お待たせいたしました、当店で一番高いコーヒーになります」

樹里がコーヒーを持って来ました。

「げ」

神戸警部はギョッとしました。

「な、何よ、これ？」

テーブルには、バケツほどの大きさのカップに並々と入ったコーヒーがあります。

「ご注文の、当店で一番高いコーヒーです」

樹里は笑顔全開です。神戸警部はガックリと項垂れ、

（ここ、そういう店だったのか……）

でも、自分で頼んだのですから、どうしようもありません。

「伝票はこちらに置いておきます」

樹里はクリップボードを裏返しに置いて行きました。

「はあ」

神戸警部は、溜息を吐き、

「どうやって飲むのよ、これ？」

バケツカップを抱え、少し飲んでみます。

「おいしいけど、こんなには無理……」

神戸警部は飲むのを諦め、席を立ちます。

「いくらよ、これ？」

クリップボードをひっくり返して、更に驚く神戸警部です。

「い、い、一万円！？」

今日は散々な神戸警部でした。

樹里ちゃん、亀島馨の彼女になる？

御徒町樹里（おかちまちじゅり）は居酒屋と喫茶店で働く「本物」のメイドです。

すでに生きながらにして伝説（レジェンド）になっています。

そんなある日、居酒屋に警視庁特捜班の亀島馨がやって来ました。

杉下警部も神戸警部も一緒ではありません。

「いらっしゃいませ、亀島さん」

笑顔全開で挨拶する樹里です。

しかし何故か亀島は深刻な顔をしています。

「御徒町さん、このお店は何時に終わりますか？」

「午前五時です」

樹里が答えます。亀島は、

（え？　でも、そうすると朝十時から喫茶店で働いている樹里さんは、いつ寝ているのだろう？）

と心配になりました。でも今はそんな事を考えている余裕はないのです。

「わかりました。お店が終わったら、ちょっとお話があるんです」

「今聞きますよ」

樹里はニコニコして言います。亀島は何故か赤くなり、

「いえ、ここではちょっと……。とにかく、付き合って下さい、お願いします」

「はい」

樹里はそう答えると、厨房に戻って行きました。

「ああ……」

憂鬱そうに溜息を吐く亀島です。

そして居酒屋は閉店し、樹里達は後片付けをして出て来ました。

もう外は明るくなっています。

「御徒町さん、こっちです」

亀島が眠そうな目で言いました。

「はい」

樹里は元気いっぱいです。

「大丈夫ですか、時間？」

亀島は心配になって尋ねました。すると樹里は、

「大丈夫ですよ。喫茶店は九時までに入れば間に合いますから、あと三時間はお話できます」

「はあ」

それでは、貴女が眠れないでしょ、と亀島は思いました。

「ここにしましょう」

二人は二十四時間営業のファミレスに入りました。

「実はですね、私、田舎の両親に彼女を紹介しなくてはならないのです」

「そうなんですか」

普通の人なら、ここでピンと来るのですが、樹里は全く気づいていません。

「それで、あの、彼女の写真を送ったのですが、それがこれなんです」

亀島がテーブルの上に置いたのは、どう見ても樹里のスナップ写真です。

メイド服を着て掃除をしています。撮影場所は、大富豪の五反田氏の邸宅の庭のようです。

「ああ、この人、私によく似ていますね」

樹里は笑顔全開でボケて来ます。亀島は苦笑いをして、

「いえ、それは貴女なんですよ、御徒町さん」

「そうなんですか」

樹里はまだ気づいていないようです。

「それでですね、来週両親が東京に出て来るので、その時だけ彼女のフリをして下さい、お願いします！」

亀島は頭をテーブルにこすりつけるようにして言いました。

「その時だけでいいのですか？」

樹里の言葉に、亀島は顔を上げて、

「はい。ご迷惑でしょうが、頼みます。助けて下さい」

「そうなんですか、その時だけなのですか……」

何故か困った顔で言う樹里を見て、亀島の鼓動は急速に速くなりました。

「え？　それって、どういう意味ですか？」

亀島はドキドキして尋ねました。

「その時だけ彼女になるのは難しいです。もう少し長く彼女ではダメですか？」

「ええ！？」

亀島は妄想が暴走して、耳がおかしくなったと思いました。

（まさか、御徒町さんは本当は私の事を……？）

「も、もちろん、いいですよ。長く彼女でいて下さい」

「はい」

樹里は笑顔全開で言いました。亀島はもういつ死んでもいいと思っていました。

「良かったです。その時だけ彼女ですと、ご両親が帰る時は彼女ではないのですよね。それは難しいです」

「……」

やはり自分の早合点だと気づいた亀島でした。

（それでもいい。例え一瞬でも御徒町さんと恋人になれるのなら）

亀島は本気でそう思いました。ここまで来ると、重症です。

ところが数日後、意外な展開が待ち受けていました。

「ああ、馨か？　母ちゃんだ。おめえ、嘘吐いてどうするんだよ。あの女の子は、彼女じゃねえらしいな。何考えてるんだ、おめえは。親をバカにすんな」

母親が怒りの電話を入れて来たのです。

「東京には行かねえぞ。こんなバカな息子だとは思わんかったわ」

亀島はショックで声が出ません。

「おめえのようなひょうろく玉が、あんなベッピンさんを彼女にできるわけねえって思って、昨日警視庁に電話してみたんだ。そしたら、あの子は違う人の彼女だって聞いたぞ」

犯人がわかりました。亀島は怒りに震えました。

（杉下さん！　何て事を！）

しかし、更に意外な展開が待ち受けていたのです。

「何でも、捜査一課の加藤警部の婚約者だそうだな？　おめえ、上司にまで迷惑かけて、どういうつもりだ？」

亀島は訳がわからなくなってしまいました。

「誰がそんな事を？」

亀島は震える声で尋ねました。

「女の人だよ。神戸さんて人だ」

犯人は女。意外な結末でした。

樹里ちゃん、加藤警部に告白される

御徒町樹里は居酒屋と喫茶店で働くメイドです。

一体いつ寝ているのかと言うくらいの働き者です。

そんな樹里が働く居酒屋に、警視庁捜査一課の加藤警部が訪れました。

先日、酔った勢いで樹里を口説いてしまいましたが、今回はシラフの状態で口説こうと決意し、やって来ました。

「いらっしゃいませ」

樹里はそんな事とは知らずに、いつものように笑顔全開で応対します。

「元気ですか？」

顔は脱獄囚のような加藤警部ですが、とても小心者です。

樹里のような美人には、どう話しかけて良いのかわかりません。

「はい、おかげ様で。ば加藤さんもお元気そうで」

樹里は悪気なくそう言いました。他の誰かの発言なら、完全に切れている加藤警部ですが、樹里には怒りません。

「ハハハ、僕はバ加藤ではなくて、加藤です、樹里さん。名前を間

違えないで下さいね」

「そうなんですか」

樹里はニッコリして言いました。

「ご注文は？」

「取り敢えず、ビールで」

「トリアエズビールですか？　そのような銘柄はありませんが」

樹里は大真面目に言います。加藤警部は苦笑いして、

「ハハハ。そうですね。生ビールを下さい」

「ピッチャーでいいですか？」

「は？」

加藤警部は今度は意味が分かりません。

「杉下さんが、加藤さんはたくさん飲むからジョッキでは間に合わないと言っていました」

「そうですか。別にピッチャーでもいいですよ」

本当なら怒り出すところですが、できるだけ樹里と話していたい加藤警部は、決して切れたりしません。

「かしこまりました」

樹里は深々とお辞儀をして、厨房に戻りました。

「杉下の阿呆が、何て事を言うんだ……」

後で杉下警部の首を絞めてやろうと決意する加藤警部です。

「お待たせしました、生ビールです」

樹里が持って来たのは、超特大のピッチャーで、ゴミ箱のようです。

「な、な、な……」

加藤警部は口をあんぐりです。

「おつまみはいかがですか？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。加藤警部はハッと我に返って、

「枝豆と冷や奴を下さい。それから、揚げ出し豆腐も」

「かしこまりました」

それでも嬉しい加藤警部です。

（やっぱり可愛いよなあ。杉下なんかに渡したくないよなあ）

加藤警部はデレーッとして、歩いて行く樹里を見ています。

「お客さん、ビールが温まってしまいますよ。早く飲まないと」

「あ、そうですね」

加藤警部はハッとしてピッチャーを持ちました。

「あれ？」

何故か向かいの席に特捜班の神戸蘭（かんべらん）警部がいます。

「お、お前、何でそこにいるんだ？」

加藤警部は驚いて尋ねました。神戸警部はニヤッとして、

「貴方こそ、どうしてこの店に来たのよ、加藤君？　居酒屋は嫌いだって言ってなかったっけ？」

と嫌味タップリに言いました。加藤警部はドキッとして、

「こ、この前ここに連れて来られて、料理が美味しいからまた来たんだよ」

「ふーん、料理がね」

神戸警部の冷たい視線に、思わず顔を俯かせる加藤警部です。

「一つ訊きたいんだけど」

神戸警部は頬杖を着いて言いました。

「な、何だよ？」

加藤警部はチラッと神戸警部を見ます。

「あの子のどこがそんなにいいの？」

ギクッとする加藤警部です。

「な、何の事だ、神戸？」

視線が定まらなくなるほど狼狽えている加藤警部です。

「恍けなくていいわよ。あの御徒町樹里が目当てなんでしょ、貴方？」

神戸警部は刑事の目で言いました。加藤警部はその目に射竦められたかのように、

「は、はい……」

「だったら教えて。あの子のどこがそんなにいいの？」

神戸警部は、答えない場合は射殺しそうな迫力です。

加藤警部は意を決して言いました。

「あの子は、お前みたいにそんな不躾（ぶしつけ）な事を訊いたりしないからだ」

「……」

神戸警部は打ちのめされてしまいました。

「そ、そう。ありがとう。よくわかった」

神戸警部はガックリと肩を落として立ち去ってしまいました。

「何しに来たんだ、あいつ？」

鈍感な加藤警部は、神戸警部が杉下警部に惚れている事を知りません。

「お待たせ致しました」

そこへ樹里が料理を運んで来ました。

「おお、うまそうだ」

「ありがとうございます、加藤さん」

加藤警部は、居ずまいを正して樹里を見ました。

「樹里さん」

「はい」

樹里はニコニコしています。

「今、お付き合いしている人はいますか？」

加藤警部は顔を真っ赤にして尋ねました。

「いいえ」

樹里は相変わらず笑顔で答えます。加藤警部は心の中でガッツボーズを決め、

「で、では、自分と付き合って下さいませんか？」

と思い切って告白しました。

「いいですよ」

「えっ？」

間髪入れない樹里の返事に、加藤警部は驚いてしまいました。

「ほ、本当ですか？」

「はい」

加藤警部は雄叫びを上げたくなりました。でも何とか堪えました。

「同伴は一日一万円になります」

樹里は笑顔で説明します。

「……」

加藤警部は燃え尽きてしまいました。

樹里があまりにもお客から誘われるので、店長が考え出したシステムでした。

樹里ちゃん、ストーカーに出会う（前書き）

あの伝説のキャラであるネコにゃんとのほんの一瞬のコラボです。

樹里ちゃん、ストーカーに出会う

御徒町樹里は、居酒屋と喫茶店で働き、場合によってはデートもしてくれるメイドです。

本当にいつ寝ているのか謎ですが、樹里は全く疲れた様子がありません。

先日、警視庁特捜班の亀島馨がおかしな行動をしたのを同僚の神戸蘭から伝え聞いた特捜班の班長である杉下左京は、樹里に会いに居酒屋に行きました。

「迷惑をかけたな。亀島には、俺からきっちり注意しておいた。悪く思わないでくれ」

「そうなんですか」

樹里は全然そんな風には思っていません。

「それから、バ加藤が来たらしいな?」

これも神戸警部からの情報です。

「はい。デートのお誘いも受けたので、デートしました」

「な、何ーッ!?」

樹里が笑顔全開で報告すると、杉下警部はあごも外れんばかりに驚きました。

「杉下さんも如何ですか？　一日一万円です。要予約だそうです」

屈託のない笑顔で言う樹里に、杉下警部は脱力してしまいました。

「俺はいい……」

「そうなんですか」

樹里が寂しそうに言ったので、

「ああ、ウソウソ！　したいしたい！　予約入れるよ」

バカな男丸出しです。実は店長から、

「デートの誘いは積極的にして下さい。拒否されたら、悲しそうにすると効果的です」

と言われている樹里です。

「ありがとうございます」

樹里は嬉しそうに厨房に戻りました。

そんな二人のやり取りを、まるで牛乳瓶の底みたいな昭和丸出しの眼鏡越しに見ている男がいます。

彼は熱狂的な樹里信者の一人です。

あまりに好き過ぎて、脳内デートでプロポーズまで済ませていま

す。

危険度ＭＡＸです。

「僕の樹里たんとデートするなんて、許せない」

彼の小さな目がギラッと輝きました。

そして居酒屋の業務が終了しました。外はもう明るくなっています。

杉下警部は翌日の仕事が早いので、深夜に帰ってしまいました。

樹里は片づけを終えて、居酒屋を出ました。

そこに先ほどの昭和眼鏡の男が近づきます。

「樹里たん」

「はい？」

樹里は全く警戒するなく、笑顔ＭＡＸで応じます。

「僕という婚約者がありながら、他の男とデートするなんて、どういうつもりなのさ？」

樹里は何の事かわかりませんでしたが、

「申し訳ありません」

と謝りました。彼が居酒屋の常連客なのは知っていたからです。

「あ、謝られてもさ……。とにかく、デートはしないでよ。僕の立場がないから」

「そうなんですか」

樹里は意味がわからないまま言いました。そして、

「ご予約していただければ、デート致しますよ」

と言いました。すると昭和男はムッとして、

「僕は君のフィアンセなんだよ。どうしてデートするのに予約がいるのさ!?　ふざけないでよ!」

と切れてしまいました。

「申し訳ありません」

樹里は男が怒り出したので、また謝りました。

「クレームは迅速に処理して下さい」

樹里は店長の言葉を思い出しました。

「では今からデートしましょう」

「え？」

意外な提案に、眼鏡男は舞い上がってしまいました。

この男は樹里信者として居酒屋に通いつめていましたが、樹里と話したのは今日が初めてなのです。

「は、はい」

さっきまでの強気な態度とは百八十度方向転換して、男は借りて来た「ネコにゃん」のように大人しくなりました。

そして樹里とマ○クデートを満喫しました。

「ご馳走様でした。また誘って下さい」

「はい」

いや、誘われたんだけど……。でも嬉しいから何も言いません。

夢のような時間でした。

今まで恐れ多くて触れる事すらできなかった樹里と腕を組んで歩いたのですから。

「では、一万円になります」

樹里のその言葉に、思いっきり現実に引き戻された昭和眼鏡男でした。

樹里ちゃん、探偵になる

御徒町樹里はメイドです。

現在、居酒屋と喫茶店で働きながら、時々デートもこなすパワフルガールです。

いつ寝ているのか、本人もよくわからないようです。

そんな樹里ですから、突然別の世界に行ってしまう事があります。

樹里は五階建てのビルの最上階に探偵事務所を開いていました。

でも忍者ではありません。ごく普通の、所謂「興信所」です。

そこへある女性が夫の浮気調査を依頼に来ました。

樹里はいつも通り、

「いらっしゃいませ、お嬢様」

「私はお嬢様ではないわよ！」

その依頼者の女性は、癇癪持ちのようです。

樹里は女性をソファに誘導し、自分も向かい合わせに座りました。

「私は杉下蘭と言います。二十五歳です」

その女性は訊いてもいないのに年齢まで答えました。

「そうなんですか」

樹里は探偵になっても笑顔全開です。

「貴女、今、私の年の事を疑ったでしょ！？」

杉下蘭がいきなり切れました。

「とんでもないです。疑っていませんよ」

樹里は慌てずに微笑んで応じます。

「そ、それならいいわ」

蘭は夫の顔写真をテーブルの上に出しました。

「これが夫です。浮気をしているようなのです。証拠写真を撮って下さい。裁判で使いたいので」

「そうなんですか」

蘭はこの探偵に何故かイラッとしました。

「承知致しました、お引き受け致します」

樹里はニッコリして言いました。

「ちなみにおいくら？」

蘭は高級そうなハンドバッグから、高級そうな財布を取り出しました。

「五億円です」

「えええええ！？」

蘭は顔の皺が一気に五倍になりそうです。

「な、何で浮気の調査でそんなにかかりますの！　ふざけないで下さい！」

「申し訳ありません、このビルがいくらなのか訊かれたのかと思いました」

樹里は相変わらず笑顔で応じます。蘭は、

「誰が訊くか、そんな事！」

と激怒しました。樹里はニコッとして、

「調査費用は、実費別で一日辺り五千円です」

「安ッ！」

今度は投売りのような安さです。怪しいです。

「ホント？　ちょっと安過ぎない？」

「では一日百万円でもいいですよ」

「高過ぎるわい！」

蘭は、完全におちょくられていると思い始めています。

「じゃあ、五千円でお願いするわ。前金でいくらお支払すればいいの？」

蘭は何とか気を鎮めて、樹里を見ました。

「五千円で」

「は？　一日分でいいの？」

また何かあると思う蘭です。

「はい。一日で終わりますので」

「そ、そう。ではお願いします」

蘭は財布から樋口一葉を取り出し、樹里に渡しました。

「領収証の宛名はどうしますか？」

樹里が尋ねます。

「上様で結構よ。経費で落とすわけではないから」

「そうなんですか」

蘭はまたイラッとしました。

「では、頼みましたよ」

「はい」

杉下蘭は、イライラしながら、御徒町探偵事務所を出ました。

そしてその翌々日の事。

杉下蘭は、また御徒町探偵事務所に来ていました。

「こちらが証拠の写真です」

樹里が差し出した写真には、夫と若い女が腕を組んでエッチなホテルに入って行くところがバッチリ写っていました。

「おお！」

覚悟していた事ですが、蘭はショックを受けました。

「ありがとう。これで裁判に勝てるわ」

蘭はバッグから財布を取り出しました。

「実費はおいくらかしら？」

もしかすると、

「写真代が百万円です」

とか言い出すのではないかと思い、蘭は切れる準備をしました。

「写真代と交通費で二千五十円です」

「ええ？」

蘭は拍子抜けしてしまいました。

「高いですか？」

樹里が心配そうに尋ねます。

「い、いえ、そんな事はないわよ。ここは良心的な探偵事務所なのね」

「ありがとうございます」

蘭は三千円を支払い、

「おつりはいいわ。チップ代わりよ」

「ありがとうございます」

樹里は深々とお辞儀をしました。

「失礼」

蘭は領収証を受け取ると、ニコニコしたままで事務所を出て行きました。

「やっと帰ったか」

事務所の奥から、蘭の夫である杉下が現れました。

実は、今回の一件は、杉下が蘭と別れるために仕組んだものなのです。

樹里は杉下の依頼で愛人のフリをし、写真を撮りました。

「これでやっとあの女と別れられる。感謝するよ、探偵さん」

杉下はスーツの内ポケットから財布を取り出し、

「あいつと別れられるなら、百万円くらい安いものだ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。そして請求書を杉下に渡しました。

「はいよ」

杉下は百万円の束を樹里に渡します。

「じゃあな。もう会う事はないだろう」

「お待ち下さい」

樹里が捨て犬のような目で杉下を見ています。

杉下はフッと笑いました。

(俺も罪な奴だぜ。たった一日愛人のフリをさせただけで、この女を虜にしてしまった)

ところが、杉下は驚愕の事実を知ります。

「おうおう、俺の女にチョッカイ出したのは、てめえか?」

入口のところに、脱獄囚のような顔をした大柄の男が現れました。

「慰謝料として、五千万円払ってもらおうか?」

杉下は樹里達に五千万円取られ、蘭にも裁判で五千万円を請求され、散々な思いをしました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、コラボする

御徒町樹里は、居酒屋と喫茶店で働くメイドです。時々デートもしてくれます。

その人気は絶大で、宗教めいた団体ができているほどです。

ある日の事です。

樹里はその日、久しぶりに休暇を取り、幼い妹三人と共に街に買い物に出かけました。

「おう、あんた、あの金持ちんとこのメイドさんやないか？　久しぶりやな」

ド派手な服装の関西弁の女性が、妙に馴れ馴れしく話しかけて来ます。

「あの、どちら様でしょうか？」

樹里は怯える妹達を庇うようにしてその女性に尋ねました。

「ウチや、ウチ。あの金持ちの邸で、除霊を頼まれた八木麗華や」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。麗華はホッとした表情になり、

「やっと思い出してくれたか。それにしてもよう似とるな。まさか、子供ちゃうよな？」

「妹です」

樹里はニコニコしたまま答えます。

「そうか。三つ子か？」

「いえ、年子です」

それにも麗華は驚きました。

「三つ子並みに似とるな」

彼女はマジマジと妹達を見つめます。また妹達が怯え、樹里の後ろに隠れてしまいました。

「何や、恥ずかしがりやな」

プラス思考の麗華は、自分が怖がられているとは思っていません。

「急いどるんで、ほな、またな」

麗華は手を振りながら去って行きました。

樹里達も再び歩き出しました。

しばらく歩いて行くと、

「オンマリシエイソワカ！」

妙なかけ声がしたので、樹里達はそちらを見ました。

若くて奇麗な女性が、烏(からす)を相手に叫んでいます。

危ない人かも知れません。烏は女性の叫び声に驚いたのか、逃げて行きます。

「ごめんなさい」

その女性は、樹里達をすり抜けて走り出しました。

「どうしたのでしょう？」

樹里は不思議に思いましたが、また歩き出しました。

「遅いぞ、樹里。何かあったのか？」

あるビルの前で待っていた警視庁の敏腕警部杉下左京が言いました。

「申し訳ありません、杉下さん」

樹里が深々と頭を下げると、妹達も真似をして頭を下げます。

知らない人が見ると、杉下警部がもの凄く悪い人に見えてしまうでしょう。

「あ、いや、そんなに怒っている訳じゃないから。こういうビルの前で、俺みたいなおっさんが一人で立ってると怪しさ満点だからさ」

「杉下さんはおっさんではないですよ」

樹里は笑顔全開で言いました。何故か杉下警部は真っ赤になります。

「そ、そうか。ありがとう」

杉下警部は樹里に囁きます。

「今度は妹達を抜きで買い物しよう」

「どうしてですか？」

本当に不思議そうに尋ねる樹里です。杉下警部は項垂れて、

「いや、いい。また一緒に買い物しよう」

「はい」

樹里は満点笑顔で応じました。

買い物を終えて、樹里達はあるコーヒーショップに立ち寄りました。

有名なお店で、高校生や大学生でごった返しています。

「何だと、ブスがあ！」

「もう一度言ってみなさいよ、チビ！」

高校生らしき男女が、怒鳴りあっています。仲間が二人を止めているようです。

「どこにでもああいうバカ連中はいるもんだな」

杉下警部の覚めた言葉が聞こえました。

「そうなんですか？」

樹里はキョトンとして杉下警部を見ました。

警部の横の席では、

「学園が消滅してしまって、これからどうなるのかしら？」

「取り敢えず、プレハブ校舎で再開するらしいよ」

と、とても深刻な話をする男女がいます。

杉下警部は、チラッとその二人を見て、

「あの男、完全に尻に敷かれるタイプだな」

と呟きました。

「ちょっとだけ時間があるから、ここで休憩しましょうよ」

そこに現れたのは、中学生くらいの女の子と、長身の男性です。

「えんこう」でしょうか？

「この事件、想像以上に複雑だよ、茜ちゃん。慎重に動かないとね」

「そうですね、大原さん」

二人きりで話しているのに、相手の名前を言うのは、何かの宣伝でしょうか？

女の子は見かけは中学生ですが、どうやら大人の女性のようです。

「おお！」

急に杉下警部が叫びます。

「あ、あの、中津法子さんですよね？　ファンなんです。サイン下さい」

杉下警部は近くに座っていた女子大生四人組に話しかけました。

「あ、あの、私、違いますから」

その女子大生は頑なに否定しました。杉下警部はがっかりして席に戻りました。

「あれ？」

何故か樹里達がいません。身体中から嫌な汗が出る杉下警部です。

「樹里ーッ！」

杉下警部は大慌てで伝票を持ってレジに走り、店員を脅すようにすばやく会計をすませると、外に飛び出して行きました。

「あら？」

そこへ樹里が現れました。彼女は妹達をトイレに連れて行っていたのでした。

「杉下さん、急用ですか？」

首を傾げる樹里でした。

樹里ちゃん、コラボする（後書き）

何が言いたかったのかといいますと「樹里より可愛い中津法子」という事です。最近、すっかりご無沙汰してますけど。

樹里ちゃん、今度こそスカウトされる

御徒町樹里（おかちまち　じゅり）はメイドです。

現在居酒屋と喫茶店を掛け持ちしているスーパーガールです。

でも時々居眠りをして、警視庁特捜班の杉下警部をドキッとさせています。

樹里はその日は喫茶店が定休日だったので、街に出かけていました。

休みの日ぐらい一人でのんびりしなさいと母親の由里に言われ、一人でお出かけです。

樹里は東京一の賑わいを見せるある街に行きました。

たくさんの若者が思い思いの服を着て楽しそうに歩いているのを、樹里はニコニコして眺めています。

「お嬢さん」

見るからに怪しい黒スーツで口ひげ、サングラスの男が話しかけて来ます。

「はい」

樹里はいつも通りの笑顔全開で応じます。

「一人？」

「いえ」

樹里は即座にそう答えました。以前杉下警部に、

「知らない男に声をかけられたら、一人の時も誰かが一緒にいる素振りをしろ」

と言われたのを思い出したのです。

「お友達がご一緒ですか？」

「いえ」

嘘が吐けない樹里です。男はニヤリとして、

「ちょっとお話いいですか？」

「はい」

杉下警部には「話を聞くな」と言われていないので、樹里は快諾しました。

そして男は、樹里を近くのコーヒーショップに連れて行きました。

「私はこういう者です」

男がサングラスを外し、名刺を差し出します。

「名刺屋さんですか？」

樹里はニッコリして尋ねました。男はイラッとして、

「いえ、違います。そこに書いてありますから」

と名刺を指差しました。

「ああ。ホントですね」

樹里は名刺を読んでみました。

「ゆうかいはんにんさんですか？」

周囲の人達がギョッとして樹里達を見ます。

「ち、違いますよ！　有海範人（ありうみのりと）です！　間違えないで下さい！」

何かトラウマがあるのでしょうか、有海さんはいきなり切れてしまいました。

肩で息をしています。

読み間違えられたくなかったら、ふりがなを振ればいいのにとは、樹里は決して思いません。

「私はグラビアモデルやファッションモデルをたくさんプロモートしている会社の者です」

「そうなんですか」

ようやく有海さんは落ち着いたようです。

「もし貴女がどこの事務所にも所属していなくて、こういう仕事に興味がおありでしたら、是非挑戦してみて下さい」

「私は仕事がありますので」

「空いている時間で結構ですよ。お休みの日とか」

「今日はお休みです」

樹里は悪気なくそう言いましたが、有海さんはイラッとします。

「いや、今日はさすがに無理です。後日空いている日はありませんか？」

「店長に確認しないとわかりません」

有海さんは、樹里を高く評価しているようです。

「では、その店長さんに私が掛け合いましょう。スケジュールを調整してもらえば、大丈夫でしょう」

「そうなんですか」

樹里にはよくわかりません。

「貴女の勤務先の電話番号か、貴女の携帯の番号を教えて下さい」

「はい」

樹里は操作がわからないので、携帯を有海さんに渡しました。

「お借りしますね」

有海さんは携帯を開いてギクッとします。

（この子、何者だ？）

連絡先一覧に、警察関係者が三人。そのうち二人は警部です。

さらに財界の首領（ドン）と呼ばれている五反田六郎氏の名前もあります。

（警察関係者？）

有海さんの背中を冷たい汗が伝います。

「わかりませんか？」

樹里が尋ねます。有海さんはハッとして、

「あ、いえ、大丈夫です」

と連絡先をスクロールさせ、

「どれが勤務先ですか？」

「これです」

そこは、「本物のメイドさんがいる居酒屋」で有名なところです。

（もしかして、この子がそのメイドさん？）

噂に聞いた事があるのです。そのメイドさんは、想像を絶する天然だと。

有海さんは居酒屋の電話番号と樹里の携帯の番号を控えました。

「では、お話を進めますね。えーと、御徒町樹里さんでよろしいのですよね？」

「はい、多分」

また有海さんはイラッとします。でもそこはグッと堪え、

「貴女自身はこういう仕事はどうですか？　やってみたいですか？」

「わかりません」

樹里は笑顔で答えます。普通の押し方では埒（らち）が開かないと考えた有海さんは、

「やってみましょう。人生は一度きりです。年をとってからではできない事もあります」

「はい」

もう一押しだと有海さんは思いました。

「是非、お願いします！」

「店長が許してくれればやれます」

「おお！」

有海さんは感激のあまり樹里の手を握りました。

「ありがとう、樹里さん」

「はい」

樹里はまだよくわかっていないようです。

有海さんは、店長の説得に時間がかかると思いましたが、樹里のプロフィールに居酒屋勤務を掲載する事であっさりＯＫを取れました。

やっぱりつまるところ、「世の中、金」と思う有海さんです。

こうして、「御徒町樹里グラビアデビュー計画」は着々と進みました。

そして数日後です。

「おい、どういう事だ!?」

何故か興奮気味の杉下警部が居酒屋に現れました。

「どうしたんですか、杉下さん?」

樹里は笑顔全開で尋ねます。杉下警部は、

「グラビアの仕事を受けたそうだな?」

「はい」

樹里は目を逸らす事なく杉下警部に答えます。

「あのな、お前はな……」

杉下警部はあまりにも考えなしの樹里を説教しようとやって来たのです。

「はい、これです」

樹里が発売前の掲載誌を杉下警部に渡しました。

「え?」

「ほら、これです」

樹里が嬉しそうに開いたのは、樹里の水着の写真のページです。

「……」

杉下警部の両方の鼻の穴から血が滴り落ち、彼がそのまま卒倒したのは言うまでもありません。

こうして樹里の知名度は全国区になり、居酒屋と喫茶店は大繁盛し、加藤警部も亀島警部補も、その雑誌を密かに購入し、食い入るように見たそうです。

樹里ちゃん、神戸蘭と対決する

御徒町樹里（おかちまち じゅり）は、居酒屋と喫茶店で働きながら、グラビアモデルもこなす美少女です。

今日はグラビアの仕事はないので、通常通り喫茶店に出勤しています。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

樹里の挨拶で迎えられたのは、警視庁の女豹と呼ばれた神戸蘭警部です。

「それ、やめてくれない？　嫌味にしか聞こえないんだけど」

「申し訳ありません」

樹里は深々と頭を下げ、

「お一人様ですか？」

とマニュアル通りの対応です。また神戸警部がムッとします。

「見ればわかるでしょ！？　どうせ私は独り者よ！」

「申し訳ありません」

樹里はまた頭を下げます。

「どうぞ、こちらへ」

神戸警部はムスッとしたままで、窓際の席に案内されます。

「この店で、普通のサイズで一番高いコーヒーをちょうだい」

先日、バケツカップで酷い目にあったので、神戸警部は慎重に注文しました。

「かしこまりました」

樹里はニコッとして立ち去ります。

「ふん」

そんな樹里を神戸警部は睨みつけ、そのうちに窓の外に視線を移しました。

（何やってるんだろ、私……）

居酒屋で加藤警部に指摘された事が頭の中を駆け巡ります。

『あの子は、お前みたいにそんな不躾（ぶしつけ）な事を訊いたりしないからだ』

加藤警部の「魂の叫び」は、神戸警部の胸に突き刺さったままです。

「お待たせいたしました」

樹里がコーヒーを運んで来ました。今回は普通のサイズのカップ

に入ったコーヒーです。

「ごゆっくりどうぞ」

樹里は会釈をして立ち去ります。神戸警部は意を決して、

「ちょっと」

「はい？」

樹里が笑顔全開で振り向きます。

「少し、話できる？」

「はい」

樹里が不思議そうな顔で神戸警部を見ます。

「ここは何時に終わるの？」

「四時です」

神戸警部は少し考えてから、

「じゃあ、四時に向かいのモスドナルドで待ってるから」

「はい」

樹里はニコッとしてお辞儀をし、厨房へと戻って行きました。

（左京はあの子に首っ丈だけど、あの子はどうなのか、確かめる）

神戸警部は、どうしても昔の恋人である杉下左京警部を諦められないようです。

そして、約束の時間です。

神戸警部は、先にモスドナルドに入り、樹里が来るのを待っていました。

「お待たせいたしました」

メイド服から普段着に着替えた樹里は、また違う可愛さがあります。

（負けそう……）

何も話さないうちにそう思ってしまう神戸警部です。

「貴女も忙しいようだから、単刀直入に訊くわね」

「はい」

樹里は注文を済ませて、神戸警部の向かいに座ります。

「貴女は、杉下左京の事をどう思っているの？」

「杉下さんの事ですか？」

「そう」

樹里は首を傾げます。

「年上の男の人だと思っています」

「……」

しまった、そういう子だった、と神戸警部は自分の質問を悔やみました。

「じゃあ、貴女は、左京の事を男として好きではないのね？」

神戸警部はストレートに訊きます。

多分樹里は、このくらい真っ直ぐな質問でないとダメだと思ったのです。

「女として好きにはなれないです」

「は？」

そんな危険球が飛んで来るとは思いませんでした。

「左京の事を好きなの？」

「はい」

眩しいくらいの純粋な目で、樹里はスパッと言いました。

「左京と恋人になりたいの？」

神戸警部のその質問に、樹里の顔が強張ります。

（この子、自分の左京に対する感情がわかっていないのね）

「左京はね、貴女のお母さんではなく、貴女と恋人になりたいと思っているのよ」

私は何を言っているんだ？　神戸警部は、自分の発言が理解できません。

この子を応援してどうするの？　左京の気持ちを代弁してどうするの？

「そうなんですか」

樹里の顔に動揺が見えます。いつもニコニコしているイメージしかない樹里の心が揺れているのです。

神戸警部は、決断しました。

「私は左京を応援するから」

樹里は、神戸警部の言葉にキョトンとしています。

「左京と貴女を恋人同士にするために、私は力を尽くすから」

「そうなんですか」

何故か樹里は困った顔をしています。

「何か不都合でもある？」

神戸警部は、樹里の心中を量りかねて尋ねました。

「お母さんが可哀相です」

「え？」

もしかして、この子は、母親が左京に夢中なのを知り、身を引くつもりだったのか？

神戸警部は不覚にも泣きそうになりました。

「亀島さんが、恋人になってくれるといいです」

「えええ！？」

左京が聞いたら、自殺しそうだ。神戸警部は、がっくりと項垂れてしまいました。

しかし、樹里劇場はそこで終わった訳ではありませんでした。

「そうすれば、お母さんも可哀相ではないです」

「？？？」

ど、どういう事？　亀島君が、この子の母親と恋人になればいい

という事？

謎が謎呼ぶ樹里ワールドでした。

樹里ちゃん、左京にコクられる？

俺は杉下左京（すぎしたさきょう）。警視庁特別捜査班の班長だ。

今日も我々特捜班の活躍するような事件はなく、実に長閑（のどか）な日だ。

「左京、ちょっといい？」

そんな平穏な一日の始まりに、あの騒がしい女である神戸蘭（かんべらん）が割り込んで来た。

「何だよ？　事件か？」

「違うわ。個人的な事」

いつになく真剣な眼差しの蘭を見て、俺は先に釘を刺す。

「金なら貸さんぞ」

「あんたから借りるほど困ってないわい！」

蘭の突っ込みは冴え渡っていた。

内緒話の定番は屋上と相場は決まっている。

俺と蘭は庁舎のヘリポートで対峙していた。

「こんなところまで連れ出して、何の用だ？」

俺は苛立ちを隠さすに尋ねた。蘭は俺を真っ直ぐに見て、

「この前、居酒屋に行った」

「は？　そんな報告、ここまで連れて来てするな、阿呆！」

俺がすかさず突っ込むと、

「話を最後まで聞きなさいよ、アンポンタン！」

蘭に突っ込みを返された。

「御徒町樹里に貴方の事をどう思っているのか、訊いてみたわ」

「何だと！？」

何て事を訊くんだ。俺は心臓が肋骨を破って出て来るのではないかと思うくらい激しい動悸に襲われた。

いかん。このままでは、俺は脳卒中で死んでしまいそうだ。

「焦らさずに早く言え」

俺は思いあまって蘭に怒鳴った。蘭は俺をバカにしたように笑い、

「そんなに結果を知るのが怖いの、左京？」

「こ、怖いもんか！」

俺の膝は、まるでサンバのリズムのように激しく揺れていた。

まともに立っていられなくなるほど、俺は動揺していた。

「安心して、左京。あの子は答えてくれなかったわ」

「は？」

蘭め、俺をからかっているのか？

「彼女自身、貴方の事をどう思っているのか、わかっていないのよ」

「何が言いたいんだ、お前は？」

俺には蘭の意図がわからない。この女、何を企んでいるんだ？

「少なくとも彼女は、貴方に好意を持っている」

その言葉に、俺はギクッとした。樹里が俺に好意を？

それなら何故、母親の由里さんと結婚させようとするんだ？

「彼女はね、母親の気持ちを知っているから、貴方に自分の気持ちを伝えられないのよ。だから、貴方が彼女に自分の気持ちをぶつけて、彼女を母親の呪縛から解放してあげて」

「えっ？」

何を言い出す？　お前は俺に惚れていたんじゃないのか？

どうして樹里と俺をくっつけようとするんだ？

「何を企んでいるんだ、蘭？」

俺はストレートな質問をした。蘭は苦笑いして、

「企んでなんかいないわ。貴方の煮え切らなさに愛想が尽きたので、彼女に貴方を譲る事にしたの」

「俺は犬か猫かよ！」

蘭の上から目線の発言に、俺はムッとした。

「左京、今は私の事なんか考えている場合じゃないわよ。樹里は、今なら必ず貴方の言葉に答えてくれるはず。確かめてみなさいよ」

蘭は今まで見せた事がないような穏やかな笑顔で俺を見た。

「わ、わかった……」

俺はその笑顔に後押しされるようにそう言った。

俺はその夜、樹里が働いている居酒屋に行った。樹里に気持ちを伝えるために。

「いらっしゃいませ」

いつものように笑顔全開で樹里が出迎えてくれる。

「樹里、仕事が終わったら話がある」

「はい」

樹里はニッコリして答え、厨房へと消えた。

何だかドキドキして来た。

こんなに胸が高鳴るのは、高校の時、同級生の女子に告白して以来だ。

あの子はもう結婚して、子供が三人いると聞いた。

ああ。涙が出そうだ。感傷的になっている。

そして俺は、酒の力を借りようと思い、焼酎をロックで何杯も飲んだ。

酔えなかった。全然アルコールが回って来ない。

それほど俺は高揚していた。

やがて、居酒屋は閉店した。

俺は外で樹里が出て来るのを待つ。

一ヶ月ほど待っていたようだった。

ようやく樹里が出て来た。

彼女の普段着を見かけるのは久しぶりだ。

「お待たせしました」

樹里はニッコリして言った。

俺は長期戦では身体が保たないと思い、単刀直入に言った。

「愛している。結婚を前提に付き合ってくれ」

言えた。淀みなく、言葉が口から出た。

「はい」

樹里は嬉しそうに答えた。

もしかして、夢？　俺はまた死にかけているのか？

でも、作者は何度も同じオチを使うような単純な奴ではない。

今度は何だ？　最終回なのか？

でもタイトルはそうではなかったぞ。

そうか。実は最終回なのか。ネタが尽きたんだな。

作者は頭が悪いから、そう長くこの話を続けられないと思っていた。

そうか。やっと、俺と樹里を結婚させてくれるのか。

良かった。ホッとしたよ。

「私も愛しています、左京ちゃん」

その言葉に、俺は身体が爆発してしまうかと思った。

「えええええ!?」

「やっと、プロポーズしてくれたのね、左京ちゃん。由里、嬉しいわ」

??? どういう事? どうして由里さんがいるんだ?

俺は知らなかった。

樹里は時々母親の由里さんや姉の璃里(りり)さんと入れ替わって働いていたのだ。

あいつが寝ずに働いているように思えていたのは、こういうカラクリだったのだ。

俺は人生最大のチャンスを、最大のピンチに変えてしまったのだった。

樹里ちゃん、亀島馨と付き合う？

私は亀島馨（かめしまかおる）。警視庁特別捜査班のメンバーだ。

特捜班と言うと聞こえはいいが、実は「雑用係」。以前存在していたものと何も変わらない。

一つだけ違うのは、熱血刑事の神戸蘭（かんべらん）警部が加わった事くらいだ。

部屋も以前と同じで、庶務課が部材を端にどけてくれただけの狭い場所。

「三人なのだから、これくらいで十分だろう」

視察に来た刑事部長が嫌味な顔でそう言った。

あの人は嫌いだ。

班長である杉下左京警部と考えが同じなのは嫌だが、やっぱり嫌いだ。

「最初私が提案した時と随分内容を変えられてしまったわ」

神戸警部も怒っていた。

捜査一課と仕事の内容が被り、杉下警部の同期である加藤警部が、公私に渡って杉下警部をライバル視しているため、余計肩身が狭くなっている。

一課長は、刑事部長と同じ大学出身。だから、二人で嫌がらせをしているのだと神戸警部が言っていた。

私にとっては、それはどうでもいい事だ。

むしろ、他の事で私は頭の中が一杯だった。

「私、左京を応援する事にしたの」

ある日、神戸警部が発した謎の言葉。

最初、何の事かわからなかった。

しかし、それは「杉下警部が御徒町樹里と結婚する事を応援する」という意味だと知った時、私は世界が破滅すると思ったほどだった。

神戸警部が横恋慕をしているうちは、御徒町さんも杉下警部と付き合ったりできないだろうと安心していた。

その関係が崩壊したのだ。神戸警部が寝返るなんて思わなかった。

いや、あの人が杉下警部を諦めるなんて考えつかなかった。

一度は真剣に付き合ったほどの二人だったのに、突然神戸警部が杉下警部をふったのだとか。

その後何があったのか知らないが、神戸警部は刑事部長に掛け合ってまで、杉下さんをG県から呼び戻した。

本当によくわからない関係だ。

そして更に朗報が入った。

杉下さんが樹里さんと間違えて、母親の由里さんにプロポーズした。

由里さんは大喜びして、もう式場と教会を押さえたらしい。

チャンスだ。今こそ、本丸に突撃だ。

しかも、今回の展開に神戸警部は燃え尽きたらしい。

「バカ過ぎて、付き合い切れない！」

彼女は匙(さじ)を投げたのだ。

ところがだ。

杉下警部が玉砕した情報は、捜査一課の加藤警部にも伝わってしまった。

加藤警部も樹里さんを狙っているのは知っている。

まずい。しかし、樹里さんが加藤警部のような強面(こわもて)と付き合うとは思えない。

大丈夫だ。心配ない。

私は落ち着いた。慌てるとロクな事がないからだ。

「おい、亀島」

廊下で加藤警部に呼び止められた。

「何ですか、加藤警部？」

私は一歩も退かない覚悟で加藤警部を見た。

それにしても凄い悪人面だ。よく警察官になれたと思う。

「お前、杉下が、御徒町さんのお母さんにプロポーズしたのを知っているな？」

「はい。それが何か？」

加藤警部は、ニヤッとした。殺される、と思ってしまうほど怖かった。

「抜け駆けしようとしてるな、お前」

ギクッとする。加藤警部もさすがに一課の刑事だ。鋭い。

「そうはさせん。だから、お前と勝負したい」

「え？」

今度こそ殺されると思った。

「二人で御徒町さんに同時に交際を申し込むんだ。それで、御徒町さんに選んでもらう」

バカなのか、この人は？　私は心の中で加藤警部を笑った。

そして、勝利を確信した。

「いいですよ。その勝負、受けましょう」

こうして私達は、その日の夜、樹里さんのいる居酒屋に行く事にした。

居酒屋に着いた私達は、樹里さんを探した。

「いらっしゃいませ」

いた。しかし、確認する必要がある。

「由里さんではないですよね？」

「はい、違います」

私と加藤警部はホッとしてつい微笑み合ってしまった。

ううう。寒気がした。

お互い、牽制しながら、料理を口にし、ビールを飲んだ。

そして閉店時間になり、私達は店を出て樹里さんが出て来るのを待った。

おお。出て来たぞ。ああ、普段着も可愛い。

横を見ると、ニヤついている加藤警部がいた。しかし、仕方がない。

それくらい、樹里さんは素敵だったのだ。

「前から好きでした。付き合って下さい。お願いします！」

私と加藤警部は、同時に右手を出し、頭を下げた。

沈黙。樹里さんは迷っているのだろうか？

バカな……。加藤警部と私で、何を迷うというのだ？

一瞬、嫌な予感がした。まさか……。

「お友達なら……」

樹里さんの声がして、私の右手を柔らかい手が握った。

「あ、あ！」

私は感激で言葉が出ない。隣の加藤警部は、固まったままだ。

「夫がいますので、お付き合いはできませんけど」

樹里さんは衝撃の言葉を口にした。

え？　おっと？　オット？　オットって、何？

私は知らなかった。

樹里さんに、結婚しているお姉さんがいる事を……。

今日はお姉さんが当番の日だったのだ。

「燃えたよ。真っ白な灰に……。燃え尽きた」

私もバカの一人だった。

樹里ちゃん、グラビアの撮影にゆく

御徒町樹里は居酒屋と喫茶店で働くメイドです。

でも、楽器の演奏は全くできません。

今日は居酒屋も喫茶店もお休みで、沖縄のビーチでグラビアの撮影です。

樹里のグラビアは、週刊誌の巻頭を飾る事がわかると、電車の中吊りに至るまで盗まれてしまうほどの人気です。

彼女を発掘した有海範人氏はそのおかげで会社の取締役に大抜擢されました。

「さあ、今回も気合入れて行こうか！」

有海氏は、スタッフ一同に檄を飛ばしました。

「おーっ！」

スタッフ達も、樹里との仕事はちょっと疲れますが、それでも楽しいのでノリノリです。

「御徒町さん、入りまーす！」

樹里が撮影現場に来ました。一同がどよめきます。

「よろしくお願い致します」

樹里は笑顔全開でお辞儀をします。男性スタッフはその笑顔に癒され、女性スタッフは、

「ケッ」

と呟きます。彼女達は、樹里がキャラを作っていると思っているのです。

「まずはこの水着でお願いします」

撮影助手の男の子が、ドキドキしながら、樹里に水着を渡します。

彼はすでに樹里の僕(しもべ)同然です。

「はい」

お約束通り、樹里はその場でいきなり着替えようとします。

「ああ、更衣室でお願いします！」

撮影助手は、顔を真っ赤にして言いました。

「そうなんですか」

樹里は満点笑顔で応じ、更衣室に行きます。

「これだけが生きがい……」

撮影助手が小声で言うのを聞きつけ、女性スタッフが、

「ケッ」

とまた呟きます。

樹里が着替えを終え、また登場です。

「おお」

その水着は豹柄で、樹里のような女性には似合わないと思われましたが、樹里は見事に着こなしました。

そうです。セクシー樹里に変身したのです。胸元が嫌らしいです。

男性スタッフたちが、何故か一斉にしゃがみ込みました。

どうしたのでしょう?

豹柄の水着の撮影は終了し、次はフリルの着いた可愛い水着です。

「おおお」

また男性スタッフがどよめきます。

「可愛いよ、樹里ちゃん！　最高だよ！」

カメラマンが樹里を乗せるために囁きます。

「ありがとうございます」

でもそのたびに樹里はいちいち深々とお辞儀するので、撮影が中断してしまいます。

「樹里ちゃん、いちいち頭を下げなくていいから、ポーズを続けて」

カメラマンは苦笑いして言います。

「申し訳ありません」

また深々と頭を下げる樹里です。

こうして撮影は無事終了し、翌日樹里は東京へと戻りました。

パワフルな彼女は、そのまま居酒屋で仕事です。

「おい！」

開店と同時に、杉下左京警部が現れました。

「いらっしゃいませ、お父さん」

「……」

樹里の母親である由里との婚約が決まって以来、樹里は杉下警部の事をそう呼びます。

杉下警部は、そう呼ばれるたびに落ち込みます。

「お父さんは、まだやめてくれ」

杉下警部は蚊の鳴くような声で言いました。

「そうなんですか？」

樹里は不思議そうに言います。

「それより、今度は沖縄で撮影したんだってな」

杉下警部は、用件を思い出して樹里を睨みます。

「はい。来週の水曜日に発売です。たくさん買って下さいね」

悪気なく売り込みをする樹里に、杉下警部は脱力しました。

でも何とか気を取り直して、

「では、父親として説教するから、よく聞け」

とうとう破れかぶれの杉下警部です。

「はい」

樹里はニコッとして杉下警部を見ます。

「グラビアはやめろ。警察官としての俺の立場を考えてくれ」

本当はそんな事は関係ないのですが、樹里が変な男達の妙な事に利用されるのが嫌なのです。

「はい、わかりました」

樹里は笑顔全開で答えました。

「わかってくれたか。頼むぞ、樹里」

「はい」

杉下警部はホッとして居酒屋を去りました。

樹里は、有海氏に連絡し、警察官の父親が反対しているのでグラビアをやめたいと話しました。

有海氏は仰天して樹里を説得しましたが、樹里の決意は固く、有海氏は諦めました。

樹里がグラビアを引退した情報は、すぐにネット上を駆け巡り、大ニュースになりました。

そしてその原因が父親になる男にあるとわかり、「樹里板」と呼ばれる掲示板には杉下警部への罵詈雑言が書き込まれました。

杉下警部が、樹里にグラビアをやめさせた事を知った亀島警部補が、ネット上に杉下警部の名前を晒したのです。

そのため、「祭り」が起こり、樹里板は荒れました。

しかし、樹里も杉下警部もインターネットをしないので、その事を全く知りませんでした。

樹里ちゃん、本当に嫉妬する

御徒町樹里は居酒屋で働くメイドです。

でもテレビドラマには出ていません。

それでもネットユーザーと一部のオタクには超有名です。

今日は母親の由里と共に、結婚式場に来ています。

杉下左京警部も一緒です。

「どう、左京ちゃん、これ？」

由里はノリノリでウエディングドレスのカタログを見て、左京に示します。

「ああ、いいんじゃないすか」

あまり乗り気ではない左京は、見ているような見ていないような態度です。

「もう！　左京ちゃんも真剣に選んでってば！」

由里はまるで二十代の頃のようにはしゃいでいます。

まだバブルがはじける前……。いえ、それほど前ではないかも知

れません。

「は、はい」

左京は仕方なく、カタログを覗き込みます。

そんな二人の後ろ姿を、幼い妹達を遊ばせながら、樹里はボンヤリ見ていました。

「……」

元気がない姉を心配し、妹の一人である真里が尋ねます。

「どうしたの、樹里お姉ちゃん？」

三人の中で一番年長の真里は、樹里が病気ではないかと思いました。

どんなに疲れていても、彼女達が遊びたがると付き合ってくれる樹里が、暗い顔をしているのを初めて見たのです。

「何でもないよ。ありがとう、真里」

そう言って微笑む樹里を見て、真里は確信を持ちました。

「お姉ちゃんてさ、すぎちゃんが好きなんでしょ？」

真里が樹里の顔を覗き込んで言います。樹里はビックリして、

「当たり前よ。杉下さんは、私達のお父さんになる人なのだから」

「そうじゃなくて」

真里は悪戯っぽく笑います。

「なになにィ、どうしたのお？」

希里と絵里が遊びに飽きて話に加わって来ました。

「樹里お姉ちゃんは、すぎちゃんの事が好きだって話よ」

「何だあ。そんな事、ジョーシキじゃん」

一番年下の絵里が偉そうに言います。

「……」

樹里は、妹達がすっかり自分の心の内を見抜いているのに驚いてしまいました。

そして、改めて、左京と由里が話しているのを見ます。

（何でしょう、このモヤモヤ？）

何だかわからない感情が、胸を焦がすようです。

「お姉ちゃん、お母さんにヤキモチ妬いてるのよ、きっと」

真里が得意そうに分析します。

「それはそうよ、そもそもお姉ちゃんの方が先に、すぎちゃんと出会ってるんだから」

希里も腕組みをして嬉しそうです。

「お母さん、人のものがほしくなるタイプだもんね」

意味がわかって言っているのか不安な絵里です。

「そうそう。璃里（りり）お姉ちゃんの結婚式の時も、危なかったんだよ」

真里がとんでもない事を暴露します。

『左京はね、貴女のお母さんではなく、貴女と恋人になりたいと思っているのよ』

樹里は左京の同僚である神戸蘭（かんべらん）警部の言葉を思い出していました。

（杉下さんは、私の事が好き？）

でも、左京からそう言われた事はありません。

その時でした。

「樹里さん」

後ろで声がしました。

「ああ、亀だ！」

絵里が言いました。そこには、亀島警部補が立っていました。

「亀、何しに来たの？」

絵里がズケズケとした物言いで尋ねます。しかし亀島はそれを無視しました。

「もうすぐ、結婚式ですね」

亀島はとても嬉しそうに言います。

「はい」

樹里は笑顔半分くらいで応じます。

「元気ないですね、樹里さん？　具合でも悪いんですか？」

亀島が尋ねると、さっき無視された絵里が、

「うるさい、亀！　あっちに行ってなさい！」

と怒り出しました。

「え？」

亀島は思ってもいない方向からの攻撃に驚きます。

「そうだそうだ、亀、引っ込め！」

希里と真里まで亀島を言葉攻めです。ちょっとＭっ気がある亀島

も、これには耐え切れません。

「あ、あの、話があるんですけど」

彼は遂に樹里を誘い、その場を離れようとします。

「ダメ、樹里お姉ちゃん、亀について行っちゃダメ！」

絵里が激怒して叫びます。しかし樹里は、

「そんな事を言ってはいけません」

とたしなめ、亀島と歩いて行きます。

「あああ、亀が樹里お姉ちゃんをさらって行くう！」

希里が叫びます。

「樹里さん」

亀島は妹爆弾から距離を置くと、樹里に話し始めました。

「ずっと好きでした。結婚を前提にお付き合いして下さい」

亀島は大真面目です。すると樹里はニコッとして、

「璃里お姉さんにも同じ事を言ったそうですね？」

亀島の意識が飛んでしまいました。彼は致命傷を受け、再起不能です。

樹里は動かなくなった亀島を残して、由里達に近づきます。

「お、どうした、樹里？」

左京が気づいて樹里を見ます。由里も樹里に目を向けました。

「好きになってもいいですか？」

樹里は左京に言いました。

「やっと言ったな！」

何故か由里が嬉しそうに立ち上がります。

「え？」

左京と樹里は、キョトンとして由里を見ました。

「あんたが言い出すのをずっと待ってたのよ、樹里」

由里は本当に嬉しそうに言いました。

そして、左京の手を樹里の手に重ねて、

「結婚するのは、あんた達よ。さあ、式場は押さえたし、ウエディングドレスもバッチリね」

ハッとして顔を見合わせる樹里と左京。顔が赤くなります。

「わーい、結婚、結婚！」

意味もわからず大はしゃぎの絵里です。

「杉下さん」

「樹里」

二人は見つめ合います。そして、ヒシと抱き合いました。

もしかして、最終回でしょうか？

しかし、運命は過酷でした。

まだまだ二人は結婚させてもらえないようです。

樹里ちゃん、さめざめと泣く

俺は杉下左京。警視庁特捜班の敏腕警部であり、班長だ。

今、俺は幸せの絶頂にいる。

遂に、あの御徒町樹里と婚約したのだ。

長かった。何度も酷い目に遭いながら、この日が来るのを信じて進んだ。

願いは叶う。そう思った。

あの樹里のサクランボのような唇。

そして、あのマシュマロのような……。

コホン。

俺は樹里の身体が目当てではない。

身体だけが目当てなら、同僚の神戸蘭でもまだＯＫだ。

う。今、殺気が……。

それにしても意外だったのは、樹里の母親の由里さんだ。

てっきり本当に俺と結婚するつもりだと思っていたのだが。

占いで、樹里の理想の相手は俺だと出たので、ずっと樹里が自分の言葉で俺に告白するのを待っていたのだという。

惚れてしまいそうです、お母さん。貴女は何て良い人なんだ。

更に意外だったのは、蘭だ。あいつ、最初は樹里を親の仇のように嫌っていたのに。

何があったのだろう？　突然、「応援する」とか言い出して。

ようやく、自分の性格の悪さに気づいたのだろうか？

そして亀島。あいつは最後まで俺に敵対心を燃やしていたが、突然諦めた。

しかも謎の言葉を言ったのだ。

「私は、警視庁にいたいんです」

どういう意味だ？　わけがわからん。

「左京、刑事部長がお呼びよ」

特捜班室に入ると、蘭が言った。

「部長が？　何だ？」

「結婚の事じゃないの？」

疑問が次々に湧いて来るが、行ってみるしかない。

俺は特捜班室を出た。

「来たか。まあ、かけたまえ」

部長は俺が部屋に入ると、席を立ってソファに移った。

「失礼します」

俺は部長と向かい合って座った。

「結婚するそうだな」

「はい」

何だ、やっぱりその事か。ちょっと安心した。

「おめでとうと、一応言っておこう」

「は？」

何だ？　妙に嬉しそうな部長が怖い。

「君も警察官なのだから、結婚相手に制約がある事は知っているね」

「はい」

制約？　そんなの、あったっけ？　取り敢えず返事をしてしまっ

た。

「警察官は中立的でなければならんから、特定の政治団体や宗教団体等の関係者とは結婚できない事になっている。もちろん、これは個人の自由を奪うものであるから、倫理規定に過ぎない」

「はい」

???　樹里は政党関係者ではないし、宗教にも入っていないぞ？

もしかして、由里さんが占い師なのがやばいのか？

それとも、樹里を崇める妙な団体があるらしいから、それがまずいのか？

しかし、部長が指摘したのは、そのいずれでもなかった。

「君の婚約者は、以前風俗で働いていた事があるらしいね」

「！」

俺は度肝を抜かれた。確かに樹里は違法風俗で働いた事がある。

何て事だ。それを楯に、部長は俺に結婚を諦めろと言うのか？

「いやあ、残念だよ、杉下君」

え？　残念？　どういう意味だ？

「君はその女性の事を非常に愛しているらしいね。だから、仕事で

はなく、結婚を選ぶのだとか」

「はあ？」

言われている事が理解不能だ。

「警察官の職を捨ててまで、その女性と添い遂げる。うーん、美しい生き方だよ」

部長の笑顔の理由がわかった。

樹里との結婚にこじつけて、俺という厄介者を警視庁から追い出すつもりだ。

亀島の謎の言葉は、この事だったのか……。

俺は考えた。

樹里との結婚は捨てられない。彼女は何者にも代えがたい存在だ。

一方、警視庁なんてヤクザな組織、いつ辞めても構わない。

しかし、この部長の企み通りに辞めるのは癪に障る。

どうしたらいい、樹里？

その時、樹里の声がした。

いや、明らかに空耳なのだが、俺には聞こえた気がした。

「そんな事考えないで下さい、杉下さん」

素直が服を着ているような樹里なら、必ずそう言うはずだ。

俺は決心した。

「はい。ありがとうございます。つきましては、部長に仲人をお願いしたいのですが？」

これくらいの嫌味はいいだろう。

「ハハハ、申し訳ないね。私はまだ上を目指したいので、経歴に瑕がつく事はできんのだよ」

以前の俺なら、確実にぶん殴っているセリフだ。しかし俺は冷静だった。

「そうですか。私も部長のような生き方ができれば、もっと上を目指せたのでしょうね」

ムッとする部長を無視し、

「失礼します」

と部屋を出た。

俺は特捜班室に戻り、何か言いたそうな蘭と亀島を無視し、便箋を取り出した。

「左京、それは？」

勘のいい蘭は気づいたようだ。

「辞表だよ。今日で辞める」

「ええ？」

蘭と亀島が異口同音に叫んだ。

「こんなもんだろ」

俺はサッと辞表を書き上げ、封筒に入れた。

「人事に行って来る」

「左京！」

「杉下さん！」

二人が呼び止めるのも聞かず、俺は人事部に向かった。

人事部には、刑事部長から連絡があったらしく、非常に事務的に辞表を受理された。

これくらいあっさりしていると、俺も後腐れがなくていい。

「左京、考え直してよ」

「杉下さん」

特捜班室に戻ると、蘭と亀島が騒がしい。

「今まで世話になったな」

俺はダンボールに私物を放り込み、二人に言った。

「じゃあな。後は頼んだぞ」

それ以上長くいると、お互い支障があると思い、俺は特捜班室を出た。

そしてその夜、俺は樹里のいる居酒屋に行った。

営業時間の間は、俺は何も言わず、楽しく酒を飲んだ。

さすがの杉下左京も、素面で未来の女房に「仕事辞めた」とは言いにくい。

居酒屋の営業時間が終わり、俺は表で樹里を待った。

「お待たせ致しました」

樹里が笑顔で出て来た。

「おう」

二人で歩き出す。

「あの」

樹里が口を開く。

「え？」

「何かお話があるのではないですか？」

「ああ、そうだった」

俺は酔いが冷め切らないうちに言おうと思い、立ち止まる。

樹里も立ち止まって俺を見た。

「実は、仕事を辞めて来た」

樹里のせいで辞めたとは言えない。

彼女のせいではないと思っているから。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開だ。

「探偵事務所でも開こうと思ってる」

「そうなんですか」

樹里は全く驚いていない。

「だから、苦労かけるかも知れない。許してくれ」

「はい」

え？　樹里が泣いている。真珠のような涙が、左右の目からポロポロとこぼれている。

「どうしたんだ、樹里？」

俺は驚いて彼女の肩を掴んだ。

「杉下さんが、優しいから……」

「え？」

その時はどういう意味かわからなかったが、俺は涙を流す樹里を抱きしめた。

後で知った事なのだが、あの腐れ刑事部長の奴、ご丁寧にも樹里に電話をして、今回の件を全部話したらしい。

樹里は俺が辞めた理由を知っていたのだ。

部長を殺しに行こうかと思った。

しかし、そんな事をしても何も解決しない。

そして何より、樹里が喜んではくれない。

それにしても、これからどうしよう？

俺は一気に現実に引き戻された。

樹里ちゃん、探偵助手になる

御徒町樹里は居酒屋のメイドです。

その知名度は抜群で、各政党から「比例代表で」と誘いがあったほどです（嘘です）。

樹里の婚約者になった杉下左京が失業してしまったため、樹里は新聞配達も始めようと思ったのですが、左京が泣いて止めたので、諦めました。

そして数日後、左京は義理の母親となる由里の援助もあり、都心の一等地に「杉下左京探偵事務所」を開業しました。

開業日には、元同僚の神戸蘭も姿を見せ、左京を励ましました。

「何か力になれる事があったら連絡頂戴」

彼女は左京ににじり寄るように告げると、事務所を出て行きました。

「あいつ、本当に俺の事を諦めたのか？」

嫌な汗をたくさん掻いた左京は、事務所に備え付けのシャワールームでリフレッシュしました。

「それにしても、全然電話が鳴らないな」

「所長」のプレートが立てられた机にしがみつくように座り、左

京は電話を睨んでいます。

「只今帰りました」

樹里がチラシとティッシュ配りを終えて、戻って来ました。今日は喫茶店はお休みです。

「おう、お疲れ。どうだ、反応は？」

左京が尋ねます。樹里は笑顔全開で、

「今日は立川まで行きましたが、飯能は行けませんでした」

と関東の限られた人にしかわからないボケをかまします。

「地名の話をしてるんじゃないよ！　チラシを受け取った人の様子はどうだった？」

左京は言葉を慎重に選んで重ねて尋ねます。

「皆さん、喜んでいました」

「はあ？」

意味がわからない左京は、樹里に近づき、

「おい、ティッシュしか配ってないのか？」

樹里の持っている手提げかごには、チラシがたくさん残っています。

「いらないと返されました」

愕然とする左京です。でも樹里は笑顔全開です。

「直接お話された方が良いのではないかと思って、お連れしました」

「何？」

さすが樹里だ。早速お客を連れて来てくれたのか。

ああ、お前と結婚できるなんて、俺は幸せだ。

左京が妄想していると、樹里が「お客」らしき人を招き入れました。

「立川署の者です。ビラを配るのに、許可を得ていますか？」

「え？」

樹里が連れて来たのは、刑事でした。

左京は慌ててお詫びし、今度からは気をつけますと謝りました。

「樹里、チラシ配りは、最寄の駅でしてくれ」

「はい。申し訳ありません」

左京が謝っているのを見て、樹里も反省したようです。

「最寄り駅がどこにあるのかわからないのですが」
「駅は目の前だろ！　見えないのか？」
左京はついイラッとしてしまいました。
「ええ？　目の前の駅は、五反田駅ですよね。最寄り駅ではありませんが」
樹里の答えに、左京は脱力しました。
（こういう奴だったのを忘れていた……）
その時、電話が鳴りました。
「はい、杉下左京探偵事務所です」
左京が笑顔全開で出ます。
「人を探して欲しいのですが」
若い女性の声です。
「わかりました。詳しいお話を伺いますので、そちらのご住所をお教え下さい」
女性は住所を告げます。
何故か左京の顔が蒼ざめていきます。

「どうされましたか？」

突然黙り込んでしまった左京に、相手の女性が尋ねました。

「ああ、いえ、別に。わかりました、これからお伺いします」

「いえ、その必要はありません」

「は？」

左京は思わず樹里と顔を見合わせます。樹里は何故なのかわからないので、ニコッとしました。

「私はもう、貴方の事務所の前まで来ています」

女性のその答えに、左京の顔色がなくなりました。

そして、ドアが開き、女性警官が入って来ました。

「やっと見つけたわ、左京さん。十年前の約束、果たして下さいね」

「……」

何故か、左京は泡を吹いて失神してしまいました。

「左京さん！」

樹里が驚いて左京を抱き起こします。

「貴女が御徒町樹里さん？」

女性警官が尋ねました。

「はい。貴女は？」

樹里は左京を椅子に座らせてから女性警官を見ました。

「私は、宮部ありさ。杉下左京の婚約者です」

「そうなんですか」

何故か笑顔全開の樹里です。ありさはイラッとして、

「そうなんですかって、貴女、全然慌ててないの？」

「はい」

「どうして！？」

ありさはますますイラッとして尋ねました。

「ありささんは、幽霊さんですよね？」

「え？」

ありさがギクッとします。でも、

「だったら、どうなのよ！？」

と逆ギレです。

「いえ、別に」

それでも笑顔全開の樹里です。

「貴女、ボンヤリしてそうでなかなか強かね。いいわ。今日のところは引き下がるわ。左京によろしくね」

ありさはそう言うと、ボンと消えてしまいました。

前途多難を暗示する初日でした。

樹里ちゃん、探偵助手になる（後書き）

あひゃあ、ありさを勢い余って幽霊にしてしまった……。
どうしよう？

樹里ちゃん、先輩所員になる？

御徒町樹里（おかちまち じゅり）は、主に居酒屋で働くメイドです。

もうすっかり忘れられていると思いますが、渡米した大富豪の五反田六郎氏が帰国すれば、五反田邸のメイドに復帰します。

「え？」

その事を聞かされ、「杉下左京探偵事務所」の所長である杉下左京はギョッとしました。

「それは、なかった事にできないのか、樹里？」

左京はダメ元で訊いてみました。

すると樹里は笑顔全開で、

「そういうお話は、弁護士を通すようにと旦那様から言われております」

「だよな」

大富豪を相手に樹里を奪い合っても、勝てない。

しかも、樹里は、仕事に関してはシビアだ。

結婚しても仕事は続けるし、探偵事務所も手伝うと言う。

「いや、探偵事務所は手伝わなくていいよ。樹里が倒れてしまうだろ？」

左京は働きづめの樹里の身体を心配して言いました。

「そ、それに、将来子供も生まれるだろうから、その、何だ……」

何故か顔を赤らめる左京です。きっと嫌らしい事を考えているのでしょう。

「はい、わかりました」

樹里はニコッとして応じます。

「そうか、わかってくれたか」

左京は火照る顔を仰ぎながらホッとします。

「では、保留にしておいた新聞配達をしますね」

全然わかってくれていない樹里に、左京は脱力しました。

「だから、そんなにまでして働かなくてもいいんだよ、樹里」

何故か涙を流して説得する左京です。

「どうしてですか？　私達には、母と妹達三人の扶養家族がいるのですよ？」

「え？」

珍しく至極まともな事を言われたので、左京は面食らいました。

「杉下さんは、お金に無頓着過ぎます」

「すみません」

叱られた子供のような心境になる左京です。

「何てね」

「え？」

左京はギョッとしました。樹里が話しているのかと思っていたら、そうではなかったのです。

「また会えたわね、左京」

樹里の背後で微笑んだのは、先日いきなり現れた宮部ありさの幽霊でした。

「わ、わ、わ！」

左京はまた気を失いそうになりましたが、何とか持ち堪えます。

「いらっしゃいませ、ありささん」

樹里は笑顔全開で挨拶しました。しかしありさはそれを無視して、

「左京、私が死んだのは、貴方のせいなのよ。それなのに、こんな

天然女と婚約なんかして！」

「いや、ありさ、それは違うぞ」

左京は慌てて言いましたが、ありさは聞きません。

「私は貴方の判断ミスで死んだのよ！　絶対許さないわ！　あんた達を呪ってやる！」

ありさは凄まじい形相で言い放つと、ボンと消えてしまいました。

「どうしよう？」

左京は樹里に言いました。すると樹里は、

「新聞配達ですか？」

「違ーう！」

何だか懐かしい気がしてしまう左京でした。

「左京、いる？」

そこへふらりと神戸蘭警部がやって来ました。

「おおお、蘭！　今呼ぼうと思っていたんだ！」

「え？」

その言葉に顔を赤らめる蘭です。きっと嫌らしい事を……。

「考えるか！」

地の文に突っ込むなんて、さすが神戸蘭です。

「お久しぶりです、神戸警部」

樹里が笑顔全開で言います。蘭も笑顔で、

「そうね。元気？　毎晩頑張ってる？」

蘭の発言に、左京が動揺します。

「な、な、な」

左京はまるで曲芸師のように動きました。

「探偵事務所と居酒屋で働くって、大変よね」

思いっきり倒れる左京です。一人コントでもしていたのでしょうか？

「何よ、騒がしいわね、左京。どうしたの？」

左京は用件を思い出しました。

「さっき、ありさの幽霊が現れたんだ」

「ありさの幽霊？」

蘭はバカにしたような顔で左京を見ます。

「本当だよ！　樹里も見たんだ。な？」

慌てて同意を求めます。樹里は笑顔全開で、

「はい。ありさんさんの幽霊さんが来ましたよ」

蘭は樹里を見て、

「貴女まで何言ってるのよ。ありさの幽霊なんて現れる訳ないでしょ？」

「嘘じゃないんだよ！　お前、幽霊は本当にいるんだぞ！」

左京は涙ぐんで主張しました。蘭は肩を竦めて、

「幽霊がいるとかいないとかじゃなくて、ありさの幽霊なんて現れる訳ないのよ」

「どうしてそんな事が言い切れるんだよ!?」

左京は逆ギレ気味に言いました。すると蘭は、

「当たり前じゃないの。だってありさは生きてるんだもの」

「は？」

左京は髪の毛が全部白くなりそうなくらい驚きました。

「おまたあ、蘭」

そこへまるでショーの主役のようにありさが現れました。

足があります。その脇に影ができています。

「ど、どういう事だ？」

何が何だかわからない左京は、大声で言いました。するとありさはケラケラ笑って、

「私は死んでいないわよ、左京。貴方はすぐに病院を出て、私を撃った犯人を捕まえに行ったけど、その後、私は蘇生したのよ」

「……」

今、左京は、髪の毛が白くなるどころか、全部抜けてしまいそうなくらい驚いています。

「言わなかったっけ？」

蘭がニッとして左京を見ます。

「聞いてないぞ！」

そして、ハッとします。

「じゃあ、さっきのは何だ？」

「ああ。私、生死の境を彷徨ったせいで、幽体離脱がお手軽にでき

るようになったのよ」

「はあ？」

また脱力する左京です。ありさはニコッとして、

「どうよ、私のこの能力？　探偵事務所に必要でしょ？」

左京はムッとして、

「お前を雇う金なんかないよ」

「あーら、そんな事言っていいの？」

ありさはスッと左京に近づきました。

「あの子に、あーんな事や、そーんな事をバラすわよ」

「い！」

何の事かはわかりませんが、蘭はともかく、ありさとは高校生の時からの腐れ縁なので、左京は慌てます。

「わ、わかった」

左京は項垂れたまま樹里に近づき、

「樹里、探偵事務所はありさに手伝ってもらうから」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

「では、新聞屋さんによろしくお願いしますとご挨拶に行って来ます」

「そこまで戻るんかい！」

左京は首の骨が折れるのではないかと言うくらい項垂れました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、大胆になる

俺は杉下左京。元警視庁の敏腕警部だ。

今は、五反田の駅前に探偵事務所を開業している。

所員は今のところ、婚約者（フィアンセ）の御徒町（おかちまち）樹里（じゅり）。

そして、幽体離脱が自由自在の半妖怪のような女、宮部ありさ。

このありさが問題だ。

こいつ、俺と高校が同じで、三年間クラスも一緒だった。

理由はわからないのだが、何故か好かれてしまい、いつの間にやら、

「全校公認のバカップル」

と呼ばれていた。俺は付き合っているつもりはなかったが。

彼女とは大学は別になった。と言うか、女子が入学できない大学を選んだのだ。

おっと、大学をググるなんて野暮はなしだ。この話はフィクションだからな。

俺はホッとしていたのだが、ある夜出席した勉強会（とは名ばかりの合コン）で再会してしまった。

「私達って、運命の赤い糸で結ばれているのね！」

ありさのその一言で、俺は他の女子から引かれてしまい、結局ありさとカップルにされてしまった。

「名コンビ復活ね」

ありさは嬉しそうだった。

彼女は別に嫌な女ではないし、結構可愛い。

でも、その頃の俺は、ありさを女として見ていなかった。

そう。俺はその頃筋金入りの「おっぱい星人」だったのだ。

ありさは、「小学生？」と訊かれるくらいの貧乳だった。

俺は偽りの交際を続けるのを良しとしなかった。

だから、ありさに言った。

「ごめん、俺、貧乳は嫌いなんだ」

ありさは泣き喚いて怒るかと思ったが、

「そう。わかった。今までありがとう」

とだけ言うと、俺の前から姿を消した。

そして、大学を卒業し、警視庁に配属されるまで、ありさとは会う事はなかった。

だから、警視庁で再会した時は、本当に驚いた。

「久しぶりね、左京」

その物言いは、高校の時と変わらなかったが、一つだけ変わったところがあった。

胸だ。絶対豊胸しただろう、と言うくらい、巨乳になっていた。

「どうよ、左京？　これはまさしく牛乳のおかげなのよ」

「はあ？」

牛乳を飲むと巨乳になる。それを信じて、あれから毎日一リットル飲んだらしい。

俺なら三日と続かない自信があるが、ありさは耐え抜いた。

巨乳への執念は、俺達男には理解しがたかった。

「貴方だって、アレが大きくなるって言われれば、頑張るでしょ？」

ありさの只一つの欠点。こいつは、可愛い顔して下品な下ネタが大好きなのだ。

「お、俺は別に現状で満足している」

俺は強がりでなく、そう言った。するとありさは鼻で笑った。

「そんな事は、女が決めるのよ」

「……」

そう言われてしまうと、一言もない。

「試してみる？」

巨乳のありさに色目を使われ、俺は陥落しかけた。

しかし、そうならなかったのは、神戸蘭（かんべらん）の存在だった。

「あら、ありさ。どうしたの？」

彼女はありさと大学の同期で、一緒に警視庁の試験を受けた親友だった。

「……」

俺は一目惚れした。蘭の目は、今以上に強烈で、見つめられたらそれまでだった。

ありさは蘭と俺が付き合うようになると、俺に近づかなくなり、所轄への出向を願い出て、三鷹だか国立だかに行ってしまった。

「杉下さん」

「うわ！」

俺は所長の椅子でうたた寝をしていたようだ。樹里に声をかけられ、ハッとして目を覚ました。

「これから、居酒屋に行きます。失礼します」

樹里はニコッとして言った。俺はちょっと照れ臭かったが、

「あのさ、俺の事、名前で呼んでくれないかな？　婚約したんだしさ」

と言ってみた。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で、

「左京ちゃん」

「ちゃんはつけないでくれ」

それだと、お前の母親の由里さんと区別がつかなくなるよ。

「では、左京」

「呼び捨て……？」

ちょっと嫌な気もするが、そういうプレイもありかも知れない。

コホン。

「左京さん、がいいかな？」

「そうなんですか」

樹里はニッコリして、

「左京さん」

と言ってくれた。俺は天にも昇る思いだった。

「愛してるわ、左京さん」

「え？」

急に樹里が俺に迫って来た。

「お、おい、居酒屋は？」

嬉しいんだが、こういう樹里は嫌な気がする。

「お、おう！」

俺は理性が吹っ飛びそうだった。樹里が胸を俺の腕に押しつけて来たのだ。

「左京さん、その前にシャワー浴びて来て」

「……」

俺は全身の血が頭に上るのを感じた。

このままでは脳出血で死ぬ。

「なーんてね」

「え？」

まさか！

「私よ、ありさよ」

「てめえ、何て事するんだ！？」

ありさが幽体離脱をして、樹里に乗り移ったらしい。

「貴方達がお楽しみの時、私が乗り移る。最高ね」

ありさはニヤリとした。

「そんな事して楽しいのか、ありさ！？」

俺は本気で怒った。こんな事、冗談ですますつもりはない。

「お前との事、俺も酷い事をしたと思っていた。でも、樹里は関係ないだろう！？　そこまでするなら、俺にも覚悟があるぞ」

「何よ？」

ありさはまだニヤついている。

「悪霊退散！」

俺は机の引き出しから、高名な霊能者から譲り受けたお札を出した。

「キャーッ！」

ありさの霊は、樹里から離れ、消えた。

「ありさ、聞こえているか！？　俺は何をされてもいい。だけど、樹里には何もしないでくれ。頼む」

俺は床に両手を着き、土下座した。

「この通りだ、ありさ」

「わかったわよ」

顔を上げると、ありさがドアを開いて立っていた。

「ありささん、お疲れ様です」

樹里は何も知らないのか、笑顔全開で挨拶した。

ありさは樹里に微笑んで、

「じゃあね」

とドアを閉じた。

本当にあいつは承知してくれたのだろうか？

「西園寺蘭子」

俺はその高名な霊能者の名刺をもう一度見た。

樹里ちゃん、悪霊に狙われる

俺は杉下左京。東京の五反田駅前に探偵事務所を構える元警視庁の警部だ。

先日、元同僚で、現在ウチの事務所の所員である宮部ありさが、自分の特殊能力である幽体離脱を悪用し、とんでもない事に俺の婚約者（イアンセ）の御徒町（おかちまち）樹里（じゅり）に乗り移った。

高校時代からの腐れ縁であるありさは、その性格の悪さで樹里を操って俺に迫らせた。

俺はそのせいで、もう少しで脳内出血しそうになった。

しかし、高名な霊能者から譲り受けたお札で、悪霊ありさを撃退した。

そして俺は今までの彼女に対する「悪行」を詫び、樹里にだけは手を出さないで欲しいと懇願した。

ありさは表面上は承諾したように見えた。

しかし、あいつの性格を良く知る俺は、別の手立てをうち、樹里を守る事にした。

「今日も暇ねえ」

いつの間にか、自分専用の机を持ち込み、椅子にふんぞり返ったありさが呟く。

「そうだな」

俺は大人だ。ありさを追い出したい心境だが、そんな事はしない。

普段はごく普通に接している。

「樹里ちゃんは、お仕事？」

付け爪の手入れをしながら、ありさが色目を使って来る。

「もうすぐ帰って来るよ」

俺は素っ気なく言う。ありさは席を立ち、俺に近づく。

「じゃあさあ、彼女が帰って来る前に、ね？」

「な、何だ！？」

俺はギクッとして椅子から立ち上がり、後ずさる。

「左京ったら、ホントにスケベなんだからあ。何考えてるのよ」

ありさはニヤニヤして言った。またこいつにからかわれたのか。

くそ！

「私、営業に行って来るわ。昔の同僚がいるから、その辺を当たってみる」

「そ、そうか」

「じゃあね」

ありさは俺に投げキッスをして、事務所を出て行った。俺は素早くそれをかわしたが。

おかしい。あいつが営業に行くなんてあり得ない。

ありさがここで働くようになって（実際にはお茶を飲んでいるか、爪を磨いているかのどちらかしかしていないが）、そんな事を言った事はない。

何を企んでいるんだ？

もしかして、樹里を待ち伏せして、また乗り移るつもりか？

だが、今回はそんな事はできないはずだ。

「遅くなりました」

そこへ樹里が来た。いつものように笑顔全開。俺の鼻の下は二倍。

いつ見ても、こいつ、最高だ。可愛い。

「いや、遅くないよ。丁度いいタイミングだ」

「そうなんですか」

樹里の笑顔で、俺はその日のストレスを解消している。

しかし、先程の不安が頭の中を過ぎった。

「樹里、お札はきちんと貼っているか？」

「はい。おへその上に貼っていますよ」

いきなりそれを見せようとする樹里を、俺は慌てて止めた。

「ああ、いいよ、見せなくて！　貼ってあればそれでいいんだ」

「そうなんですか」

樹里はニコッとして言った。

そう。樹里に新に購入した悪霊避けのお札を貼らせているのだ。

これであの女も、樹里に乗り移る事はできない。

しかし、甘かった。俺は準備不足だったのだ。

「ぐ！」

何かで後頭部をガンと殴られたような衝撃を受け、俺は倒れた。

「左京さん！」

樹里が驚いて俺に駆け寄る。

良かった。樹里が俺を「左京さん」と呼んでくれている。

などと感激している場合ではない。

何者かの襲撃か？　しかし、どこから……。

「ほい」

俺の意識と無関係に、俺の身体は勝手に立ち上がる。

「ふーん。なるほどね」

俺の身体は、何故かジーパンの中を覗いていた。

何してるんだ、俺？

「確かに現状で不満ないかな」

え？　何言ってるんだ、俺？

「樹里」

俺は樹里を見た。俺の意識とは関係なく。

「はい」

「お札、もういらないだろう？　剥がしていいよ」

あああ！　わかったぞ！　ありさだな！　あいつが俺に乗り移って、こんな事を言わせてるんだ！

畜生、何て悪知恵の働く奴なんだ！

「はい」

ああああ！　素直過ぎる樹里は着ている服を捲りあげる。彼女のかわいいへそとお札が見える。

おおお。思わず感動してしまう自分が情けない。

樹里はニコニコしながらお札を剥がしてしまった。

ダメだ、樹里！　ありさに身体を乗っ取られるぞ！

叫びたいが、今俺はありさの霊に乗り移られて、身体の自由が利かない。

どうする、左京！？　樹里がピンチだ！

「はい」

樹里は笑顔で、剥がしたお札を俺の額に貼り付けた。

「キャーッ！」

途端にありさの霊が俺から離れた。

「な、何て事するのよ、貴女は！？」

ありさ得意の逆ギレだ。見苦しい奴。

「それはこっちのセリフだ、ありさ！」

俺はありさを睨みつけた。しかし、額にお札が貼られたままなので、間抜けだ。樹里が、

「左京さんを困らせてはダメですよ、ありささん」

と笑顔で諭す。

「見抜いていたのね、あんた」

ありさは樹里を憎らしそうに睨んだ。

「何よ、みんなして、私を邪魔者扱いしてェッ！」

ありさの霊は、ボンと消えてしまった。

「左京さん」

樹里が俺を見た。俺はお札を剥がして、

「何だ？」

「ありささんが可哀相です。優しくしてあげて下さい」

樹里の言葉に、俺はハッとした。

「ああ。そうするよ」

俺も笑顔で応じた。

しかし、俺は数日後、別の事で仰天した。

俺はてっきり同じ霊能者に頼んだつもりだったのだが、違っていたのだ。

一枚目は、パテッ○ス並みの安さだったのに、二枚目は結婚指輪並みだったのだ。

請求書をよく見てみると、

「八木麗華霊能研究所」

と書かれていた。

ああ。相変わらず、詰めが甘い俺だった。

樹里ちゃん、事件を解決する

俺は杉下左京。五反田駅前に事務所を構える名探偵だ。

と言いたいところだが、未だに依頼はゼロ。

それなのに所員は二人もいる。

一人は俺の最愛の人、御徒町樹里（おかちまち じゅり）。

彼女は、実質無給で働いてくれるので、問題ない。

問題はもう一人。

宮部ありさ。警視庁時代の元同僚。しかも、こいつは、俺のせいで一度死にかけた。

その負い目があり、全く役に立っていないのだが、辞めさせる事ができない。

この先どうなるのだろう？　早くも借金地獄に陥る予感がする。

「お久しぶりです」

毎日暑い日が続く中、もっと暑くなりそうな奴が登場した。

「何しに来た？」

俺はそいつに言い放った。そいつは苦笑いをして、

「杉下さん、仕事を依頼に来た人間に対して、そんな言い方はないでしょう?」

その男、警視庁特捜班の亀島馨は言った。

もう二度と顔を合わせる事もないと思っていたのに!

「何でお前、ここを知ってるんだ?」

俺は机を飛び越えて亀島に詰め寄った。亀島はフッと笑って、

「神戸警部に聞いたんですよ」

「何?」

神戸蘭。こいつも俺の元同僚。お喋りめ!

「まあ、座って話しましょう、杉下さん。話は長くなりますので」

「く」

俺はムカついたが、一応話だけは聞く事にした。

もし下らない話だったら、ありさに取り憑いてもらって、警視庁で裸踊りをさせてやる。

「あれ? そう言えば、樹里さんはいないんですか?」

「馴れ馴れしく名前で呼ぶな！　樹里は喫茶店だよ」

亀島はニヤリとして、

「婚約者の方が働いてますね、杉下さん」

「う、うるせえ！」

図星を突かれた俺は、怒鳴るしかない。

「早く本題に入れ」

亀島を睨みつける。亀島はスーツの内ポケットから封筒を取り出し、

「こんなものが、警視庁に届きました」

「うん？」

それには、「予告状」と毛筆体で印字されていた。

「何だ、これは？」

俺は亀島に尋ねた。

「最近、世間を騒がせている三人組の泥棒ですよ」

「キャッツ◯イか？」

俺は遠慮なく言った。後で名前の部分は編集されるだろうが。亀島は笑って、

「違いますよ。彼女達はもうご老体で、泥棒なんて無理でしょう」

「かも知れんな」

俺は封筒の中身を取り出し、読んでみた。

「五反田六郎邸の玄関にあるシャンデリアを頂きに参上します」

五反田六郎？　樹里が働いていた大富豪の家じゃないか！？

「怪盗ドロント？」

ふざけた名前だ。

「一度現場で三人を見かけた者の話では、相当美人らしいですよ」

亀島は嬉しそうだ。

「そんなの整形だろ」

ドスンとどこかで何かが落ちる音がした。

「何だ？」

俺はキョトンとした。

「オホホホホ」

「何だ？　天井裏に鳩でも紛れ込んだか？」

俺は上を見て呟いた。

「違うわよ！　いい加減にしなさいよ、ヘボ探偵！」

女の声だ。

「だ、誰だ？」

俺と亀島は、驚いて周囲を見渡す。

すると、天井の一部がカタンと開き、スッと黒ずくめの女が舞い降りた。

顔は仮面の忍者のようなマスクで隠していて、年齢もわからない。只、長い黒髪を見る限りでは、若い女だ。俺は髪の毛に詳しいのだ。

「私は世界的な美人大泥棒のドロントよ、ヘボ探偵さん」

その女は胸を張って言った。俺は見たままを口にする。

「貧乳」

「うるさいわね！」

素早い突込みだ。その女はフッと笑い、

「貴方に私が捕まえられるかしら？　楽しみにしてるわね、ヘボ探偵さん！」

ボンと煙幕が張られ、ドロントと名乗る頭のおかしい女は消えた。

「今のがドロントか。若い女みたいですね」

「そのようだな」

「じゃ、頼みましたよ、杉下さん」

亀島はサッサと事務所を出て行こうとする。

「おい、俺はまだ引き受けるとは一言も言ってないぞ！」

ムッとして呼び止めると、亀島は更に、

「だって、あの泥棒を捕まえたら、杉下さんはマスコミに取り上げられて、仕事がたくさん舞い込みますよ。そうしたら、樹里さんに楽をさせられるじゃないですか」

「あ、ああ……」

樹里を楽させてあげられる。その一言が、俺を決断させた。

「わかった。引き受けよう」

俺は言った。亀島は妙に嬉しそうな顔をして出て行った。

嫌な予感がするが、気にしないでおこう。

そして、どこに行っていたのか、ありさが帰って来た。煙草臭いから、パチンコのようだ。

「ありさ、仕事だ」

俺は渋く決めた。するとありさは、

「そうかい、八丁堀」

と意味不明な事を言う。俺が白い目で見ているのに気づいたのか、

「もう、左京ったら、冗談が通じないんだから」

と笑う。疲れる奴だ。

俺はありさに予告状を見せて、亀島の事を話した。

「あの子、まだ警視庁にいたんだ。ふーん」

と感心しながら予告状を読む。

いつになく真剣な顔で相談する俺とありさ。

こいつもかつては敏腕刑事だったのだ。

昔の血が騒いで来たのだろう。

「只今戻りました」

樹里が帰って来た。今日は居酒屋の当番は姉の璃里（りり）さんだそうだ。

俺は樹里にも予告状の話をした。

「そうなんですか」

相変わらず笑顔全開で応じる樹里。

樹里は五反田氏に連絡を取った。すると、五反田氏は、樹里に全面的に任せると言ってくれた。

これで仕事がやり易くなる。

「待てよ」

俺はふと疑問を持った。

「依頼は警視庁だが、仕事料はだれが払ってくれるんだ?」

「八丁堀、野暮な事は言いっこなしだぜ」

誰のつもりなのか、ありさは気取って言った。

そして予告の日の夜。

俺と樹里とありさは、五反田邸の玄関にいた。

玄関のロビーだけで、俺のアパートくらいある。

でか過ぎるぞ、五反田邸！

警視庁の警官隊は、邸の周囲にまさに蟻の這い出る隙間もないくらいひしめいている。

「これでは盗むどころか、ここに来る事さえできないでしょう」

何故か陣頭指揮を執っている亀島が扇子で顔を扇ぎながら言う。

誰の真似なんだ、お前は？

「オーホホホ！」

またあのＳＭの女王みたいな女の笑い声だ。

「出たな、ドロント！」

亀島は早くも膝が震えている。情けない奴だ。

「あ！」

ドロントだ。奴が玄関の上の天窓から舞い降りて来た。

「ドロントだ！　確保ォ！」

亀島の命令で、警官隊が一斉にドロントに襲いかかる。

「遅い！」

ドロントは素早く動き回り、外に出て行ってしまった。

「俺達も追うぞ！」

俺とありさと樹里も、ドロントを追った。

「あれ？」

後ろからついて来ていたはずの樹里がいない。

「おい、ありさ、樹里はどうした？」

「え？」

俺は蒼ざめ、邸に戻った。

樹里の身に何かあったら、俺は……！

「え？」

俺は仰天した。樹里がシャンデリアを下ろして、運び出そうとしていたのだ。

「ど、どういう事だ？」

「こういう事よ」

樹里の顔がベリベリと剥がれ、あの仮面女の顔が現れた。

「何ィッ！？」

俺とありさは唖然とした。

「シャンデリアは頂くわ、ヘボ探偵さん」

ドロントは怪力だ。シャンデリアを担ぐと、逃げ出した。

「待て、貧乳！」

俺は叫んだ。ドテッと「貧乳」が倒れた。何故かありさも落ち込んでいる。

「私は豊胸なんてしてないわよ……」

「ええい、ややこしい！」

俺は倒れたドロントを取り押さえた。

「げ、人形？」

それは変わり身だった。プシューッとガスが吹き出す。

「うわ！」

俺は慌てて飛びのいたが、強烈な睡魔が襲って来る。

「くそ……」

「じゃあねえ、ヘボ探偵さん」

貧乳が逃げる。しかし、

「どうしたんですか？」

といきなり貧乳の前に樹里が現れた。

「わわ、どうして貴女がここにいるのよ！？　あの睡眠薬は、象だって寝てしまうのよ！」

ドロントは仰天していた。でも樹里は笑顔全開で、

「そうなんですか」

俺とありさは、その隙にドロントを追い詰めた。

「観念しろ、貧乳！」

「うるさいわね！」

ドロントはシャンデリアを諦め、天窓へと飛び上がった。

「今日のところは、引き下がるわ。でも、次はこうはいかないからね！」

貧乳は捨てゼリフを吐き、逃げて行った。しかし、俺は限界だ。

そのまま、倒れてしまった。

気がつくと、事務所のソファの上だった。

「左京、無事シャンデリアを守り切れたわよ」

ありさが嬉しそうに言う。樹里も、

「大丈夫ですか、左京さん？」

と心配そうに俺を見ていた。樹里の顔が俺に近づいて来る。

「わわ、樹里、ありさがいるんだ、こんなところではまずい……」

慌てふためく俺の上に樹里はそのまま倒れこみ、可愛い寝息を立て始めた。

「何よ、今頃睡眠薬が効いて来たの？」

ありさが呆れ顔で言った。

こうして、貧乳、あいや、怪盗ドロントとの対決は、俺達の勝利に終わった。

しかし、翌日の新聞には、

「警視庁特捜班亀島チーム、怪盗を撃退」

と書かれていた。

あのヤロウ。いつか締めてやるぞ、亀島！　覚悟してろ！

樹里ちゃん、入間市に現る

御徒町樹里（おかちまち じゅり）は、居酒屋で働きながら難事件にも挑む探偵助手です。

先日、貧乳の怪盗ドロントが、樹里がメイドをしていた五反田邸のシャンデリアを盗もうとしたのを見事阻止しました。

しかし、手柄は警視庁特捜班の亀島警部補に横取りされ、所長の杉下左京は地団駄踏んで悔しがりました。

「亀島の奴、いつか締めてやる！」

怒りが収まらない左京所長は、事ある毎にそう言います。

「まあまあ、左京。落ち着きなさいって」

幽体離脱助手の宮部ありさが慰めます。

「警視庁はこれからお得意様になるんだから、大事にしないと。貴方も大人なんだから、それくらい理解しなさいよ」

ありさがいつになく真面目に話すので、左京は怖くなってありさから離れました。

「何？」

ありさは菩薩のような顔で左京を見ます。

「お前、まさかあの貧乳の泥棒じゃないだろうな？」

「まさかあ。何なら、確かめる？」

ありさがズンと胸を突き出した時、樹里が帰って来ました。

「お、おう、お帰り、樹里。どうだった、反応は？」

左京は危うくありさの胸の「真偽」を確かめそうになった自分を戒めました。

「今日は入間市まで行けましたが、飯能市までは行けませんでした」

ありさは知らないフリをしています。左京は椅子から転げ落ちそうになって、

「いや、だから、その飯能じゃなくてだな、反応だよ。アクセントが違うだろ？」

「字で書いていただければ、よくわかるのですが」

樹里は笑顔全開です。左京は項垂れました。

「って事は、今日も仕事は無しか……」

「いえ、仕事はあります。入間市で仕事を受けたので、飯能市まで行けなかったのです」

樹里の言葉に、左京は涙ぐんで彼女を抱きしめます。

「ああ、さすが樹里だ！　やっぱりお前は素晴らしい！」

「左京さん、ありささんが見てます」

樹里はニコッとして言いました。左京はハッとして赤くなり、

「おっと、すまん」

と樹里から離れました。

こうして、左京達一行は、埼玉県南西部に位置する入間市へと出かけました。

依頼主は入間市のある町の小学校の校長先生です。

学校で飼っているうさぎが、何者かに殺される事件が起こりました。

「初めまして、所長の杉下左京です」

左京が校長先生に名刺を渡します。

「副所長の宮部ありさです」

ありさが勝手に作った名刺を教頭先生に渡します。教頭先生は三角眼鏡が似合う女性です。

「お前なあ」

左京はありさを睨みますが、何も言いません。

「いやあ、樹里ちゃん、久しぶりだねえ。キャバクラ、潰れたんだってね」

校長先生が樹里に話しかけます。樹里は笑顔全開で、

「そうなんですか」

教頭先生が軽蔑した目を校長先生に向けたままで、左京に、

「校長が以前通いつめていたキャバクラのナンバーワンだったらしいですね？」

「はあ、そうみたいですね」

左京も嫌なことを思い出し、汗を掻いています。

「早速、現場に行きましょうか」

左京が校長先生に言いました。しかし校長先生は樹里と話していて、見向きもしません。

「校長！」

教頭先生が怒鳴ります。校長先生はビクッとして、

「は、はい！」

ようやく我に返った校長先生です。

左京達は、校庭の端にある飼育小屋に行きました。

「網が鋭い刃物で切り裂かれていますね。計画的な犯行です」

左京が虫眼鏡で現場検証をしていると、

「きゃふ、きゃふ！」

とありさが叫びました。

「どうしたんですか、ありささん？」

樹里が驚いて声をかけます。

「ありさ、ふざけているのなら、帰ってもらうぞ！　もちろん、自腹でだ！」

左京の叱責を無視するかのように、ありさは四つん這いになって走り出しました。

まるでうさぎのようです。

「どこへ行くんだ、ありさ！？」

左京は怒り心頭でありさを追います。それを樹里が追いかけます。

校長先生と教頭先生は、呆気に取られて動けないようです。

ありさは素早くて、なかなか追いつけません。

「何考えてるんだ、あいつは？」

左京は日頃の運動不足が祟り、倒れそうです。

「お！」

やっとありさが止まりました。そこは理科室の前です。

「あら、私、何してたのかしら？」

ありさはバカな子のような事を言いました。

「む？」

左京はその時、、理科室の壁に血がついているのに気づきました。

「そういう事か！」

左京は校舎を回り込み、理科室の中に入りました。

「どうしたのよ、左京？」

ありさと樹里が追いかけて来ました。

「犯人はあんただ！」

左京は理科室で実験をしていた白衣の男に言いました。

「何を言ってるんですか？　僕はうさぎなんて殺していませんよ」

白衣の男は理科の先生のようです。彼はシラを切ります。

「バカめ。俺はウサギを殺したなどと、一言も言ってないぞ！」

「うわあ、しまった！」

三文芝居のようなやり取りがあり、理科の先生は左京に組み伏せられました。

「しかも、お前の白衣には、血がついている。それが動かぬ証拠だ！」

左京は思い切り気取って言いました。

こうして、事件は気の毒なくらい呆気なく解決しました。

うさぎを殺した動機は、うさぎを飼育している国語の先生が、犯人の先生を冷たく振ったからでした。

「人間は醜いな、本当に」

左京は事件の残虐性に拳を震わせて言いました。

「私は整形はしてないし、豊胸もしてないわよ」

ありさが意味不明な事を言います。

「帰ろう、樹里」

「はい、左京さん」

左京はボケるありさを完全に無視して、小学校を出ました。

「探偵料は、後日振り込むってさ」

ありさが苦笑いして告げます。

「それにしてもさ、私、途中から記憶ないんだけど、何があったの？」

「それはこっちが訊きたいよ！」

左京は、ありさの謎めいた習性を恐れました。

樹里ちゃん、左京とデートするＰＡＲＴ２

俺は杉下左京。東京の五反田駅前に事務所を構える私立探偵だ。

先日、フィアンセの御徒町樹里（おかちまち　じゅり）が営業で受けて来た小学校の事件で妙な事が起こった。

いや、元々妙な奴だから、妙な事ではないのかも知れないが。

高校時代からの腐れ縁の宮部ありさが、突然奇異な行動をして走り出したのだ。

その結果、俺は犯人を見つける事ができたのだから、所謂「結果オーライ」なのだろう。

それから何度か、俺達は事件の調査の依頼を受けて現場に出向いたが、そのたびにありさはおかしな動きをした。

ありさが奇異な事をするのは、決まって動物が殺された事件の時だった。

生死の境を彷徨った挙句、幽体離脱が自由自在になったありさだから、その辺に何かヒントがあるのかも知れない。

しかし、そんな事を調べても、腹の足しにはならない。

だから無視した。

「でも、詳しく調べれば、事件の調査に役立つかも知れないわよ」

いつの間に来たのか、元同僚の神戸蘭（かんべらん）が言った。

「お前、仕事はどうした？」

俺が嫌味を込めて言うと、

「私達はドロント特捜班になったのよ。だから、ドロントが現れないと暇なの」

蘭は奇妙な事を言った。

「ドロント？　何だ、それ？」

俺はふざけた訳ではなく、真面目に尋ねた。

「あんた、ホントのバカになったの？　この前対決した、あの泥棒よ」

蘭は可哀相な子を見る目を向けて来た

「ああ、貧乳の女か。そうか、ドロントっていう名前だっけ」

呆れ顔の蘭の視線が痛い。

「只今ァ！」

そこへお騒がせ女のありさが帰って来た。

「あれ、蘭、来てたの？　もうしちゃったの？」

俺は飲みかけのコーヒーを吹き出した。

「まだよ」

蘭は爽やかな笑顔で応じている。そういう意味ではないのか？

「な、何だ、ありさ！？　朝からどこへ……」

おかしな話になりそうなので、俺は話題を逸らそうとした。

「左京、今日は事務所を早じまいして、樹里とデートして来なさいよ」

「は？」

蘭にそんな事を言われるとは思わなかった俺は、キョトンとした。

「はい、これ」

ありさから手渡されたのは、東京フレンドランドのナイトツアー招待券だった。

「ありさ、お前……」

只の邪魔臭い女だと思っていたのに。どうしたっていうんだ？

「私も蘭も、あんたに救われたから。ホントはすごく感謝してるんだよ、左京」

ありさは照れ臭そうだ。俺は泣きそうになった。

「ありがとう、二人共……」

俺はこぼれそうになる涙を堪え、礼を言った。

そして、蘭とありさに追い出されるように事務所を出た俺は、樹里に連絡した。

「今夜はフレンドランドでデートしよう、樹里」

「はい、左京さん」

樹里も嬉しそうだ。俺は蘭とありさの優しさに感謝した。

そして、夜になった。

俺と樹里は、久しぶりに二人きりになり、夜の遊園地を満喫した。

「樹里……」

観覧車の中で、俺は樹里を見つめた。

夜景をバックにした樹里は、いつになく色っぽく見えた。

ああ、奇麗だ。以前、群馬の山奥で見かけた女神にそっくりだ。

「樹里、いいか？」

「はい、いいですよ」

俺は樹里の隣に座り、彼女を抱き寄せる。

俺の心臓はＦ－１マシン並みに速くなった。

この状態があまり続くと、死んでしまいそうだ。

樹里は目を閉じた。

おお！　俺を待ってる！　樹里が俺を待ってるぞ！

ゆっくりと俺は樹里に顔を近づけた。

「うん？」

樹里はコテンと俺の肩に倒れて来た。

「え？」

彼女は寝ていた。キスをするために目を閉じたのでなかったのだ。

「ごめんな、樹里、疲れてるんだな」

無理に付きあわせたのかも知れないと思い、樹里に詫びる。

観覧車が下に着いても樹里は起きないので、俺は彼女を背負って、そのままフレンドランドを出た。

このまま、アパートに連れ帰って……。

黒左京が囁いたが、俺はそんな事はしない。

かと言って、この時間では、樹里の実家も皆寝ている。

俺は仕方なく大枚を叩(はた)いてタクシーに乗り、事務所に向かった。

樹里が起きるまでそこで休んで、送るつもりだった。

事務所にもシャワーがあるしな。

黒左京がまた囁く。

うるさい、引っ込め、悪い俺め！

「あれ？」

何故か事務所の明かりが点いたままだ。

ありさめ、消し忘れたな。

給料から電気料を引いてやろう。

そう思って事務所の前まで来ると、何故か中が騒がしい。

「泥棒？」

いや、そうだとしたら、随分間抜けだ。こんなに騒がしかったら、すぐに見つかるぞ。

「誰だ！？」

俺はいきなりドアを開き、中に飛び込んだ。

するとそこでは、蘭とありさが、警察の同僚達を三人集め、どこかの男共と「王様ゲーム」の真っ最中だった。

「てめえら、騙したな！」

俺の怒りに恐れをなしたのか、男共は慌てて逃げ出した。

「お前ら！」

俺は蘭以下五名を説教した。

「ここで騒ぎたいのなら、ちゃんとそう言え！　こそこそするな！」

「はーい」

こいつら、本当に反省してるのか？

「今度は、樹里さんも一緒にどうですか？」

知らないうちに目を覚ました樹里が、蘭の同僚達に誘われていた。

「そうなんですか」

何も知らない樹里は笑顔全開で応じていた。

はああ。蘭とありさを「いい奴」だなんて思った俺がバカだった

……。

樹里ちゃん、怪盗と対決する

御徒町樹里は、居酒屋で働くメイドでしたが、最近居酒屋が出て来ません。

婚約者の杉下左京の探偵事務所での助手がメインの仕事です。

「今度は、メイドのいる探偵事務所で売り出せば？」

金の話になると目を輝かせる左京の元同僚の宮部ありさが言います。

「それじゃ、新手の風俗みたいだろ？　俺は真面目に探偵業をやりたいんだよ」

一瞬、いい考えかもと思った左京でしたが、そんな事はおくびにも出さず、全面否定です。

「杉下さん、お暇ですか？」

嫌味たっぷりの挨拶をしながら、警視庁特捜班の亀島馨がやって来ました。

「何だ、人の手柄を横取りした恥知らずか？　何の用だ？」

左京は根に持つタイプなので、前回の怪盗との対決の一件を亀島が自分の手柄にしたのをまだ怨んでいます。

「あらあ、亀ちゃん、お久ー」

ありさが陽気に話しかけますが、亀島はそれを無視して、

「また、ドロントが予告状を警視庁に送りつけて来ました」

と左京に封筒を差し出します。左京は面倒臭そうな顔をしながらも、興味津々で中身を出します。

「親愛なるヘボ探偵様

明晩、大東京博物館にあるマンモスの牙を頂きに参上致します

世界的美人大泥棒ドロントより愛を込めて」

左京はそれを亀島に突き返し、

「前回の活動費をもらっていない。そんな依頼は受けられん」

と言い放ちました。すると亀島は、

「あれ？　神戸警部に渡して、届けてもらったはずなのですが？」

そっと事務所から逃げ出そうとしている女が一人います。

「おい、ありさ、どこに行く気だ？」

左京がドスの効いた声で尋ねます。ありさはニコッとして、

「と、トイレに……」

「そっちは出入り口だよ。トイレは反対側だ」

左京はありさに近づきます。

「まさか、ネコババしたんじゃないだろうな？」

「ま、まさかあ……」

嫌な汗を大量に掻いているありさです。

「どちらにしても、怪盗ドロントは貴方宛に予告状を送りつけているのです。逃げるのですか、杉下さん？」

亀島が挑発めいた事を言って、話を元に戻します。

「わかったよ。その依頼、受ける」

「ありがとうございます」

亀島はそのまま出て行こうとしましたが、左京は、

「今度は直接俺に報酬を渡してくれ。この事務所には、手癖の悪い奴がいる」

とありさを睨みます。

「わかりました。ではこれで」

亀島は事務所を出て行きました。

「ありさ」

彼と一緒に出て行こうとしたありさを左京が捕まえます。

「ひーん、許して、左京ゥ。私を鞭で叩いていいからあ」

「気色の悪い事を言うな！」

左京はありさをソファに座らせました。

「お前には償い切れない迷惑をかけた事は忘れちゃいないが、それとこれとは話は別だぞ」

「はーい」

ありさはションボリして言いました。

「で、金はどうした？」

左京は真顔で尋ねます。

「蘭と合コンで使っちゃった……」

ありさは、テヘと笑いました。

「この前のか！？」

「うん」

先日、ありさと左京の元同僚の神戸蘭は、三人の女性警官を呼ん

で、どこかの男と事務所で合コンをしていたのです。

「あのなあ……」

左京はガックリとしてしまいました。

「ここの家賃も払わないといけないし、お前の給料も水道光熱費も……」

頭痛がして来た左京は、ソファに倒れてしまいました。

「ごめーん、左京、今度はありさ、頑張るからあ」

ありさがドサクサに紛れて左京に抱きつきました。

左京はショックのあまり、跳ねつける元気もありません。

「只今帰りました」

そこへ樹里が入って来ました。途端に左京はありさを跳ね飛ばし、自分の席に戻ります。

「お、お帰り、樹里。早かったな」

「今日は新聞配達だけですから」

笑顔全開の樹里です。左京はまた項垂れて、

「すまない、樹里。俺に甲斐性がないばっかりに……」

「左京さん、元気を出して下さい」

樹里が心配して左京に声をかけました。

「ありがとう、樹里」

左京は力なく微笑みました。

そして翌日の夜です。

大東京博物館は、例によって蟻の這い出る隙間もないほどの警官隊で溢れています。

「ハッハッハ、これならあの怪盗も、マンモスの牙に近づく事などできませんよ、館長」

また扇子で顔を扇ぎながら、誰の物真似かわからない一人コントをしている亀島です。

「そうですか。それは心強いですな」

館長も扇子で顔を扇いでいます。よくわからないキャラです。

左京は樹里、ありさと共にマンモスの牙の前にいました。

「この前みたいに入れ替られるとまずいから、合言葉を決めておく」

「はい」

樹里は笑顔全開で返事をします。ありさはヘラヘラしていて気持ち悪いです。

「俺が、山、と言ったら、お前達は？」

「まや、です」

樹里が答えます。ありさも、

「まや、よん」

と余計なウインクまで付けて答えました。

「よし、忘れるなよ」

そんな事を言っていると、

「ドロントだあ！」

と叫び声がしました。見上げると、天窓にドロントが立っていました。

「オーホッホ！　マンモスの牙、頂きに来たわよ、ヘボ探偵さん」

ドロントは天窓から飛び降ります。

「確保ーッ！」

亀島の号令で、警官隊が殺到します。

「遅いわよ！」

ドロントはサッと警官隊をかわし、逃げ回ります。

「追わなくていいの、左京？」

ありさが動かない左京に尋ねます。

「学習しろよ、ありさ。あれは囮だ。あの貧乳は、まだこの中にいる！」

見回すと、さっきまでいた館長がいません。

「館長がドロントだ！」

左京が辺りを探します。するとマンモスの牙の向こうから館長が現れました。

「ありさ、捕まえるぞ！」

「あいよ、八丁堀！」

また意味不明な事を言い出すありさです。

「甘いぞ、ドロント！」

「ひいい！」

館長は左京とありさに組み伏せられました。

「私はドロントじゃない！　トイレに行っていただけだ！」

「えええええ！？」

ハッとして亀島を見ると、彼はせっせとマンモスの牙を梱包して、宅配便の送り状を貼っています。

「そっちか！」

慌てて走り出す左京とありさ。

樹里はどこに行ったのでしょう？

「フフフ……。バカな連中だわ。私の部下はたくさんいるのよ」

館長が言いました。彼の正体はオ〇マだったのでしょうか？

「違うわよ！」

地の文に突っ込みを入れる人第二弾です。

「私が本当のドロント。一度容疑が晴れた者は、対象から外れるものなのよ」

ドロントは正体を現し、得意満面にない胸を張ります。

「そうなんですか」

そこへいきなり現れる樹里です。

「ヒャーッ！」

ドロントは仮面が取れそうになるほど驚きました。

「ど、どうして貴女がここにいるのよ！？」

「トイレから戻ったからです」

樹里は笑顔全開です。ドロントは脱力しました。

「そういう事を訊いているんじゃないわよ……」

左京達が騒ぎを聞きつけて戻って来ました。

「じゃあねえ、ヘボ探偵さん。マンモスの牙は、確かに頂いたわよ」

ドロントはビュンとバネ仕掛けの脱出装置で天井へと舞い上がりました。

「ハッハッハ、引っかかったな、貧乳！　あの牙は偽物だ。本物は、俺の事務所に隠してある」

左京がここ一番と見得を切って言い返します。

するとドロントはニヤリとして、携帯を取り出し、

「聞いた？　本物は、杉下左京の探偵事務所よ」

「何だと！？」

左京は自分が早合点したのを思い知りました。

「今度こそ、本当にマンモスの牙は頂くわね、ヘボ探偵さん」

ドロントは天窓から逃げて行きました。

「ううう……。失敗だ……。騙したと思っていたら、騙されていた……」

左京は項垂れてしまいました。

「ああん、可哀想な左京」

ありさが左京を巨乳に埋もれさせて慰めます。

「ぐおおお！」

左京は息ができなくなってもがきました。

ところがです。

「えええ！？　牙がどこにもない？　騙されたの、私達？」

ドロントも牙を手に入れられず、

「杉下左京め、やるわね」

と悔しがっていました。

牙はどこに行ってしまったのでしょうか？

落ち込む左京をありさと樹里が慰めます。

「毎度、トラネコハルナの魔球便です」

と宅配の人がやって来ました。大きな荷物を抱えています。

「えーと、杉下左京様より、お届け物です」

「はい？」

左京は素っ頓狂な声で応じました。

「はい、ここに受け取りのサインを」

左京の代わりにありさがします。

「毎度！」

宅配の人は笑顔で去って行きました。

「なんだ、これ？」

一同が集まり、箱の中身に注目します。

中から出てきたのは、マンモスの牙でした。

「はああ！？」

左京以下、仰天しています。

「ど、どういう事だ？」

すると樹里が、

「良かったです、届いたのですね」

「え？　どういう事だ、樹里？」

左京は呆然として樹里を見ました。樹里は笑顔全開で、

「左京さんが牙を忘れて行ってしまったので、こちらに送ったんです。大き過ぎて、私が持って来られなかったので」

「……」

左京は気を失いそうなくらい驚きました。

こうしてまた、樹里達はドロントに勝ったのでした。

しかし、翌日の新聞には、

「警視庁特捜班、また怪盗を撃退！」

と記事が掲載されたのでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京と婚前旅行にゆく

俺は杉下左京。東京五反田の駅前に事務所を構える探偵だ。

この前、貧乳の怪盗（すまん、名前を忘れた）を撃退し、警視庁からわずかばかりの謝礼をもらった。

「みんなで骨休めに行かないか？」

俺は宮部ありさと樹里を誘って、群馬県の湖へ出かける事にした。

しかし、当日になって、

「ごめん、用事できた」

とありさがドタキャンして来た。

仕方なく、俺は樹里と二人で群馬県大利根郡の士似神村（しにがみむら）に車で出かけた。

何となく、嫌な思い出がある場所だが、例の雑貨屋に寄らなければいいだけだ。

考えてみると、樹里と二人で旅行なんて初めてだ。

これって、もしかして、「婚前旅行」？

急にドキドキして来たぞ。

ふと助手席を見ると、樹里は寝ていた。

寝顔も相変わらず可愛い。

俺は一人ニヤつきながら、高速を走った。

そんな状態だったからだろうか、俺は昔の事を思い出していた。

まだ俺が警視庁の捜査一課にいた頃の事だ。

「所轄に兇悪犯が立て籠もった？」

耳を疑うような情報が入った。

しかもそこは、西多摩警察。ありさが出向したところだ。

情報を更に収集して行くと、そのありさが人質らしい。

「くそ！」

俺は机を叩いて叫んだ。

「落ち着いて、左京。今狙撃班が編成されたわ。すぐにありさは救出されるわよ」

その頃、本気で付き合っていた神戸蘭が声をかけてくれた。

蘭。あの頃は本当に奇麗だった。今は見る影もないが。

「そうだな」

俺は蘭を見て答えた。蘭は俺を抱きしめて、

「ありさは大丈夫。あの子は悪運だけは強いんだから」

「そうかもな」

やがて警視庁選りすぐりの狙撃チームが編成され、西多摩署に急行した。

俺達捜査一課もそれぞれ車に乗り、現場へと急ぐ。

「ありさ……」

助手席の蘭が、

「左京、貴方、まだありさの事を？」

「ま、まさか。違うって」

俺は慌てて否定した。何しろ蘭の右手が拳銃にかかっていたからな。

そして現場に到着。辺りは機動隊だらけだ。そしてそれを遠巻きにマスコミが見ている。

事件は大々的に取り上げられ、警視総監の進退問題まで浮上した。

警察署が犯罪者に乗っ取られたのだ。言い訳のしようもない大失態だ。

犯人は窓ガラスを割り、ありさを引き摺るようにして顔を出した。

「てめえら、それ以上近づくと、この巨乳の命はねえぞ！」

犯人は錯乱しているらしく、ありさの事を「巨乳」と呼んでいた。

「私は大丈夫です！　狙撃して下さい！」

ありさは健気にもそう叫んだ。

「うるせえよ、おっぱい姉ちゃん！　黙ってろ！」

間違いない。犯人は「おっぱい星人」だ。

周囲を見渡すと、あちこちから狙撃手が犯人を狙っていた。

しかしありさが近過ぎて、撃てないでいる。

このまま只無駄に時間を費やすのはまずい。

犯人のストレスも溜まり、ありさの疲労もピークになる。

俺は決断し、犯人に気づかれないように近づいた。

「左京！」

蘭が慌てて俺を止めようとしたが、俺はそれより早く走り出していた。

犯人は狙撃手が気になっているらしく、俺には気づいていない。

俺は絶対に外さないと確信が持てる距離まで接近し、拳銃を構えた。

そして、撃った。

「うわっ！」

弾は見事に犯人の肩を撃ち抜いた。

「きゃっ！」

しかし、その拍子に犯人の銃が暴発し、ありさを撃った。

「ありさ！」

俺はすぐに駆け寄り、まだ動こうとする犯人を蹴飛ばしてから、ありさを抱き起こした。

「ありさーっ！」

俺は絶叫した。

「千円です」

ふと気づくと、俺は大利根インターの料金所にいた。

「妙な事を思い出したな」

俺はまだ寝ている樹里をチラッと見て、フッと笑った。

あの時は、本当にありさは死んだと思った。

犯人は混乱に乗じて逃走し、俺は謹慎処分になった。

しかし、危篤状態だったありさが死んだと聞き、俺は病院を飛び出し、無断で犯人を捜した。

遂に犯人を追い詰め、逮捕したが、俺を待っていたのは捜査一課からの異動だった。

もうどうでもよくなった俺は、蘭に罵られて、別れを告げられても、何も言わなかった。

そして、俺は閑職である特別捜査班に移った。

しかし、だからこそ、樹里と出会えたのだ。

人生とは不思議なものだな。

その上、死んだと思っていたありさも生きていたんだからな。

俺は前回の教訓を生かし、手前のスタンドでガソリンを給油し、

例の雑貨屋を通過した。

ざまあ見ろ、強欲夫婦め。

心の中でガッツポーズだ。

見えて来た。女神湖だ。

何だか妙に懐かしい。

「樹里、着いたよ」

「はい……」

樹里はムクリと起きた。

俺は車を停め、外に出た。

あの時の情景が甦る。

あれは本当に女神だったのか？

「左京さん」

樹里が近づいて来た。

いや。女神はここにいる。

俺は笑顔の樹里に微笑み返した。

樹里ちゃん、左京と婚前旅行にゆくＰＡＲＴ２

御徒町樹里は探偵事務所に勤めているメイドです。

最近、姉の璃里と母親の由里が居酒屋勤務をこなし、樹里は喫茶店と新聞配達もこなしています。

稼ぎの少ない男と婚約した彼女は哀れでした。

「何だか、悪口を言われた気がする」

東京の五反田駅前で探偵事務所を開業している元警視庁の警部である杉下左京は、ムスッとして布団から出ました。

彼は昨日、婚約者の樹里と群馬県の大利根郡に来ました。

本当は職場の旅行だったのですが、もう一人の所員の宮部ありさがドタキャンしたのです。

ありさが来るはずだったので、旅館の予約は二人部屋一つと一人部屋一つでした。

彼女が来ない事がわかり、キャンセルの電話をしたら、

「当日の場合はキャンセル料は宿泊料の百パーセント頂きます」

と言われました。

「だったらそのままで！」

結局左京は、樹里と別々の部屋に泊まったのです。

「私は左京さんと一緒で構いませんよ」

樹里は笑顔全開で言いましたが、

「いや、一人部屋をキャンセルしても、宿泊料が変わらないのだから、もったいないよ」

左京は血の涙を心の中で流し、樹里に言いました。

「そうなんですか」

樹里が寂しそうに見えたのは、左京のいかがわしい邪な心のせいでしょうか？

「誰がいかがわしい邪な心だ！？」

左京が地の文に突っ込みます。そろそろこの方式も呆れられる頃です。

（しかし、樹里と二人で旅行に来たのに、別々の部屋なんてなあ……）

邪さを否定し切れない左京です。

朝食は樹里の部屋で一緒です。左京はスキップして彼女の部屋に行きました。

「あれ？」

樹里は部屋にいませんでした。食事の用意はまだのようです。

「どこへ行ったんだろう？」

その時、ふと左京の頭にある事が浮かびました。

（ここは源泉かけ流しの温泉宿だ。しかも、大浴場は二十四時間入浴可能。もしかして、樹里は朝風呂か？）

そしてもう一つ思い出します。

（大浴場は、こ、こ、こ、混浴！）

すでに鼻血がでそうな左京です。

（いかん！　そんな事考えたらいかん！）

必死で頭から妄想を追い出しながらも、悲しい男のサガには勝てず、左京は大浴場に行ってしまいました。

「はあ」

彼は湯船に浸かりながら、自分の邪さに溜息を吐きました。

更に残念な事に、お風呂には樹里はおろか、誰もいませんでした。

（ホッとしたような、寂しいような……）

左京は身体を洗おうと湯船から立ち上がりました。

カコーン。

その時、女性用の脱衣所から人影が近づいて来ました。

「い！」

左京は慌てて湯船に身を沈めます。

（お、女？　まさか、樹里？）

心臓がハツカネズミ並みのスピードでビートを刻みます。

（死ぬ……。このままだと、死ぬ……）

左京は上せてしまいそうです。

女性は左京がいる事を知らないのか、それとも何とも思っていないのか、かかり湯をすると、湯船に入りました。

「……」

左京は女性に背を向け、ゆっくりと離れます。

気のせいか、女性が距離を詰めて来る感じです。

（ウソだろ？）

左京は怖くなりました。

（おかしな女だったら、どうしよう？）

「わーい、混浴ゥッ！」

聞いた事がある声がしました。

「え？」

ムニュウッと何かが背中に押し付けられます。

「左京と混浴、嬉しいなあ！」

それはありさでした。ある意味確かに「おかしな女」です。左京は混乱しながらも、

「あ、ありさ、お前、来られないんじゃなかったのかよ！？」

「合コンがあったんだけどォ、早めに終わったから、来ちゃった！」

ありさが左京に背中から抱きつきます。

「って、ありさ、お前何してるんだ！？」

左京はそのまま鼻血を吹き出してお湯の中に沈んでしまいました。

「ああん、左京、しっかりして！」

ありさが叫びました。

一方樹里は、左京が部屋に来た時はすでに朝食を済ませた後で、今はロビーのソファに座っています。

左京の朝食は左京の部屋に運ばれたのです。左京とは入れ違いでした。

それを知らない樹里は朝食をすませてしまったのです。

左京の部屋には、誰も食べないかも知れない朝食が用意されていました。

「左京さん、遅いですね」

樹里はニコニコしたまま、現在湯船に沈んでいる左京を待っていました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ドロントと対決する

御徒町樹里は居酒屋にはほとんど勤務していない新聞配達メイドです。

新聞販売所の所長が、

「是非、メイド服で配達してくれ！　そしたら、時給を今の二倍出そう！」

と悪魔の囁きをしました。

樹里は婚約者である杉下左京の探偵事務所の経営がうまくいっていないので、快諾しました。

そしてその販売所はその地域で一番店になりました。

更にその噂を聞きつけた大学生や新卒社会人達が、次々に樹里が新聞を配達している区域に引っ越して来ました。

不動産屋さんも大喜びで、

「是非、ウチのイメージガールになって下さい」

と頼みに来ました。

樹里の可愛さを商売にするのを極力避けていた左京も、事務所の大家さん絡みでは断りきれず、家賃を半額にするという条件で承諾しました。

こうして樹里のポスターが不動産屋さんに張り出され、樹里の顔はどんどん知られて行きました。

その効果は居酒屋にも喫茶店にも波及し、樹里の時給が上がります。

こうして、逆格差婚になりそうな気配を感じた左京は、酷く落ち込んでいました。

「左京、元気出しなさいよお」

この前、群馬県の温泉旅館で「混浴」した宮部ありさが慰めます。

「俺は甲斐性なしだ……」

左京は更に落ち込みます。

「それはそうなんだけどね」

ありさもつい同意してしまいます。

「ううう……」

「あああ、ごめーん、左京ゥ！　許してえ」

ありさは机に顔を埋める左京を後ろから抱きしめます。

「相変わらず、暇そうですねえ、杉下さん」

そこへ警視庁特捜班の亀島警部補が現れました。

「てめえ、この前も自分の手柄にしやがって！」

左京はありさを振り払って、亀島に詰め寄ります。

「まあまあ、落ち着いて、杉下さん。また、ドロントから予告状が届いたんですよ」

すると杉下は、

「誰だ、それ？」

といつもの調子に戻りました。

もうすっかり慣れっこの亀島とありさはこける事なく、話は進みます。

「ドロントは、有名作家の家から世界最大のダイヤを頂くと予告して来ました」

「有名作家？　誰だ？」

すると亀島は、

「どうせ杉下さんは知らないでしょうが、今をときめく女流作家の西園寺麗華さんですよ」

「さいおんじれいか？　どこかで聞いた事があるな……」

左京は、以前悪霊退散のお札を購入した霊能者と勘違いしているようです。

西園寺麗華。一体どんな性格なのでしょう？

「へえ、珍しいですね。世間ずれした杉下さんが、西園寺先生をご存知だなんて」

亀島は明らかに左京をバカにした目で言いました。

「亀島君、今度手柄を横取りしたら、あーんな事や、そーんな事を刑事部長にばらすわよ」

ありさが言いました。すると亀島は初めてありさに気づいたように彼女を見て、

「あれ？　貴女はどなたでしたっけ？」

と強烈な嫌味を言います。

「何なのよ、あんたは！？」

掴みかかろうとするありさを制して、左京は、

「とにかく、協力はする。だが、今度マスコミにウソ吐いたら、その時は許さんぞ」

と亀島を睨みました。亀島はフッと笑って、

「わかりました。これは予告状のコピーです」

左京にコピーを渡すと、亀島は事務所を出て行きました。

「左京、気をつけてね。あいつ、また手柄を横取りするつもりよ」

ありさはプリプリしながら言いました。左京は自分の席に戻り、

「ありさ、お前、亀島が嫌いなのか？」

「ええ。大嫌いよ！」

ありさは大声で言い放ちます。

「そうか」

左京が急に立ち上がったので、ありさは殺されると思いました。

「初めてお前と意見が一致したな」

左京は嬉しそうにありさの手を握りました。

「ダメよん、左京。まだ外は明るいわ……」

「アホか！」

一年中発情しているありさに呆れる左京です。

そして予告の日の夜です。

「凄いお屋敷ですね」

樹里が西園寺邸を見渡して言いました。とんでもなく広いです。

確かに、東京ドームと同じ敷地面積のお屋敷は凄いですが、樹里が勤めていた五反田六郎邸の方がずっと大きいです。

「ようこそいらっしゃいました。私が西園寺麗華です」

名前から想像していた左京は、ガッカリしました。

若いセクシー系の女性を思い描いていたのですが、現れたのは、

「前世でどんな悪い事をしたの？」

と訊きたくなるような姿の中年女性です。一番的確な表現をすれば、

「使い古した酒樽」です。

「どうぞ、こちらへ」

西園寺先生の案内で、左京達はダイヤが保管されている地下室に行きました。

「こそ泥は上から現れると聞きまして、急遽地下室に移しました。ここなら安全ですわ」

みょうに艶っぽい目で左京を見る西園寺先生に気づき、

「左京、気をつけてよ。あの先生、貴方を狙ってるわ」

とありさが小声で言いました。

「まさか」

鈍感な左京はあっさり否定しました。

「天井は分厚いコンクリート、扉は頑丈な鋼鉄製。これなら、あの貧乳も忍び込めませんね」

左京が言うと、西園寺先生は微笑んで、

「そうでしょう。さすが、杉下先生、素敵ですわ」

とウィンクしました。左京は全身の毛穴が身体から飛び立つのではないかと思うくらい、ゾッとしました。

左京は硬質プラスチックのケースに納められたダイヤを見ました。

（樹里にこれくらいのダイヤをプレゼントできたらなあ……）

妄想の世界に浸っていると、置いてきぼりにされていました。

左京達は地下室の入口の前に立ち、警戒に当たります。

ありさは屋敷の周囲に不審な人物がいないか見回りに行きました。

例によって警官隊が屋敷の庭を埋め尽くさんばかりに立っていま

す。

「わっはっは、さすがですね、先生。地下室にダイヤを保管するなんて。これではあのドロントも手も足も出ませんよ」

「オホホホ、ご謙遜ですわね、刑事さん。地下室に移すというのは、貴方の提案じゃございませんか」

西園寺先生のその言葉に、左京はさっきとは違った意味でゾッとしました。

「やられた！」

彼は地下室への階段を駆け下りました。

「どうしたんです、杉下さん？」

亀島が追いかけます。

「バカヤロウ、まだわからないのか！？　貧乳はお前に変装して、西園寺先生にダイヤを地下室に移すように言ったんだよ！　だとしたら、俺達は完全に貧乳の罠に嵌ったって事になる！」

「ああ！」

亀島もようやく事件の真相に気づいたようです。

「くそ、鍵を締めたのか！？」

地下室の扉は開きません。そこへ酒樽、いえ、西園寺先生が来ま

した。

「ああ、先生、鍵を開けて下さい」

「はいはい」

西園寺先生は、足か腕かわからないような物体で鍵を持ち、扉を開きました。

「ああ！」

するとまさに、ドロントがダイヤを袋に詰めているところです。

「あーら、早かったわね、ヘボ探偵さん」

ドロントはニヤッとして言いました。

「私のダイヤがァッ！」

西園寺先生が酒樽、いや、身体を震わせて叫びます。

「袋のネズミだぞ、ドロント！」

左京と亀島が詰め寄ります。

「そうかしら？」

ドロントはケースの裏側に行くと、スッと消えました。

「何だと！？」

左京が駆けつけると、そこには細い女性がやっと通れるくらいの穴が開いていました。

「くそう、貧乳め、自分の体型を利用したのか!?」

「うるさいわよ！　悔しかったら、追いかけて来なさいよ！」

しかし、穴のサイズは左京にも亀島にも、もちろん西園寺先生にも無理です。

「ありさ！」

左京が呼ぶと、

「ああん、胸がつっかえて通れないィ」

ありさはすでに挑戦していました。

「無理か……」

左京はがっかりしていますが、何故か亀島はありさのつっかえた胸を凝視しています。

「本物ですか、それ？」

「本物よ！」

亀島のセクハラ発言に切れるありさです。

「樹里は通れないか？」

しかし、樹里は地下室に降りて来ていません。

「彼女も無理よお。あの子、悔しいけど、私よりおっぱい大きいのよね」

「え？」

思わず反応してしまう左京と亀島です。

その頃、貧乳、いや、ドロントは部下達が掘った抜け穴を走り、出口へと向かっていました。

「どうよ、この作戦。さっすが、私。自分で自分を誉めたいわ！」

ドロントは出口に辿りつき、縦穴を進みます。

「あ、ありがとう」

穴を出たところでドロントは手を貸してもらったので、その人にお礼を言いながら地上に出ました。

そこは西園寺邸のすぐ脇にある工事現場の一角です。

「揃いも揃ってバカばっかりね。おかしくて仕方がないわ」

ドロントは西園寺邸を見て呟きます。

「そうなんですか」

ドロントはギョッとして声の主を見ます。

そこには、笑顔全開の樹里が立っていました。

「ま、また貴女？　どうしてここにいるのよ！？」

ドロントはバッと樹里から飛びのいて尋ねます。

「歩いて来たからです」

樹里は相変わらず危険球連発です。

「そんな事を訊いてるんじゃないわよ！　とにかく、さよなら！」

ドロントはベルトに仕込んだハンググライダーを出して、空へと飛び立ちます。

「さようなら！」

樹里が笑顔で見送ります。

「あの子、どういう子？　バカなのか利口なのか、全然わからない……」

そして気づきます。

「あー！　ダイヤを入れた袋が！」

さっき、穴から出る時に差し出された手を部下の手と思い、つい渡してしまったのです。

ですから、ダイヤの入った袋は樹里が持っています。

「今度こそ、負けないわよォ！」

ドロントはそう叫び、夜の闇に消えました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

こうして、西園寺邸のダイヤは無事西園寺先生の手に戻りました。

そして翌日。

朝刊には、

「杉下左京探偵、怪盗を撃退するも捕まえられず」

と大きく記事が載っていました。

「あのヤロウ……」

左京は亀島の悪知恵に激怒し、新聞を丸めてゴミ箱に捨ててしまいました。

樹里ちゃん、新聞の集金にゆく

御徒町樹里（おかちまち じゅり）は、新聞配達をするメイドです。

結構無防備なので、携帯のカメラやデジカメで撮影され、ネットで公開されています。

動画も配信されていて、有名なサイトでは一日五百万アクセスを記録したそうです。

でも樹里はインターネットをしないので、全然それを知りません。

しかも、

「樹里ちゃん、頑張って！」

と声をかけられると、

「ありがとうございます」

とわざわざ自転車を降りて深々とお辞儀をして挨拶を返します。

マニアは悶絶するそうです。

そんなある日。

いつものように朝刊の配達を終えた樹里が販売所に戻りました。

すると所長が、

「御徒町さん、頼みがあるんだけど」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で所長を見ます。

所長は奥さんも高校生の娘もいる中年のおっさんですが、樹里の笑顔についニヤけてしまいます。

「実は、購読料を滞納している人がいるんだけど、その人が、御徒町さんが集金に来てくれれば払うって言ってるんだ」

滅茶苦茶な要望です。

「そうなんですか」

でも樹里は笑顔全開です。

「悪いんだけど、集金に行ってもらえないかな?」

「はい、わかりました」

樹里は全く躊躇する事なく答えました。

所長はホッとしたのですが、

「何かあると困るから、誰かと一緒に行った方がいいよ」

「はい」

樹里は集金袋と領収書を渡され、早速その滞納者のところに行く事にしました。

そして彼女は、婚約者である名探偵の杉下左京に連絡します。

「どうしたんだ?」

まだ起きたばかりの左京は樹里に何かあったと思い、大慌てで携帯に出ました。

樹里は事情を説明しました。

「よし、わかった。三十分でそっちに行く。待っててくれ」

「はい」

樹里は携帯を切り、左京を待ちました。

まもなく左京が欠伸をしながら車で現れました。

「乗れ。そいつのところに行こう」

「はい」

左京は樹里を乗せると、滞納者が住むアパートに向かいました。

「あれ？　ここは……」

左京はそのアパートに見覚えがあります。

「どうしてだ？　俺はここを知っている……」

左京は樹里に一人でドアの前に立つように指示し、自分は柱の陰に隠れます。

「何で知ってるんだ？」

彼はふと目の前にある郵便受けを見ました。

アパートの住人全員のものがズラッと並んでいるタイプで、それぞれに鍵が付いています。

「加藤真澄？　聞いた事があるような名前だな？」

普通の人ならこの時点で気づきますが、人の顔と氏名を忘れる天才の左京は気づきません。

「おはようございます。新聞の集金に来ました」

樹里が滞納者の部屋に声をかけました。

「お待ちしてました！　汚いところですが、上がって下さい、樹里さん！」

ドアを開いて現れたのは、あの懐かしい脱獄囚顔の加藤警部でし

た。

「ああ、てめえはバ加藤！　何でこんなところにいるんだよ!?」

左京は樹里と加藤警部の間に立ち塞がりました。

「す、杉下!?　お前も来てたのか!?」

加藤警部は仰天しました。

「お前、真澄って言う名前なのか?」

左京が笑いを噛み殺して尋ねます。

「わ、悪いか!?」

加藤警部は顔を赤らめて言い返します。

「わはははは、似合わねえ！　笑えるゥッ！」

左京は大笑いしています。

「う、うるさい！」

加藤警部は樹里を見て、

「滞納分をお支払しますので、お茶でも飲んで行って下さい」

「はい」

大笑いしていた左京ですが、樹里があっさりと加藤警部の部屋に入ってしまったので、

「ああ、待て、バ加藤！」

と止めに入りましたが、ドアはバタンと閉じられ、鍵もかけられてしまいました。

「樹里、大丈夫か！？　何もされていないか！？」

左京はドンドンとドアを叩いて叫びます。

「うるさいね、あんた！　警察を呼ぶよ！」

隣の部屋から、おばさんが顔を出します。

「呼びたきゃ呼べ！」

左京がそう言うと、おばさんは本当に警察を呼びました。

実はそのアパートは独身の警察官がたくさん入居していたのです。

左京も以前住んでいた事があったのですが、全く覚えていませんでした。忘れん坊過ぎです。

「不審者め！」

左京は取り押さえられ、近くの交番へ連れて行かれました。

「樹里ーッ！」

彼の叫びが辺りに響きました。

一方、加藤警部の部屋に入った樹里は、座布団の上にチョコンと座り、加藤警部が淹れてくれた紅茶を飲んでいました。

「ど、どうですか、美味しいですか？」

「はい、美味しいです」

樹里の笑顔に顔を赤らめ、加藤警部は恥ずかしそうに頭を掻きました。

「す、すみませんでした、お呼び立てしてしまって」

加藤警部は樹里に新聞代を渡します。

「ありがとうございます。ところで、契約の更新はいかがですか？」

「します、します！　五年くらいします！」

加藤警部は興奮して言いました。

「そんなにはできないのです。一年でいいですか？」

「はい、それでいいです！」

すると樹里は集金袋から、写真を取り出し、

「今一年契約をして下さった方には、もれなく私の写真を差し上げています」

と加藤警部に渡しました。

「おお！」

樹里のグラビア時代のボツ写真でした。どこまでも商売上手な販売所です。

それは目を瞑ってしまっているので、使われなかったものです。

「おおおお！」

加藤警部は雄叫びを上げました。

「では、失礼します。ありがとうございました」

樹里は笑顔で挨拶し、部屋を出て行きました。

「じゅ、樹里さん……」

加藤警部は、その写真と生の樹里を見たので、失神してしまいました。

「左京さん？」

アパートの外に左京がいないので、樹里は不思議に思い、携帯に連絡します。

でも、電源が切れていて、左京は出ません。

「左京さん、どこに行ってしまったのでしょう?」

左京が交番から解放されたのは、それから二時間後でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、人探しをする

御徒町樹里は新聞配達がメインの仕事になって来たメイドです。

彼女が配達を担当している区域は「メイドさんが新聞を配るスポット」として情報誌に掲載され、只今アパートの空きが一つもありません。

暴力団の資金源になるのではと警戒されるほど、不動産屋さんが繁盛しています。

でも樹里はそんな事情を全く知らないまま、新聞を笑顔全開で配達しています。

そんなある日の事でした。

樹里の婚約者である名探偵の杉下左京の事務所に、彼の元同僚の加藤真澄警部が来ました。

「てめえ、何の用だ、バ加藤!?」

左京は加藤警部を見るといきなり喧嘩腰に尋ねました。

「喧嘩をしに来たんじゃない。依頼をしたい」

加藤警部は、その脱獄囚顔を神妙な表情にして言いました。

「わかった。座れ」

左京は加藤警部とソファで向かい合います。

「じ、実は、初恋の人を見かけた」

「へ？」

左京はこれ以上ないというくらい驚いた顔をしました。

「初恋？　相手は人間か？」

「当たり前だ！」

加藤警部はムッとして言い返します。

「彼女は死んだと思っていた。でも生きていたんだ」

左京の背中に悪寒が走ります。

（まさか……）

「たっだいまあ！」

バカ陽気に、所員である宮部ありさが入って来ました。

「おお！」

加藤警部が驚いて立ち上がります。ありさも加藤警部を見て驚きます。

「どちら様ですか？」

ありさの強烈なボケに左京は頭からこけました。

「お前は宮部ありさだな！？　十年前に貸した千円、返してもらおうか」

小さい男だ。左京は心の中で加藤警部を笑いました。

「何の事でしょう？　私にはさっぱりわかりません」

ありさはとぼけて出て行こうとしましたが、

「只今帰りました」

と入って来た樹里のせいで、脱出に失敗しました。

「ああ、バ加藤さん、いらっしゃいませ」

樹里が笑顔全開で言います。加藤警部は先日の一件を思い出し、

「バ加藤」を訂正するゆとりもなく、照れてしまいます。

「お、お邪魔してます」

また左京が不機嫌になりました。

「サッサと用件を言え、バ加藤！」

加藤警部は左京を見て、

「それで、初恋の人を探して欲しいんだ」

「わかった。で、手がかりは？」

左京はあくまでぶっきら棒です。

「これだ。警視庁内の監視カメラに写っていたものだ」

加藤警部は内ポケットから写真を一枚取り出しました。

左京はその写真を見ました。

「おい、この女性は……」

左京もその女性を知っているのでしょうか？　加藤警部は左京を見て、

「そうだ。お前も良く知っている」

「そうなのか？　全く見覚えがない」

相変わらず人の顔を忘れる名人です。

「一度病院で診てもらえ！」

加藤警部は毒づいてから、

「新城瑠奈（しんじょうるな）。俺達と同期の元鑑識課員だ」

「そうか、新城瑠奈か。やっぱり見覚えがないし、名前も知らない」

左京はむしろ得意そうに言いました。加藤警部はムッとしましたが、

「とにかく、彼女がどこにいるのか知りたいんだ。頼む」

「そんな事なら、お前の方が得意だろ？　本庁の監視カメラの画像を解析して、Ｎシステム（顔認識システム）を使えば、すぐにわかるんじゃないのか？」

左京は呆れ気味に言いました。しかし加藤警部は、

「そんな事、私用で使えるか！　お前と一緒にするな！」

「あのね、加藤君、さっきの話なんだけどさあ……」

ありさが媚びるような笑顔で加藤警部に近づきます。

「今大事な話の最中なんだ、静かにしてくれ！」

加藤警部はありさにイラつき、怒鳴りました。

「何よお、怒鳴る事ないでしょ！　フンだ！」

ありさは怒って出て行ってしまいました。

「探し出して、どうするつもりだ、加藤？」

左京が意地悪な質問をします。

「謝りたいんだ。彼女に」

「怖い顔でごめんと？」

左京が茶化します。

「違う！　何でそんな事のために探してもらわなければならないんだ！」

加藤警部はぶち切れ寸前です。

「はい」

樹里がいきなり携帯で話し始め、事務所を出て行きました。

「どうした、樹里？」

左京の呼びかけにも答えず、樹里は行ってしまいました。

「全く、どいつもこいつも……」

左京は加藤警部を見て、

「手がかりがこれだけじゃあ、探しようがないぞ。無理だな」

「そこを何とか……」

加藤警部にすがりつかれて、左京は寒気がしました。

「俺に触るな、気色悪い！　無理なものは無理だよ！」

二人はしばらく押し問答のように言い合いました。

「だから、どう足掻いても無理だ！」

左京が業を煮やして加藤警部を振り払いました。

加藤警部はガックリと項垂れ、立ち上がりました。

「わかった。騒がせたな」

彼は写真を内ポケットにしまうと、事務所を出て行こうとしました。

「加藤さん」

樹里が戻って来ました。

「は、はい」

初恋の人に会いたいと言っていたくせに、樹里には鼻の下を伸ばすエロオヤジです。

「お待たせしました。お探しの方をお連れしました」

「え？」

加藤警部は驚いて樹里の後ろに立っている女性を見ました。

そこにいたのは、写真の女性、新城瑠奈でした。

「加藤君、お久しぶり」

瑠奈はニコッとして言いました。

「私を探していたんですってね」

「あ、ああ。どうしてそれを？」

すると瑠奈の後ろからありさが現れ、

「瑠奈は私の親友よ。だから、居場所を知っているの」

「へ？」

加藤警部は間抜け面になりました。左京が、

「どうしてそれをさっき言わないんだ！？」

するとありさはムッとして、

「言おうとしたら、この脱獄犯が怒鳴ったんでしょ！」

加藤警部はハッとしてありさを見ました。

「す、すまない、宮部。それと、ありがとう」

「いいわよ。さ、瑠奈と話したい事があるんでしょ。ここじゃ何だから、喫茶店にでも行きなさいよ」

ありさは愛想良く二人を送り出しました。

「これで借りた千円はチャラよ」

「ああ」

加藤警部と瑠奈は微笑み合いながら事務所を出て行きました。

「はーい、これにて一件落着ね」

ありさが嬉しそうに言います。

「そうなんですか」

樹里も嬉しそうに応じます。

「バカヤロウ、仕事をふいにしやがって！」

左京がありさに詰め寄ります。

「あはは、左京、ありさの可愛さに免じて、許してえ」

ありさはクネクネして詫びます。

「気色悪いからやめろ」

左京はありさから離れました。

「でも、たかが千円のために、強欲なお前が動くはずがないよな？」

左京の会心の突っ込みにギクッとするありさです。

「本当はどういう事なのか、きっちり説明してもらおうか、ありさ？」

左京はありさを睨みつけました。ありさは苦笑いして、

「加藤君、記憶違いしてたのよね。私が彼から借りたのは十万円なの。だから、誤魔化そうと思って、瑠奈を連れて来たの」

左京は唖然としました。

「お前なあ……」

「いいとこあるでしょ、私って。テヘ！」

可愛い子ぶるありさをもう一度睨み、項垂れる左京です。

「はい、左京さん」

樹里が左京に何かを手渡します。

「何だ？」

それはタクシーの請求書でした。瑠奈の家まで行って来た料金です。

「三万円！？」

左京がありさを見た時、彼女はそこにいませんでした。

「あの女ァッ！」

左京は地団駄を踏みました。

新城瑠奈がすでに結婚して二人の子供がおり、旦那とラブラブだと知った加藤警部が自棄酒を浴びるほど飲んだ事を左京達が知るのは次の日の事でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、秋祭りにゆく

御徒町樹里（おかちまち　じゅり）は探偵事務所で働くメイドです。

今日は事務所の近所でお祭りがあるので、顔を売るために所長の杉下左京が神輿を担ぐ事になっています。

樹里と、所員の宮部ありさは、実行委員会の手伝いで町内会の公民館に行きました。

「おおお！　本物だ！」

樹里が公民館に入って行くと、寿司詰め状態で若い男性がいました。

普段は祭りになど見向きもしないのですが、伝説のメイドである樹里が来ると知り、遠くは鹿児島と北海道からも来ているようです。

要するに「にわか祭りファン」です。

「よろしくお願いします」

樹里が深々とお辞儀をすると、携帯やデジカメのストロボが光ります。

「こらこら、勝手に撮影しないで」

ありさが樹里の前に出て言います。

「お母さん、どいて下さい」

カメラ小僧の一人が心無い一言を言いました。

「お母さん!?」

確かにありさは、樹里よりも樹里の母親の由里と年齢が近いですが、「お母さん」は聞き捨てなりません。

「おまんら、許さんぜよお!」

ありさは激怒し、久々の幽体離脱で、ポルターガイストとなります。

「ひえええ!」

公民館の中を座布団が飛びかい、カメラ小僧達は恐怖に震えました。

ありさのおかげで大人しくなった樹里信者達を置いて、樹里とありさは炊き出しをしている奥様方がいるキッチンに行きました。

「お手伝いに来ました」

ありさが笑顔で言います。しかし奥様方は、

「貴女、本当に手伝う気あるの?」

確かにありさは付け爪全開で、ブレスレットにネックレス、大き目のイヤリングを着けていて、タックトップにショートパンツ、ペ

ディキュアもキラキラです。

奥様方が眉をひそめるのも仕方ありません。

「な、何よお……」

ありさが反論しようとした時、樹里が進み出て、

「ありささんはお神輿担当です。私がお手伝いします」

と言いました。樹里はいつものメイド服なので、奥様方はご満悦のようです。

「まあ、貴女、確か、雑誌にも載ったメイドさんよね？　あのお料理、作って下さらない？」

「はい、喜んで」

樹里は早速奥様方と打ち解けたようです。

「け」

ありさは舌打ちして、公民館を出ました。

「どうした、ありさ？　元気ないな？」

そこへハッピ姿の左京が現れました。

「ああん、左京のバカバカ、私を苛めないでよお」

ありさは急に泣き出し、左京に抱きつきます。

「何だよ、ありさ、よせって……」

そう言いながらも、ありさの巨乳の感触を堪能しているスケベな左京です。

「左京のバカ、バカ、バカァッ！」

何故「バカ」をそれほど連発されるのかわからない左京です。

「何だかわからないが、神輿を一緒に担ぐか？」

「嫌よお。ありさ、重いの苦手え」

瞳をウルウルさせて、ありさが左京を見ます。

「そうか、わかった。じゃあな」

左京が慰めてくれると思ったありさは、あまりに淡白な彼の態度に唖然とします。

左京は町内会の人達と話しながら立ち去ってしまいました。

「左京のバカ。嫌い」

ありさはすねてしまいました。

「ありささん」

そこへ樹里が来ました。ありさがいなくなってしまったので、探しに来たのです。

「何よ？　私なんて、料理の邪魔でしょ？」

「千切りを手伝って下さい」

樹里が笑顔で言います。

「せん〇り？」

ありさは聞き間違えたようです。お伝えできません。

「はい。一緒に来て下さい」

樹里も聞き間違えたようです。ありさの言った事を訂正しません。

「いや、私、そんな事できないィ」

そう言いながらも、妙な妄想をしたありさは、ヘラヘラしながら樹里について行きます。

そして。

左京が神輿を担ぐのを楽しく見た樹里とありさは、手が空いた左京と一緒に夜店が立ち並ぶ神社の境内に行きました。

「どうしたんだ、ありさ、その手は？」

左京は絆創膏だらけのありさの手を見て尋ねました。

「包丁で切っちゃった」

テヘと笑い、ありさは舌を出しました。

「そうか。頑張ったんだな、ありさ」

左京がそう言うと、ありさはとてもジーンとしてしまい、

「左京のバカァッ！　急に誉めないでよお！」

と泣き出しました。

「何なんだよ、お前は？」

左京は訳がわかりません。

「金魚すくいだ。やるか？」

左京はそんなありさを放置し、夜店を見ます。

「はい」

樹里が早速チャレンジです。

「おおお！」

樹里はまるで魔術師のように金魚を次々にすくいます。

左京とありさも驚愕しています。

「凄いな、嬢ちゃん。相当練習したな？」

オジさんが顔を引きつらせながら言いました。

商売あがったりなくらいすくわれてしまったのです。

しかし、樹里は笑顔全開で、

「いえ、生まれて初めてしました」

と強烈なバックハンドボレーを返します。

オジさんは燃え尽きたように動かなくなりました。

こうして、樹里は、次々に夜店を制覇して行きました。

「もう持ち切れないから、事務所に帰ろう」

左京は両手いっぱいに景品と金魚の入ったビニール袋を持っています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

そして翌日、左京は町内会の人達に、

「もう祭りに来ないでくれ」

と言われてしまいました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ドロントと意気投合する?

御徒町樹里は、新聞配達をしながら、探偵事務所と居酒屋で働くメイドです。

居酒屋では今、「今日は誰かな?クイズ」が大流行しています。

樹里の母親の由里と、姉の璃里が樹里と入れ替って働いているので、店長が考え出したものです。

誰が働いているのか当てた人には、もれなくそのメイドさんとツーショット撮影ができます。

樹里が一番人気なのは当然ですが、バツイチ(最近判明?)の由里と、夫とラブラブの璃里の人気も相当なものです。

世の中にはマニアがたくさんいるのです。

そして、今日は樹里は探偵事務所で伝票整理です。

「これも経費で落としといてね」

所員の宮部ありさが、領収書を樹里に差し出します。

「何だ、それは?」

不意に彼女の後ろに現れた所長の杉下左京がそれを手に取ります。

「わああ、ダメーッ、左京ってばあ！」

ありさが慌てますが、すでに領収書は左京の手の中です。

「こらありさ、どうしてお前のアパートの電気料までウチで払わなきゃならないんだ？」

左京はムッとして領収書をありさの鼻先に突きつけます。

「ああん、怒らないでよお、左京ゥ。後で私が身体で払うからあ」

ありさはクネクネして左京に貼りつきます。

「バ、バカな事を言うな！」

左京は真っ赤になってありさを突き放します。

「はい、ありささん」

何も聞いていなかったのか、樹里はあっさりありさに電気料分の現金を渡しました。

「渡さなくていいよ、樹里」

左京は受け取ろうとするありさを押しのけて樹里に現金を返します。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じます。

「左京のケチ」

ありさが毒づきます。

「ケチじゃない！」

左京はさすがに怒り出しました。

「お前には、何とかやり繰りして給料を渡しているだろう！？　いい加減にしてくれ」

するとありさはその剣幕に涙ぐみます。

「左京が苛めるゥ」

「苛めてるんじゃない！」

左京はますますイラつきます。

「相変わらず、騒がしい事務所ですね」

そこへ警視庁特捜班の亀島警部補が来ました。

「おっと、今日付けで警部に昇進しましたので」

彼は地の文の訂正を促します。わかりました、警部ですね。

「お前のような役立たずが警部とは、警視庁も人材不足だな」

左京が嫌味を言います。

「ホントね、左京」

いつの間にか立ち直ったありさが、左京に抱きついて亀島を口撃（こうげき）します。

しかし、亀島はそんな二人をまるで無視して、

「樹里さん、怪盗ドロントから予告状が届きました」

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔全開です。

「おい、何で樹里に話すんだ？　そういう話は所長の俺にしろ、役立たず！」

左京は二人の間に割り込み、亀島を睨みつけます。

「ほお、そうですか。今までの事件は、全て樹里さんのおかげで解決していると思われるのですがねえ」

亀島の「痛いところを突いて来る」作戦にぐうの音も出ない左京です。

「パー」

突然ありさが叫びました。全くの意味不明としてそれは処理され

てしまい、ありさは凹みました。

「明日午後十一時、国立歴史研究所にある金のオマルを盗むそうです」

「金のオマル？」

左京はキョトンとしました。亀島は左京をバカにしたような目で見て、

「知らないのですか？　つい先日、豊臣秀吉の研究チームが、大阪城の地下で発見したのですよ。秀吉が実際に使用していたと思われるものです」

すると左京は気持ち悪そうな顔をして、

「使っていたオマルを盗むのか？　変態かよ、あの貧乳は？」

「誰が貧乳なのよ！？」

どこからか、ドロントの声がしました。

しかも突っ込んだのが「変態」ではないところが彼女らしいです。

「また天井裏か？　ワンパターンだな、貧乳！」

左京がニヤッとして言うと、

「違うわよ」

ドロントは床の一部を開いて現れました。

「てめえ、また性懲りもなく！」

左京が飛び掛ろうとすると、ドロントはサッと飛びのいて、

「では明日の午後十一時に会いましょう」

と言い、煙幕を張りました。

「わわ！」

「キャー、左京、どこ触ってるのよお！」

妄想ありさの叫び声が聞こえます。

「ち！」

煙が消えると、ドロントはいなくなっていました。

「逃げられたか」

左京は舌打ちしました。

「では、また頼みますよ、樹里さん」

亀島は左京を無視して事務所を出て行きました。

「はい、亀島さん」

樹里は笑顔全開です。

「どいつもこいつも！」

左京は脳の血管が切れそうです。

そして、予告の日の午後十一時直前。

国立歴史研究所の敷地には、例によって警官隊がひしめいています。

左京達は、オマルが展示されているフロアにいました。

「予告の時間まであと少しです。大丈夫なんですか、刑事さん？」

研究所の所長が心配そうに言います。

「大丈夫ですよ、所長さん。絶対に盗ませはしません」

亀島はガハハと笑いながら、扇子で顔を扇ぎます。

「しかし、オマルってこんなに小さい物なんですか？　子供用ほどもない」

左京が展示されているオマルをマジマジと見て言います。

「もしかすると、オマルではなく、別の物かも知れませんが、調べてみない事には何とも言えませんね」

所長は言いました。確かにオマルにしては小さいです。両手の上に載りそうです。

「実は秀吉がすごく小さかったんじゃないの？」

ありさがボケます。しかし誰もそれに乗ってくれず、

「ああん、左京の意地悪ぅ」

ありさが左京に抱きつきます。

「お、おい、何考えてるんだ！？」

そう言いながら巨乳を堪能する左京です。

「ホホホ」

ドロントの笑い声がフロアに響きます。

「来たか？」

左京が周囲を見渡します。

「ドロントだ！」

ドロントは例によって天窓から飛び降りて来ました。

「金のオマル、頂くわよ！」

ドロントは降下しながら、煙幕を張ります。

「ああん、左京、どこ触ってるのよお」

またありさが騒ぎます。

「ああ！」

煙が消えると、オマルも消えていました。

「待てーッ！」

逃げるドロントを追う亀島と警官隊。しかし左京は動きません。

「どうしたのよ、左京。何でドロントを追わないの？」

ありさが不思議そうな顔で尋ねます。

「ドロントはここにいるからさ」

「え？」

ありさが所長を見ます。

「わ、私はドロントじゃない！」

所長は慌てて否定しました。左京はフッと笑って、

「そう。貴方はドロントではない。ドロントは、お前だ！」

左京はありさの巨乳を鷲掴みにしました。

「いやん、左京、何するのよ、公衆の面前でえ」

ありさが顔を赤らめて言いますが、左京は、

「俺が何度ありさに抱きつかれていると思ってるんだ、貧乳？　これが偽物だと気づかないと思っていたのか！？」

「くっ！」

ありさは左京の手を振り払い、後ろに飛びました。

「ばれちゃしょうがないわね」

ありさの顔が破られ、下からドロントのマスクが現れました。

「貧乳を生かした隠し場所までは良かったが、俺に抱きついたのは間違いだったな」

左京が得意そうに言うと、ドロントは、

「私の変装を見破っても、詰めが甘いのよね、ヘボ探偵さん」

「何！？」

ドロントは偽の巨乳からオマルを取り出し、更にガスマスクを取り出します。

「お前の貧乳は四次元ポケットか！？」

左京が愕然としました。

「貧乳って言うな！」

ドロントはそう叫ぶと、睡眠ガスを放ちます。

「くそ、またこれか……」

左京と所長はガスを吸ってしまい、気を失いました。

「じゃあねえ、ヘボ探偵」

ドロントは意気揚々とフロアを立ち去りました。

そして。

ドロントは研究所の外へと逃げ、車に乗り込むと、

「出して」

と命じ、その場から走り去ります。

「これって、オマルじゃないわ。きっと、食器か何かよ」

彼女はそれに頬ずりします。

「あああ、金てホントに冷たくていい感触」

ドロントは獲物を足元に置いて、

「今日は祝杯を上げましょう」

「そうなんですか」

ギクッとします。嫌な予感です。

「あ、貴女誰？」

わかっているのに訊いてしまいます。車が停止しました。

「私は御徒町樹里です」

運転手は、何故か樹里でした。

「どうして貴女がそこにいるのよ！？」

「代行の運転手をしているからです」

樹里は笑顔で答えます。

「そんな事を訊いてるんじゃないわよ！」

嫌なデジャブを見せられている気がするドロントです。

「逃げられないぞ、ドロント！」

いつの間にか復活した左京が警官隊とパトカーで取り囲んでいま

す。

「ううう！　また貴女にしてやられたわ！　今度はこうはいかないんだから！」

ドロントは車から飛び出すと、ハンググライダーを出し、夜空に消えました。

「さようなら」

樹里はドロントに手を降りました。

こうして、また樹里はドロントとの対決に勝ちました。

そして、ありさは自分のアパートでよだれを垂らして眠っているのを発見されました。

数日後です。

研究所に戻されたオマルと思われていたものの正体がわかりました。

それは、秀吉が飼っていた犬のオマルでした。

それを知ったドロントは寝込んでしまったそうです。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ナンパされる（前書き）

沢木先生、ごめんなさい。

樹里ちゃん、ナンパされる

御徒町樹里（おかちまち じゅり）は、居酒屋で時々働き、怪盗とも対決するメイドです。

今日は久しぶりに仕事が全部お休みです。

「たまには、俺とは別行動がいいだろう」

婚約者の杉下左京にそう言われ、樹里は一人で街に出かけます。

普通の女性なら、婚約者にそんな事を言われたら、

「浮気でもする気？」

と疑いますが、樹里はそんな事はミドリムシのべん毛ほども考えません。

「そうなんですか」

樹里はあっさり左京の申し出を受け入れました。

今日はお友達の船越なぎさとお食事する予定です。

樹里にお友達がいるのが、連載開始後初めてわかり、作者も驚いているようです。

「へい、彼女、一人ィ？」

今時珍しい声のかけ方をするバカっぽい男が樹里の前に現れまし

た。

でも樹里は自分に声をかけられたとは思わず、そのまま歩いて行ってしまいます。

「へいへい、彼女ォ。無視しないでよォ。どこ行くのォ？」

男は懲りずに樹里に纏(まと)わりつきます。

「あっちに行きます」

樹里は笑顔全開で前を指差しました。男は転びそうになりましたが、何とかこらえ、

「あはは、彼女、面白いねえ。ねえねえ、俺とお茶しない？」

とまだしつこく誘って来ます。

「いいですよ」

樹里はあっさりＯＫしました。男の顔が一瞬だけ兇悪になります。

「ささ、こっちこっち」

男はどんどん人気のないところへと樹里を連れて行きます。

そして、全く人通りのない路地にある喫茶店に樹里を連れ込みます。

樹里がピンチです。左京のバカは何をしているのでしょう？

「ささ、座って」

男は樹里を一番奥のボックス席に座らせ、

「ちょっとトイレ行って来るね」

と言い、その場を離れます。

「おい、どうだ、上玉だろ？」

男は喫茶店のマスターに声をかけました。

マスターは樹里をチラッと見て、

「そうだな。あれなら、風俗で相当稼げそうだぜ」

「へへへ」

どうやら、とんでもない連中のようです。

マスターはコーヒーにこれでもかというくらい睡眠薬を入れ、男に渡します。

男はニヤリとしてそれを受け取り、樹里のところに戻ります。

「はい。マスターのおごりだよ。さ、飲んで飲んで」

男は樹里にコーヒーを渡しました。

「そうなんですか」

樹里はそれを受け取ると、何の躊躇いもなく、一気に飲んでしまいました。

「ぐひ」

男はあまりにもあっさり事が運ぶので、思わず不気味な声で笑ってしまいます。

「美味しかったです」

樹里は笑顔全開で言いました。

「ええっ！？」

男は仰天してマスターを見ます。

「あ、あのさ、眠くならない？」

「いえ、全然」

樹里はニコニコしています。男は慌ててマスターに駆け寄り、

「どういう事だよ！？　眠らねえぞ、あの女」

「信じられねえ。シロナガスクジラだって眠っちまう薬だぜ」

マスターも首を傾げています。

そして更に驚愕の出来事が二人を襲います。

「待ったァ、樹里？」

一人の可愛らしい女性が入ってきました。歩くと「キャピキャピ」音がしそうです。

「私も今来たところです」

樹里はその女性に答えます。どうやら、彼女が樹里のお友達の船越なぎさのようです。

「私、道に迷っちゃってさあ。樹里は迷わなかった？」

なぎさは疲れているみたいで、樹里の向かいに座るとグッタリしました。

「はい。親切な方が、ここまで連れて来て下さったので」

樹里は男を見てニコッとしました。男はギクッとして作り笑いを返します。

「ここねえ、コーヒーが美味しいのよ。あれ、もう頼んだの？」

なぎさが尋ねます。樹里は笑顔全開で、

「マスターさんがご馳走して下さったんです」

「へえ、そうなんだ。私、ここに随分通ってるけど、一回もそんな事ないよ」

なぎさが恨めしそうにマスターの方を見たので、男とマスターは慌てて隠れます。

「おい、ここの常連なんているのか？」

男がマスターに尋ねます。マスターは、

「いる訳ないだろ？　ここ、今日だけ開いてる偽の喫茶店だぜ」

「じゃあ、あの二人は何を言ってるんだ？」

男は身震いして樹里たちの方をソッと覗きます。

「あれ？　ここ、よく見ると、私がいつも来るお店じゃないよ。出よう」

なぎさが立ち上がります。

「そうなんですか」

樹里はキョトンとして立ち上がります。

「失礼しました」

なぎさはマスターと男にバツが悪そうに微笑み、樹里と一緒に出て行きました。

「何なんだ、あの二人は？」

男とマスターは顔を見合わせました。

そして……。

「こっちだ、こっち。このお店だよ」

なぎさが樹里を引っ張って連れて来たのは、喫茶店「黒薔薇」でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、妊娠する?

御徒町樹里(おかちまち じゅり)はメイド探偵です。

婚約者の杉下左京も一目置く探偵能力があります。

でも樹里にはその自覚はないので、夜の空いた時間に内職を始める事にしました。

「樹里、そんなに俺は甲斐性がないのか?」

左京が泣きながら尋ねたので、樹里はビックリしました。

「どうしてですか、左京さん?」

彼女が不思議そうな顔で左京を見ると、左京は何故か顔を赤らめて、

「あ、いや、いいんだ。只、俺はお前の身体が心配なんだ。働き過ぎだろう?」

「そうなんですか?」

樹里は自分が働き過ぎだと思っていないようです。

「新聞配達は朝だけですから、まだ夕方も働けますよ」

樹里は笑顔全開で「追い討ち」をかけます。

もちろん、彼女にはそんなつもりはゾウリムシの繊毛（せんもう）ほどもありません。

「あ、そうか……」

言えば言うほど樹里の労働意欲を刺激するだけだと思った左京は諦めました。

「でも、赤ちゃんができたら、そんなにたくさんは働けませんよね」

左京はギクッとしました。

（何だ、今の発言は？　またありさの奴が樹里に乗り移ったのか？）

ふと横を見ると、使えない所員である宮部ありさはせっせと爪を磨いていました。

「赤ちゃん？」

左京は樹里を見て尋ねます。すると樹里は、

「はい。赤ちゃんができたら、一日中働くのは無理ですよね」

「そ、そうだな」

邪（よこしま）な考えからできている左京はニヘラーッとして言いました。

「オムツを取り替えたり、ミルクを上げたりしないといけないですから」

樹里が笑顔で左京を見るので、左京はハッとしてにやけ面をやめました。

「そ、そうだな」

左京は何となく違和感を感じました。

何故生まれてからの話をするんだ？

俺はまだ何もしていないぞ？

イデオンのナブール・ハタリの気持ちがわかる左京です。

「ねえ、予定日はいつなの？」

不意に顔を上げたありさが樹里に尋ねます。

「予定日？」

左京が素っ頓狂な声を出したので、ありさがムッとした顔で、

「何よ、左京。貴方、予定日を知らないの？」

「へ？」

何の事だ？　俺は異世界に飛ばされたのか？

左京は混乱しました。

「十二月です」

「は？」

樹里が笑顔で答えるのを聞き、左京はほんの少しだけホッとします。

十二月が予定日なら、樹里のお腹はもっと出ているはずです。

「でも、あんまり目立たないよねえ」

ありさが不吉な事を言います。

左京の全身に嫌な汗がドカンと噴き出しました。

「そうなんですか？」

樹里は不思議そうな顔でありさを見て、自分のお腹をさすります。

左京が蒼くなりました。

（ウソだろ、樹里？　ウソだろ？）

今度はユウキ・コスモの気持ちがわかる左京です。

「お姉さんとどっちが早いかしらね、左京？」

ありさがニヤニヤして左京を見ます。

「え？」

何だ？　樹里の姉の璃里さんも妊娠しているのか？

どっちが早いって、どういう意味だ？

まさか……。

左京は涙ぐんで樹里を見ました。

「樹里……」

左京は何故か気を失ってしまいました。

「う？」

意識を回復した左京は、ソファの上に横になっていました。

「大丈夫ですか、左京さん？」

樹里が尋ねます。もう外は真っ暗で、ありさは帰ったようです。

「樹里、あのさ……」

左京は勇気を出して尋ねる事にしました。

「ありさが言ってた『お姉さんとどっちが早い』ってどういう意味だ？」

「私達の結婚とどっちが早いかという事ですよ」

樹里は笑顔全開で答えました。そして、

「璃里お姉さんに赤ちゃんができたんです。十二月に生まれます」

「そ、そうか……」

それはさっきわかった。問題は樹里だ。左京は樹里を見ます。

「その、樹里も妊娠しているのか？」

「どうしてですか？」

樹里がほんの少しだけ怒った顔になったのを左京は見ました。

「あ、いや、別に俺はその……」

慌てふためく左京です。

「いくら私と璃里お姉さんが似ていても、間違えないで下さい」

「あ、ああ……」

そっちを怒ったのかよ。樹里の相変わらずさに左京は少しだけホッとします。

「さっきお腹をさすったのはどうしてなんだ？」

左京は尋ねました。樹里はニコッとして、

「私も早く赤ちゃんが欲しいなって思ったんです」

「樹里……」

左京はソファから起き上がり、樹里の肩に手をかけます。

「式なんか後にして、籍を入れよう。俺も早く子供が欲しい」

「そうなんですか」

樹里が真顔になり、目を瞑りました。

（また寝ちまったのかな？）

左京はしばらく樹里を見ていました。すると、

「左京さんの意地悪」

と樹里は目を開け、事務所を出て行ってしまいました。

「えええ！？」

今のは、キスを待っていたのかよ！？

わからん！　わからん事が多過ぎるぞ、御徒町一族！

左京はまた混乱しました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、一歩前進する

御徒町樹里は探偵事務所のメイドです。

あまりにも仕事が少ないので、婚約者である杉下左京は、「メイドのいる探偵事務所」として広告を出すべきかどうか真剣に悩んでいるようです。

「出しちゃえば、左京。そうすれば、私のボーナスも増えるし」

役に立たない所員の宮部ありさが無責任にそそのかします。

「お前にボーナスを出す予定ないし」

人気作品のパクリを二人してさり気なく敢行しています。

節操がない作者です。

「何よ、ケチ」

ありさはムッとして顔を背けます。

「だったら爪ばかり磨いてないで、仕事取って来い、無駄に巨乳！」

左京が切れます。

「む、無駄に巨乳って何よ!?　必要十分に巨乳でしょ！」

ありさも負けずに言い返します。

「随分仲がよろしい事で」

「いっ？」

左京がハッと気づくと、元同僚の神戸蘭（かんべらん）がドアを開いて立っていました。

「あっ、出たな、無駄に巨乳その弐！」

左京が言い放つと、蘭が銃を構えます。

「誰が無駄に巨乳その弐ですって？」

左京はすぐさま銃を構えようとしましたが、自分が警察官ではない事を思い出して慌てます。

「わわ、冗談だ、蘭、よせ！」

ありさが悪乗りして、

「撃っちゃえ、蘭。こんな女たらし！」

しかし蘭は銃をしまい、

「こんな奴撃って免職になりたくないわ」

と言うと、スタスタと中に入って来て、ソファに座ります。

「何しに来たんだ、蘭？」

左京が向かいに腰を下ろします。すると図々しくありさがその隣に座ります。

「その後どうなの、樹里とは？」

「えっ？」

途端に赤くなる左京です。

「左京ったらねえ、樹里ちゃんと婚約しているのに、私の胸を揉んだりするんだよ、蘭」

ありさがとんでもない事を言い出します。

「それホントなの、左京？」

蘭の目が鋭くなります。

「バ、バカ言うな！　こいつが勝手にすり寄って来るだけで、俺は触った事なんかないぞ！」

「ひどーい、あんなに揉んどいてえ」

「ありさ、うるさいわよ」

蘭もありさの「虚言癖」はよく知っていますから、もう相手にするつもりはありません。

「ねえ、警視庁に戻って来る気ない？」

蘭が切り出しました。左京は目を見開いて、

「何言ってるんだ、蘭。あの部長がそんな事許す訳ないだろう？」

「刑事部長は捜査情報を漏洩させた容疑で逮捕送検されて、検察で取り調べを受けているわ」

蘭の言葉に左京は心の中でガッツポーズです。

（必ず最後に正義は勝つんだ）

「だから貴方にとって障害になるものはない」

蘭の目は真剣です。ありさもあまりの緊張感にふざける事ができません。

「いや、まだあるぞ」

左京は蘭を見ます。蘭はフッと笑って、

「亀島君の事？」

「そうだ。あいつは公私共に邪魔だ。あいつがいる限り、俺の復帰はない」

すると蘭は肩を竦めて、

「亀島君なら、田舎の家業を継ぐ事になって、退職したわよ」

「何？　あいつ、また辞めたのか？」

前に亀島が警視庁を辞めた事をしっかり覚えている左京は、元同僚の加藤警部の名前はもう忘れています。

「ええ。ドロント特捜班の班長だったけど、全然ドロントを捕まえられないので、職を解かれたのよ。それがきっかけで、退職したわ」

「なるほど。可哀想な奴だ」

口ではそう言いながら、左京は顔がニヤけています。

本当はバッとしないキャラなので、作者が降板させたのです。（嘘です　作者）

「だから貴方には何も障害はないのよ、左京。戻って来て、警視庁に」

蘭はまた真面目な顔で左京を見ます。心なしか、蘭の瞳がウルウルしています。

「悪魔のウルウルは神無月美咲の必殺技だぞ」

左京が意味不明なことを言ったので、蘭とありさは顔を見合わせます。

「とにかく、考えてみて。いい返事、待ってるわ」

蘭は事務所を出て行きました。

「蘭め、左京に未練タラタラね」

ありさは蘭を送り出すと、腕組みして言いました。

「違うよ。お前も俺もいなくなって、亀島も辞めちまったから、寂しいのさ」

左京にしてはまともなセリフです。

「そうなのかな？」

ありさも寂しそうな顔をしました。

「只今帰りました」

そこへ樹里が帰って来ました。

「お帰りなさい。さっき蘭が来てたのよ」

ありさが言うと、樹里は笑顔全開で、

「そうなんですか」

でも樹里は「蘭」が誰の事なのかわかっていないと思われます。

夕方になりました。結局仕事の依頼が来ないので、ありさは帰りました。

「全く、どうしてこんなに仕事が来ないのかな……」

左京は給湯室で洗い物をする樹里に愚痴をこぼします。

「お仕事なら私がしていますから」

樹里は笑顔全開で言います。左京は悲しそうに樹里を見て、

「いや、そういう事じゃなくてさ……」

「そうなんですか？」

樹里は不思議そうな顔で左京を見ます。彼女はスポンジを絞り、

「除菌もできる女医（あやこ）」に浸けました。

「どうしたらいいんだろうな、俺は？」

左京は蘭の話を樹里にしました。樹里は左京を見て、

「それは左京さんが決めて下さい。私は左京さんについて行くだけですから」

と笑顔で言います。

「樹里」

左京は樹里の健気さに感動しました。そして彼女の肩に手を置きます。

「左京さん」

樹里が目を閉じました。

（こ、これはもしかして……？）

考える左京です。今日はどっちなのか？　寝てしまったのか、キスを待っているのか？

（ええい！）

悩んでいると、またこの前みたいに呆れられる。そう思い、左京は決断して樹里に顔を近づけました。

「……」

左京の唇が樹里の唇に触れます。信じられないくらいの柔らかさです。

そして、何とも言えないいい匂いがします。

（こ、これは……）

しばらく堪能したい左京でしたが、身体が言う事を聞きません。

彼は樹里から唇を離しました。

「樹里」

「左京さん」

二人は見つめ合い、抱き合いました。

「左京さん」

樹里が左京をウルウルした瞳で見上げます。

「何だい、樹里？」

左京は気取って尋ねます。

「食後は歯を磨いて下さいね」

「……」

今日のお昼は餃子定食だった事を思い出した左京でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ドロント一味と対決する

御徒町樹里は探偵事務所で働くメイドです。

婚約者の杉下左京の生活能力があまりに低いので、朝から晩まで働いています。

でも樹里は笑顔全開です。

「おはようございます」

所長の左京が事務所に行くと、樹里はすでに掃除を終えていました。

「お、おはよう」

左京は心なしか、やつれています。

「きちんと朝食を摂っていますか、左京さん?」

樹里が心配そうに尋ねます。彼女は栄養士の資格も持っているのです。

「ハハハ、最近食欲がなくてさ」

左京は寂しそうに笑いました。

「では、私が毎日作りに行きますね」

樹里が笑顔で言いました。すると左京は樹里の肩に手を置いて、

「って言うか、一緒に暮らさないか、籍を入れて」

「はい、いいですよ」

左京の渾身の入籍要請も樹里に実にあっさりと承諾され、左京は拍子抜けしました。

「前からそうしたいと思っていたんです」

樹里がそう言うと、左京は鼻血を噴き出して倒れてしまいました。

また邪(よこしま)な事を考えたようです。

「左京さん！」

樹里が叫ぶ声が遠くなり、左京は気を失いました。

左京が目を開けると、ソファの上でした。

「気がついた？」

何故か向かいのソファには元同僚の神戸蘭(かんべらん)がいます。

「わああ、樹里が蘭になっちまったあああ！」

左京が絶叫します。

「失礼な奴だな！」

蘭が怒りました。やっと冷静になった左京は事務所を見渡して、

「あれ、樹里は？」

「お買い物よ」

蘭が笑顔で答えます。

「おめでとう。一緒に暮らす事になったんですってね」

「あ、ありがとう」

左京は照れながら応じました。そして、

「で、どうしてお前がいるんだ？」

蘭は真顔になってソファに座りなおし、

「ドロントからの予告状が届いたのよ」

「またあの貧乳か。もううんざりだな」

左京はソファにふんぞり返りました。

「今度は、大東京美術館からピカソの絵を盗むと予告して来たわ」

蘭が説明します。左京は、

「それ、警察の仕事だろ？　俺関係ねえし」

「予告状は樹里宛に届いているのよ。さっき樹里にも読んでもらって、依頼をＯＫしてもらったわ」

「はあ？」

左京が気絶している間に、密談が行われたようです。

「お前らなあ……」

左京が文句を言おうとすると、蘭がキッとして、

「わからないの、左京？　樹里は貴方が困っているのを知っているのよ。だから、ドロントを捕まえて左京の名をメディアに取り上げてもらうつもりなの」

「そうなのか……」

左京は樹里の気持ちを知って涙ぐみました。

「予告状には、明日の午後十時にドロントは現れると書かれていたわ。頼んだわよ、左京」

蘭は何故か悲しそうな笑顔で事務所を出て行きました。

「おはー！　ありさちゃんだよお」

そこへ能天気全開の宮部ありさが現れました。

左京はありさに話をしました。

「蘭の奴、左京が有名になったら、警視庁に戻ってくれなくなるので、複雑なのね」

「そうなのか」

板ばさみ状態の左京です。でもどっちを取るかは決まっているので悩みません。

そして予告の日になりました。

ドロント特捜班は蘭が班長です。

以前亀島馨が班長だった時と違って、警官隊はそれほどたくさんいません。

「ドロントは混乱に乗じて盗む傾向があるわ。人員の配置は必要最小限にしなさい」

蘭は亀島と違って、プロファイリングの専門家なのです。

左京とありさと樹里は、ピカソの絵が展示されているフロアにいます。

「こんな絵のどこにそれほどの価値があるんだろうな」

美術館で決して言ってはいけない事を平気で口にする左京です。

「芸術を理解できない人は地上のノミだという事です」

美術館の館長がいきなり現れました。何だかどこかの大佐みたいな事を言っています。

「そうなんですか」

樹里が笑顔で応じます。左京はケッと舌打ちをしました。

「例えば、この絵が偽物なら、館長さんは即座にわかるのですね？」

左京が嫌味満点の質問をします。すると何故か館長は酷く狼狽(うろた)えて、

「も、もち、もち、もち……」

と呂律が回りません。

(何か怪しいな)

左京はソッとありさに耳打ちします。

「館長が臭い。目を放すな」

「あはーん」

ありさが悶えます。

彼女は左京の吐息に感じてしまったようです。

「アホか！」

左京は呆れて樹里にも言います。

「館長が臭い。目を放すな」

「はい」

樹里は笑顔で応じ、館長に近づきます。

左京は慌てました。

（樹里の奴、館長の臭いを嗅ぐつもりじゃないだろうな？）

「餃子定食の後にはこれを噛んで下さい」

樹里は館長に口臭を消すガムを渡しました。

「あ、ありがとうございます」

館長は、どうして夕食が餃子だったのを知られたのかわからず、怖くなりました。

それを見て左京はホッとしました。

そして遂に予告の時刻になりました。

「オーホホホ！」

ドロントの素っ頓狂な笑い声がフロアに響きます。

「来たわ！　総員配置に着け！」

蘭の命令で、警官隊が動きます。

「何をしても無駄よ、無駄に巨乳さん」

ドロントが蘭を挑発します。

「うっさいわね、貧乳！」

蘭はカリカリして警官隊を睨み、

「フロアの出入り口を全て封鎖！　換気孔も塞いで！　天井裏も天窓もよ！」

彼女の素早い指示で、警官隊が的確に動きます。

「さすが蘭ね。亀島君とは違うわ」

ありさが感心して言います。

「これでも盗み出せるの、貧乳さん？」

蘭は辺りを見渡して言い放ちます。

「もちろんよ、無駄に巨乳さん」

ドロントの言葉が終わらないうちに、フロアにガスが充満して来ます。

「くそ、得意の睡眠ガスだ」

左京は口をハンカチで押さえて歯軋りします。

「さあ、眠りなさい！」

ドロントがガスマスクをして姿を現しました。その後ろに部下らしき男が同じくガスマスクをして立っています。

「ドロントめ……」

蘭も警官隊もガスを吸って眠ってしまいました。

ありさは爆睡しています。いびきが凄いです。

館長は酷い口臭を撒き散らしながら、絵の前でいびきを掻いていました。

「さ、手早く片づけるわよ」

ドロントは絵の前に立ちました。男が額に手をかけます。

「くそ、そうはさせるか……」

左京もあと一歩のところで力尽きて眠ってしまいました。

「待って。仕事は中止。引き上げるわよ」

「はい」

ドロントは突然盗みをやめ、引き上げてしまいました。

彼女は部下と共に美術館の外に出て、隠しておいた車で逃走しました。

「どうしたんですか、首領？　盗みをやめるなんて」

部下が尋ねます。するとドロントはキッとして、

「あの館長、偽物を飾っていたの。だから杉下左京が『この絵が偽物なら、館長さんは即座にわかるのですね？』と尋ねた時、あんなに狼狽えたのよ」

「そうなんですか」

ドロントはムッとして部下を見ました。

「その言い回し、不吉だからやめてよ！」

「私は何も言っていませんが」

部下はキョトンとしています。

「え？」

ドロントがハッとして後部座席を見ると、そこには笑顔全開の樹里がいました。

「どうして貴女がそこにいるのよ！？」

ドロントは間抜けな質問をしてしまったと後悔しました。

「ドアを開けて乗ったからです」

樹里はふと部下の顔を見ました。

「あ、亀島さん、お久しぶりです」

「……」

何と亀島馨は、ドロントの部下になっていました。

「逃げるわよ！」

「はい、首領！」

ドロントと亀島は、ハンググライダーで飛び去ってしまいました。

こうしてまたしても樹里の活躍で、ドロントを撃退しました。

そして館長は偽物の絵を展示していた事を追及され、絵の横流しが発覚して逮捕されました。

樹里から話を聞いた左京達は、唖然としました。

「亀島君がドロントの仲間に……」

蘭は酷くショックを受けています。

「あいつならやりかねないな」

左京はあっさりと現実を受け入れました。

「亀島君て、貧乳好きになったのかな？」

ありさが呟きます。

「そうなんですか？」

樹里が笑顔で応じます。それを見てありさは、

「違うな、多分。この中で一番無駄に巨乳なのは、樹里ちゃんだもんね」

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔ですが、左京は失神してしまいました。

「巨、巨乳地獄……」

左京は泡を吹いていました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、居酒屋に復帰する

御徒町樹里はメイド探偵です。

最近、すっかりメイドの格好をしなくなってしまったので、マニアは発狂寸前のようです。

まるで三つ子並みに似ている母親の由里と、姉の璃里の協力で、婚約者である杉下左京の探偵事務所を盛り立てて来ましたが、ようやく事業も軌道に乗り始めたので、樹里は居酒屋に出勤しました。

「寂しいよお、樹里ィ」

探偵事務所を出る時に左京が言った一言が樹里の胸を締め付けました。

樹里は居酒屋をやめる決意を固めていました。

でもそうすると、ずっと以前に書かれたお話と未来が変わってしまうので、作者的には非常に困るらしいのですが、なんでもありがこのお話の信条なので、敢えて何も考えない事になりました。

「店長さん」

久しぶりに出勤した樹里がいつもの笑顔ではないので、店長は死を覚悟しました。

「何でしょうか、樹里さん?」

彼は身体中から嫌な汗を掻いています。彼は感じているのです。

ニュータイプでなくても、そのくらいの事はわかるのですが、偉い人にはわからんのです。

「実は、このお店を辞めたいのです」

そんな事を言われるような気がしたのですが、現実にそう言われてしまうとやっぱりショックの店長です。

「どうしてもですか？」

店長が涙目で尋ねます。すると樹里は、

「どうしてもではないです」

店長はしばらくぶりにイラッとしました。

「どうしてもではないのであれば、何とか思い留まってもらえませんか？　ウチは貴女で保っているのですから」

店長は土下座をして言います。樹里はそれを見て驚いてしまいました。

「店長さん、そんな事はしないで下さい。私の代わりなんて、いくらでもいると思いますから」

いや、いない。断じていない。多分いない。いないんじゃないかな。ま、ちょっといるかも知れない。

「貴女の代わりなんて絶対にいません。お願いですから、辞めないで下さい」

店長の鬼気迫る説得により、樹里は答えを保留にし、左京に相談する事にしました。

また左京の寂しそうな顔を思い出します。

「寂しいよお」

まるで子供のように甘えた声で樹里に言った左京。

他人が見ると、只のバカにしか見えませんが、樹里にはそうは見えませんでした。

二人は左京のアパートで一緒に暮らし始めています。

樹里がアパートの前まで来ると、左京の部屋にはまだ明かりが点いていました。

「左京さん」

樹里は階段を上がり、部屋のドアを開きました。

「お帰り、樹里」

左京は玄関まで出て来て樹里を出迎えます。

「お仕事は？」

「今日はない。ありさも早く帰ったよ」

左京は悲しそうに言いました。

樹里は居酒屋を辞める話をしたら、店長に止められた事を左京に話しました。

「そうだろうな。俺が店長でも、必死に止めるよ」

「そうなんですか」

樹里はいつもの笑顔ではないです。

左京は樹里の気持ちを察しました。

「樹里、居酒屋の仕事は続けたいのか？」

「はい」

左京は微笑んで、

「じゃあ続けろ。その方がお前らしいよ」

「左京さん」

樹里はようやく笑顔になりました。

「探偵事務所は俺とありさで十分だ。ドロントが現れた時だけ、応援に来てくれ」

「はい」

二人は抱き合います。

「樹里」

「左京さん、大好きです」

「……」

左京は一瞬沈黙します。そして、

「取り敢えず、もう少しお前の荷物を整理しよう。このままじゃ、生活できないから」

「はい」

狭い左京の部屋は、樹里が運び込んだ荷物でほとんど空きがないのでした。

「二人だけだったらまだしも、もう一人家族が増えたら、厳しいだろ?」

左京は顔を赤らめて言います。

「そうなんですか」

しかし樹里は、一体誰が来るのだろうと思っていました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、亀島馨の話を聞く

御徒町樹里はメイドです。探偵業は副業で、あくまでメイドです。

樹里は久しぶりにフルで居酒屋勤務をしました。

婚約者の杉下左京は、樹里と入籍したために安心したのか、

「探偵事務所はもう大丈夫だから」

と言いました。

普通、もう一人の所員が好き者の宮部ありさですから、左京が浮気をしないか心配になるものです。

でも樹里にはそんな気持ちは全くありません。

そして何より、左京にはそんな度胸はないでしょう。

「いらっしゃいませ」

樹里はいつもどおり笑顔全開です。

常連客達も樹里が完全復帰したので大勢詰め掛けています。

店長も一安心です。

そんな時、ある人物が現れました。

ドロントの手下と成り果てた元警視庁の特捜班班長の亀島馨です。

彼は黒髪ロングヘアの美人を連れています。黒のスーツが似合う大人の女性です。

樹里はその女性を以前見た事がある気がしましたが、思い出せません。

二人は個室を希望し、奥の座敷に行きました。

「亀島さん、いらっしゃいませ」

樹里が名前を呼んで近づいたので、亀島がギクッとします。

彼は髪型を変え、サングラスをかけ、マスクをしていたのです。

（どうしてわかったんだろう？）

彼は焦りました。まさかとは思いますが、樹里は地の文を読んだのかも知れません。

そして、樹里はそこでようやく亀島の連れの女性に正体に気づきました。

「ドロントさんですか？」

女性はビクッとして、

「な、何を言うんですか、店員さん！　私は只のＯＬです！」

その女性は見るも無残なほど狼狽えています。

「首領、この人に隠し事は無駄ですよ」

亀島はマスクとサングラスを取りました。

「みたいね」

女性は肩を竦めます。

「どうしてドロントさんはそんなにお奇麗なのに顔を隠して仕事をしているのですか？」

一瞬嬉しそうな顔をしたドロントですが、

「普通泥棒は顔を隠すでしょ！」

と言い、イラッとします。そして辺りを見回してから、

「今日は貴女にお願いがあって来たの」

「お金は貸してはいけないと夫に言われています」

樹里が笑顔で応じると、

「誰が借金頼むか！」

ドロントは切れてしまいました。

しかし亀島はそれどころではありません。

（夫？　杉下さんと結婚したのか？）

真っ白な灰になりそうな亀島です。

「この人の話を聞いてあげて。私は只の付き添いだから」

ドロントは可哀想な子を見る目で亀島を見ました。

「ボランティアですか？」

樹里が容赦のないボケをかまします。

ドロントは苦笑いします。

しかし当の亀島は気もそぞろです。

（入籍したのか……。同棲なら、まだチャンスはあると思ったのに。でもこれで決心がついた）

彼は樹里を見上げて、

「僕はこれからドロントさんの元で働く事にします。杉下さんには負けません」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。ドロントは唖然としています。

しばらくして、亀島とドロントは居酒屋を出ました。

「いいの、亀ちゃん？　あの子とこのままで？」

ドロントが尋ねます。亀島は自嘲気味に笑い、

「もういいんです。これからは貴女について行きます」

「そう」

ドロントは亀島の男の意地を感じ、それ以上何も訊きませんでした。

一方樹里は、明け方に左京のアパートに戻り、寝ぼけ眼の左京に亀島の話をしました。

「ドロントと現れたのか！？」

左京は仰天しました。

「で、奴は何しに来たんだ？」

「これからはドロントさんの元で働きますと言ってました」

左京はガツンと壁を殴り、

「あのバカ、何を考えているんだ？」

「いろいろな事だと思います」

樹里が笑顔で答えたので、左京は脱力しました。

「そりゃそうだけどさ……」

すれ違う思いです。

樹里ちゃん、神戸蘭に嫉妬する？

御徒町樹里はメイドです。

旅の僧は別の世界のお話なので、関係ありません。

樹里は亀島馨と居酒屋で会い、話をしました。

夫である杉下左京は亀島の行動に酷くショックを受けていたようです。

「樹里」

その日は二人で同じ布団に寝ました。

狭いせいです。決して左京の邪な心の現われではありません。

「左京さん」

樹里が不意に言います。

「どうした？」

「私達、結婚したのですよね？」

樹里の潤んだ瞳が左京の胸を締めつけます。

（こ、これはもしかして……）

左京の鼻息が荒くなりました。

「そ、そうだよ」

「だったらどうして……」

樹里が言葉を切ります。

（絶対そうだ、間違いない！）

左京は布団から出て服を脱ぎ始めます。

「どうして私は『御徒町樹里』のままなのですか？」

「……」

トランクス一枚になった左京は間抜けな顔をして樹里を見ます。

その問題を左京に訊いても答えは出ません。作者が何も考えていないだけですから。

「どうしたんですか、左京さん？」

樹里が不思議そうに見上げたので、左京は真っ赤になり、

「ああ、別に何でもないよ」

と慌ててパジャマを着ます。

「私と寝ていると暑いですか？」

樹里が悲しそうに言うので、左京は焦ります。

「ち、違うよ」

左京は布団に戻り、樹里を抱きしめます。

「樹里と寝ているととても温かくて気持ちいいよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔になりました。

(俺はこの笑顔のために毎日頑張っているんだ)

左京はギュッと樹里を抱きしめます。

「左京さん」

樹里はもう寝ていました。

「相変わらず、寝つくのが早いな」

左京は苦笑いです。

翌日です。

左京が探偵事務所に行くと、ドアの前で神戸蘭が待っていました。

「おはよう、左京」

「おう。どうした？」

蘭はドアを見て、

「話が長くなるから、中で」

「わかった」

二人は事務所に入り、ソファに座ります。

「ねえ、警視庁（さくらだもん）に戻るつもりない？」

「今はない」

やっと軌道に乗りかけているのを今更投げ出せない。

それくらい、蘭にもわかるはずだ。

左京は思いました。

「そう」

蘭は寂しそうに微笑みます。

「何かあったのか？」

左京は蘭の様子が変なので尋ねました。

「貴方がいなくなって、亀島君がいなくなった上、ドロントの手下になって……。いろいろありすぎて疲れちゃった……」

蘭は涙ぐんでいます。これは左京を落とす作戦かも知れません。

「違うわい！」

また地の文に突っ込む蘭です。

「蘭……」

恋人同士だった事もあったかな？

有名なアニメの台詞を真似るまでもなく、二人は元恋人同士です。

「あーら、お邪魔様」

そこへ本当にお邪魔な宮部ありさが現れました。

「何よ、ありさ？」

蘭は慌てて涙を拭います。するとありさはニヘラーとして、

「蘭、ダメよん、誘惑しちゃ。左京は樹里ちゃんと入籍したんだから」

蘭はえっという顔で左京を見ます。

「言わなかったっけか？」

左京は軽く言います。蘭は立ち上がると事務所を飛び出しました。

「蘭！」

左京は追いかけようとして躊躇います。

「何してんのよ、左京。追いかけなさいよ。元恋人同士なんでしょ？　義理にかけた事したの、あんたなんだから、きっちり謝りなさいって！」

ありさがポンと背中を叩きます。

「わ、わかった」

左京は蘭を追いかけました。

「私ってお人好しね」

ありさは悲しそうに微笑みます。

蘭はビルの前に立っていました。

「蘭」

左京は息を切らせて声をかけます。蘭が潤んだ瞳で振り返ります。

「俺が悪かった。許してくれ」

「左京」

蘭が左京に抱きついて来ました。

「おい……」

左京は泣いている蘭を見て突き放す事ができず、優しく抱きしめます。

「ちょっと、何してんのよ!?」

蘭は左京からもがいて離れました。

「え?」

左京には意味がわかりません。

「ここに停めといた車、レッカー移動されたのよ！　それであんたに連絡してもらおうと思って近づいたら、段差に躓いただけなのに、何であんたに抱きしめられるのよ！」

「そ、そうなのか……」

鈍い左京には、それが蘭の強がりだとわかりません。

悲しい女の一人芝居です。

「うるさわね！」

また地の文に突っ込む蘭です。

「ああ、もう、今日はホントに嫌な日！」

蘭はプンプンしながら歩き出し、携帯を取り出します。

「何なんだよ、あいつ？」

左京は呆然としていました。

更にそれを離れたところから樹里が見ていました。

「左京さん？」

彼女からは、蘭と左京が抱き合っていて嫌がる蘭に尚も左京が迫っているように見えました。

半分は樹里の妄想です。

樹里はそのまま回れ右をして、帰って行きました。

左京は、樹里が時間になっても来ないので携帯に連絡します。

「出ない。どうしたんだろう？」

ありさがニヤニヤして、

「どこかで浮気？　旦那が元恋人と浮気したから」

「違うよ！」

左京はそう言いながらももの凄く不安です。

「今日は臨時休業だ、ありさ」

「ええ？」

ありさは驚いてしまいます。

「今日は出勤扱いだからねえ！」

「わかってるよ！」

左京は振り返らずに走り去ります。

左京がアパートに戻ると、樹里が荷物をまとめていました。

「おい、どうしたんだ？」

樹里は左京を見上げて、

「蘭さんとお幸せに」

とだけ言うと、荷物を持ち、部屋を出て行こうとします。

左京はその言葉に全てを悟りました。

（見てたのか、あれを？）

「誤解だ、樹里。蘭とは違うんだって！」

「……」

樹里は悲しそうな顔で左京を見ると、ドアを開けます。

「慌てん坊同士なんだから、全く」

外に蘭が立っています。

「樹里、私はこいつに警視庁に戻らないかって言いに行っただけよ。別に貴女が心配するような事は何もないんだから」

「そうなんですか？」

樹里は改めて左京を見ます。

「そうだよ。誤解だって」

樹里はもう一度蘭を見ます。

「そうよ。それに、私は人の物が欲しくなるほど男に困っていないわよ」

「そうなんですか」

樹里がようやく笑顔になります。

「じゃ、そういう事で」

蘭は涙を堪えて背を向け、歩き出します。

「嬉しいな」

左京が樹里を後ろから抱きしめます。

「どうしてですか？」

樹里は不思議そうに左京を見上げました。

「樹里が嫉妬してくれたから」

「そうなんですか」

左京は樹里が赤くなったのを初めて見ました。

「さ、仕事に行こうか」

「はい」

二人は事務所に歩き出します。

「ありさ、仕事だ」

左京は携帯でありさを呼び出します。

「えええ！？　もう飲んでるんですけど」

「早過ぎだよ、お前」

呆れる左京です。

樹里ちゃん、なぎさと再会する

御徒町樹里は居酒屋メイドです。

久しぶりに完全復帰した日は、夜通し騒ぎ捲る樹里信者達で店は大賑わいでした。

店長は大入り袋を従業員に振舞いましたが、中身は百円です。

そんなある日、居酒屋に樹里の親友である船越なぎさがやって来ました。

相変わらず歩くと「キャピキャピ」と音がしそうです。

何故かなぎさは深刻な顔をしています。

「どうしたんですか？」

親友を心配して、樹里が声をかけます。

「樹里、聞いてよお。私のアパートに泥棒が入ったのよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じます。

普通の人なら怒り出しますが、なぎさも樹里の親友なので怒った

りしません。

「ドロントさんですか？」

樹里が尋ねます。するとなぎさは、

「誰それ？　そんな貧乳みたいな人、知らないわよ」

知っているような気がする言い方です。

ドロントが聞いたら激怒するでしょう。

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔です。

「でもさあ、盗まれたのが、私が大事にしてたフィギュアだけだったから、警察も真面目に話を聞いてくれなくてさ」

「そうなんですか」

なぎさは樹里を見て、

「貴女の彼氏って、探偵よね？」

「違います」

「あれ？　違うの？」

なぎさはキョトンとします。

「夫です」

樹里が言いました。するとなぎさは、

「彼とは別れたんだ」

と妙な納得の仕方です。

「それも違います。探偵が夫です」

「え？　じゃあ、結婚したんだ」

なぎさはようやく理解しました。

この二人の会話は落語以上に支離滅裂です。

「はい」

「私、結婚式に呼ばれてないよ」

なぎさは口を尖らせます。

「すみません、結婚式は挙げていません」

「何だ、結婚してないの？」

話が完全に堂々巡りです。

「ま、いっか。とにかく、泥棒の事を調べて欲しいのよ。お願いし

ていい？」

なぎさはどうやら探偵である杉下左京に仕事を依頼したいようです。

「わかりました。私から連絡しておきます。ここが事務所の住所です」

樹里は自分の名刺をなぎさに渡しました。

「ありがとう。明日行ってみるね」

なぎさは食事をして帰りました。

そして次の日の朝です。

左京が事務所に行くと、ドアの前になぎさが立っています。

（最近、朝一の客が多いな）

左京は樹里からなぎさの事を聞いていたので、

「船越なぎささんですね？　探偵の杉下左京です」

「え？　どうして私の名前がわかるんですか？　凄いですね、探偵さん」

さすが樹里の親友だと左京は思いました。

左京は事務所になぎさを通して、ソファで話を聞きます。

「実は、生き別れの妹を探して欲しいんです」

「は？」

左京は樹里から聞いていた依頼内容と違うのでビックリしました。

「あの、泥棒の件ではないのですか？」

「泥棒は諦めました。妹の方が心配なので」

「そうですか」

樹里の交友関係は恐ろしい。左京は心の中で震えました。

「では、妹さんの特徴を教えて下さい」

左京は調査票を取り出してペンを持ちます。

「双子なので私にそっくりです。性格も私と同じです」

こんなのがもう一人？　左京はますます怖くなります。

「いつ離れ離れになったのですか？」

左京は更に質問します。するとなぎさは指で数え始めます。

（数えられる程度なのか？）

左京は不安になって来ました。

「生まれてすぐです」

いや、それなら数えるなよ！　それに生まれてすぐなら、性格とかわからねえだろ！

左京は怒鳴りたい気持ちを抑え、

「そうですか。だとすると、難しいですね」

「そんな事言わないで下さい。お金ならいくらでも出しますから」

その一言で契約成立です。

「貴女の本籍と住所を教えて下さい。調査の参考にしますので」

「はい」

なぎさはバッグの中なら運転免許証を出しました。

「……」

左京は思います。

（こいつに免許取らせたの、誰だよ！？）

左京は顔を引きつらせて笑い、それを書き写します。

しばらくしてなぎさは帰りました。

そこへお騒がせ所員の宮部ありさがやって来ます。

「左京ったら、また若い女の子引き込んでたの？」

「違うよ！　樹里の友人だ」

「え？　樹里ちゃんの友達に手を出したの？」

ありさが後退りして言います。

（どうして俺の周りにはこんな奴しか集まらないんだ？）

左京は自分の身の不幸を嘆きました。

「クライアントだよ。双子の妹を探して欲しいんだってさ」

「あらま、本格的な依頼ね」

ありさは驚きました。

「かなり雲を掴むような依頼だが、金ならいくらでも出すと言っていたので引き受けた」

「わーい、ボーナス！」

ありさが喜んだので、

「何でだよ!?」

左京が切れます。

夕方になり、今日は居酒屋が休みの樹里が来ました。

「只今戻りました」

樹里は笑顔で言います。左京が樹里を見て、

「樹里の親友の船越さんが来たよ。依頼の内容が変わって、生き別れの妹さんを探す事になった」

「そうなんですか?」

樹里は何故か首を傾げています。

「どうしたんだ?」

左京が尋ねます。すると樹里が衝撃的な事を言います。

「なぎささんは一人っ子ですよ」

「……」

思わず項垂れる左京です。

その頃、なぎさは街を歩いていてふと思いました。

「あ、私には妹なんかいなかった」

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、またしてもドロントと対決する

御徒町樹里は軸足を居酒屋に戻したメイドです。

普段は居酒屋と喫茶店で働き、探偵事務所にいる夫の杉下左京と合流して、二人の愛の巣であるアパートに帰ります。

ところが今日は予定が狂いそうです。

左京の事務所に警視庁ドロント特捜班の班長である神戸蘭（かんべらん）がやって来たのです。

「また貧乳か」

左京がうんざり顔で言います。

「そんな顔しないでよ。私だってできればあんたなんかに頼みたくないんだから」

蘭はいつになくイラついています。

「どうしたんだよ、蘭？　機嫌が悪いな？　ひょっとして……」

左京がニヤついて言うと、

「違うわよ！　嫌らしいわね！」

と蘭はいきなり切れました。

（何で嫌らしいになるんだ？）

左京は唖然とします。するとぐうたら所員の宮部ありさが、

「左京ったら、私にもセクハラ発言ばっかりなのよ、蘭」

「そうなの？」

二人が左京を睨みます。

（どうにでもしてくれ……）

左京は自棄（やけ）になっています。

「刑事部長が処分なしで戻って来たのよ」

蘭は苦々しそうな顔で言いました。

「何だって！？」

根性悪の刑事部長が復権したようです。左京は本当に殺しに行こうかと思っています。

「それで、今度ドロントを取り逃がしたら、左遷だって言われたの」

蘭は急に悲しそうな目で左京を見ます。

「ダメよ、蘭。もう当事務所は人員は足りているから、クビになっても当てにしないで」

ありさが意味不明の先回り発言です。

「お前が言うな！」

左京と蘭のダブル突っ込みを受けるありさです。

「だから、今回はしくじれないのよ。わかって」

蘭は悔しそうです。左京は、

「だったらどうして俺に頼みに来るんだ？」

「刑事部長の差し金よ。総監を通じて私に圧力をかけて来たの」

蘭の説明に左京は疑問だらけになります。

「どういう事だよ？」

「気を悪くしないで聞いて」

蘭が真剣な顔で言います。左京はギクッとしました。

「刑事部長は、私の追い落としを企んでいるの。貴方を関わらせれば、必ずしくじるって思っているのよ」

「何ィッ！？」

左京は激怒しました。

要するに無能な探偵を利用して、邪魔な蘭を追い出そうとしてい

るのです。

「ふざけやがって、あのジジイが！」

左京は歯軋りしました。

「警視庁に妙な勢力があるのよ。刑事部長が復権したのもそいつらの仕業らしいわ」

「そうか」

蘭がすがるような目で言います。

「私一人の力じゃ、どうする事もできないのよ。戻って来て、左京」

「しかし、あの部長がいる限り、俺の復職はないだろう？」

左京の言葉に蘭は項垂れます。

「そうなんだけど……」

すると二人の「いい感じ」に嫉妬したありさが、

「それよりさ、ドロントの方はどうなのよ、無駄に巨乳さん？」

「誰が！？」

蘭はムッとしましたが、

「ドロントはまた樹里宛に予告状を送って来たの。今度は、多摩サ

ファリパークのホワイトタイガーを盗むと書いてあるわ」

と予告状のコピーを左京に渡します。

「多摩サファリパークか」

何だか嬉しそうな左京です。

「何よ、ニヤけちゃって、スケベ！」

ありさが突っ込みます。すると左京は、

「そ、そんなんじゃねえよ！」

と否定します。

実は左京は女子大生探偵（なかつのりこ）の隠れファンで、彼女の住んでいるアパートがサファリパーク付近だと知っているのです。

もはやストーカーです。

「誰がストーカーだ！」

地の文に突っ込む左京は、周囲から見ると完全に可哀想な子です。

「蘭さんがピンチなのか」

ドロントの手下の亀島馨が、その会話全てを事務所の天井裏で聞

いていました。

そして予告の日の夜です。

ホワイトタイガーの檻の前には、蘭と左京と樹里とありさがいます。

「班長、全員配置につきました！」

警官隊が報告します。

「了解。予告の時刻まであとわずかだ。気を抜くな」

「は！」

警官隊は敬礼しました。

「オーホホホ！」

ドロントの甲高い笑い声が静まり返ったパーク内に響きます。

「出たな、貧乳！」

左京が辺りを見回します。

「またいつものお間抜けコンビね」

「うるせえ！　お前だっていつも失敗してるだろ！」

左京が言い返します。

「今日は失敗しないわよ。ホワイトタイガーは頂くわ」

「させるか！」

左京は声のする方へと走ります。

「左京、待ってよ！」

ありさが慌てて追いかけます。

「貴方達はここで警戒して」

蘭は警官隊に命じて左京を追います。

警官隊は急に心細くなりました。

「いやあ、悪い悪い。遅れちまったな」

そこへ何故か左京が現れます。警官隊は仰天しますが、

「貴様、ドロント一味だな！」

と一斉に飛び掛り、左京を縛ってしまいました。

「バカヤロウ、俺は本物だ！」

「偽物はみんなそう言うんだよ！」

警官隊は動じません。

「俺の言う事が信じられないのか？」

「信じられないね」

警官隊はそっぽを向きます。

「ふむ、君らは正しい。でも、残念でした」

左京の靴の先からガスが吹き出します。

「ぐわ！」

警官隊はたちまち眠ってしまいました。

「さてと」

偽左京はロープを解きます。

「手伝いますね」

誰かが手を貸してくれます。

「ありがとう」

偽左京はドロントでした。

「え？」

手伝ってくれたのは樹里でした。

「また貴女なの？　どうして睡眠ガスで眠らないのよ！？」

ドロントはイラついて怒鳴ります。

「眠くないからです」

樹里は笑顔全開です。

「そういう事を訊いてるんじゃなくてね……」

脱力している間に左京達が戻って来ました。

「やっぱりそうか、貧乳！　今日こそは逃がさないぞ！」

左京と蘭がドロントを囲みます。

「さあて、それはどうかしらね」

ドロントはビュンと空に飛び上がります。

「ホワイトタイガーは、私の忠実な手下の亀ちゃんが頂いたわ。じゃあねえ」

「何！？」

檻を覗くと、虎だと思っていたのは、大きな赤べこでした。

首が揺れているので癒されます。

「やられた……」

蘭はがっくりと膝を着きます。左京は唖然としていました。

(亀島のヤロウ、蘭に引導渡しやがって！　許せねえ)

左京は今度亀島を見かけたら、如意棒でタコ殴りにするつもりです。

「左京さん、こんなものが落ちていました」

樹里が大きめの茶封筒を差し出します。

「何だ、これ？」

左京は中身を確かめました。

「うおお！」

思わず叫んでしまう内容です。

そして翌日です。ドロントを取り逃がし、ホワイトタイガーまで盗まれた蘭は、刑事部長に呼び出されました。

「神戸君、大失態だな」

刑事部長は嬉しそうに言います。蘭は茶封筒を差し出します。

「何だ？　辞表ならもう少し小さい封筒にしろ。それに君の辞表は受け取らんよ。懲戒免職処分の予定だからね」

部長はニヤリとして封筒の中身を見ます。

そして信号機の青より顔色が悪くなります。

「部長、貴方は警察の面汚しですね」

蘭がニヤッとして言います。部長は汗を滝のように流します。

「こ、これをどこで……」

「ニュースソースは明かせません。取り敢えず、総監には報告をすませました。今度こそ、塀の向こうに落ちやがれ、悪党！」

「……」

蘭の暴言に何も言えないほどなのは、茶封筒の中身が刑事部長の数々の犯罪を詳細に記した物だったからです。

「失礼します」

蘭は悠々と刑事部長室を出ました。

（亀島君、ありがとう）

その資料は亀島が調べた物でした。蘭が追い詰められている事を

知った亀島が、現場に置いて行ったのです。

（これで左京がここに戻って来る事ができる）

蘭は嬉しそうに廊下を歩きました。

その頃、左京は朝刊を眺めながら剥れています。

「亀島のヤロウ、美味しいとこだけ持って行きやがって」

「そうなんですか」

樹里がコーヒーを淹れてくれました。

「まあ、よしとするか」

左京はコーヒーを一口飲んで言いました。

樹里ちゃん、宮部ありさと探偵する

御徒町樹里は居酒屋で働くメイドです。

姉の璃里の出産が間近になったので、居酒屋と喫茶店の仕事は樹里と母親の由里でこなしています。

そんな時、妹の真里・希里・絵里が通っている幼稚園で、飼っていたうさぎが何者かに殺される事件が起こりました。

園長先生は樹里の夫が名探偵の杉下左京だと知っていたので、犯人探しを依頼しました。

「警察に頼めばいいんだよ。そういう関係で仕事受けるの、嫌なんだよなあ」

左京は全くやる気がありません。すると普段はサボり魔の宮部ありさが、

「だったらこの事件、私と樹里ちゃんだけで解決しちゃうわよ」

「おう、やってもらおうか」

左京は椅子にふんぞり返ったままで言います。

「私はお前を女として育てた覚えはない」

ありさが謎の返しをします。左京はあっさり無視します。

「解決したら、私の時給を倍にしてくれる？」

ありさがニヤリとします。

「ああ、するよ。何だったら、十倍でも良いぞ」

左京はバカにしたように言いました。

「言ったわね！　忘れないでよ！」

ありさは勢い良くドアを閉めました。

「できる訳ねえよ、お前に」

左京は後で死ぬほど後悔するとは夢にも思っていません。

ありさは喫茶店に行き、樹里に事件の話をしました。

「そうなんですか」

妹が通っている幼稚園での事件なのに、樹里は笑顔全開で聞いています。

「取り敢えず、ここが終わったら調査に行くから、お願いね」

「はい」

ありさは樹里が仕事を終えるのを待ち、そのまま幼稚園に行きま

した。

幼稚園は喫茶店からそれほど離れておらず、すぐに到着です。

園児達はすでに帰った後で、先生方と園長先生がいました。

園長先生はヤクザのような風貌ではなく、近所のおばあさんのような雰囲気の人です。

「杉下探偵事務所の副所長の宮部ありさです」

ありさはまだ「副所長」の名刺を切らしていなかったようです。

「杉下の妻の御徒町樹里です」

樹里も名刺を出します。

園長先生は、「何故結婚しているのに御徒町のままなのだろう?」とは思いません。

「お忙しいところを申し訳ありません」

園長先生は園長室に案内します。

そこには一人の先生が待っていました。

「第一発見者の高田先生です」

ポニーテールの若い先生です。

ありさは発見当時の事を尋ねました。

「朝、いつものように飼育小屋に行きました。そしたら、網が破られていて、うさぎが……」

高田先生は涙ぐんで声を詰まらせます。

うさぎはナイフのようなもので切り刻まれていたそうです。

「ううう」

ありさは妄想が強過ぎて、気持ち悪くなりました。

「大丈夫ですか、ありささん？」

樹里が背中を擦ってあげます。

「では、現場を見せて下さい」

ありさは青い顔で言いました。園長先生と高田先生がギョッとします。

樹里とありさは飼育小屋に行きました。

その時です。

「きゃふ、きゃふ！」

久しぶりにありさがおかしくなりました。

「ありささん、どうしたのですか？」

樹里が声をかけますが、ありさは、

「きゃふ、きゃふ」

と言いながらピョンピョンうさぎのように飛び跳ね、園庭の反対側に行きます。

そこでは年配の植木職人が植木の剪定をしていました。

「きゃふ、きゃふ！」

ありさがその植木職人を睨みます。

「何ですか、この人は？」

植木職人が園長先生に言います。園長先生は苦笑いをして、

「探偵事務所の方です」

「た、探偵？」

何故かギクッとする植木職人です。

「犯人は貴方ですね、酒屋さん」

樹里が言いました。

「いや、儂は植木屋だし……。それに何ですか、犯人て？」

植木職人はありさと樹里を気味悪そうに見ながら、園長先生に尋ねます。

「うさぎが殺されていたんです。その犯人探しを探偵さんに依頼したんです」

園長先生が答えると、植木職人は、

「その犯人が儂だって言うんですかい、園長？　冗談じゃねえ」

と怒り出しました。

「貴方が犯人なんですよ、等さん」

樹里が重ねて言います。植木職人は樹里を睨み、

「儂は等なんて名前じゃねえよ！」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「証拠があるのか！？　滅多な事言うもんじゃねえよ、嬢ちゃん！」

と急に凄み出します。明らかに犯人の反応です。

「証拠は、貴方の頭に巻いた手ぬぐいに付着したうさぎの毛です」

突然我に返ったありさが言い放ちました。

「え！？」

植木職人はハッとして手ぬぐいを触ります。

「その剪定ばさみが凶器ですね。どれほど奇麗に洗っても、科学捜査の力を使えば、すぐにわかりますよ、等さん」

「だから儂は等じゃねえよ……」

植木職人はガックリと項垂れて言いました。

その後、植木職人は近くの交番からおまわりさんが連れに来ました。

うさぎに、自分が育てた花を食い荒らされたのが犯行の動機でした。

「殺す事はなかったでしょ？　その事を園長先生に言って、対策を講じてもらえば良かったのよ」

ありさは連れて行かれる植木職人に言いました。

「そんな冷静さがあれば、うさぎを殺したりしてねえよ。あれは、

儂が何年もかかって作った新種の花だったんだ。それをあっさり食いちぎられた時、もう殺してやると言う発想しかなかったのさ」

ありさは悲しそうな植木職人の顔を見て黙りました。

ありさと樹里は園長先生にお礼を言われました。

「依頼料は口座振込みでと所長さんから連絡がありました」

園長先生の言葉に苦笑いするありさです。

「あのヤロウ、まだ疑ってるのか」

こうして、うさぎ殺害事件は樹里とありさの連係プレーで解決しました。

ありさと樹里が事務所に戻ると、左京がいません。

「あいつ、逃げたな」

ありさがムッとします。

「ありささん、これが」

樹里が机の上にあった封筒をありさに渡します。

「何？」

ありさは中身を出します。それは便箋でした。それには、左京の字で、

「さっきは悪かった。謝るから、時給十倍は勘弁してくれ」

と書いてありました。ありさはクスッと笑い、

「十倍じゃなくていいわよ、左京」

するとトイレから左京が出て来ます。

「ホントか、ありさ」

「ええ。九倍でいいわ」

左京はそのままトイレに戻りました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、一足早くサンタになる？

御徒町樹里は居酒屋をメインにあちこちで働くメイドです。

恐らく日本で一番有名なメイドです。

でも本人には全くその自覚はありません。

樹里はいつものように居酒屋に出勤します。

すると店長が揉み手をしながら出迎えてくれました。

「樹里さん、今日はお願いがあってさ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開警戒心ゼロで応じます。

「そろそろそんな時期かなあ、何て思ってさ」

店長は何故か言いにくそうです。

「何が損なのですか？」

樹里は聞き間違えたようです。

店長はギクッとします。

「あ、いや、何だ、その。無理にとは言わないんだけどさ」

樹里は店長が病気になったと思ったようです。

「お大事にして下さい」

深々とお辞儀をし、厨房に行こうとします。

「あああ、待って待って、樹里さん。言います。正直に言いますから」

店長は大きな紙袋からサンタの衣装を取り出します。

「今日から、これを着て働いて欲しいんだ」

「そうなんですか。可愛いですね」

樹里は笑顔で言います。店長は何か隠しているようです。

「そうなんだよ、可愛いでしょ？　とにかく、着てみてくれないかな？」

「はい」

樹里が久しぶりにいきなり服を脱ぎ出すボケをかまします。

店長は仰天して、

「うわっ、更衣室で着替えて。ウチはそういうお店じゃないんだか

ら」

どういうお店なのかは樹里にはわかりません。

「そうなんですか」

樹里は衣装を持って着替えに行きます。

「これでまた、売上げアップだ！」

店長の目が「¥マーク」になるという昭和の演出が入ります。

「どうでしょうか？」

樹里が店長の妄想を打ち破ります。

「ブッ！」

店長はどこかの猿と一緒で、鼻血を噴き出します。

サンタの衣装はサイズが小さかったらしく、樹里は肩も丸見え、胸の谷間も丸見え、スカートも丈が短過ぎて、太腿が剥き出しです。

「い、いかん、これではキャバクラだ」

店長は慌てました。

「すまない、樹里さん、明日はワンサイズ上の衣装を用意するから、今日はそれで我慢して」

「そうなんですか」

でも樹里は全然気にならないようです。

樹里はそのムチムチのサンタの衣装で仕事をこなしました。

何故か厨房にいる男性従業員達は全員が前屈みです。

店長はようやく鼻血が止まりましたが、樹里がテーブルを拭いているのを見てまた噴き出します。

こうして、樹里はまた知らないうちに居酒屋の売上げに貢献しました。

店長が衣装のサイズの変更をしない事を決断したのは言うまでもありません。

そして次の日の朝です。

働き者の樹里は新聞配達をするために販売所に行きました。

「御徒町さん、お願いがあるんだけど」

販売所の所長は居酒屋の情報を聞きつけ、早速便乗する事にしたのです。

「今日からは、メイド服ではなくてこの衣装を着て配ってくれないか」

とサンタの衣装を出しました。

「そうなんですか」

全然気にしない樹里はその衣装に着替えて新聞配達をしました。

居酒屋のものとは違って、サイズは合っていますが、自転車に乗るにはスカートが短過ぎました。

でも樹里は何も気にせずにいつものように配達をこなしました。

そのせいか、道路脇の側溝に落ちる人が続発したそうです。

樹里が夫である杉下左京のアパートに戻ると、左京がドアの前で待っていました。

「おはようございます、左京さん」

樹里は笑顔全開です。でも左京は渋い顔をしています。

「樹里、ちょっと話がある」

「そうなんですか。私も話があります」

左京はドキッとしました。

（な、何だ?）

もしかすると離婚話？　ビビリな左京はすっかり狼狽えています。

二人は部屋に入り、向かい合って正座しました。

部屋は片付いて来たのですが、まだ狭いので正座しないと座れません。

「お話って何ですか？」

樹里が尋ねます。左京は、

「いや、俺は後でいい。樹里からしてくれ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔で、

「赤ちゃんができたそうです」

「えっ？」

左京は自分の耳がおかしくなったと思いました。

「赤ちゃん？」

嫌な汗が全身から噴き出します。

（どういう事だ？　俺はまだ何もしていないんだぞ。まさか、亀島？）

良からぬ事を想像してしまう左京です。

「はい。大家さんのお家のワンちゃんに赤ちゃんができたそうです」

「……」

左京は自分の浅ましさに死にたくなりました。

（樹里を疑ってしまった……）

自己嫌悪に陥る左京に樹里が追い討ちをかけます。

「私達も早く欲しいですね、赤ちゃん」

「あ、ああ、そうだな」

普段の左京なら小躍りしそうな樹里の言葉ですが、今日の左京はそれどころではありません。

「頑張りましょう、左京さん」

樹里が左京の手を握って言います。左京は鼻血が出そうになりました。

でも何故か涙が出て来ます。女の子ではないのに。

「左京さん、どうしたのですか？」

左京の涙を不思議に思った樹里が尋ねます。

「いや、何でもない。ありがとう、樹里」

「そうなんですか？」

樹里はますます不思議に思いました。

樹里ちゃん、誕生日を祝ってもらう

御徒町樹里は居酒屋でサンタバージョンで働くメイドです。

今はメイド服を着ていないので、メイドではないのかも知れません。

樹里の名ばかりの夫である杉下左京は、樹里に誕生日のお祝いをする事を話すつもりでしたが、樹里の話に驚愕して、言い出せなくなりました。

樹里の誕生日は、十一月二十七日です。

左京はこっそりプレゼントを買って来ました。

そして探偵事務所に行きました。

「何ニヤニヤしてるのよ、左京？」

先日の一件で、ダメ所員から卒業した宮部ありさが言います。

「樹里の誕生日なんだ」

言ってしまってからハッとする左京です。

「あら、いつ？」

「あ、明日」

左京は項垂れています。

「何よ、その反応？　私には内緒にするつもりだったな！？」

ありさはムッとして左京を睨みます。

「お前、ロクな事しないからだよ！　高校の時の事、忘れたのか！？」

左京はありさを睨み返します。

「あはは、忘れたわん」

ありさは笑って誤魔化そうとします。

「ケーキの中にまんじゅう入れやがって」

左京が言うと、ありさは、

「もうそんな事しないから、私も参加させてよ。樹里ちゃんにはいろいろとお世話になってるからさ」

「絶対だな？」

左京はまだ疑っています。

「絶対よ」

ありさも真顔で応じました。

「それから、樹里には内緒だぞ。ビックリさせるんだからな」

「はいはい」

ありさは肩を竦めて言いました。

ありさは左京との約束をした後、すぐに事務所を出ます。

営業に行くフリして、樹里にばらしに行くのです。

「左京め、私を除け者にしようとした罰よ」

ありさは樹里がいる居酒屋に着きました。

「いらっしゃいませ」

樹里がサンタの格好で現れたので、ありさの悪戯心が増大します。

「樹里ちゃん、お願いがあるんだけど」

「何でしょうか？」

樹里は笑顔全開です。

そして誕生日当日です。

樹里は居酒屋を早上がりして、十時頃事務所に来る事になっています。

事務所では、母親の由里や妹達、そして姉の璃里も参加して飾り付けをしてくれました。

「じゃあねえ、左京ちゃん」

由里達は樹里が来る前に事務所を去ります。

「ああ、一緒にお祝いしましょうよ、お母さん達も」

左京が止めましたが、由里は、

「そんなの、野暮ってものよ、左京ちゃん」

「そうですよ。二人きりでお祝いして下さい」

お腹の大きくなった璃里も樹里と寸分違わぬ笑顔で言います。

「あ、ありがとうございます」

由里と璃里は、嫌がる真里、希里、絵里を引き摺るようにして帰って行きました。

「ありさの奴も、結局いなくなったし……」

左京は何故かドキドキして来ました。

（樹里と二人きり……）

妄想で鼻血が出そうな左京です。

そして夜の十時。樹里が事務所に到着しました。

「遅くなりました、左京さん」

樹里はロングコートを着て現れました。

「あれ？　そんなの持ってたのか？」

「ありささんに借りました」

樹里が笑顔全開で言います。

「あの、これ？」

樹里は周りを見回します。

「ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ　ＪＵＲＩ！」と書かれた横断幕があります。

たくさんのモールと電飾で彩られた事務所は、別世界のようです。

「誕生日おめでとう、樹里」

左京は背中に隠していたラッピングされた箱を差し出します。

「左京さん」

樹里が笑顔のまま涙ぐみます。

「さあ、座って。蝋燭に火を点けるから」

「はい」

樹里はコートを脱いでソファに座ります。

「ブ！」

左京は鼻血を垂らしてしまいました。

樹里はサンタの服のままだったのです。ムチムチバージョンの方です。

ありさの悪戯です。樹里はそのままの格好で帰るように言われたのでした。

「早く火を点けて下さい、左京さん」

樹里が笑顔全開で言いました。

「あ、ああ……」

左京は貧血を起こして倒れてしまいました。

「左京さん？」

樹里は驚いて左京に駆け寄ります。

「ハッピバースデイ、樹里」

左京は意識が朦朧とする中、それだけ言いました。

「ありがとうございます、左京さん」

樹里が左京にソッと口づけしたのを左京は知りません。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、船越なぎさに叱られる？

御徒町樹里は居酒屋を中心に様々な場所で働くメイドです。

今はクリスマスシーズンにつき、サンタバージョンです。

しかもちょっぴりエロいので、更にマニアが増えています。

その上樹里には「エロ」の自覚がないので、大胆です。

いつものように樹里が新聞配達を終え、喫茶店に出勤した時です。

携帯に着信です。

親友の船越なぎさからでした。

「おはようございます」

樹里は笑顔全開で言いました。

するとなぎさは、

「酷いわ、樹里。私の誕生日を忘れて！」

といきなり怒り出します。

「そうなんですか？」

樹里はなぎさの誕生日を知りません。

何年も前から親友ですが、彼女から誕生日を教えてもらった事がないのです。

それも妙な話ですが。

「申し訳ありません、なぎささん。今日でも遅くなければ、お祝いさせてもらいます」

「わかった。今からそっちに行くから」

少しだけ機嫌が直ったなぎさはそう言いました。

なぎさが喫茶店に来たのは、営業時間終了間際でした。

「ごめん、遅くなって。もう終わり？」

なぎさは決まりが悪そうに尋ねます。

樹里は笑顔全開で、

「居酒屋でお祝いしましょう。左京さんも呼びますから」

「そうなんだ」

なぎさは嬉しそうです。

そして、居酒屋でなぎさの誕生日パーティが始まります。

樹里の夫の杉下左京にグウタラ所員の宮部ありさがついて来ました。

左京の元同僚の神戸蘭、樹里の母親の由里、妹の真里、希里、絵里も来ました。

今日は樹里はエロサンタではありません。

母親と妹も来ると聞いた店長が気を遣ってくれたのです。

樹里自身は全然気にしていませんでしたが。

「なぎさちゃん、久しぶり！」

由里となぎさが抱き合って喜び合います。

「わーい、なぎさお姉ちゃん！」

真里達もなぎさに会って大はしゃぎです。

「璃里お姉さんは、出産が間近なので来られません」

樹里が詫びます。なぎさは、

「そうなんだ。樹里もおばさんになるのね」

「はい」

樹里は嬉しそうです。

ところが、一人、左京は眉間に皺を寄せています。

「どうしたのよ、左京？　怖い顔して」

すでにほろ酔いのありさが尋ねます。息が酒臭いです。

「いや、別に」

左京は妙に思っている事がありましたが、どうでもいいと思って言いません。

「ところで、なぎさちゃんの本当の誕生日っていつだったの？」

蘭が尋ねました。するとなぎさは蘭を見て、

「十一月二十七日です」

左京とありさが顔を見合わせます。

由里と真里達が顔を見合わせます。

「何だ、樹里ちゃんと一緒だったんだ」

ありさが酒臭い口で言いました。

「そうなんですか」

樹里はビックリしています。

「これでみんなに覚えてもらえたね、なぎさちゃん」

蘭が微笑んで言うと、なぎさもにっこりして、

「はい」

と大きく頷いて、バッグから手帳を取り出し、

「こんなに大きくメモしておいたのに、誰もお祝い言ってくれなくて、寂しかったけど、今はとっても嬉しいです」

カレンダーに大きな字で「お誕生日」と書かれています。

でも、普通自分の誕生日をメモする人がいるのでしょうか？

なぎさは忘れっぽいから仕方ないかも知れません。

しばらくして、誕生日会は終了しました。

何故かすっかり意気投合したありさとなぎさは二次会に突撃です。

樹里は由里達を送り出し、通常業務に戻ります。

「左京、何か隠してるでしょ？」

蘭が囁きます。

「そうなんですか」

樹里もそれに気づいて左京を見ました。

「この前、あの子から依頼を受けた時、免許証を見せてもらって、生年月日を書き写したんだ」

「それが？」

蘭は訝しそうな顔で左京を見上げます。左京は肩を竦めて、

「あの子の誕生日は、一月一日。樹里と一緒の誕生日じゃないよ」

「ええ？」

蘭は仰天しました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。左京は樹里を見て、

「樹里はなぎささんに誕生日を教えた事はあるのか？」

樹里はニコッとして、

「あるかも知れません」

どうやら覚えていないようです。

「多分その時、彼女はそれをメモしたんだと思う」

「でも普通、自分の誕生日がわからなくなるなんて事、ある？」

蘭は呆れ気味です。左京は蘭を見て、

「特別な日に生まれると、祝ってもらえないって事があるからな。彼女の場合、元日うまれだから、小さい頃からお祝いしてもらってないんだよ、多分」

「そっか」

蘭はなぎさの事がちょっぴり可哀想になり、涙ぐみます。

「左京さん、ありがとうございます」

樹里が唐突に言いました。左京は驚いて樹里を見、

「何だよ、樹里、突然？　どうしたんだ？」

樹里は目をウルウルさせて、

「なぎささんがショックを受けると思って、その事を言わなかったんですね」

樹里の言葉に蘭もハッとします。

「そんなんじゃねえよ」

左京は樹里のウルウル目にドキッとしながら顔を背けました。

その頃、なぎさとありさはカラオケボックスで大盛り上がりです。

「今年のカウントダウンは、二人で決めよう！」

ありさが泥酔状態（えびぞうじょうたい）で言います。

今年の流行語大賞は「泥酔」と書いて「えびぞう」と読むになります（嘘です　作者）。

「ごめん、ありささん。私、年末年始は家にいないと」

「そうなんだ。残念」

ありさはニヘラーとして言います。

そして次の瞬間、一気に酔いが覚めます。

「一月一日が誕生日だから、お祝いするの」

なぎさの笑顔が眩しくて、何も突っ込めないありさでした。

樹里ちゃん、またまたドロントと対決する

御徒町樹里はメイドです。

最近はサンタ姿での仕事が増えています。

とうとう喫茶店もサンタバージョンを開発しました。

居酒屋に比べると肩も出ていませんし、スカートではなくショートパンツです。

でもそれはそれでマニアには垂涎モノのようです。

「樹里ちゃん、ボーナス、たくさん出すからね」

マスターが言いました。初登場ですが、髭は生やしていません。

「そうなんですか」

樹里はどうしてボーナスがたくさん出るのかわかっていません。

そんなクリスマスづいた喫茶店に、警視庁ドロント特捜班班長の神戸蘭が来ました。

「元気、樹里？」

蘭は笑顔で言いました。

「はい。蘭さんもお元気そうで何よりです」

「それが、あんまり元気じゃないのよね」

蘭は項垂れてカウンターの席に着きました。

「ご注文は？」

樹里は蘭の様子を気にする事なく、仕事をします。

「コーヒーで」

「スペシャルは如何ですか？」

樹里がどこかの店員のように勧めます。

「じゃあ、それで」

考える気力もない蘭は、言われるがままに答えました。

「ありがとうございます」

樹里は笑顔全開でオーダーをマスターに伝えます。

「ドロントからまた予告状が届いたのよ」

「そうなんですか」

蘭が元気がないのは、その予告状の内容のせいでした。

「現在来日中のさる王国の女王陛下のダイヤのネックレスを頂くって……」

「猿の王国の女王様ですか?」

樹里が笑顔で尋ねます。

「違うわよ！　とにかく、これが予告状のコピー」

蘭はイラッとして樹里に紙を渡しました。

「どうぞ」

マスターが蘭にコーヒーを出しました。

蘭はそれを見てギョッとします。

「マスターより愛を込めて」

というクリスマスカードが添えられていたからです。

「他意はありません、それがスペシャルなんです」

マスターは苦笑いして言いました。蘭はホッとします。

「とにかく、左京に渡して。頼んだわよ」

そして伝票を見てまたギョッとします。

「ご、五千円！？」

メニューを見ると、確かに「スペシャル　５０００円」と書かれていました。

（またやられた……）

蘭は項垂れたまま会計をすませ、店を出て行きました。

「ありがとうございました」

樹里は深々とお辞儀をして蘭を見送りました。

そして予告日の夜です。

さる王国の女王陛下は東京一のホテルであるパリスホテルの最上階に宿泊しています。

そのため、他の客は全員泊まれません。

その代わり、警官隊がたくさんホテル周辺を囲んでいます。

ロビーも警官だらけです。

杉下左京達は女王の部屋にいました。

但し、女王は奥の部屋にいて、左京達は控えの間のような別室です。

「下賤の者とは直接お会いにならんのだ」

左京が文句を言うと、ボディガードのような大男が言いました。

「誰が下賤の者だ！」

左京は切れましたが、どうにもなりません。

「ねえ、樹里ちゃんはどこ？」

宮部ありさが尋ねます。左京は肩を竦めて、

「さあね。お前がドロントの可能性があるから、教えないよ」

「ケチ！」

ありさはムッとしました。

すると警察の制服を着た蘭が現れます。

左京は久しぶりに見る蘭の制服姿に萌えました。

「誰が萌えるか！」

地の文を読むのはやめて下さい。

「どうぞ」

ボディガードは蘭を奥の部屋に通します。

「おい、何で蘭は入れるんだよ！？」

「うるさい、下賤の者」

ボディガードは左京の抗議に耳を貸そうとしません。

「畜生、俺は何のためにここに来たんだ？」

左京は歯軋りしました。

実はここでネタバレですが、ドロントは蘭に化けているのです。

ドロントの蘭はまんまと女王の部屋に入ってしまいました。

その上、ボディガードは亀島馨の変装です。

何があっても左京達を中に入れないのが彼の役目なのです。

（ホントに間抜けばかりで笑っちゃうわね）

ドロントの蘭は女王に謁見しました。

「苦しゅうない。近(ちこ)う寄れ」

レースのカーテンで仕切られた向こうから、甲高い女王の声がします。

「はい、陛下」

ドロントの蘭はカーテンを払い、女王の顔を見ました。

「ええ！？」

そこには何故か樹里が笑顔全開で座っています。しかもサンタの格好をしています。

「どうして貴女がここにいるのよ！？」

ドロントは思わず変装を忘れて叫んでしまいます。

「ここにいろと言われたからです」

樹里は笑顔全開で応じました。

「そういう事を訊いているんじゃなくてね……」

ドロントが言いかけた時、

「こういう事よ」

と樹里の後ろから蘭が現れました。

「えええ！？　どういう事！？　貴女は睡眠薬で眠らせたはず……」

ドロントは変装の意味をなくし、正体を現します。

「あれは樹里が変装した私なのよ。樹里には睡眠薬は効かないわ」

蘭が得意満面で言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。蘭は畳み掛けるように言います。

「全て罠なのよ、ドロント。女王陛下なんて来ていないし、ダイヤのネックレスもないわ」

「そんな……」

ドロントは間抜けな顔で唖然としました。

「さあ、観念しなさい、貧乳！」

「うるさいわね！　まだ終わらないわ！」

ドロントは窓ガラスを破り、ハンググライダーを開くと外へ飛びました。

「え？」

するとそこは何故かいきなり地面です。ドロントは瀕死のカエルのように這いずった状態です。

「ここは一階よ、ドロント。エレベーターに細工したの」

蘭が更に得意そうに言います。

「く……」

ドロントは機動隊に取り囲まれます。

「観念するんだな、貧乳」

左京とありさが玄関から回り込みます。

亀島が変装したボディガードはすでに縛られています。

「まだよ。私には優秀な部下がいるのよ」

ドロントは煙幕を張ります。

「わ！」

左京も蘭も視界が利きません。

「いやああん、左京のエッチ」

ありさの妄想タイムが始まります。

煙が消えると、ドロントはいなくなっていました。

「くそ、あと一歩のところで！」

左京が悔しがりますが、蘭はニヤッとします。

「機動隊の皆さん、服を脱いで下さい」

「はい！」

機動隊員が皆服を脱ぎ、下着姿になります。

「そこ！」

一人だけ脱がない隊員がいました。

「ドロント、逃がさないわよ！」

蘭が走ります。機動隊員に変装したドロントは、

「逃げるわよ」

と言うと、ボンと破裂してしまいました。

「ええ？」

蘭は唖然とします。左京とありさは顔を見合わせました。

「トリックよ。彼女は近くにいるはず。探して！」

下着姿の機動隊員が付近を捜索し始めます。

その頃ドロントは、近くにあったマンホールから下水道に降りて逃走していました。

「亀ちゃんが捕まったのは痛いな。何とかしないと」

ドロントはしばらく進んでから外に出ました。

遠くでパトカーのサイレンの音が聞こえます。

「聞こえる、ヌート、キャビー？」

ドロントは無線機を使いました。

「はい、首領」

どうやらドロントの部下のようです。

「しばらく潜伏するわ。迎えに来て」

「はい」

ドロントはＯＬに変装し、部下を待ちました。

（神戸蘭があのメイドに会いに行ったのも罠だったのね。亀ちゃんが動いているのを気取られたのかな？）

ドロントは一人反省会です。

「お待たせ致しました」

その声に反応し、ドロントは車に乗り込みます。

「どちらまで？」

ドロントはハッとして運転席を見ます。

何故かそこには樹里がいました。

「どうして貴女が……」

そこまで言いかけ、答えを予測してやめます。

「さよなら！」

ドロントは車を降りて逃げました。

「またのご利用を」

樹里は笑顔全開で見送りました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、密室殺人の謎を解く

御徒町樹里は探偵メイドです。

今日は珍しく、いつもは暇な杉下左京探偵事務所に依頼がありました。

それは、以前左京が在籍していたG県M警察からでした。

M市内で起こった殺人事件を解明して欲しいという事です。

「妙だな。あそこの署長は俺の事を邪魔者扱いしていたんだ。何かある」

疑い深いだけでなく、小心者でムッツリスケベの左京は、その話を素直に受け取れません。

「取り敢えず、行きましょうよ、左京。G県て、温泉がたくさんあるんでしょ？」

グウタラ所員の本領を発揮して、宮部ありさが言いました。

「M市には温泉はないぞ」

左京は哀れむような目で言いました。しかしありさは、

「だからあ、左京と樹里ちゃんが事件を調べる間に私がホッコリと温泉三昧よん」

「何がホッコリとだ！」

左京はありさのお気楽発言に切れました。

「お前は事務所で留守番だ」

「えええ！？　そんなのずるいぃ。仕事とか行って、二人で温泉満喫するつもりでしょ、スケベ」

ありさが嫌らしい笑みを浮かべて言います。

「温泉満喫なんかするか！　それにどうしてスケベなんだ！？」

左京は血圧が上がりそうです。

「だって、樹里ちゃんと混浴するつもりなんでしょ？」

そう言われ、思わず妄想して鼻血を出しそうになる左京です。

「こ、こ、混浴なんか、す、す、するか！」

動揺し過ぎです。

「あ」

左京はある事に気づきました。

「やっぱりお前も連れて行くぞ、ありさ」

「わーい！　左京大好き！」

ありさは喜んで抱きつきました。

でも、左京は、

（こいつに留守番させたら、電話かけまくって、人呼びまくって、一晩中ドンチャン騒ぎするから、連れて行った方が無難だ）

と思っていました。

そして翌日です。

左京と樹里、そしてありさの三人は、新幹線でG県のT市に着きました。

左京と樹里は、H山付近でドライブして以来です。

ありさはG県は初めてです。

「お待ちしていました、私がM警察の署長の萬田久雄です」

左京は驚きました。署長が替わっていたのです。

「杉下さん、覚えていらっしゃらないでしょうが、貴方がウチの副署長をされていた時、私は刑事課長でした」

「そうなんですか」

何故か樹里が笑顔全開で応じます。

「こちらはお嬢さんですか？」

萬田署長の悪気のない問いかけに傷ついた左京ですが、

「私は杉下の妻です」

樹里がすかさず言ってくれたのでホッとしました。

「ああ、失礼しました。お若い奥様ですね。羨ましいです」

萬田署長は左京を随分歳だと思っているようです。

「ありがとうございます」

樹里は笑顔全開でお礼を言いました。

「それで、こちらの方は？」

署長はありさを見ました。

「副所長の宮部ありさです」

ありさは真顔で名刺を差し出します。

左京は呆れましたが、否定すると話が長くなりそうなので、何も言いません。

こうして三人は、M警察の車で現場へと向かいました。

「M市は、平成の大合併で大きくなりましてね。赤白山の山頂もウチの管轄なんです」

「そうですか」

左京はそこがどこなのかもわからずに適当に返事をしていました。

やがて、一行は殺人現場に着きました。

そこは赤白山にある別荘の一つです。

「こちらです」

署長が案内してくれたのは、その別荘のバスルームでした。

「広ーい。私のアパートのお部屋より大きい！」

ありさが仰天します。それもそのはずです。畳にして十畳ほどの広さなのです。

バスタブも大人三人がゆったりと入れます。

「ウチのお風呂より広いですね、左京さん」

樹里が言います。

「それはそうだ。ウチのはユニットバスだからな」

左京は悲しそうに言います。

「これくらいあったら、いつも一緒に入れますね」

樹里の大胆発言に左京は必死で鼻血を止めました。

「ほお。それはまた羨ましい」

萬田署長が軽蔑の眼差しを左京に向けます。

ありさは面白くないのか、剥れています。

「被害者はバスタブの中で鈍器のような物で後頭部を殴打されて殺されていました。洗い場は水浸しでしたが、本人以外が出入りした形跡はなく、窓もドアも内側からしっかり鍵がかかっていました」

左京はドアと窓を確認します。ドアはガラスが壊されています。警察が入る時に壊したようです。

「これは密室殺人だな」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言います。殺人現場で不謹慎です。

「容疑者は二人です。被害者の妻、そしてその息子」

「その息子？」

署長の言い回しの不自然さに気づいた左京が言います。

「奥さんの連れ子なんです。被害者とはたびたび揉めていたようです」

「なるほど」

ふと気づくと、樹里がいません。

「おい、樹里は？」

「知らないわよ」

ドアは閉じられたままで、窓も開いていないバスルームから樹里がいなくなってしまいました。

「樹里！」

焦った左京が叫びます。

「はい、左京さん」

すると樹里がバスタブから急に現れました。

「え？」

一同驚愕です。左京がバスタブを覗くと、底に抜け穴があります。

「何だ、これは？」

署長も知らなかったようです。左京は樹里と入れ替って中を見ました。

「外に通じているようだ。何て事だ」

左京は署長に、

「発見当時、お湯が出されたままではなかったですか？」

「ええ。蛇口が全開にされていたようです」

つまり、犯人は被害者を別の場所で殺害してここに運び、蛇口をひねってから底の蓋を閉じ、抜け穴を通って脱出したのです。

「つまらない密室だ。作者の浅知恵だな」

左京が暴言を吐きました。読者からの酷評を封じるためのようです。

抜け穴の事を妻とその息子に話すと、二人は動揺しました。

驚いた事に、妻と息子は実の親子ではなく、妻の前の夫の連れ子でした。

二人は愛し合っていて、共謀して被害者を殺したのです。被害者の莫大な遺産が目当てでした。

こうして、赤白山密室殺人事件は、実にあっさりと解決しました。

「さすが噂に違わぬ名探偵ですね」

萬田署長が絶賛します。

「わはは、それほどでもありませんよ」

左京は謙遜して言いました。

「また何かありましたら、よろしくお願いします、奥さん」

署長は樹里に言っていたのでした。

「はい」

樹里は容赦なく笑顔全開で応じました。

帰りの新幹線で、左京がずっと拗ねていたのは言うまでもありません。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、叔母さんになる

御徒町樹里はメイドの傍ら、探偵としても活躍しています。

先日も、G県で起こった密室殺人事件を知らないうちに解決しました。

公私共に忙しい樹里ですが、今日は私的に忙しい日です。

彼女の姉の璃里がいよいよ出産が間近なのです。

「落ち着くんだ、樹里。今は出産は安全だからな」

樹里に話をしている夫の左京の方がずっと落ち着きがありません。

熊のように病院のロビーを歩き回り、看護師さん達に叱られています。

「左京ちゃんたら、自分の子供でもないのにどうしてそんなにソワソワしてるの？」

樹里の母親の由里が呆れて言います。

「そうだそうだ。杉ちゃん、落ち着きがないぞ」

樹里の妹の真里が言います。

「そ、そうかな？」

左京は苦笑いして椅子に座りました。

「ねえ、樹里お姉ちゃんはまだ赤ちゃん産まないの？」

屈託のない笑顔で、希里が尋ねます。

「そうね。まだみたいね。早く欲しいですね、左京さん」

樹里が笑顔全開で言ったので、左京は真っ赤になって、

「そ、そうだな」

と答えました。

「杉ちゃん、どうしてお顔が赤いのお？」

末っ子の絵里が言いました。左京は慌てて、

「ここが暑いからかな？　ちょっと外に行って来る」

とロビーを出て行ってしまいました。

左京は玄関で璃里の夫である竹之内（たけのうち）一豊（かずとよ）氏とバッタリ会いました。

「遅くなりました。妻はまだ？」

竹之内氏が尋ねます。左京はロビーの方を見て、

「ええ。まだです。みんな、ロビーで待機していますから」

「ありがとうございます」

竹之内氏は立ち去りかけて、

「お互い、若い妻を持つといろいろ大変ですが、頑張りましょう」

「はい」

竹之内氏はロビーへと向かいます。

「俺は貴方ほど歳じゃないんだけどなあ」

竹之内氏は由里より年上です。左京は由里より年下なのです。

その時、M警察の署長に樹里を娘だと思われた事を思い出し、

「俺もそれほど若くないって事か」

と苦笑いする左京です。

「あれ？　璃里さんは樹里と幾つ年が違うんだっけ？」

年の差だけで考えると、左京と竹之内氏は立場が変わらないのかも知れません。

外に出て、庭を散歩している患者達を眺めていると、樹里が来ました。

「左京さん、生まれるみたいです」

「そうか」

二人が玄関に戻ると、宮部ありさと神戸蘭が来ました。

「丁度いいタイミングだぞ」

「そうなんだ」

四人は揃って中に入ります。

ロビーに戻ると、竹之内氏と由里がいません。

「二人は？」

左京が真里に尋ねました。

「竹ちゃんは璃里お姉ちゃんのとこに行ったよ。お母さんは、いろいろ準備があるからって、璃里お姉ちゃんの病室に行った」

「では、私もお母さんのところに」

樹里が歩き出すと、

「俺も」

「左京さんはここにいて下さい」

「はい」

樹里のきっぱりとした言い方に左京はシュンとしてしまいます。

「樹里お姉ちゃんは、看護師さんでもあるんだから、大丈夫だよ、杉ちゃん」

本当にわかっているのか、希里が言いました。

「取り敢えず、分娩室の方に行ってみましょう」

蘭が提案し、一同は奥へと進みました。

分娩室の前に行くと、そこにはソワソワしている竹之内氏がいました。

「前の妻とは子供ができないまま、死別してしまったので、この年で初体験なんです」

竹之内氏は照れ臭そうに言いました。

「最初は出産に立ち会おうと思ったのですが、土壇場で怖気づいてしまいました」

「そうですか」

左京は思いました。

（俺は絶対に無理だ。多分、気絶してしまう）

すでに立会い出産を見送っている情けない男です。

「まだみたいね」

由里と樹里もやって来ました。

「心配しなくても、あの子は私の子ですから、大丈夫ですよ、竹之内さん」

由里が不安そうな竹之内氏を励まします。

左京は由里がまともに話すのを初めて見ました。

「ありがとうございます、お義母（かあ）さん」

竹之内氏が涙ぐみます。

そして、璃里が分娩室に入って数時間が経ちました。

緊張が続いていた竹之内氏は、グッタリしてソファに座っています。

今度は代わりに左京が落ち着かなくなっています。

「まだなのか！」

「左京さん、座っていて下さい」

樹里にピシャリと言われ、左京はまたシュンとしました。

「はい」

真里達も手を握り合っています。

蘭とありさも、ジッと分娩室のドアを見つめています。

そして。

遂に赤ちゃんの産声が聞こえて来ました。

「産まれた？」

竹之内氏が不意に顔を上げます。

「産まれたぞ！」

竹之内氏は雄叫びを上げました。

「璃里！」

竹之内氏はいきなり分娩室に飛び込んで行きました。

「良かったあ、樹里。これでお前も叔母さんだな？」

左京が涙ぐんで言います。

「そうですね」

樹里は笑顔全開で言いました。

「すみませんでした」

何故か竹之内氏が謝りながら出て来ました。

「どうしたんですか？」

左京が尋ねました。すると竹之内氏は恥ずかしそうに、

「璃里の分娩室は隣でした」

一同は唖然としました。竹之内氏はそれなりにオッチョコチョイでした。

「そうなんですか」

樹里だけは笑顔全開です。

そして更に数時間後、今度こそ璃里の出産が終わりました。

玉のように奇麗な女の子です。

樹里は叔母さんになりました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、結婚式を挙げる？

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために……。

すみません、間違えました。

御徒町樹里はメイドです。探偵としても優秀です。

先日、樹里の姉である璃里に子供が生まれ、実里（みり）と名づけられました。

将来ミスター隠し芸と結婚しそうな名前ですが、字が違います。

樹里は実家に行き、里帰りをしている璃里の手伝いをしています。

「悪いわね、樹里。貴女のところも新婚なのに」

璃里が実里を抱いて、樹里に言います。早口言葉みたいです。

「大丈夫よ、お姉さん。左京さんは一人暮らしが長いから」

「いえ、そういう事ではなくてね……」

璃里は苦笑いします。

「それから、あなた達、結婚式挙げないの？」

「そうなんですか」

「そうなんですかじゃなくて、貴女の事なのよ、樹里」

璃里が手こずるのですから、他人にはもっと大変です。

璃里は母親の由里が占いの仕事を終えて帰宅すると、樹里の事を相談しました。

「そうだね。そろそろどうなのさ、樹里？」

由里も心配していたようです。

「左京さんは、仕事が軌道に乗ってからと言っています」

樹里は言いました。すると由里が呆れて、

「そんな事を行ってたら、おばあさんになっちゃうよ、樹里。年内は難しいかも知れないけど、年明け早々にも式を挙げなさい。どうしてもダメなら、左京ちゃんは私が説得するから」

「はい、お母さん」

樹里は由里と璃里の勧めに従って、結婚式を挙げる事にしました。

その日の夜、一時左京のアパートの戻った樹里は、左京に結婚式の話をしました。

「そうか。由里さんと璃里さんに余計な心配かけてるのか」

左京は腕組みして考え込みました。

「母と姉の事は気にしないで下さい。私も左京さんが嫌なのなら、式は挙げなくて構いませんから」

樹里の言葉に左京は涙ぐみました。

「樹里……」

左京は思わず樹里を抱きしめました。

欲情したのでしょうか？

「左京さん？」

樹里は左京が泣いているのに気づきました。

「ありがとう、樹里、そして、不甲斐ない夫ですまない」

「左京さん……」

樹里も左京を抱きしめました。

二人は見つめ合い、口づけを交わします。

そして、とうとう大人の時間に突入しました。

翌朝です。

左京は鼻をいい匂いに刺激されて、目を覚ましました。

ふと見ると、樹里がキッチンで料理をしています。

「おはよう、樹里」

「おはようございます、左京さん」

樹里は笑顔全開で応じました。もちろん、男性の憧れ、「〇にエプロン」などではありません。

左京はその笑顔を見て赤面します。

「と、トイレ」

左京は裸のままトイレに駆け込みます。

「左京さん、服を着て下さい」

樹里が恥ずかしそうに言いました。

「す、すまん！」

中から左京が謝りました。

そして朝食をすませると、左京が居ずまいを正しました。

「樹里」

「はい」

その笑顔にまた赤面する左京です。

「式を挙げよう。その方がいい」

「左京さん」

また二人は抱き合いました。

「左京さん、困ります」

服を脱ぎかけた左京を樹里が窘(たしな)めました。

「あ、悪い……」

左京は真っ赤になって服を着直します。

「では、私は母達に報告して来ます。その後で事務所に行きますね」

「わかった」

二人はアパートを一緒に出ました。

左京が事務所に入ると、珍しく宮部ありさが先に来ていました。

ありさは左京を見るなり、素っ頓狂な声を出しました。

「あっれえ？」

「な、何だよ？」

左京はムッとして机に着きます。ありさは左京の顔を覗き込んで、

「何だか、顔が艶艶（つやつや）してるんですけど、旦那」

「え？」

左京はギクッとしました。ありさはニヤッとして、

「ああ、ひょっとして、樹里ちゃん……」

「ああ、電話しなくちゃ！」

左京は大声でありさの言葉を遮り、携帯を取り出してどこかにかけるフリをします。

「何なのよ、全く」

ありさはムスッとして自分の席に戻りました。

しばらくして、樹里が事務所にやって来ました。

左京は仕事の電話に出ています。

「はい、わかりました。ではその金額でお受け致します」

ありさは樹里に、

「ねえ、左京って、今日顔が艶艶してるでしょ？」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「あれね、きっと、樹里ちゃんに内緒でいけないお店に行ったのよ。怒った方がいいわよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。ありさは呆気に取られますが、

「意味わかってるの、樹里ちゃん？　左京はね、風……」

「ありさ、てめえ、何言ってるんだ！」

左京が割って入ります。

「違いますよ、ありささん」

樹里が笑顔で言いました。すると察しの悪いありさにも、事情がわかったようです。

「な、なあんだ、そういう事なんだ」

ありさはニヤニヤして言いました。

「それならそうと、早く言ってよ、左京」

「そんな事、積極的に言う事じゃねえだろ！」

左京は怒りました。するとそこへ神戸蘭が来ました。

「あら、お揃いね」

「聞いてよ、左京ったらね……」

ありさが蘭にヒソヒソ話します。

「ありさ、何喋ってるんだよ！？」

左京が止めに入ろうとすると、蘭が、

「あんたねえ、いくら樹里が許してくれたからって、何もそんな店に行かなくてもいいでしょ！」

左京はキョトンとしました。

「あれ？」

蘭も様子が変なのに気づきます。

ふと見ると、ありさは逃亡した後でした。

「だ、騙したな、ありさ！」

蘭は顔を赤くして、事務所を飛び出して行きました。

「何なんだ、あいつらは？」

左京は入口に塩を撒きました。

「左京さん」

樹里が声をかけます。

「うん」

左京は樹里を見ました。

「式場の手配や日取りは、母が占いで決めるそうです。全部任せて欲しいと言ってました」

「そうか……」

一抹の不安が残る左京でしたが、反対する訳にも行かず、

「わかった。そうしてもらってくれ」

と言いました。

（どうなるのかなあ、結婚式……）

左京の憂鬱な日々が続きそうです。

樹里ちゃん、なぎさとお茶する

御徒町樹里は居酒屋、喫茶店、探偵事務所で活躍するメイドです。

インターネットでは、樹里自身が知らないうちに大活躍する小説とかが書かれていて、動画サイトも大賑わいです。

とりわけ、神村何たらとか言う人は、樹里を勝手にモデルにして、荒稼ぎしているという噂です。

勝手にグッズを作ったり、人形を作ったりして大儲けしているそうです。

樹里の親友である船越なぎさは、最近始めたツイッターでその事実を知りました。

彼女は樹里にその事を知らせるため、杉下左京探偵事務所に来ています。

「樹里はもうすぐ戻ると思いますので、おかけになってお待ち下さい」

左京は顔を引きつらせながら言いました。

「はい」

なぎさは見た目は可愛い女の子ですが、樹里と同じくらい不思議ちゃんなので、左京はなるべく関わり合いになりたくありません。

（樹里の相手だけでも疲れるのに）

それでも樹里の事を愛しているので苦にならない左京ですが、なぎさの奇天烈さはごめんなのです。

（こんな時に限って、ありさの奴、クリスマスだとか言って休みやがって）

いつもなら邪魔な宮部ありさでも、なぎさの「危険球」避けくらいにはなると思う左京です。

「何か飲みますか？」

左京は愛想笑いをして尋ねました。するとなぎさは、

「クリームソーダでいいです」

「……」

喫茶店じゃねえんだぞ！　怒鳴りたい衝動を何とか堪えて、左京は言います。

「それはちょっと無理かな。他にないですか？」

「じゃあ、コーラフロート」

「……」

我慢の限界水位が訪れそうです。

「それもありません。コーヒーか紅茶だったらありますが」

左京は口をヒクつかせて言いました。

「そうですか。じゃあ、日本茶で」

聞いてなかったんかい！

左京は発狂しそうです。

その時、樹里が戻りました。

左京は今日ほど樹里が頼もしく見えた事はありません。

「只今帰りました」

「お、お帰り、樹里！」

抱きついてキスしたいくらいですが、なぎさがいるので今は我慢です。

「はい、なぎささん」

樹里は大きな紙袋をなぎさに渡しました。

「おお、ありがとう、樹里」

中から出て来たのは、クリームソーダとコーラフロートと日本茶でした。

左京はマジックショーでも見ている心境です。

「じゃあ、私はクリームソーダ」

なぎさは嬉しそうにカップを手にします。

「左京さんはどちらがいいですか？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。

「じゃ、俺は日本茶で」

三人はソファに座ってお飲み物タイムです。

なぎさの話を聞き終わり、左京は深刻な顔をしましたが、樹里は笑顔全開です。

「そうなんですか」

なぎさは樹里の笑顔を見て、

「樹里、わかってるの？　あんた、利用されてるのよ、その神様律子とかいう人に」

神様ではないと思いますが、まあいいでしょう。

「樹里の動画がいろいろなサイトで見られるというのは、以前聞いた事がある」

左京はその話を元同僚の加藤真澄警部に聞きました。

加藤警部も樹里の動画と画像を収拾していると聞き、左京は、激怒して加藤警部のパソコンを壊そうとした事があります。

「あいつら全員、樹里の画像や動画を見て……」

そこまで言いかけて、左京はハッとします。

樹里となぎさがジッと自分を見ているのです。

（い、いかん。下手な事は言えないぞ）

「見て、楽しむのはいいが、金儲けをするのは許せないな」

うまく言い繕えてホッとする左京です。

「きっと樹里を見て、エッチな事してるのよ、男子共は！」

なぎさがあっさり言いました。

左京の努力が水の泡です。

「そうなんですか、左京さん？」

樹里の無茶ブリに左京はお茶を溢しそうになります。

「じゅ、樹里は可愛いからな。そんな事もあるかも知れない」

左京は顔を赤らめて言いました。

「左京さんもそういう事をしてるのですか？」

更に樹里が核心に迫ります。

左京は嫌な汗をたくさん書きましたが、

「そ、そんな事する訳ないだろう」

と慌てて言います。

「そうなんですか」

樹里は何故か悲しそうです。

「どうしたの、樹里？」

なぎさが心配して尋ねます。

「左京さんは私の事を可愛いと思っていないそうです」

えええ？　どうしてそうなるんだよ！？

左京は項垂れました。

「まあ、酷い。旦那さんなのに、奥さんが可愛くないだなんて」

助けてくれ。

左京は天然二人に責められて、泣きそうでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、年末にまたドロントと対決する（前書き）

今年はこれでおしまいです。

樹里ちゃん、年末にまたドロントと対決する

御徒町樹里は居酒屋と喫茶店と新聞配達と探偵をこなすスーパーメイドです。

忘年会シーズンを迎え、樹里が働いている居酒屋は大忙しです。

ようつべやニコ動のおかげで、樹里の人気が更に高まり、彼女を一目見ようと現れるマニア達が多くなっています。

商売に貪欲な店長は、樹里のサイン入りのTシャツや団扇、バスタオルまで販売しています。

サインと言っても、「御徒町樹里」と書いてあるだけです。

でも、資格マニアの樹里は書道の腕前も確かで、海原U山も逃げ出すような見事な書体です。

しかも全て自筆なので、ネットオークションで高値がつくかも知れません。

「いらっしゃいませ」

樹里が笑顔全開で出迎えたのは、会社帰り風の三人連れの女性でした。

二十代後半、二十代前半、十代か二十代か微妙な子の三人です。

三人は周囲のエロオヤジ達が鼻の下を伸ばしてしまう美人です。

とりわけ、二十代前半と思われる女性は、目がウルウルしていて、美しさが強烈です。

三人は奥の個室に席を予約していました。

「いらっしゃいませ、ドロントさん」

樹里がいきなりネタばらしです。

「な、何でわかったのよ！」

二十代後半の女性がビクッとして尋ねます。

「タイトルでわかりました」

樹里は笑顔全開で応じます。ドロントは項垂れました。

「掟破りな子ね、相変わらず」

ドロントは気を取り直して、

「この子はヌート」

と二十代前半の子を見て言います。

「よろしくお願いします」

ヌートは礼儀正しい人のようです。樹里は深々とお辞儀をして、

「よろしくお願い致します」

「で、こっちがキャビー」

ドロントは十代か二十代かわからない子を見て言いました。

「よろしく！　樹里ちゃん、可愛い！」

キャビーはミーハーな子のようです。

「ありがとうございます」

樹里は深々とお辞儀をします。

「では、ご注文がお決まりになりましたら、こちらのボタンを押して下さい」

樹里はおしぼりを置くと、厨房に戻ろうとします。

「ちょっと！　他に何か訊く事があるでしょ！」

ドロントが呆れ顔で言います。

「ああ」

樹里はポンと手を打ち、

「キャビーさんはドロントさんのお嬢さんですか？」

「違うわい！」

ドロントは切れました。

「私をいくつだと思ってるのよ！」

樹里が答えようとしたので、

「やめた方がいいよ、樹里ちゃん。多分首領はまた切れるから」

キャビーが止めました。

「どういう意味よ、キャビー？」

ドロントが睨みます。

「あはは、注文しなくちゃ」

キャビーは笑って誤魔化そうとします。

「まあいいわ。私達が来たのは、他でもないわ」

ドロントが真剣な顔で樹里を見ます。

「はい」

樹里もドロントを見ます。

「明日の午後十時に……」

ドロントがそこまで言った時、

「樹里ちゃんスペシャル、ご予約のお客様が見えました！」

と店長が樹里を呼びに来ました。

「申し訳ありません、失礼します」

樹里は厨房に行ってしまいました。

「忙しそうですね」

ヌートが呟きます。ツイッターにではありません。

「オーダーでしたら、私が承ります」

店長は美人三人なので、嬉しそうです。顔がニヤついています。

「生中三つ」

ドロントがぶっきら棒に言います。

「生中三つですね。こちらのお子さんのご注文は？」

店長は触れてはいけない事を言ってしまいました。

「誰がお子さんだ！　私は二十歳！　失礼しちゃうわ！」

キャビーは激怒しました。

「も、申し訳ありません、では、お母さんとお姉さんのご注文とご

一緒という事で」

店長は更に言ってはいけない事を言ってしまいました。

「誰がお母さんだ！」

ドロントはまた切れました。

「も、申し訳ありません！」

店長は逃げるように厨房に行きました。

「何なのよ、この店は！」

ドロントとキャビーが見事にハモって言います。

「まあまあ」

実害のなかったヌートが二人を宥(なだ)めます。

「何だか仕事するの嫌になっちゃった。今年はもうお休みにするわ」

ドロントは頬杖を突いて言いました。

「わーい、やったあ！」

キャビーは大喜びです。

そこへ店長が樹里ちゃんスペシャルを持って戻って来ました。

「先ほどは大変失礼致しました。当店の看板メニューである樹里ちゃんスペシャルをサービスさせていただきますので、お許し下さい」

店長は土下座して謝り、また逃げるように厨房に行ってしまいました。

「うわ、すごい！　美味しそう！」

キャビーがよだれを垂らします。

「本当。すごくいい匂いね」

ヌートも目を輝かせます。

「毒でも入ってるんじゃないの」

ドロントは疑いの眼差しです。

「だったら、首領は食べないで下さいね」

キャビーが早速食べ始めます。

「おいしい！　何これ、お好み焼きみたいだけど、全然違う。今まで食べた事がないくらい、美味しい！」

キャビーが絶賛します。

「本当ね。おいしいわ。どうすればこんなに美味しくなるのかしら？」

ヌートは不思議そうです。

ドロントは気になり始めたようです。

「一口食べさせて」

「もう、我がままなんだから」

キャビーが呆れながらドロントに食べさせます。

「お、美味しい！」

ドロントはさっきまでの悪態を恥じました。

「決まりね。今日で仕事納め」

「はい」

ヌートとキャビーは笑顔で応じました。

そしてドロント達は料理を堪能し、帰る事にしました。

「ありがとうございました」

樹里が見送りに来ました。

「来年は必ず私達が勝つわよ。覚悟していなさいよ」

ドロントが言います。樹里は笑顔全開で、

「そうなんですか」

こうして、二人の対決は持ち越しとなりました。

樹里はアパートに帰り、左京にドロントの話をしました。

「また現れたのか、あの貧乳は」

「はい。二人のお嬢さんといらっしゃいましたよ」

樹里はヌートとキャビーがドロントの娘だと思い込んでいるようです。

「え？　あいつ、子供がいたのか？　いくつくらいだ？　年長さんとか？」

左京は尋ねました。すると樹里は、

「いえ、お一人は私と同じくらいで、もうお一人は璃里お姉さんくらいです」

「え？」

左京は仰天しました。

（あの貧乳、そんなに年だったのか？）

すっかり二人の子持ちにキャラ確定のドロントです。

そして、翌日の午後十時。

寒空の下、ドロントの部下の亀島馨はドロント達を待っていました。

「遅いなあ、首領達。どうしたんだろう？」

仕事は延期になった事を教えてもらっていない哀れな亀島でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、年末にまたドロントと対決する（後書き）

来年もよろしくお願いします。

樹里ちゃん、赤ちゃんに会いにゆく

御徒町樹里は、居酒屋と喫茶店と新聞販売所で働くスーパーメイドです。

年明け早々、樹里は弁天様の格好で新聞配達をし、近所の浪人生達がありがたがって拝んだそうです。

但し、弁天様が受験には関係ないのは、浪人生達には内緒です。

しかも樹里を拝んでも、合格する事はないでしょう。

そして三が日が終わった四日に、暮れに女の子を出産した姉の璃里の家へ夫の杉下左京と訪れました。

「いやあ、昨年はいろいろとお世話をおかけしました」

璃里の夫の竹之内（たけのうち）一豊（かずとよ）は、璃里の父親くらいの年齢です。

前の奥さんとは死別で、子供もいないので、璃里との赤ちゃんには大喜びです。

「この子が成人するまでは、元気でいたいですね」

一豊は実里（みり）と名づけたその子を抱いて言います。

「私達も早く赤ちゃん欲しいですね」

樹里が笑顔全開で言いました。すると左京は、

「そ、そうだな」

と顔を赤らめます。また邪(よこしま)な事を考えているようです。

「抱いてあげて下さい」

一豊が左京に言います。

「え、お、俺がですか？」

ビビる左京です。大木さんの相方ではありません。

「はい」

一豊があっさりと左京に実里を預けます。

「おお」

顔を強張らせて、左京は実里を抱きました。

その途端、まさしく火が点いたように実里が泣き出しました。

「ひい！」

左京は驚いて樹里に実里を預けました。

すると、何かのスイッチを切り替えたかのように、実里が笑い出

しました。

「……」

左京は酷く落ち込みました。

（俺が怖いのだろうか？）

「どうぞ」

璃里がキッチンからやって来て、左京達に紅茶を出してくれました。

「どうしたのですか、左京さん？」

璃里が左京の暗さに気づいて尋ねます。

「今、実里ちゃんを抱かせてもらったのですが、いきなり泣き出されて……」

左京も泣き出しそうな顔をしています。

「仕方ないですよ。樹里は病院に毎日来ていて、夫も実里に付きっ切りでしたから」

璃里が慰めてくれました。

「はあ」

左京は、

（もし、俺と樹里の子供も、俺に懐かなかったらどうしよう？）

などと妄想を始めています。

「怖がって抱くと、赤ちゃんにそれが伝わります。もう一度落ち着いて抱いてみて下さい」

璃里に言われ、左京は深呼吸をして、樹里から実里を受けます。

ところが、今度は左京が触っただけで泣き出しました。

樹里から離れていないのにです。

「や、やめときます……」

左京はすっかり落ち込んでしまいました。

璃里と一豊は顔を見合わせます。

「少し時間がかかりそうですね」

一豊が言いました。

「心配しないで下さい、杉下さん。私も最初は泣かれましたよ。璃里が離れただけで泣きましたから」

「そうですか」

左京は少しだけ勇気づけられました。

しばらくして、二人は璃里達の家を出ました。

「左京さん」

帰り道、樹里が話しかけます。

「何？」

考え事をしていた左京が、ハッとして樹里を見ます。

「あまり思いつめないで下さいね。実里は左京さんと久しぶりに会ったのですから。そのうちに泣かれなくなりますよ」

「うん」

左京は樹里に言われて気持ちが楽になりました。

「俺、出産には立ち会うから。育児もできるだけ手伝うから」

左京は樹里を真っ直ぐ見て宣言しました。

「嬉しいです、左京さん」

二人は周囲に誰もいないのを確認してから、口づけしました。

「でも、出産に立ち会って、気絶しないで下さいね」

「え？」

樹里にそう言われ、途端に怖くなる左京です。

（気絶するほど、なのか？）

前言を撤回したくなる左京でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、すっかり騙される？

御徒町樹里はメイドです。肩書きが多過ぎるくらいのメイドです。

樹里が勤める居酒屋では、とうとうG県名物の「縁起達磨」の樹里版を売り始めました。

G県T市にある達磨屋さんが全面協力です。

メイドバージョンとサンタバージョンと弁天様バージョンがあるそうです。

宗教的にどうなのかという達磨です。

ある日の事です。杉下左京探偵事務所に、樹里の姉の璃里の夫である竹之内一豊が現れました。

「いつぞやは失礼しました」

左京はソファを勧めながら挨拶します。

「いえ、こちらこそ」

一豊は微笑んで応じます。左京は樹里が給湯室に行くのを見てから、

「今日は何か？」

「実は、私の知り合いがホテルを経営しておりまして」

「そうなんですか」

突然戻って来て、サッとお茶を出しながら笑顔全開で応じる樹里に、一豊と左京はビクッとします。

「そのホテルにある時価数千万円はすると言われている、黄金のシャンデリアをドロントが盗むと予告して来たのです」

「あの貧乳がですか？」

左京は仰天しました。まさか、そんな話をされると思っていなかったからです。

「つきましては、ドロントに関しては、第一人者である杉下さんに、是非、ドロントの犯行を阻止して欲しいと頼まれまして」

「なるほど」

左京は樹里を見ました。樹里は一豊を見ました。

一豊はありさを見ようとしましたが、ありさは休みです。

「お引き受けしましょう」

「ありがとうございます」

左京は身を乗り出して、

「犯行の予告日はいつですか？」

「今週の土曜日、十五日の大安です」

一豊が言いました。左京はキョトンとします。

「大安？」

「あ、いえ、何でもありません。これが、そのホテルのパンフレットです。目を通しておいて下さい」

一豊は左京にパンフレットを渡すと、そそくさと事務所を出て行きます。

「お願いしますよ」

左京は一豊の様子が変なのに気づきました。

「まさか、ドロントがお義兄（にい）さんに変装して来たのではないだろうな」

「今のは間違いなくお義兄さんですよ、左京さん」

樹里が言います。

「どうしてそんな事がわかるんだ？」

左京は不思議に思って尋ねました。

「お義兄さんは、お茶を飲む時、必ずお茶碗を三回回すんです」

「そうなのか」

左京は全然気づいていませんでした。

それでも左京は、何だかモヤモヤしていました。

そして、予告の日の一月十五日、土曜日、大安です。

左京と樹里は、そのホテルに向かいました。

「あれ？」

左京は、ホテルが通常通り営業しているので、驚きました。

「どうして営業してるんだ？　お客が危険だろう」

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔全開です。

「全く、何を考えているんだ！」

左京はホテルのフロントに行きました。

「探偵の杉下左京です。支配人にお会いしたいのですが」

すると受付の女性は爽やかな笑顔で、

「お待ちしておりました。こちらでございます」

と左京達を案内します。

「どういう事だ？」

左京は樹里と顔を見合わせました。

「こちらです」

その女性はある大広間の前で立ち止まり、扉を開けました。

「さ、どうぞ」

左京と樹里は女性に背中を押され、暗くなった大広間に入りました。

その途端、二人にスポットライトが当たります。

「新郎新婦の入場です」

結婚行進曲が流れ、拍手が沸き起こります。

次第に中が明るくなり、由里や璃里、一豊、真里、希里、絵里、ありさ、蘭、その他大勢の人達が見えて来ました。

「おめでとう、樹里ちゃん」

中には泣きながら叫んでいる者もいます。

左京と樹里は真里達に手を引かれて、席に着きました。

「みんな……」

左京は感動して目を潤ませます。樹里も泣いています。

「皆さん……」

そして、披露宴が始まります。

司会進行は一豊です。隣で実里を抱いた璃里が応援しています。

すでに飲んだくれたありさが歌を歌います。

遅れて現れた船越なぎさが、祝辞を読みました。

「左京さん、樹里、おめでとう。次は遅れないで来るから、許して下さい」

とんでもなく縁起でもない祝辞です。

そしてクライマックスのケーキ入刀です。

左京と樹里は、大急ぎで着替えです。

ウェディングドレス姿の樹里は美しく、左京は鼻血が出そうです。

「ケーキ入刀です。皆さん、カメラのご用意を」

一同が二人の前でカメラを構えます。

左京と樹里はナイフを持ち、ケーキに添えます。

「樹里、幸せになろうな」

「はい、左京さん」

二人は笑顔でケーキ入刀しました。

たくさんのフラッシュが焚かれ、まるで芸能人の結婚披露宴のようです。

「式なしの披露宴のみになってしまって申し訳ないです」

一豊がそっと二人に詫びます。

「とんでもない。ありがとうございました」

左京は涙ぐんで言いました。

「式は、小野神社さんに頼んであるからね！」

ほろ酔いの由里が言いました。

「小野神社？」

左京は樹里と顔を見合わせました。

そして数日後、左京のアパートに、ホテルから巨額の請求書が届きましたとさ。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、船越なぎさの従妹の家にゆく

御徒町樹里は、居酒屋で弁天様のコスプレで働き、喫茶店でゴスロリ服で働き、寒さ対策のため、新聞配達は南極越冬隊並みの装備でしているメイドです。

一部のマニアは、南極越冬隊と言うフレーズで悶絶するらしいです。

詳細は不明です。各自でググって下さい。

樹里は、親友の船越なぎさに誘われ、なぎさの従妹の家に来ています。

そこは超有名な推理作家である大村美紗（おおむらみさ）の家なのです。

ですから、大豪邸です。

なぎさの従妹は、美紗の一人娘のもみじです。

もみじは高校二年生で、親の躾（しつけ）が厳しかったのか、大人しい子です。

なぎさと同じＤＮＡはほとんど存在しないようです。

「いらっしゃい。いつもなぎさがお世話になっています」

美紗がもみじと出迎えてくれました。

「お邪魔致します」

樹里はメイドの時の癖が出たのか、深々とお辞儀しました。

「まあ、礼儀正しいお嬢さんね」

美紗がニコニコして言います。

「樹里はこう見えても、結婚してるんだよ」

なぎさが笑顔で言います。

すると突然、美紗の顔がピクピクッとしました。

隣に立っているもみじの顔色が悪くなります。

「ここで立ち話も何でしょうから、リビングへどうぞ」

もみじが慌てて言います。美紗はプイと顔を背け、

「私は仕事がありますので、失礼します」

と言うと、奥へ行ってしまいました。

「どうしたの、叔母様?」

なぎさがキョトンとします。

「なぎさお姉ちゃん、この前言ったでしょ。お母様、お父様と離婚したばかりだって」

「そうなんですか」

樹里は心配そうに言いました。

「あれ、そうだっけ？　全然覚えてないや」

なぎさは笑顔全開で言いました。もみじは溜息を吐き、

「どうぞ」

と先導します。

樹里達はリビングルームに通されました。

そこには、美紗がもらったたくさんの賞状が額に入れられて飾られています。

「凄いわね、相変わらず」

なぎさは自分の失言で場の雰囲気が悪くなった事などまるで感じていないようです。

「お飲み物は？」

もみじが尋ねます。

「私、クリームソーダ」

なぎさも相変わらずのようです。

「樹里さんは？」

もみじが尋ねます。

「私はコーヒーで」

「はい」

もみじはなぎさに何も言わず、部屋の隅にある大きな冷蔵庫からクリームソーダを出します。

なぎさ対策は万全のようでしたが、失言対策だけはしていなかったようです。

どこかの国の政府みたいです。

「樹里さんは、ホットの方がいいですか？」

「はい。お願いします」

もみじは笑顔で応じ、コーヒーメーカーを操作します。

「もみじ、樹里は喫茶店に勤めているから、コーヒーには詳しいわよ」

「え？」

もみじが何故かギクッとします。

いつの間にかリビングの入口から美紗が半身で覗いています。

「なぎさお姉ちゃん、この前言ったでしょ。お母様とお父様の離婚の原因は、喫茶店に勤めていたウエイトレスとの浮気だって」

もみじが小声で言います。

「あれ、そうだっけ」

なぎさは全く悪びれもしません。

どうやら、あの霊感少女より、ＮＧワードが多そうです。

「コホン」

美紗は咳払いをしてから、なぎさを睨みつけて去って行きました。

しばらく、樹里達はいろいろと話をしました。

なぎさもその後はＮＧワードを言わなかったらしく、美紗は現れませんでした。

「そろそろ行こうか、樹里」

「はい」

二人が帰りそうになったので、もみじは寂しそうな顔で、

「もう少しいてよ、樹里さん、なぎさお姉ちゃん。ね？」

樹里はなぎさを見ました。するとなぎさは、

「それがダメなのよ。樹里はこれから新聞配達の仕事があるの」

「え？」

またもみじがピクッとします。

いつの間にか、美紗が入口に来ていました。

地獄耳なのでしょうか？

「なぎさお姉ちゃん、この前言ったじゃない。お母様が新聞配達の人と大喧嘩して、新聞を取るのをやめたって」

「あはは、全然覚えてなかった。ごめん」

謝りながらも大笑いするなぎさです。

「そういう事なら、仕方ないですね。また来て下さい」

もみじは、美紗がいなくなったのを確認してから言いました。

もみじは二人を玄関の外まで見送ります。

「お邪魔しました」

樹里が笑顔全開で深々とお辞儀します。

「いつでもいらして下さいね」

もみじも笑顔で言いました。

「何か困った事があったら、樹里の旦那さん、探偵だから、相談して」

なぎさがそう言うと、もみじがビクビクッとします。

「そ、そうなんだ。じゃ、さよなら」

もみじはそそくさと家の中に入ってしまいました。

「変なの。ね、樹里」

なぎさはキョトンとして樹里を見ました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

もみじは、急いで美紗の部屋に行きました。

「ムキー！　あの子、私の事をからかいに来たのよ！　でなければ、あれほど私の聞きたくない事を言わないでしょ！　どうせ私は探偵

小説を書けない探偵作家よ！」

美紗は逆上していて、原稿用紙をクシャクシャにして投げています。

なぎさの「樹里の旦那さん、探偵だから」発言がダメ押しだったようです。

「お母様……」

「あの子は二度とここに呼ばないで！　あの子が来ると、私の創作意欲が失われるのよ！」

ここ数日スランプで、全然ストーリーが浮かばない美紗でした。

なぎさと樹里は駅にいました。

「いつでもいらして下さいって言われたから、私、明日にでも行ってみるわ」

なぎさは何も感じていないようです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

ミステリーの女王の大村美紗のスランプはしばらく続きそうです。

樹里ちゃん、左京の代わりに探偵する？

御徒町樹里は、居酒屋と喫茶店と新聞販売所で働くメイドです。

ついでに夫である杉下左京の探偵事務所の所員も勤めています。

しかも、主に事件を解決しているのは樹里です。

「ふう」

探偵事務所の所長の席で、左京は頬杖を突き、その上溜息まで吐いています。

「どうしたのよ、左京？　浮かない顔して」

時々活躍する事もあるダメ所員の宮部ありさが尋ねます。

「俺、探偵に向いていないのかな？」

左京はボンヤリとした顔で言います。

「はあ？　今更何言ってるのよ？　向いていると思ったから、公務員辞めて開業したんでしょ？」

ありさは呆れ顔で言います。左京はまた溜息を吐き、

「そう思ったんだけどさあ。事件を解決した記憶がない」

「確かにね」

ありさは容赦なく同意します。所謂（いわゆる）「禿同（はげどう）」です。

「うう……」

左京は机に顔を埋めて自分の才能のなさを嘆きます。

「ああん、左京、可哀想」

追い討ちをかけたくせに、そんな事はすっかり忘れて、左京に後ろから抱きつくありさです。

「今からでも遅くないわ。私とやり直しましょう」

「はあ？」

ありさの発言に思わず左京は起き上がり、ありさを振り払います。

「何でお前とやり直さなくちゃならないんだよ！？」

「だってえ」

ありさはクネクネして甘えるポーズをとります。

そこへ巾着を持ったお婆さんが入って来ました。

「いらっしゃいませ」

ありさが笑顔で出迎えます。何故か左京の顔が引きつります。

「ど、どうも……」

お婆さんはツカツカツカと左京に歩み寄り、

「ほとんど条件反射だね。今日は、家賃の催促に来たんじゃないよ」

どうやら、お婆さんはビルのオーナーのようです。

「そ、そうですか」

左京はホッとしてお婆さんにソファを勧めます。

「それに最近は、滞納してないでしょ」

お婆さんに言われ、左京はハッとします。

「いい奥さんだね、あの子は。毎月きちんと私の所に支払いに来てくれてるよ」

大家さんは微笑みながらソファに座ります。

「そ、そうですか」

左京は驚きながらも向かいに座ります。

（樹里の奴、いつそんな金を……？）

また落ち込む左京です。

「今日は、依頼に来たんだよ」

「え？」

左京はありさと顔を見合わせます。

ありさが慌てて給湯室に走ります。

「依頼、ですか？」

「そう。このビルの一階のコンビニの店長が、強盗に遭ってね」

大家さんの言葉に左京は、

（ここの一階って、コンビニだったのか）

と思いました。ずっと知らなかったようです。（決して私の怠慢ではありません　作者）

「防犯カメラに姿がしっかり映っていてさ」

「それなら、警察に届ければ解決しますよ」

正直な左京はそう言ってしまいました。

「あんたも欲がない男だね。それじゃ、探偵の出番はないだろ？」

大家さんは呆れています。

「まあ、見てくれれば、どうして私があんたに依頼に来たのかわかるよ」

大家さんは、巾着の中からＤＶＤを取り出し、テーブルに置きました。

「では、拝見いたします」

左京はそれを手に取り、ＤＶＤプレーヤーに入れます。

「何々？」

ありさが大家さんにお茶を出しながら尋ねます。

「まあ、見てろって」

ＤＶＤの映像がテレビに映ります。

「あ、これ、階下（した）のコンビニだ」

ありさがそこに映っている店員を見て言いました。

時刻は深夜の午前二時です。

そこに一人の男性客が入って来ます。

男性客はいきなり包丁を取り出し、店長を脅します。

反対側にいた店員は異変に気づき、裏から逃げてしまいました。

店長はその男にレジのお金を渡しました。

男は札だけ鷲掴みにすると、店を飛び出しました。

犯行時間はおよそ五分。

手馴れているようです。

しかし、左京もありさも、犯行自体より驚いている事がありました。

「左京……」

ありさが目を見開いて左京を見ます。

「ああ……」

左京は画面を見たままです。

「間違いないよね。この男、あんた達の知り合いだろ？」

大家さんは悲しそうに尋ねました。

「はい。元同僚の亀島馨です」

衝撃の事実です。強盗はあの亀島でした。

「だから、穏便にすませたい。その子を私の所に連れて来てくれないかね、杉下さん？」

「わかりました」

左京は力なく答えます。大家さんはお茶を飲んでから立ち上がり、

「若者が落ちて行くのを見るのは忍びないんだよ。できれば、立ち直って欲しいんだ。頼んだよ」

と言うと、事務所を出て行きました。

左京はありさとまた顔を見合わせました。

「あいつ、ドロントの手下になったんじゃなかったのかよ」

「ドロントがコンビニ強盗はしないわよね」

ありさはソファに腰を下ろして言います。

「何があったんだろう?」

左京は立ち上がり、窓の外を見ました。

そして夕方です。

夕刊の配達を終えた樹里は、夕ご飯の買い物をするためにスーパーに立ち寄っていました。

すると目の前の男が、大きなボストンバッグに次々に商品を押し込んでいます。

樹里はツカツカとその男に歩み寄り、

「今晩は、亀島さん」

と声をかけました。

「ひ！」

亀島はいきなり樹里に声をかけられ、文字通り魂消（たまげ）たようで、幽体離脱しそうになりました。

近くの公園のベンチで、樹里は亀島の話を聞きました。

「ドロントさんが、私に内緒で行方をくらましてしまって……。この半月、どうしたらいいのかわからなくなって、コンビニ強盗をしたり、万引きをしたりで……」

亀島は泣きそうです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「お腹がすいているのですね、亀島さん。これから夕ご飯をご一緒に如何ですか？」

「え？」

亀島は涙を流しました。

（樹里さんと食事……）

妙な妄想を始める亀島です。

「行きましょう」

プロポーズするところで樹里に声をかけられ、我に返りました。

樹里が連れて行ったところは、大豪邸です。

「どこですか、ここ？」

「知り合いの方のお屋敷です」

樹里はインターフォンを押します。

「樹里です。夕ご飯の支度に来ました」

「はいよ。どうぞ」

声が答え、門が自動的に開きます。亀島は唖然としました。

「待ってたよ、樹里さん」

玄関で出迎えたのは、あの大家さんでした。

「おや？　もう連れて来てくれたのかい、樹里さん？」

大家さんは亀島に気づき、尋ねます。

「はい？」

樹里は笑顔全開でキョトンとしました。

大家さんは亀島と話をして、お説教をしました。

二時間近く懇々と諭された亀島は大いに反省し、泣きました。

「でも、警察官をしていた者として、貴女のご好意に全面的に甘える訳にはいきません」

亀島は涙を拭って言いました。

「そうかい。あんたがそう思うなら、私はもう何も言わない。でも、忘れちゃいけないよ。世の中には、あんたの味方もたくさんいるって事をね」

大家さんの優しい言葉に亀島は泣き崩れました。

「ところで、杉下さんは？」

大家さんは亀島を送り出すと、樹里に尋ねます。

「事務所にいます」

樹里は笑顔全開で答えました。

「何だい、事件を解決した本人が来ないのかい？　呼んどくれ、樹里さん」

「はい」

大家さんは左京が亀島を見つけたと思っているようです。

樹里には何の事件の事なのかわかりません。

そして、訳もわからず大家さんの屋敷にやってきた左京は、真相を知ってまた落ち込みました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京を救う？

御徒町樹里は、居酒屋と喫茶店と新聞販売所で働くメイドです。

しかも、今は探偵の杉下左京の妻でもあります。

発表はしていないのですが、ネットでは炎上騒ぎが頻発しています。

「杉下コロス」

「杉下氏ね」

物騒な書き込みが並びました。

「みんなの樹里ちゃんを汚しやがって！」

「いいなあ、俺も参加したい」

危険度が上がって来ています。

でも、樹里も左京もインターネットをしないので、その情報を知りませんでした。

そんなある日の事です。

杉下探偵事務所に宅配便が届きました。

普段なら絶対にその時間にはいないはずのグウタラ所員の宮部ありさが、どこかもわからない怪しい制服の宅配業者風の男に三十センチ四方くらいの段ボール箱を受け取りました。

「あれ、ハンコは？」

さっさと行ってしまった業者風の男に呆気に取られながらも、

「左京宛？」

とありさは箱を左京の机の上に運びます。差出人は「ＳＭ企画」となっています。

「やだ、左京ったら、樹里ちゃんと何してるのよ、毎晩」

ありさの妄想が始まります。

ありさは気づいていません。箱の中から聞こえて来る時計の音に。

しばらくして、左京がやって来ました。

「珍しいな、ありさ。早いじゃないか」

左京もありさがいる事に驚きました。

「朝まで飲んでたもんで。テヘ」

ありさは舌をペロッと出して可愛く小首を傾げてみせますが、

「ふーん」

左京のあまりの素っ気なさに項垂れます。

「あれ、何だこれ？」

左京が机の上の段ボール箱に気づきます。

「さっき、届いたのよ。左京が頼んだんじゃないの？」

ありさが尋ねます。すると左京は箱を眺めたままで、

「事務所には手癖の悪い奴がいるから、ここに届けてもらう事はしないよ」

「ふーん」

ありさは自分の事を言われたとは思っていないようです。

左京は、長年の刑事の勘で危険を感じていました。

（届くはずのない荷物？　やばいんじゃないのか、これ？）

しかも微かに聞こえる時計の音。

（ば、爆弾？）

左京はすぐさま携帯を取り出し、元同僚の神戸蘭にかけました。

そして。

その段ボール箱を届けたのは、樹里が勤める居酒屋の常連客で、樹里が左京と結婚した事を快く思っていません。

髪は伸び放題の長髪、口の周りは泥棒髭、服は上下グレーのスウェットで、左京の事務所に着て行った宅配業者の制服は、ネットで購入したものです。

「杉下左京め。僕の樹里ちゃんを奪いやがって！」

薄暗くて汚いアパートの部屋で、その男は不気味に笑いました。

更に。

左京からの連絡を受けて、蘭が血相を変えて現れました。彼女は爆弾処理班を引き連れています。

「あれだ」

左京は机の上に置かれた段ボール箱を指差しました。

蘭は、中身が爆弾かも知れないと知って、泡を噴いて痙攣しているありさを蔑むような目で見てから、処理班に指示します。

処理班三人は素早く防弾シートを床に敷き、その上にそっと段ボール箱を置きます。

カッターナイフを慎重に使い、箱の上部を切ります。

「え？」

蓋にトラップが仕掛けてあったらしく、警報が鳴り出します。

「下がって！」

蘭がありさを引き摺りながら、左京を押し出します。

処理班は防護ヘルメットのバイザーを下げ、中身を爆発物処理用の金属製の容器に入れ、蓋を閉じました。

それで大丈夫かどうかはわかりませんが、何もしないよりはマシです。

しかし、五分ほど待っても、何も起こりません。

処理班は互いに顔を見合わせ、意を決して容器を開きました。

すると中から、声が聞こえて来ます。

「サキョウシネ、サキョウシネ、サキョウシネ……」

中に入っていたのは、録音機能付きの目覚まし時計で、左京への暴言が吹き込まれていました。

処理班の三人は、腰が抜けてしまいました。

「とにかく、爆弾じゃなくて良かったわ」

処理班を帰してから、蘭が言いました。

「すまん。俺がもっとよく確認すれば良かった」

謝罪する左京に蘭は、

「いいのよ。それより、貴方が無事で良かった」

「蘭……」

見つめ合う二人です。ありさがムッとします。

「樹里ちゃんに言いつけるぞ、左京」

左京はギクッとしますが、蘭はフッと笑い、

「左京なんて、もう眼中にないわよ。イケメン新人が来たから」

「え？」

ありさが目を輝かせます。

「わ、私にも紹介して、蘭」

「あんたは関係ないでしょ。いずれ会えるわよ」

蘭はそう言って事務所を去りました。

そしてその日の夜。

左京に目覚まし時計を送りつけた男は、樹里のいる居酒屋に行きました。

「樹里ちゃん、結婚したんだって？」

他のお客達が樹里に話しかけています。

（今頃そんな事言ってるのかよ。そのうち、樹里ちゃんは未亡人さ）

男はニヤリとします。

「ありがとうございます」

「どうなの、新婚生活は？　旦那は優しい？」

エロい事を聞き出そうという魂胆がミエミエの顔で質問するエロ客です。

「はい。結婚して良かったと思っています」

樹里は笑顔全開で言いました。

「うはあ、ご馳走サマンサターバサ」

オヤジギャグを放つエロ客です。

樹里の笑顔を見て、犯人の男はドキッとしました。

（杉下左京を殺せば、樹里ちゃんはまた僕の樹里ちゃんになる。でも、樹里ちゃんは永遠に笑顔を見せてくれないかも知れない）

樹里が左京を愛している事を悟った男は、その足で付近の交番に出頭しました。

こうして樹里は、またしても、知らないうちに事件を解決し、左京を救ったのでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ドロントと久しぶりに対決する

御徒町樹里は既婚者ですが、居酒屋と喫茶店と新聞販売所で働くスーパーメイドです。

どこかの妙なお店で働く偽者と違い、世界メイド協会の認定する国際免許を取得しています。

但し、その世界メイド協会の本部は東京の秋葉原にあります。

いつものように樹里が居酒屋で働いていると、ドロントの部下のキャビーがＯＬ姿で現れました。

「いらっしゃいませ、キャビーさん」

樹里は笑顔全開でお出迎えです。

「樹里ちゃん、声が大きいよ」

キャビーが焦ります。

「そうなんですか」

樹里は尚も笑顔全開です。

「いらっしゃいませ、キャビーさん」

今度は耳元で囁きます。

「ああん」

耳が弱点のキャビーは喘いでしまいました。

「って、違うって！」

ハッと我に返り、切れるキャビーです。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

そして、キャビーは奥の個室に通されました。

「ご注文は？」

先日、キャビーを「子供扱い」した店長が、呼んでもいないのに名誉挽回のために現れます。

「消えなさい」

キャビーにそう言われ、店長は泣きながら去りました。

「首領からの伝言を伝えるわ」

キャビーが真面目な顔で言います。

「酒量ですか？」

「違うわよ！」

キャビーが樹里のボケに気づき、すかさず突っ込みます。

「私達は、明日の午後十一時に、国立近代博物館にある恐竜の化石を頂くわ」

「国立市には、博物館はないですよ」

樹里の途方もない反則ボケにキャビーは項垂れます。

「と、とにかく、この予告状を貴方の旦那に渡して」

キャビーはこれ以上何か聞くと暴れてしまいそうな予感がしたので、樹里に予告状を渡しました。

「そうなんですか」

こうして、キャビーは「樹里ちゃんスペシャル」を食べて、居酒屋を去りました。

「樹里さん、あの子の家、知ってる？」

店長がこっそり尋ねます。

「知りませんよ」

樹里は笑顔全開で答えます。

「そうかあ。今度はいつ来るのかなあ」

店長はキャビーに惚れてしまったようです。

ロリコン伯爵です。

「誰が日に向かいし時告ぐる山羊だ！」

店長が切れます。シリーズが違うので止めて下さい。

こうして樹里は、仕事を終えるとアパートに戻り、左京に予告状を渡しました。

「まだあの貧乳、泥棒を続けているのか」

左京は予告状を見て溜息を吐きます。

「面倒臭いなあ」

左京はやる気がありません。

「左京さん、そんな事だと離婚ですよ」

「え！？」

左京は樹里のその発言にギョッとします。

ふと樹里を見ると、宮部ありさの生霊が取り憑いています。

「ありさ、てめえ！」

「にゃはは、久しぶりに幽体離脱してみたのよん」

ありさは逃亡しました。

「でも、ありささんの言う通りですよ。仕事はきちんとして下さい」

樹里が真面目な顔で言ったので、左京は、

「はい！」

と正座して返事しました。意外に尻に敷かれているようです。

そして翌日の夜十一時少し前です。

博物館の周囲を機動隊員が固めています。

博物館の中の恐竜の化石の展示コーナーの前には、館長と左京、樹里、ありさ、神戸蘭がいます。

「こんなものを盗んで、どうするつもりなんだ、あの貧乳は？」

館長がいるのに「こんなもの」とか言ってしまう左京です。

「こんなものですが、マニアなら、一億円でも買うほどのものですよ」

館長はムッとして言います。

「ほう、世の中には物好きがいるんですねえ」

それでも気にしない左京です。

その時です。

「おーほっほっほ！」

ドロントの素っ頓狂な笑い声が聞こえます。

「出たな、貧乳！」

左京が天井を見渡します。

「久しぶりね、皆さん。今日こそ、頂いちゃうわよ」

「そうはいかないわ！」

蘭が機動隊員を動かし、化石の周囲を固めます。

「防毒マスク着用！」

蘭と機動隊員はマスクを被ります。

「どうよ！」

蘭が胸を張って言います。

「相変わらず、無駄に巨乳ねえ、神戸警部。残念でした」

ドロントの声が言います。

「何？」

マスクの中に睡眠ガスが吹き出します。

「マスクに細工をしておいたのよ、おバカさん」

「く……」

蘭達は全員眠ってしまいました。

残ったのは、館長と樹里と左京とありさです。

「御徒町樹里、貴女の弱点、調べたわ。これでも食らいなさい」

天井からたくさんグミが降って来ます。

「何よ、これ？」

ありさがドサクサに紛れて左京に抱きつきます。

「効きませんよ、ドロントさん」

「え？」

樹里はグミに反応していません。

「私は、竹之内璃里。樹里の姉です」

「何ですって！？」

ドロントは仰天しました。

「ええい、作戦変更よ！」

ドロントと仮面を着けたヌート&キャビーが現れ、化石のそばに舞い降ります。

「そうはさせません」

璃里が飛び上がり、ドロントに立ちはだかります。

「どうして樹里と入れ替っていたの！？」

ドロントは動揺して尋ねます。

「貴女はここ何日か、樹里の弱点をネットで調べていましたよね。私の夫の一豊（かずとよ）がその動きを掴んでいたのです」

「く！」

しかし、その間にキャビーとヌートが化石を梱包して持ち去ります。

「こら、待て！」

左京とありさがそれに気づき、追いかけます。

「そうはイカの〇玉よ！」

キャビーが凄い事を言います。

「キャビー、恥ずかしいわ、私」

一緒に逃げているヌートが赤くなります。

「じゃあね！」

ドロントは煙幕を張り、璃里から逃げます。

「待ちなさい！」

璃里が出産から間もない人とは思えない身のこなしでドロントを追います。

「樹里と違って、動きが機敏ね。今度から、貴女をマークさせてもらうわ」

博物館の外に出ると、ドロントはハンググライダーを出し、飛び立ちます。

周りには、眠らされた機動隊員がゴロゴロしています。

「化石は頂いたわ、皆さん。今年は私達の勝利で始まったわね」

ヌートとキャビーは、箱詰めした化石を息を切らせて運んでいます。

「連中、諦めたみたいですよ」

二人は建物の陰に隠れ、一休みです。

「重いですねえ、これ。腰が痛くなっちゃった」

キャビーが愚痴ります。

「そうなんですか、重くて申し訳ありません」

その声にギョッとするヌートとキャビーです。

「よいしょ」

箱を破って樹里が出て来ます。

「えええ!?」

仰天するヌートとキャビーです。

「自分では軽い方だと思っていたのですが、もう少し痩せた方がいいですか?」

樹里が笑顔全開で尋ねます。パトカーが近づいて来る音がします。

「逃げるわよ、キャビー!」

「はい、ヌートさん」

二人は樹里を残して逃げ去りました。

「さようなら」

樹里がサイレン音を発しているスマートフォンを持って手を振ります。

こうして、またしても対決は樹里の勝利に終わりました。

左京は璃里の登場に驚いています。

「いつ入れ替ったんですか？　全然気づきませんでした」

「お出かけのキスをした後ですよ」

璃里が笑顔で言います。左京は赤面しました。

「それにしても、樹里の弱点がグミだったなんて、知りませんでした」

すると璃里は、

「ああ、それは嘘です。夫が流した誤情報なんです」

唖然とする左京です。

「お姉さんと樹里ちゃんで探偵事務所を開いた方がいいみたいね」

ありさの心ない一言に項垂れる左京です。

「私は、子育てがありますから」

璃里は樹里と寸分違わない笑顔で言いました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、亀島馨と再会する

御徒町樹里は居酒屋と喫茶店と新聞販売所と探偵事務所で働くメイドです。

もうすぐアメリカから財界の実力者である五反田六郎氏が帰国します。

樹里は五反田邸のメイドに戻り、居酒屋も喫茶店も新聞販売所も探偵事務所も辞める事になります。

「た、探偵事務所も？」

それを知った樹里の夫の杉下左京は酷く狼狽しました。

「ありささんがついてますよ、左京さん」

樹里は笑顔全開で言いました。

「だから余計不安なんだよ」

左京は涙ぐみます。

「行って来ます」

左京は項垂れたまま、アパートを出ました。

「行ってらっしゃいませ」

樹里は習慣で深々とお辞儀をします。

左京の車が見えなくなってから、樹里は部屋に戻りました。

「樹里さん」

その時、アパートの陰から声をかけた男がいました。

「はい？」

樹里はその男を見ました。

男は見るからに不潔で、髪は伸び放題、髭は生やし放題。

でも決して六郎という名前ではありません。

「ご無沙汰してます、亀島です」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

樹里は亀島を部屋に入れ、お茶を出しました。

亀島は俯いたままで、ポツポツと語り始めました。

「あの後、警察の前まで行ったのですが、どうしてもそれ以上進めずに今日まで来てしまいました」

「そうなんですか。私は仕事があるので、これで出かけますが、亀島さんはどうしますか？」

樹里が笑顔で尋ねます。亀島は唖然としました。

（つ、冷たい。話を聞いてくれないのか？）

亀島は思わず涙ぐみました。

「亀島さん？」

樹里がニコッとして顔を覗き込んだので、亀島はハッと我に返りました。

「し、失礼します！」

彼は靴を履き損ねたまま、部屋を飛び出して行きました。

（私はどこまで甘えた人間なんだ。樹里さんに一度は助けてもらったのに……）

亀島は泣きながら走りました。

外は雪がちらついています。

「亀ちゃん」

誰かが亀島を呼びました。

「え？」

涙を拭って顔を上げると、そこにはＯＬ姿のドロントがいました。

「また一緒に仕事する？」

亀島は気持ちが揺れます。

「どうする？」

ドロントが優しく微笑みます。

亀島は迷いました。なかなか結論が出せません。

「亀ちゃん、寒いんだから、早く決めてよ！」

ドロントは震えながら言います。

亀島はドロントを見て口を開きました。

「もう、一緒には仕事はしません。今日でケリをつけます」

「そう。わかった」

そう言うと、ドロントはスッと消えました。

「今度こそ、警察に行こう」

亀島は雪の降りしきる中、また歩き出しました。

樹里はアパートを出て喫茶店に行きました。

すると親友の船越なぎさが現れました。

「ねえ樹里、今日で終わりって本当？」

「ええ、本当ですよ」

樹里は笑顔全開で答えます。

「そんな事、私聞いてないよ」

なぎさは怒ります。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「いつも私だけ何も知らないんだもん、つまんない」

なぎさは剥れました。

「そうなんですか、申し訳ありません」

樹里は深々と頭を下げました。

「コーヒー飲み放題は本日で終わりです」

樹里は笑顔で言い添えます。

「今日はコーヒーの気分じゃないのよね。また明日来るね」

なぎさは理解したのかどうかわからない笑顔で帰って行きました。

「またのお越しを」

樹里は深々とお辞儀をしました。

左京は、樹里に言われた事がショックで、事務所の椅子に座って項垂れています。

「ああん、左京ったら、元気出してえ」

ありさが後ろから抱きつきます。

「鬱陶しいよ！」

左京はありさを跳ね除けます。

「事務所畳もうかなあ……」

「何言ってるのよお。だめよお、そんな事したら、ありさが可哀想じゃない？」

ありさはそれでもしつこくまとわりつきます。

「こんな繁盛してない事務所なんてサッサと畳んで、警視庁に復帰しなさいよ、左京」

いきなり、ドロント特捜班の神戸蘭警部が現れました。

「お前、いつの間に……」

左京が唖然とする中、蘭はツカツカとソファに近づいて座り、

「その方が、樹里も楽ができるんじゃない？」

左京は蘭の指摘にギクッとします。

（今の俺は、樹里に負担をかけているのか？）

「左京が復帰するなら、私も復帰するう」

ありさが言いました。すると蘭は白い目でありさを見て、

「あんたの居場所はないわよ」

と言い、事務所を出て行きます。

「考えといて、左京」

ありさが追いかけます。

「蘭、冷たいわよお。私も復帰させてえ」

ありさは出て行ってしまいました。

「どいつもこいつも……」

呆れる左京です。

（でも、樹里のことを考えると、その方がいいのかも知れない）

左京は思いました。

その頃、亀島は、ある警察署の前でまだ迷っていました。

「ううう……」

そして結局、

「ううう！」

とその場から走り去る亀島でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京とお祝いする

御徒町樹里は、居酒屋と喫茶店と新聞販売所で働きながら、探偵もこなすメイドです。

でも自分では、探偵をしていると思っていないため、余計に夫である杉下左京を落ち込ませてしまいます。

今日はバレンタインデーです。

そして、左京の誕生日と言うとんでもない日でもあります。

去年は、樹里の実家で誕生日を祝ってもらった左京でしたが、今年はどうなるのでしょう？

「はーい、左京、楽しみにしてた、バレンタインのチョコだよお」

事務所に行くなり、左京は宮部ありさにチョコを渡されました。

「何なんだよ、これは？」

しかもそれは、剥き出しで食べかけのチョコです。

「私が食べ残したチョコだよ。私と間接キスだよ」

「アホか」

左京はありさを無視して、自分の席に座りました。

「照れちゃって、もう。そんなに恥ずかしがらなくても、今ここには、私と貴方だけよん」

ありさがにじり寄ります。

「鬱陶しいからそばに来るな！」

左京は手でシッシッとしました。

「何よ、人が折角遊んであげてるのに」

ありさは口を尖らせて自分の席に戻ります。

「俺は子供か！？」

左京は切れました。

「左京、事件よ」

そこへいきなり警視庁の神戸蘭警部が飛び込んで来ます。

「何だよ、お前まで！？」

左京はムッとして立ち上がります。

「そうよ、蘭。今、私と左京はいい所なんだから、邪魔しないで」

ありさの妄想が暴走しています。

「何言ってんのよ、ありさ?」

蘭は本当に事件の話をしに来たようです。

「ドロントが予告状を送って来たのよ」

「何?」

左京は仰天しました。

「ドロントは前々回出たばかりよ。早過ぎるでしょ」

ありさがイチャモンをつけます。

左京と蘭はそれを無視して、ソファで予告状を見ています。

ありさは落ち込みました。

「日本中のチョコレートを盗むだって? そんな事ができる訳ないだろ?」

左京は予告内容がバカげているので、呆れてしまいます。

「そうなのよ。だから、ドロントに盗まれる前に、はい」

蘭はヌケヌケと左京にチョコを差し出しました。

「何してんのよ、蘭。左京は妻帯者よ」

ありさもヌケヌケと言います。

「蘭、その予告状、お前が作ったのか！？」

左京がムッとします。

「違うわよ、これは本物。ドロントって、恋人がいないから、嫉妬からそんな予告状を作ったのよ、見苦しいわよね」

蘭が言いました。すると、

「ちょっと、何て事言うのよ、無駄に巨乳警部？」

と声がしました。

「その声は、貧乳か？」

左京が辺りを見回します。

「私は貧乳じゃないわよ、ヘボ探偵さん」

「だったら、ここで私と大きさ比べしましょうよ」

ありさが言いました。

「断る」

ドロントは即答です。

「ほーら、やっぱり貧乳だから、できないんだ」

「うっさいわね！　私はあんたみたいにお子ちゃまじゃないのよ！」

それを聞いて、左京と蘭が爆笑します。

「何よお、二人共、笑い過ぎ！」

ムッとするありさです。

「取り敢えず、ヘボ探偵さん、ハッピーバレンタイン&ハッピーバースデー」

ドロントの声がして、床の一部が開き、チョコとケーキがせり上がって来ました。

「あ、ありがとう」

意表を突かれた左京は、素直にお礼を言いました。

「じゃあね、また今度ね」

ドロントは去ったようです。

「何だ、あいつ、いい奴じゃないか」

左京は不用意にチョコとケーキに近づきました。

「左京、危ないわよ。爆弾かもよ」

蘭が引き止めます。左京はギクッとしました。

でも、時計の音もしないようです。

「大丈夫じゃん。いただきます」

ありさが勝手に食べてしまいます。

「うげ……」

しかし、それはよくできた作り物でした。

「蝋でできてた……」

ありさは涙目です。

「意地汚いからよ」

蘭が鼻で笑います。

「貧乳め、やっぱり騙してたのか」

左京はムッとしました。そして、思わず、笑ってしまいます。

「でもあいつ、俺の誕生日を知っているなんて、どうしてだろうな？」

「左京に気があるのよ、きっと」

嫉妬心剥き出しで、ありさが言います。

「それは断じてない！」

ドロントが床を開いて現れ、それだけ言って去りました。

唖然とする左京達です。

何だかんだ言いながらも、自分の誕生日を祝いに来てくれたありさと蘭に、左京は礼を言いました。

「ありがとう。もうすぐ、樹里が帰って来るから、みんなでパーティをしよう」

すると、ありさと蘭は顔を見合わせてから、

「そんな事できないわよ」

と口を揃えて言い、

「じゃあね」

と一緒に事務所を出て行ってしまいました。

「はあ？」

意味がわからない左京です。

それと入れ替わるように樹里が入って来ました。

「只今戻りました、左京さん」

樹里は笑顔全開で言いました。

「お帰り、樹里」

左京も笑顔で返します。

「はい、お誕生日おめでとうございます」

樹里はプレゼントを渡し、テーブルにケーキの箱を置きます。

「ありがとう、樹里」

左京はすでに涙ぐんでいます。

（去年は、亀島と由里さん達がいたけど、今年は二人きりか）

つい、ニンマリする左京です。

「蝋燭に火を点けますね」

樹里が箱を開けます。中からチョコレートケーキが出て来ます。

「そうか、合体してるんだな、二つが」

左京が感動して言いました。

「合体？　何がですか？」

樹里がキョトンとして尋ねます。

左京は、

（いつもの樹里だな）

と微笑ましく思いながら、

「だからさ、誕生日のケーキと、バレンタインデーのチョコが、一緒になって、チョコレートケーキなんだろ？」

と尋ね返します。すると樹里は、

「バレンタインデーって、何ですか？」

と言いました。

（まさか、去年と同じオチか？）

あまりの結末に、固まりそうになる左京でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、五反田邸に戻る？

御徒町樹里は、居酒屋と喫茶店と新聞販売所と探偵事務所で働くメイドです。

どのお店も、樹里のおかげで大繁盛……のはずなのですが、杉下探偵事務所だけは閑古鳥すら鳴かないほど寂しいです。

そして、その探偵事務所です。

「また今日もお仕事ないの？」

仕事があってもしたくない宮部ありさがうわ言のように言います。

「お前は仕事がないのが嬉しいんだろ？」

所長の椅子に沈み込んで、左京は言いました。

「じゃあさ、私と秘密のお仕事、する？」

ありさが妙に色っぽい顔で迫ります。

「バ、バカヤロウ、何考えてるんだ！？」

左京は真っ赤になってありさから離れました。

「何想像してるのよ、左京ったら。嫌らしいんだから」

ありさは嘲るように笑いました。

「じゃあ、秘密のお仕事って、何だよ？」

左京は椅子に戻って尋ねます。ありさは左京の机にドンとお尻を乗せて、

「某大学の付属病院の霊安室の清掃」

と顔を下から懐中電灯で照らしながら言います。

「わあ！」

左京はその顔に驚いて椅子から転げ落ちます。

「失礼ね、こんな可愛い顔に驚いたりして」

ムッとするありさです。

「ほとんどご遺体はないんだけどね」

何故か嬉しそうに話すありさに身震いする左京です。

「俺、そういうの苦手」

ありさは左京の態度に呆れます。

「元刑事が、遺体を怖がってどうするのよ？　恥ずかしいわ、元同僚として」

「お前にだけは言われたくない！」

左京はバンと机を叩きます。

「それから、そのでかいケツを机から下ろせ！」

「触ってもいいわよ」

また色っぽい顔で言うありさです。

「誰が触るか！」

左京が真っ赤になって怒ります。

「相変わらず、暇そうね、左京」

そこへ、警視庁の神戸蘭警部が来ました。

「あんたも相当暇ねえ、蘭？」

ありさが蘭を睨みます。この二人、仲がいいのか悪いのか、設定資料にも書かれていません。

「左京、警視庁（さくらだもん）に戻りなさいよ」

蘭はありさを無視して言います。

「またその話か？　戻らないよ」

左京は蘭に背を向け、窓の外を見ます。

「樹里も、もうすぐ五反田邸に戻るんでしょ？　そうしたら、ここも続けられないわよ」

蘭は更に説得を続けます。

「樹里がどこで働こうと、俺は探偵事務所を続ける」

「意地っ張りね」

蘭が呆れて言いました。

「うるせえ」

左京はまだ外を見ています。

「ありさだって、ここを閉めたら困るだろ？」

「全然」

ありさのあまりにもあっさりとした返事に項垂れる左京です。

その頃、樹里は成田空港で五反田六郎氏を出迎えていました。

「お戻りなさいませ、ご主人様」

樹里は深々と頭を下げます。

「悪いね、御徒町さん。情報によると、結婚したそうだね？　おめでとう」

五反田氏は何でも知っているようです。

「ありがとうございます」

「ご主人は探偵事務所を開いているそうだね？」

「はい」

笑顔全開で答える樹里です。

「あまり繁盛していないと聞いたが？」

「はい」

それにも笑顔全開で答える樹里に、五反田氏は顔を引きつらせました。

「更に調べてもらったのだが、仕事の大半は、君のお陰で解決しているようだね。君が抜けると、事務所は立ち行かなくなるのではないかね？」

「大丈夫です。お手伝いは続けます」

「それでは君の休みがなくなってしまうよ」

五反田氏は樹里のあまりにもパワフルな仕事ぶりを心配している

のです。

「そうか。まあ、その話はまた後でゆっくりしよう。行こうか」

「はい」

二人は迎えのリムジンで、世田谷にある五反田邸に行きました。

説得を諦めた蘭は、警視庁に帰って行きました。

「やっと二人きりになれたわね、左京」

ありさがまたにじり寄ります。

「お前、今日おかしいぞ？　どうしたんだ？」

左京は椅子から立ち上がって身を引き、尋ねました。

「左京が元気ないから、励ましてるのよ」

ありさは笑顔全開ですが、どこか狡猾に見えます。

（何を企んでいるんだ、こいつは？）

左京も油断していません。その時、左京の携帯が鳴りました。樹里からです。

「おう、どうした？　え？　五反田邸？　あ、そうか」

途端に動揺が背中から浮き出して見える左京です。

「お、おう、そうか、わかった。帰りが遅くなるので、そのままアパートに戻るんだな？　ああ、構わないよ、全然」

見苦しいほど狼狽える左京です。ありさは肩を竦めました。

「ホントに大丈夫なのかしら？」

左京は携帯を切ると、ありさがいるのも忘れて、

「樹里ー！」

と寺内〇太郎一家のお婆ちゃんのように叫びました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、別の怪盗に挑戦される

御徒町樹里は、居酒屋と喫茶店と新聞販売所で働き、その上、ダメ夫の杉下左京の探偵事務所を手伝うスーパーレディです。

ある日、樹里の居酒屋に牛乳瓶の底のような眼鏡をかけた若い女性が現れました。

髪はショートカット、服装は黒のワンピースで、お葬式の帰りのようです。

女性は挙動不審で、店内をキョロキョロ見渡しています。

「いらっしゃいませ」

樹里はそんな事はまるで気にかけず、声をかけました。

「わあ！」

何故か、出川〇朗さんのように大袈裟に驚く女性です。

「ツイッターでお見かけしました。神村律子さんですか？」

樹里が尋ねます。女性は狼狽えて、

「ち、違います。ツイッターしない人にわからない話、しないで下さい」

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔です。

「私はこういう者です」

女性は名刺を渡します。

「名刺屋さんですか？」

樹里が尋ねます。

「以前使ったボケをまた使うのはやめて下さい！」

女性が怒ります。女性は「空間クリエイター」の六本木厚子さんという方です。

「そうなんですか」

樹里は席に案内します。

「個室がいいんだけど」

「承知致しました」

厚子さんは一番奥の個室に案内されました。

「ご注文がお決まりになりましたら、そのベルでお呼び下さい」

樹里が出て行こうとすると、

「待って。御徒町樹里さんでしょ？　話があるの」

「そうなんですか」

樹里は振り返って厚子さんを見ました。

「貴女、ドロントを知ってるでしょ？」

厚子さんは急に声をひそめて尋ねます。

「はい」

樹里は笑顔全開で答えます。

「私ね、ドロントの小学校時代の同級生なの」

「そうなんですか」

樹里はまた部屋を出て行こうとします。

「まだ話は終わってないのよ」

厚子さんが大きな声で言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で振り返ります。

「私は、ドロントの恥ずかしい過去や、素顔も知ってるのよ。どう、知りたくない？」

厚子さんはドヤ顔で言いました。

「いえ、別に」

樹里は深々と頭を下げて退室してしまいました。

「ええ？」

厚子さんは唖然としました。そして、手許のベルを鳴らします。

すると店長が現れました。

「ご注文、お決まりですか？」

「すみません、御徒町さんを呼んで下さい」

いきなりの樹里指名にショックを受ける店長です。

「はい」

店長は項垂れて退室しました。

入れ替りで樹里が現れます。

「何でしょうか？」

厚子さんはニヤリとして、

「私も怪盗だと言ったら、どうする？」

「通報します」

樹里は携帯を出してボタンを押します。

「わああ、何するのよ！？」

厚子さんは慌てて樹里の携帯を取り上げ、電源を切ります。

「ホントに警察呼ばないでよ！」

厚子さんはゼイゼイ息をはずませて言いました。

「そうなんですか」

樹里は携帯を返してもらい、ポケットにしまいます。

「私はベロトカゲという怪盗なの。明後日の午後十二時、プラントン銀座から、世界最大の真珠を頂くわ。これ、予告状ね」

厚子さんは可愛いキャラクターモノの封筒を樹里に渡します。

「じゃあね！」

ボンと煙を出し、逃げる厚子さんですが、煙が少な過ぎて、走って行くところが丸見えでした。

「またのご来店をお待ちしております」

樹里は深々と頭を下げて言いました。

仕事が終わって帰宅し、樹里は左京に予告状を見せました。

「悪戯だろ、これ」

左京はそのままゴミ箱に捨てました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じました。

そして一方、警視庁の神戸蘭警部の元にも、ベロトカゲから予告状が届いていました。

「何これ？　悪戯にしても、あまりにも稚拙でバレバレね」

蘭は予告状をシュレッダーにかけました。

予告の日の夜です。

「誰もいない……」

颯爽と登場しようと仮面とコスチュームまで特注で作った厚子さんでしたが、無人の現場を見て、項垂れて帰りました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、取材されるＰＡＲＴ？

御徒町樹里はメイドです。もうすぐ本格的なメイドに戻る予定です。

居酒屋の店長は、樹里のそっくりさんを真剣に探しています。

由里や璃里にも打診しましたが、璃里は子育てが忙しく、由里は占いが繁盛していて無理なのです。

一方、系列の喫茶店は「会いに行けるアイドルがいる喫茶店」に路線変更する予定ですが、多分こけるでしょう。

新聞販売所の所長は、朝刊だけなら配達できそうなので、一安心です。

ある経済研究所の試算では、樹里効果は数百億円との事です。

騒動の張本人の自覚がゼロの樹里は親友の船越なぎさの従妹の大村もみじの家に向かっています。

もみじの母親は、有名な推理作家の大村美紗です。

彼女は、樹里が五反田六郎氏の邸のメイドだと知り、取材を申し込みました。

メイドが探偵の推理小説を書くために、樹里にメイドの事を訊き

たいのだそうです。

普通は取材する人がされる人を訪ねますが、傲慢な美紗はもみじを通じて樹里に来るように言ったのです。

樹里は喫茶店の定休日に大村邸を訪問しました。

玄関でもみじが出迎えます。

「ごめんなさい、樹里さん、母が不躾（ぶしつけ）で」

まだ高校二年生とは思えないくらいの言葉遣いでもみじは謝罪しました。

「それから、どうしてなぎさお姉ちゃんが一緒なんですか？」

もみじが小声で尋ねます。

美紗はなぎさが嫌いなのです。

先日も呼んでいないのに現れたなぎさを見て、怒りのあまり卒倒したそうです。

「さあ」

樹里も首を傾げました。

樹里は誰にも言わなかったのですが、何故か大村邸の門の前に来たら、なぎさが待っていたのです。

「ううう」

そんな様子を柱の陰から星明子さんのように覗いている美紗がいます。

「あ、叔母様、久しぶり！」

何も感じていないなぎさが、顔を引きつらせている美紗に言います。

「きいい！」

美紗はそばにあった花瓶を床に叩きつけて割ってしまいました。

「お母様！」

もみじがびっくりして美紗を追いかけます。

「どうしたのかしら、叔母様？」

なぎさはキョトンとして樹里を見ました。

美紗は部屋に戻って、机の上の書きかけの原稿を破り捨てます。

「なぎさめえ！　どうして私をこんなに苛立たせるのよ、あの子はあ！？」

美紗は大声で言いました。部屋に入って来たもみじが唖然としま

す。

「もみじ、今すぐあの子を家から追い出して！　警察を呼んでもいいから！」

美紗は鬼の形相でもみじに命じます。

「お母様、警察はまずいわ。世間体がありますから」

「世間体」という言葉に、美紗はハッとして冷静さを取り戻しました。

「そ、そうね。ご近所の目もあるから、警察はやめましょうか」

美紗はニコッとして、

「ごめんなさいね、もみじ、貴女に当り散らしてしまって」

「大丈夫です、お母様」

もみじは微笑んで応じました。

もみじは玄関に戻り、なぎさに言いました。

「申し訳ないんだけど、お帰り下さい」

もみじは深々と頭を下げました。

「そうね。何だか、叔母様、ご機嫌悪いみたいだし」

なぎさは素直に応じてくれたようです。

もみじはホッとしました。

「じゃあ、帰ろうか、樹里」

「そうなんですか」

なぎさが樹里と帰ろうとしたので、もみじが慌てます。

「ああ、樹里さん、帰らないで下さい。母が待ってますので」

もみじは樹里の右手を掴んで引き止めます。

「何よ、もみじ。帰れって言ったり、帰るなって言ったり。どっちなの？」

なぎさがムッとして言いました。全然話が通じていないなぎさに項垂れるもみじです。

「なぎさお姉ちゃんだけ帰って」

もみじは項垂れたままで囁くように言いました。

「え？　何、もみじ？」

聞き取れなかったなぎさが尋ねます。

「あんただけ帰れって言ってるんだよ、わからねえのか、ボケ！」

とうとうもみじは切れてしまいました。

「何だあ、それならそうと言ってくれればいいのに」

なぎさはようやく理解したようです。

「もみじったら、私と樹里が仲がいいのを嫉妬してるのよ」

なぎさは樹里に言いました。理解していなかったみたいです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。もみじはまた項垂れました。

「お姉ちゃんはリヴィングルームで待ってて」

「わかった」

なぎさは笑顔で言いました。

もみじは樹里と共に二階の美紗の部屋に行きました。

「お母様、樹里さんをお連れしました」

「入って」

美紗が応じます。

もみじと樹里は美紗の部屋に入りました。

「わああ、叔母様のお部屋に入るの、何年ぶりかしら？　凄いでしょ、樹里？」

いつの間に入ったのか、なぎさがいます。

「きいいい！」

美紗はとうとう倒れてしまいました。

「お母様！」

「叔母様！」

もみじとなぎさが駆け寄ります。

「お待ち下さい。ここは私が」

樹里が看護師の顔になりました。

美紗に近づき、ペンライトで瞳孔反応を確認し、脈を看ます。

「気を失っているだけです」

樹里がもみじに言います。もみじはホッとしました。

「何だあ、びっくりさせないでよ、叔母様」

なぎさが容赦なく美紗の肩を叩きました。

「え？」

意識を回復した美紗は、目の前になぎさがいるのを見て、

「ひいいい！」

とまた気絶しました。

こうして結局、樹里に対する取材はできず、美紗の「なぎさ嫌い」は更に強くなってしまいました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、元に戻る？（前書き）

祝・百話目です。

樹里ちゃん、元に戻る?

御徒町樹里は、元々の雇い主である五反田六郎氏が、完全に日本に帰国する事になったので、居酒屋も喫茶店も、そして夫である杉下左京の探偵事務所も辞める事になりました。

「ううう」

一番悲しんでいるのは、左京です。

「樹里、続けられないのか?」

涙ぐんだ目で樹里を見ますが、逆は効果的でも、樹里には効果はありません。

「旦那様とお話して下さい」

樹里は笑顔全開で言い置き、アパートを出て行きました。

「樹里ー!」

左京は絶叫しました。ご近所に通報されそうです。

樹里はまず最初に喫茶店に行きました。

マスターは顔を引きつらせて出迎えます。

本当は引き止めたいのですが、相手は財界のドンである五反田氏なので、何もできません。

「本日でお仕事を辞めさせていただく事になりました。いろいろお世話になりました」

「今までありがとう、御徒町さん」

マスターは泣き出してしまいます。

悲しいだけではなく、これからどうしようという不安に怯えているのです。

「代わりと言っては何ですが、私を雇って下さいませんか？」

そう言って、樹里の背後から現れたのは、樹里にそっくりな女性です。

どこが違うのかわからないくらい似ています。

「どちら様ですか？」

マスターはビックリして尋ねます。

「私の従妹の、鶯谷翠（うぐいすだにみどり）です。三月に高校を卒業したばかりです」

「おお！」

マスターは感動して震えています。

「是非、ウチで働いて下さい！」

マスターは次のプランを思いつきました。

「女子高を出たばかりのメイドさんがいる喫茶店」で行くつもりです。

「樹里お姉ちゃんほど仕事がうまくできませんが、よろしくお願いします」

翠も、樹里に負けないくらいの笑顔で言いました。

こうして、喫茶店は倒産を免れました。

次に樹里が行ったのは、新聞販売所です。

「朝刊は今まで通り私が配達しますが、夕刊はこの子に配達させてもらえませんか？」

そう言って、樹里が紹介したのは、やはり瓜二つの女性です。

「今年、大学を卒業します、従姉の代々木つかさです」

「おお！」

所長は樹里が二人いるような気がして、卒倒しそうです。

「是非！」

つかさと固い握手をする所長です。
新聞販売所も安泰のようです。

次に樹里は居酒屋に行きました。
「御徒町さん、時給を今の十倍にするから、続けてもらえないかな？」
店長が恐る恐る尋ねます。
「できません」
樹里は笑顔全開で応じました。
「ううう……」
そこへ、信者の皆さんがやって来ます。
「樹里様、辞めないで下さい。続けて下さい」
信者達は号泣しています。
さすがの樹里も笑顔全開ではいられません。
樹里と同伴した人、樹里をテレビ局の魔手から救ってくれた人、
樹里の事を本当に愛してくれている　人、左京に嫌がらせをした人。

喫茶店や新聞販売所と違い、彼らと樹里はずっと近い存在になっていたのです。

樹里は五反田氏に連絡を取りました。

「居酒屋で働くのを続けてもよろしいですか？」

五反田氏は、樹里が望む事は何でも聞いてあげようと思っていたので、すぐにＯＫが出ました。

「御徒町さん、くれぐれも働き過ぎないようにね」

「ありがとうございます」

こうして、樹里は居酒屋の深夜だけ働く事になりました。

以前の結末（樹里ちゃん、居酒屋で働く参照）と違ってしまったのは、作者がバカだからです（そのとおりです　作者）。

左京は、悲しみに打ちひしがれていました。

樹里が探偵をしてくれないという事は、コーヒーにクリープを入れないのとほぼ同じです。

「何よお、元気出しなさいよお、左京」

幽体離脱所員の宮部ありさが言います。

「うるせえよ」

左京は完全に不貞腐れています。

「だから、こんな事務所早く畳んで、警視庁に戻りなさいよ、左京」

いつの間に入って来たのか、神戸蘭警部が言います。

「水戸浪士に刺されちゃいなさいよ、あんたなんか！」

ありさがムッとしてわかりにくいボケを言います。

蘭はそれを無視しました。ありさは項垂れます。

「只今戻りました」

そこへ樹里が入って来ました。

「樹里！」

左京は人目も憚らず、いきなり樹里に抱きつきます。

「俺、一生懸命働くから！　だから、お願いだ、見捨てないで」

左京は樹里に言いました。すると樹里は、

「では、樹里にそう伝えておきますね」

「え？」

左京はギョッとして樹里（？）から離れます。

「夫以外の殿方に抱きしめられたの、久しぶりです」

その人は樹里ではなく、姉の璃里でした。

「わわわ、申し訳ありません、お姉さん！」

左京は真っ青になって土下座します。

「いいんですよ、左京さん。樹里と間違えられるか、試したのですから」

璃里は樹里と寸分違わぬ笑顔で言います。

「どういう事ですか？」

左京はキョトンとして立ち上がります。

「探偵事務所は、私が引き継ぎます。樹里の代わりに」

「ええ！？」

左京とありさと蘭が異口同音に叫びました。

「先日、ドロントと対決して、昔の血が騒ぎ出してしまいました。主人にも賛成してもらったので、心配いりません」

璃里は結婚する以前、警察官だったのです。

「全然知りませんでした」

左京が仰天して言います。璃里は笑顔で、

「警察官と言っても、警察庁勤務でしたから、ほとんどデスクワークでしたが」

それを聞き、蘭とありさが、

「けっ」

と舌打ちします。キャリア組には冷たい二人です。

「さてさて、また無駄足踏んだみたいね」

蘭は肩を竦めて事務所を去りました。

「表向きは、樹里が仕事を続けている事にして下さい。ドロント対策として」

璃里が言いました。よく見ると、璃里の方が樹里より大人っぽいです。

「はい」

左京は思わず赤面しました。するとありさが、

「あれれえ、左京、どうして顔が赤いのかなあ?」

「う、うるせえ！」

一瞬でも、璃里に見とれてしまった自分が情けない左京です。

「只今戻りました」

そこに本物が到着のようです。

「樹里！」

左京は抱きつこうとして、立ち止まります。

「本当に樹里？」

「ばれたか。私よ、左京ちゃん」

それは母親の由里でした。

「お母さん、止めて下さい」

左京は心臓が止まりそうです。

「私も占いの仕事が暇な時は、できるだけ手伝うわ」

色目を使う由里に、呆れる璃里とビビる左京です。

その頃、本物の樹里は、五反田邸にいました。

「挨拶はすんだかね、御徒町さん。あ、結婚したのだから、杉下さんかな？」

五反田氏が、精一杯の冗談を言いましたが、樹里は、

「御徒町で結構です、旦那様」

と笑顔全開で応じます。ちょっとだけ引きつる五反田氏です。

こうして、またしても、御徒町一族が増加するのでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、一目惚れされる

御徒町樹里はメイドです。

大富豪の五反田六郎氏の邸で働いています。

ある日、五反田氏の留守中に、五反田氏の旧友である目黒七郎氏の跡取り息子の祐樹（ゆうき）がやって来ました。

目黒氏の事業の一部を引き継ぎ、正式に後継者候補として財界デビューを果たすようです。

そのために祐樹は五反田氏に挨拶に来たのですが、五反田氏は急用で出かけて留守でした。

祐樹は、富豪にありがちな、「バカ息子」ではありません。

幼い頃から英才教育を受け、わずか十五歳でアメリカの「バーハード大学」を主席で卒業しました。

更に特別な家庭教師に「帝王学」も学び、いつでも目黒氏の後継者となれる器です。

しかし、そんな生活が長かったせいで、祐樹は女性に対してほとんど免疫がありません。

富豪でイケメンで、おまけに秀才と、無敵最強モードなのですが、恋愛経験がないのです。

大学生活でも、周囲は皆年上でしたから、恋愛はできなかったのです。

目黒氏も、祐樹にその方面の教育をしなかった事を悔やみました。

でもまだ祐樹は二十歳です。これからいくらでも人生経験はつめる。

そう考えた目黒氏は、自分の手許ではなく、旧友の五反田氏の元で修行を積むように祐樹に言いました。

樹里は、五反田氏から祐樹の事を聞かされていて、邸に来たら待たせておくように言付かっています。

祐樹はスーツの襟を直し、玄関の呼び鈴を押しました。

「いらっしゃいませ」

ドアが開き、樹里が現れます。

祐樹は、樹里がとても奇麗な女性なので、顔が真っ赤になってしまいました。

「あ、あの、その、えーと……」

仕事関係の女性には全く狼狽える事がなく、「立て板に水」のように話せる祐樹ですが、プライベートで女性に会うと、「横板に餅」のように言葉が繋がらなくなってしまいます。

しかも、祐樹にとって樹里の容姿とその笑顔は、ど真ん中でした。

決して、山形のお米の事ではありません。

「どうぞこちらへ」

樹里が祐樹を案内します。祐樹は火照る顔を両手で扇ぎながら応接間に行きました。

「お飲み物はいかがなさいますか？」

樹里は相変わらずの笑顔全開です。

「あ、あの、み、水で結構です」

祐樹は呂律が回らない事を情けなく思い、ますます顔を赤くします。

「畏(かしこ)まりました」

樹里は深々とお辞儀をし、応接間を出て行きます。

「ふう」

樹里がいなくなると、祐樹はようやくホッとしてソファに身を沈めます。

（あの子、可愛いなあ。歳は僕と同じくらいだろう。名前、なんて言うのかな？）

樹里がいなくなった途端、そんな事に興味が行くのですから、祐

樹も本当は女性が好きなのでしょう。

「さすが、五反田のおじ様のお邸だ。経済学の本がこんなに」

応接間の壁には、大きな書棚が備え付けられており、たくさんの本が並べられています。

しかもそのほとんどが、原書です。

祐樹は立ち上がり、その中の一冊を取り出して開きました。

そこへ樹里が戻って来ます。

「お待たせ致しました」

樹里はトレイにガラスの水差しとグラスを載せています。

「あ、あり、ありがとう、ご、ございます」

祐樹は慌てて本を書棚に戻し、ソファに座ります。

「どうぞ」

樹里が水差しからグラスに水を注ぎ、祐樹の前に置きました。

「はい」

祐樹は何を焦ったのか、グラスをあおりました。

「ああ！」

そのせいで、グラスの水のほとんどが口に入らず、祐樹のスーツに零れ落ちました。

「大丈夫ですか？」

樹里が素早く動き、ハンカチで祐樹のスーツを拭いました。

「……」

祐樹は樹里の顔を間近に見て、何も言えずにされるがままです。

（可愛い。可愛過ぎる！）

祐樹は思わず樹里の手を握ってしまいます。

「あの」

樹里はビックリして祐樹を見ました。

「あの、その、お名前をお聞かせ下さい」

祐樹はまさに勇気を振り絞って尋ねました。

「御徒町樹里と申します」

樹里は笑顔で答えました。

「素敵なお名前ですね」

お世辞ではありません。祐樹は本当にそう思っているのです。

「ありがとうございます」

祐樹は樹里の手を握ったままなのを思い出し、

「ああ、す、すみません」

と慌てて放します。

「お召し物をお脱ぎ下さい。乾かします」

樹里が言いました。

「あ、はい」

祐樹がスーツを脱ぎました。

すると、下に来ていたワイシャツも濡れています。

「そのままでは風邪をお引きになってしまいますので、お風呂にお入り下さい。その間にお洋服を乾かします」

「え、あ、はい」

祐樹は立ち上がり、樹里についてバスルームに行きます。

「あの」

「はい？」

樹里は笑顔で振り返ります。

「お付き合いされている方は、いらっしゃいますか？」

祐樹は更に一歩踏み込みました。

樹里は立ち止まって考え込みます。

（え？　考えるような事か？）

祐樹は不思議に思いました。

「おりません」

樹里は笑顔全開で答えました。

「じゃ、じゃあ、僕と付き合っていただけませんか？」

「はい」

樹里は笑顔で応じます。

祐樹は卒倒しそうです。

「こちらです」

祐樹は脱衣所で服を脱ぎ、よく温まった浴室に入りました。

「お召し物を乾かします」

ドアの向こうで樹里の声がします。

「はい、ありがとうございます」

祐樹はガッツポーズです。

（あんな可愛い子と付き合えるなんて、僕は運がいい）

祐樹は頭と身体を洗い、しばらく浴槽で温まります。

「お召し物、乾きましたので、こちらに置いておきます」

「はい」

祐樹は樹里の声で我に返り、浴槽から出ました。

服を着ながら、今晩の予定を考えます。

（いきなり食事とか誘ってもいいのだろうか？）

ダメなら断わるだろう。そう考えた祐樹は、バスルームを出て応接間に戻ります。

「間もなく、五反田が戻りますので、もうしばらくお待ち下さい」

樹里がそう告げて退室しようとしたので、

「あの、今晩お食事でもいかがですか？」

「はい」

樹里は躊躇いもなく応じます。

「そ、そうですか。では、ご連絡先をお教え下さい」

祐樹はアタフタと携帯を取り出します。

「その前に、夫に連絡してもいいですか？」

「はい？」

祐樹はキョトンとしました。

（今、彼女、夫って言わなかったか？）

「あ、あの、お付き合いしている方はいらっしゃらないのですよね？」

祐樹は確認のためにもう一度尋ねます。

「はい」

樹里は笑顔全開で応じます。

「今、『夫』って仰いませんでしたか？」

祐樹は顔を引きつらせて言います。

「はい」

樹里は尚も笑顔です。

「僕をからかっているのですか？」

祐樹は少しムッとして尋ねました。

「いいえ、とんでもないです。お客様をからかったりは致しません」

「付き合ってる人はいないのに、旦那さんがいるって、おかしいじゃないですか」

祐樹は更に尋ねます。

「夫とは付き合っていませんので」

「はあ？」

祐樹は唖然としました。

樹里は夫の杉下左京に連絡し、許可を得ました。

「お食事、行っていいそうです」

樹里が笑顔で言います。

祐樹はその笑顔にやられてしまい、樹里が既婚者だなんてどうでもよくなってしまいました。

（ずっと思っていれば、いつか僕の方を向いてくれる）

結構ポジティブな人です。

当然の事ながら、連絡を受けた左京は、そっと樹里達の後をつけ、血の涙を流しながら堪えていたのは言うまでもありません。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ベロトカゲと対決する?

御徒町樹里はメイドです。

現在、大富豪の五反田六郎氏の邸で働いています。

ある日、樹里が庭の掃除をしていると、門扉の向こうに女性が現れました。

髪はショートカット、服装は黒のワンピースで、牛乳瓶の底のような眼鏡をかけています。

以前樹里が働いている居酒屋に来た六本木厚子です。

厚子は性懲りもなく、また樹里に挑戦しようとしているようです。

彼女はまたの名を「ベロトカゲ」と言います。

股に名前があるのではない事は、火を見るより明らかです。

「御徒町さん」

厚子は門扉の向こうから樹里を呼びます。

樹里は厚子に気づき、近づきます。

「いらっしゃいませ」

樹里は厚子の事を忘れているようです。

「随分凄いお邸で働いているのね」

「どちら様ですか？」

厚子は樹里の言葉にショックを受けました。

「私よ。六本木厚子よ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「このお邸のシャンデリアを、以前ドロントが盗もうとして失敗したのよね？」

厚子はニヤリとして言いました。

「そうなんですか」

樹里は尚も笑顔全開で応じます。

「だから今度は私がそのシャンデリアを盗むわ。これ、予告状よ」

厚子は樹里に封書を手渡します。

「そうなんですか」

樹里はそれを受け取りました。

「じゃあね」

厚子は煙幕を張って逃げますが、その日は風の強い日でしたので、逃げる厚子が丸見えです。

「お気をつけて」

樹里は深々とお辞儀をして厚子を見送ります。

一方、ドロントの隠れ家です。

八王子の山の中にあります。

「あっちゃんがまた現れたらしいわね」

ドロントが部下のヌートとキャビーに言いました。

「はい。首領が盗み損ねた五反田邸のシャンデリアを盗むそうです」

キャビーが答えます。ドロントはムッとして、

「盗み損ねたんじゃないわよ！　盗まなかったの！」

「ものは言いようですね」

キャビーが言います。

「うるさいわよ！」

ドロントは切れました。

「とにかく、私の邪魔はさせないわよ、あっちゃん」

ドロントは腕組みをして言いました。

そして予告日当日です。

厚子は自分の事務所に行きました。

事務所は高層ビルの最上階です。

ここで着替えて盗みに行く予定です。

事務所の前まで行き、ドアの鍵を開けていると、

「六本木厚子さんですね？」

と目つきの悪い私服刑事が三人現れました。

「何でしょうか？」

厚子は、以前似ていると言われた安めぐみのような笑顔で尋ねました。

でも刑事にはわかりません。

「五反田邸への窃盗予告の件で訊きたい事があります。署まで同行願います」

「え？」

厚子はビクッとしましたが、ここはセオリー通り、恍けます。

「何の事でしょう？」

「シラを切るつもりか？　五反田邸のメイドさんに渡した予告状が、あんたの事務所の名入りの封筒だったんだよ」

刑事はいささか呆れ気味に言いました。

「えええええ！？」

芸人並みのリアクションで驚く厚子です。

予告状に自分の事務所の封筒を使うなんて、間抜け過ぎです。

「さあ！」

厚子は警察に連行されてしまいました。

厚子が警察に捕まったのを知り、ドロント達は呆気にとられました。

「やっぱり、小学生の時から変わらないわ。アホのあっちゃんのま

まね」

溜息を吐くドロントでした。

樹里の夫の杉下左京は、妙な女が犯行予告をしたと知り、驚いて五反田邸に来ました。

「樹里、大丈夫か？」

左京は庭にいた樹里に話しかけました。

「左京さん」

樹里が微笑んで左京を見ます。

左京はにやけます。気持ち悪いです。

「うるさいわい！」

地の文に突っ込む左京です。

「もう犯人は逮捕されたから、安心しろ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じました。そして、

「それより、お話があります」

左京は悲しい条件反射で、ビクッとしてしまいます。

「な、何でしょう？」

全身から嫌な出る左京です。

「赤ちゃんができました」

「犬のか？」

左京は、「もうそんな事に驚かないぞ」という顔で言います。

「違います」

「じゃあ、猫の？」

「違います」

左京は腕組みをして考え込みます。

「まさか、由里さんの？」

由里とは、樹里の母親です。

「違います」

ほんのちょっとですが、樹里が怒っている気がする左京です。

「ま、まさか……？」

さっきより更に大量の汗を掻く左京です。

「はい。私達の赤ちゃんです」

樹里は笑顔全開で言いました。

「おお……」

左京はあまりの驚きに目眩がしました。

「生活、できるのか、俺達……」

仕事がうまくいっていない左京は先行き不安です。

樹里ちゃん、推理作家と会う

御徒町樹里は大富豪の五反田六郎氏の邸のメイドです。

しかも、夜は居酒屋でも働いています。

それもこれも、夫である杉下左京の探偵事務所が、本人同様パッとしないからです。

「うるせえ！」

事務所のソファにふんぞり返って、地の文に悪態をつく左京です。

人としてどうかと思います。

「どうしたらいいんだろう……」

左京は頭を抱えました。

こんな状態なのに、樹里が妊娠しました。

子供を養っていく自信がないのです。

「あんたのせいなんだから、しっかりしなさいよ、左京」

いつもは能天気で、逆セクハラ連発の所員の宮部ありさも白い目で見ています。

「それもそうなんだけどさ……」

ありさは、

「私もそろそろ泥舟から逃げ出さないとね」

とこそっと言いました。

「てめえ、前原◯司みたいな事する気か！？」

左京はとても不謹慎な発言をしましたので、伏字にしました。

「だって、このままじゃ、この事務所潰れるでしょ？　私も生活があるしね」

「ううう……」

そう言われると一言もない左京です。

さて、その頃、樹里はある人の訪問を受けていました。

日本の推理小説界の大物、大村美紗です。

娘のもみじも同行しています。

美紗は、樹里の親友である船越なぎさの叔母です。

美紗はなぎさが嫌いなので、彼女に内緒で五反田邸に来ました。

五反田氏は美紗と旧知です。

しかし、忙しい五反田氏は邸にいる事ができず、樹里が一人で出迎えました。

「ご機嫌よう、樹里さん。今日はあの子はいませんよね？」

玄関で出迎えてくれた樹里に、美紗が尋ねます。

「あの子ですか？」

樹里には誰の事かわかりません。それに気づいたもみじがフォローします。

「なぎさお姉ちゃんですよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「あら、叔母様。お久しぶりです」

そのなぎさが、樹里の後ろから顔を見せました。

「……」

美紗は硬直してしまいました。

「なぎさお姉ちゃん、どうしてここにいるの？」

もみじも仰天しています。

「近くを通りかかったから、樹里の顔を見ようと思って。私、五反田さんとマブダチなんだよ」

なぎさは見た目は若くて可愛いので、男性には受けがいいようです。

しかも、彼女は樹里の親友なので、五反田邸は顔パスです。

普段はあまり姿を見せない邸の警備員の人達にも、なぎさファンがいます。

しかし、身内であり、何度もなぎさに頭を悩まされている美紗はそんな風には思えません。

「も、もみじ、帰るわよ！」

ようやく硬直が解けた美紗が叫びました。彼女はもみじの返事を待つ事なく、踵（きびす）を返して門のそばに停まっている運転手つきのリムジンに向かいます。

「ああ、お母様！」

もみじは樹里となぎさを気にしながらも、美紗を追いました。

「ここまで来て、帰るなんて、五反田のおじ様に失礼よ、お母様」

もみじが小声で窘（たしな）めます。

でも美紗は、

「なぎさがいる方が失礼よ。五反田さんもあんな子と友人だなんて、私もお付き合いを考えないとね」

とプリプリして言いました。

「お母様……」

もみじは美紗の癇癪に呆れました。

「どうしたのかしら、叔母様？」

なぎさは不思議そうに樹里を見ます。

「さあ」

樹里は笑顔全開で応じます。

「そうかあ、叔母様ったら、私が五反田さんとマブダチだって知ったので、怒ったのね。可愛い、叔母様」

半分鋭いなぎさです。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

という事で、大村美紗は、またしても姪のなぎさのせいで、樹里と話ができませんでした。

さて、左京です。

「ふーん」

向かいのソファで、白い目で左京を見ている神戸蘭（かんべらん）がいます。

蘭は樹里が妊娠した事を知り、事務所にやって来たのですが、左京の不甲斐なさに呆れています。

「決断の時なんじゃない、左京？」

蘭は、ここぞとばかりに攻め立てます。

「警視庁に戻りなさいよ、左京。あの刑事部長も、亀島君もいなくなったんだから」

そう言えば亀島は自首したのだろうか、と左京は思いました。

「蘭、悪い魔女みたいな顔してるわよ」

左京が警視庁に戻るのは面白くないありさがチャチャを入れます。

でも、勝俣さんは無関係です。

「うるさいわね、無駄な所員！」

蘭が切れました。

「何ですって、無駄な警部！」

醜い罵り合いは、別のシリーズでお願いします。

「樹里も、そのうち仕事が難しくなるわ。そうなったら、今以上に大変よ、左京」

蘭は今度は菩薩様のような顔で語りかけます。

「左京、催眠商法に負けないで！」

ありさが妙な応援をします。

「何言ってるのよ、人生催眠商法みたいなあんたが！」

蘭が強烈な嫌味を言います。

「何ですって！？」

ありさが切れました。

「あああ、うるさい！　一人にしてくれ！」

左京はありさと蘭を事務所から追い出し、鍵をかけてしまいました。

「あんたのせいよ！」

ありさが毒づきます。

「あんたのせいでしょ！」

蘭が言い返します。

「うるさい！　どこかに行け！」

左京がドアを開いて怒鳴り、また閉めて鍵をかけます。

ありさと蘭はさすがにショボリし、立ち去りました。

左京は夜になると、樹里が働いている居酒屋に行きました。

「俺はどうすればいいと思う、樹里？」

店の奥の個室で、左京は飲んだくれて樹里に相談します。

「そんな左京さん、嫌いです」

「え？」

樹里の言葉にギクッとする左京です。

「努力もしないで、いきなり泣き言を言うような左京さんは嫌いです」

樹里の真剣な表情に左京は目が覚めた思いがしました。

「私が力になりますから、頑張って下さい」

樹里が左京の手を優しく包みます。

「樹里！」

左京は思わず樹里を抱きしめました。

「あの、困ります、左京さん。私、夫がいますので」

「え？」

ハッと気づき、よく見ると、樹里ではなく、姉の璃里でした。

「あわわ、お義姉（ねえ）さん、すみません！」

今日は璃里が当番の日でした。

由里さんじゃなくて良かった、と思う左京です。

「探偵事務所は、アピールが足らないのだと思います。夫と相談して考えてみますので」

「ありがとうございます、お義姉さん」

左京は涙ぐんで礼を言いました。

その頃、樹里は五反田邸で夕食の後片付けをしていました。

そこへ再び美紗ともみじがやって来ました。

樹里は二人を応接間に通し、五反田氏を呼びに行こうとしました。

「あの子は帰ったのよね？」

探るような目で美紗が尋ねます。

「あの子ですか？」

樹里はまたわからないようです。

「なぎさお姉ちゃんですよ、樹里さん」

もみじが言いました。

「あれ、叔母様ともみじ、また来てたの？」

なぎさがドアを開いて現れました。彼女の後ろには五反田氏がいます。

「大村さん、お待たせしました」

何も事情を知らない五反田氏は、微笑んで言いました。

「急用を思い出しました。失礼」

美紗はムッとしたままで応接間を出て行ってしまいます。

「も、申し訳ありません」

もみじは五反田氏に詫びながら、美紗を追いかけます。

「どうしたのかね、大村さんは？」

ビックリして樹里に尋ねる五反田氏です。

「叔母様、私が五反田さんと仲がいいのを嫉妬してるのよ、きっと」

なぎさが無責任な推理を展開します。

「そうなのかね」

五反田氏は肩を竦めました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

こうして、二度に渡る大村親子の五反田邸訪問は、わずか数分で終了しました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ドロントと最終対決する？

御徒町樹里は大富豪の五反田氏の邸のメイドです。

今日もいつものようにお邸の庭を掃除しています。

「御徒町さん、無理をしないようにね。今は貴女だけの身体ではないのだから」

出かける時に、五反田氏が声をかけました。

「そうなんですか。ありがとうございます」

樹里はそう言いながらも、後は誰の身体なのだろうと思っています。

「行ってらっしゃいませ、旦那様」

樹里は深々とお辞儀をして、五反田氏を見送ります。

そして、庭掃除をすませると、邸に戻ります。

その時でした。

「どの時ですか？」

樹里が地の文に尋ねます。

今からわかりますので、お待ち下さい。

「そうなんですか」

樹里はそのまま玄関の扉を開いて中に入ってしまいます。

「ちょっと！」

庭の木の陰でムッとしているオバさんがいます。

「誰がオバさんだ！」

地の文に突っ込むオバさんです。

よく見ると、ドロントに似ています。

「似ているんじゃなくて、ドロント本人よ！」

ドロントはヘトヘトになっています。

「あんたが妙な事を書くから、あの子に予告状を渡しそびれたじゃない！　どうしてくれるのよ！？」

じゃあ、樹里を呼び戻します。

「そうしてくれる？　頼んだわよ」

ドロントはホッとしたようです。

「ドロントさん、いらっしゃいませ」

いきなり樹里が後ろに現れ、心臓が止まりかけたドロントです。

オバさんにはきついドッキリでした。

「ふざけないでよ！」

ドロントは切れたようです。

眉間に深い小皺がたくさん寄っています。

「うるさいわね！」

更にヒートアップするドロントです。

「それより、どうして貴女がそこにいるのよ……」

そこまで言いかけて、「しまった」と思うドロントです。

「歩いて来たからです」

型通りの回答をする樹里です。

ドロントも型通りに項垂れます。

「取り敢えず、これ。確かに渡したわよ」

ドロントは樹里に予告状を手渡しました。

「これは何ですか？」

樹里が尋ねます。

「犯行の予告状よ」

「ハンコの葉子苦情ですか?」

樹里が更に尋ねます。

「誰がそんな事言った!?　明日の午後十一時に、国立漫才劇場にある漫才トロフィーを頂くのよ。旦那に伝えなさい」

ドロントは苛つきながら言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「それから、ご懐妊おめでとう」

ドロントからの意外な言葉です。

「ありがとうございます」

樹里は更に笑顔全開です。

「だからと言って、私は手心は加えないから。覚悟しておいてね」

ドロントはそう言いながら駆け去ろうとします。

「ではこれは私の姉に渡して下さい」

「はあ？」

ドロントは思わず立ち止まって振り返ります。

「探偵事務所は、姉の璃里が受け持つ事になりました。但し、ドロントさんには内緒なんです。言わないで下さい」

樹里の言葉に唖然として硬直するドロントです。

「今、何て言ったの？」

ドロントは尋ねました。目眩がしそうです。

「トルネードスピンですか？」

「誰がタイムショックだ！」

ドロントはもう一度切れました。

「探偵事務所は姉が受け持つって、どういう事？」

ドロントは自分達がレギュラーから外されると感じ、危機感を抱いているようです。

「言葉通りです」

樹里は変わらない笑顔で答えました。

「訊いた私がバカだったわ。じゃあね……」

ドロントはフラフラしながら、五反田邸を去りました。

ドロントは八王子にあるアジトに戻りました。

「樹里ちゃんは元気でしたか？」

隠れ樹里ファンのキャビーが嬉しそうに尋ねます。

「知らないわよ」

ドロントは意気消沈して応じます。

「どうしたんですか、首領？　元気がないですね」

ヌートが心配して尋ねます。

ドロントは溜息を吐いてソファに倒れ込みます。

「溜息を吐くと小皺が増えますよ」

キャビーが余計な事を型通りに言います。

「うるさいわね！」

ドロントは切れました。そして目眩を起こします。

「私達、もう出番がなくなるかも知れない……」

「ええ！？」

ヌートとキャビーは仰天しました。

「だから、今回は仕事はなし。来週またここに来て」

ドロントはショックで臥せってしまいました。

次回は、ドロント編最終話「シャーロット・ホームズ登場」です（嘘です　作者）

樹里ちゃん、マジ告白される

御徒町樹里は、日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸のメイドです。

普通、五反田氏程の富豪の邸の規模だと、数名のメイドが必要とされるのですが、樹里はたった一人で全てをこなしています。

広大な庭の掃除、何部屋あるのか、主（あるじ）の五反田氏ですら把握していない邸宅内の掃除。

そして、五反田氏達の食事の用意、衣類の洗濯。

五反田氏が心配して、樹里に尋ねました。

「御徒町さん、一人で大丈夫かね？　とても大変だと思うのだが？」

「そうなんですか」

樹里は五反田氏の心配をよそに、笑顔全開です。

「メイドを増員しようと思うのだが、どうかね？」

五反田氏が言いました。すると樹里は、

「大丈夫ですよ。まだ余裕があります」

と応じます。五反田氏は、樹里が妊娠しているので、それも心配しているのです。

「しかし、御徒町さんはお腹に赤ちゃんがいる。それも気になるのだよ。本当に大丈夫かね？」

「大丈夫ですよ。私の母は、私を身ごもった時、知らずにダンスを踊っていたそうです」

樹里の誕生秘話を聞かされ、五反田氏は唖然としました。

「わかった。だが、くれぐれも無理はしないようにね」

「はい、旦那様。お気遣い、ありがとうございます」

樹里は笑顔全開でお礼を言いました。

五反田邸には、五反田氏の他に五反田氏の奥さんの澄子（すみこ）さんと娘の麻耶さんがいます。

麻耶さんはまだ小学四年生です。

彼女は樹里を凄く慕っており、澄子さんんも樹里に全幅の信頼を寄せています。

五反田氏を見送った樹里が邸に戻ると、樹里の身体を心配した澄子さんと麻耶さんが樹里に声をかけます。

「御徒町さん、無理しないでね。辛かったら、いつでも言ってね」

澄子さんは、樹里のお陰で夫婦の仲が修復できた（樹里ちゃん、幽霊と会う参照）ので、彼女の事を本当の家族のように思っている

のです。

「樹里お姉ちゃん、赤ちゃんを大切にしてね」

麻耶さんは涙ぐんで言いました。

「ありがとうございます、奥様、お嬢様」

樹里は深々とお辞儀をしました。

そんな優しい人達に恵まれた樹里のところに、五反田氏の旧友である目黒七郎氏の後継者の祐樹がまた現れました。

彼は、樹里に一目惚れし、彼女に杉下左京と言う甲斐性なし夫がいる事を知りました。

それでも樹里の事を諦め切れない祐樹は、もう一度樹里にアタックしようと思い、五反田邸を訪れたのです。

「まあ、いらっしゃい、祐樹さん。お久しぶりね」

澄子さんが言いました。

「お久しぶりです、澄子おば様」

祐樹が微笑んで応じます。

「祐樹お兄様、ご機嫌よう」

祐樹に淡い恋心を抱く麻耶さんが言います。

「やあ、麻耶ちゃん。ご機嫌よう」

そんな麻耶さんの思いに気づく事なく、祐樹は挨拶します。

「御徒町さんはいますか？」

祐樹は澄子さんに尋ねます。

「ええ。今、お庭の掃除をしているわ。もうすぐこちらに来ますよ」

「そうですか。では、そちらに行ってみます」

樹里に一秒でも早く会いたい祐樹は、心配そうな視線を向ける麻耶さんに目を向ける事なく、邸を出て行きます。

でも、とても素直に育った麻耶さんは、

（祐樹お兄様が樹里さんを好きなのなら、私は諦める）

と思っています。本当にいい子なのです。いい子過ぎて、可哀想になってしまいます。

祐樹は、庭で木の剪定をしている樹里を見つけました。

「樹里さん、こんにちは」

祐樹は身なりをもう一度整え、樹里に声をかけました。

「いらっしゃいませ、祐樹様」

樹里は手を休め、深々とお辞儀をします。

「妊娠されていると聞きました。大丈夫なのですか、そのようなお仕事をされて？」

祐樹が心配そうに尋ねます。

「大丈夫です。私の母は私がお腹にいる時、牛乳配達をしていましたから」

「そうなんですか」

祐樹はつい、樹里の口癖を真似てしまいます。

「樹里さん」

祐樹はグッと樹里に近づきます。

「何でしょうか？」

樹里は笑顔全開で応じます。

「今のままでは、貴女はとても幸せとは思えない。僕が貴女を本当に幸せにしてみせますから、僕と結婚して下さい」

祐樹は大真面目な顔で言いました。

左京が聞いたら、血の涙を流しそうです。

「そうなんですか」

樹里の笑顔が消えます。

祐樹はギクッとしました。

「貴女は、僕と結婚すれば仕事をする必要もない。毎日あくせくしなくてもいいんです。お腹の子供は、僕の養子にします。ですから、僕と結婚して下さい」

それでも祐樹は怯まずに更に押します。

「祐樹様」

樹里は真っ直ぐに祐樹を見ました。

「はい」

祐樹は生唾をゴクリと呑み込みました。

「私が幸せかそうでないかは、祐樹様にはわかりませんよ。人の幸せの物差しは、人それぞれなのです。他の人には幸せに見えなくても、自分が幸せだと思うなら、それがその人にとっての幸せなのです」

樹里のその言葉に、祐樹は愕然としました。

自分のあまりに思い上がった気持ちに気づいたのです。

「すみませんでした、樹里さん。僕が間違っていました」

祐樹は震える程感動して、五反田邸を立ち去りました。

それを木の陰から、左京が見ていたのを樹里は知りません。

「樹里……。俺は今、猛烈に感動しているぞ」

一度は折れかけた探偵への情熱を、左京は取り戻す事を決意しました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京と共にドロントと対決する

俺は杉下左京。

五反田駅の前に事務所を構える私立探偵だ。

所員には、俺の妻の御徒町樹里と高校時代からの腐れ縁の宮部ありさがいた。

ところが、樹里は大富豪の五反田六郎氏の邸に戻る事になり、代わりに樹里のお姉さんの璃里さんが来てくれる事になった。

「左京、なんだか嬉しそうね」

グウタラのくせに口だけは一人前のありさが言う。

「何がだよ？」

俺は所長の椅子にデンと座って尋ねた。

「璃里さんが樹里ちゃんにそっくりなだけじゃなくて、大人の女性だから、ウキウキしてるんでしょ？」

ありさはズバリ核心をついて来た。

俺は全身に嫌な汗をたくさん掻いてしまう。

「男が浮気しやすいのは、妻が妊娠している時だって、小〇館の学習雑誌に書いてあったぞ」

得意満面で言うありさ。

「そんな事が書いてあるはずねえだろ！」

俺はハンカチで汗を拭いながら反論した。

そう言いながらも、璃里さんの可憐さにちょっとだけ心惹かれている俺がいた。

「オーホッホッホ！」

その時、奇妙な鳥が鳴いた。

「鳥じゃないわよ！」

鳥が突っ込みを入れる。

「だから鳥じゃないって言ってるの！」

床の一部を開き、変な女が現れた。

「誰だ、お前は？」

俺は真剣な顔で尋ねたが、その奇妙な女は俺を呆れて見ているし、ありさも冷たい視線を向けている。

「やっぱり、ここじゃなくて五反田邸に行くわ」

女はそう言うと、姿を消した。

「ありさ、あの女を知っているのか？」

俺は恥を忍んで尋ねた。

「一度入院しなさい、あんたは」

あの軽いノリのありさはどこへ行ったのか、非常にきつい返しをされてしまった。

「面倒臭いから、貴方に渡しとくわ、ヘボ探偵さん」

女が戻って来て、予告状と書かれた封書を置き、また消えた。

「これは……」

俺はそれを開き、中身を読んだ。

字が汚くて読み辛かったが、

「今日の午後十一時、東東京大学（ひがしとうきょうだいがく）の研究所から、不老不死の薬を頂きます。世界的美人大泥棒ドロント」

と書かれているようだ。

「まあ、大変ですね」

いつの間に来たのか、璃里さんが俺の横に立ち、予告状を覗き込んでいた。

「あ、お、おはようございます」

何故か赤面してしまう俺。

「おはようございます。早速ドロントから予告状が届いたのですね」

璃里さんは相変わらず樹里そっくりの笑顔で言う。

「はい。しかし、不老不死の薬なんて、本当にあるのでしょうか？」

「とにかく、行ってみましょう」

という事で、俺と璃里さんとありさは、東東京大学の研究所に行く事にした。

「蘭に連絡した方がいいんじゃないの？」

ありさが余計な事を思いつく。

「そうですね。蘭さんには知らせておくべきでしょう」

璃里さんが同意したので、俺は仕方なく警視庁ドロント特捜班の神戸蘭（かんべらん）に連絡し、研究所へと向かった。

東東京大学は、東京都の東の端にある。

もう少し行けば千葉県である。

東京湾の向こうには、例のネズミの国がある。

俺はあの国が大嫌いなので、一度も行った事がない。

俺は断然東京フレンドランド派なのだ。

「私が研究所の責任者の足立ひかるです」

研究所の所長と言うから、もっと年を取った人物かと思ったが、随分と若い女性だ。

どう見ても、璃里さんと同じくらいにしか見えない。

しかも、美人だ。ありさなんか、目じゃない。

「なるほど、所長さん自らが被験者なのですね？」

璃里さんが言った。え？　どういう事だ？

「はい。実は私は今年で六十五歳なのです」

足立所長の言葉に、俺とありさは驚愕した。

「養女にして下さい、所長さん」

ありさが思いっきり媚びた。

「残念ですが、私には五人の娘がおりますので」

足立所長の答えにありさはがっかりした。

すごい。もし、彼女の言葉が真実なら、ドロントが狙うのも頷ける。

あの貧乳はとんでもない若造りで、実は二十代の娘が二人いるのだ。

「私は独身だし、子供もいないわよ！」

いきなりドロントの声が聞こえた。何で俺の考えている事がわかるのかは、この際突っ込まない。

「む、貧乳め、まだ予告の時間まで間があるぞ。もう来たのか？」

俺は身構えて辺りを窺う。

「まだよ。今は下見。本番は午後十一時よ。じゃあね」

ドロントは去ったようだ。

そこへドヤドヤと機動隊員がやって来て、蘭が姿を見せた。

「警視庁ドロント特捜班の神戸蘭警部です」

蘭は所長に挨拶した。

「ご苦労様です。所長の足立です」

ありさの耳打ちに蘭が仰天した。

「所長さん、驚きました。実は男性なのですか？」

「誰がはるな愛だ！」

所長は切れた。シリーズが違うので、そのボケは慎んでもらいたい。

蘭は嘘を教えたありさを睨みつけた。

そして、俺達は対ドロントの策を練った。

「今度こそ、捕まえてやるぞ、貧乳め」

俺は拳を握りしめた。

そして、時刻は午後十一時五分前。

研究所の周囲を機動隊員が取り囲み、半径百メートル以内は立ち入り禁止になった。

蘭は徹底的にドロントの変装を封じるため、機動隊員達の制服を特殊なものにしていた。

全身ピンクなのだ。

これでは、ドロントも同じ衣装を用意できない。

蘭め、考えたな。

そして、俺達は合い言葉を考えた。

これも入れ替わりを防止するためである。

研究所の一番奥の一室に、厳重に金庫に保管された不老長寿の薬がある。

そしてその部屋には、所長の足立さんと俺と璃里さんと蘭がいた。

「あー、三日ぶりのお通じ」

妙に嬉しそうにありさが戻って来た。相変わらず品のない事を平気で言う女だ。

「ありさ、合い言葉を言え」

俺はすかさず言った。ありさは苦笑いして、

「やあねえ、左京。私、さっきまでトイレにいたんだよ。入れ替わる暇ないよ」

「ダメだ、例外は認めない。山と言ったら？」

俺は続けた。ありさは肩を竦めて、

「合い言葉は決めてないでしょ。ほら、本物よ」

その通りだった。合い言葉を決めているフリをして、ドロント一味を引っ掛ける作戦だ。

「警部、トイレで縛られている宮部さんを発見しました！」」

そこへ機動隊員が驚くべき報告を上げて来た。

「何！？」

俺達は一斉にありさを見た。

「ちょ、ちょっと待ってよ。私は本物よ。偽者じゃないわ」

「容疑が晴れるまで、護送車に監禁しておきなさい」

蘭の命令で、ありさらしき女は機動隊員に連行された。

「蘭、あんたねえ、覚えときなさいよ！」

ありさらしき人物は捨て台詞を吐いた。

「危なかったわ。私に変装しているなんてね」

トイレで縛られていたありさが現れた。

「えい！」

璃里さんがいきなりありさの右腕を捻り上げる。

「いたた！　何するのよ、璃里さん！？」

ありさが痛みに顔を歪めて尋ねる。

「縛り上げられていたわりには、手首に何の痕跡もありませんよ、ドロントの部下さん」

璃里さんの言葉に俺と蘭はギクッとした。

「くう！」

ありさと思われた女は、璃里さんの腕を振り解いた。

「よく見抜いたわね。さすが樹里ちゃんのお姉さん」

その女は、ドロントの部下だった。

「私の名はキャビー。でも、あなた達には、私達の作戦を完全に見破る事はできないわ」

キャビーと名乗った女は、煙幕を張って逃げた。

「追う必要はありません。ドロントは混乱に乗じて薬を盗むつもりです」

璃里さんが叫んだ。

その時、プシューッと白い煙が充満し始めた。

「く……」

俺は璃里さんを庇いながら煙から離れる。

「私は放ったらかしかい！」

蘭が怒る。

「蘭は強い子だから、一人で生きられるよ」

俺はそう言って蘭を慰めた。

「やかましい！」

蘭は更に切れた。

「薬は頂くわよ、ヘボ探偵さん」

ドロントの声が、煙の向こうで聞こえた。

「待て！」

俺は璃里さんと共にドロントを追う。

ドロントはすでに金庫の扉を開いていた。

「くそ！」

俺と璃里さんが慌てて中に駆け込む。

「どうして貴女がそこにいるのよ！？」

ドロントは、広い金庫の中をほうきで掃除している樹里に言った。

俺も樹里がそこにいるのを見て驚いた。

「中に入れてもらったからです」

ドロントはその返答を聞き、項垂れた。いいぞ、樹里！

「ええい、今日はこの辺にしておいてあげるわ！」

ドロントは負け惜しみを言い、煙と共に消えた。

またしても俺は、樹里に助けられたのだった。

その後、足立所長に事情を訊いた。

東東京大学は五反田六郎氏の創立した大学で、研究所は本当にあるが、不老不死の薬はないと言う。

五反田氏は、ドロントに幾度か邸を脅かされているので、罠を仕掛けたのだ。

結果として、ドロントは捕まえられなかったが。

足立さんは六十五歳ではなく、二十代。所長なのは本当だそうだ。

樹里が金庫の中にいたのは、五反田氏の指示ではない。

たまたま、金庫の掃除をしていて、眠ってしまったらしいのだ。

それで、騒がしいので目を覚ましたら、ドロントが入って来たのだと言う。

「危ないぞ、樹里。今度からは気をつけないと」

俺は樹里に言った。すると樹里は決まりが悪そうに、

「申し訳ありません、左京さん」

と深々と頭を下げた。何故か、すごく悪い事をした心境になる。

そして俺達は事務所に帰った。

「あれ？　誰か、忘れているような気がするが？」

ありさはそのまま警視庁に連れて行かれ、一晩留置場に泊まったと言う。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ようやく推理作家と話をする

御徒町樹里は大富豪である五反田六郎氏の邸のメイドです。

最近、居酒屋は母親の由里がメインで働いています。

由里は店長といい雰囲気で、もしかすると再婚するかも知れません。

「妹達も店長さんに懐いていて、私は賛成です」

樹里は左京にそう言いましたが、左京は、

（店長の奴、ロリコン疑惑があると聞いたからな。気をつけないと）

と思っています。それは当たっているかも知れません。

「お料理の腕は、お母さんの方がずっと上なんですよ」

樹里は笑顔全開で母親自慢をします。

「そうなのか？」

左京は信じられないという顔です。

「では、行って参ります」

樹里は五反田邸に出かけました。

樹里の身体を気遣ってくれた五反田氏が、夜は家に帰るように言ってくれたのです。

「私は大丈夫ですよ」

始めはそう答えていた樹里でしたが、

「いや、ご主人が可哀想だよ。毎日帰って、安心させてあげなさい」と五反田氏に諭されました。

「そうなんですか」

樹里は納得して、今は泊り込みはしていません。

左京はその話を聞き、陰で一人で泣きました。

(五反田さん、今まで『強欲で金の亡者』とか悪口言ってすみません)

左京は心の中で五反田氏に詫びました。

樹里が五反田邸の前に着くと、門の前で女性が待っていました。

親友である船越なぎさの叔母の、大村美紗です。今日は娘のもみじはいません。

「待っていたわ、樹里さん。今日はあの煩わしい姪に会わずにすみ

そうね」

美紗は上から目線で言いました。

「そうなんですか」

でも樹里は全然気にしないため、笑顔です。

「もみじさんはご一緒でないのですか？」

「もみじはなぎさを連れて、原宿で買い物しているわ」

美紗は悪い魔女のような顔で言います。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔で応じました。

そして、樹里は美紗を伴い、邸に入りました。

五反田氏と妻の澄子さんは仕事で出かけていますが、娘の麻耶さんは学校が休みなので部屋にいました。

「お久しぶりね、麻耶さん」

応接間で対面した美紗が言いました。相変わらず、笑顔が上から目線です。

「おはようございます、美紗おば様」

麻耶さんは笑顔で応じました。でも、ちょっとだけ怖がっているようです。

「どうぞ」

樹里が美紗に紅茶を出します。

「あら、いい香り。アッサムね？」

美紗が早速カップを手に取って言います。

「いえ、ダージリンです」

樹里は悪気なく言ってしまいます。

途端に美紗の機嫌が悪くなります。

「樹里さん、私が間違っているとおっしゃりたいの？」

「いえ、そのようなつもりはございません」

樹里は深々と頭を下げました。麻耶さんはすっかり怯えて、樹里の後ろに隠れてしまいます。

「まあ、いいわ」

美紗は麻耶さんが怖がっているのに気づき、話を打ち切ります。

五反田氏に悪い印象を与えたくないという、とても姑息な思いからです。

実は美紗はとても腹黒いと言われています。

「誰かが悪口言ってない？」

二度くしゃみをした美紗が言いました。

「そうなんですか？」

樹里は麻耶さんと顔を見合わせてから言いました。

そして、美紗は樹里からメイドの話をいろいろと聞き、取材は終わりました。

「ありがとう、樹里さん。新作を書き終えたら、貴女に贈るわね」

美紗は上機嫌で言いました。

「ありがとうございます、美紗様」

樹里はまた深々と頭を下げました。

「ああ、良かった、間に合ったね」

美紗が玄関を出ると、そこには困った顔のもみじと嬉しそうな顔のなぎさがいました。

「ひ、ひ、ひ！」

美紗が引きつけそうです。

「はい、おば様、お土産よ」

なぎさは美紗の異変に全く気づく様子もなく、美紗に紙袋を渡します。

「マフラーとセーターよ。冬物が安かったから、買って来たの」

なぎさはニコニコして言いました。

「ムキー！」

美紗はその紙袋を地面に叩きつけると、

「帰るわよ、もみじ！」

と怒鳴り、門へと歩き出します。

「ああ、お母様！」

もみじは申し訳なさそうに樹里と麻耶さんに会釈し、美紗を追いかけます。

「今日もご機嫌斜めだね、叔母様ったら。甘いものが足らないんだよ、きっと」

なぎさは腕組みをして、歩き去る大村親子を見ました。

「それはカルシウムの間違いです」と言う人が誰もいない五反田邸です。

そして、「機嫌が悪いのは貴女のせいです」と言う人もいません。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、食欲増進する

御徒町樹里は、大富豪の五反田六郎氏の邸に通うメイドです。

樹里が妊娠している事に気遣った五反田氏の計らいで、泊まり込みの仕事はなくなりました。

「樹里さん、今くらいが一番気をつけないといけない時期だから、無理をしないでね」

五反田氏の奥さんの澄子さんが言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

樹里自身、看護師の資格を持っているので、妊娠については普通の人より詳しいはずですが、やはり経験者には敵いません。

「私なんか、麻耶を身籠った時は、本当につわりが酷くて、大変だったのよ。それに難産で、三十時間くらいかかったの」

澄子さんは嬉しそうに体験談を語ります。

それを聞いていた麻耶さんは複雑な表情です。

「そうだったの？」

澄子さんは麻耶さんを抱きしめて、

「そうよ。でもね、貴女が生まれて、初めて貴女の顔を見た途端に、辛い事なんか全部忘れてしまう程嬉しかったし、幸せだったわ」

「そうなんだ」

澄子さんに頭を撫でられた麻耶さんは照れ臭そうです。

樹里は二人の姿を見て、自分のお腹に手を当てました。

（早く会いたいです、私達の赤ちゃん）

その頃、樹里の夫である杉下左京は、書店で買い込んで来た妊婦の本を貪るように読んでいます。

「……」

読めば読む程、色々な事が心配になって来る左京です。

そんな左京の百面相を見て、所員の亜梨沙は冷め切った目をしています。

「樹里ちゃんは出産が終わったら、実家に帰るんだから、あんたがそんな本読んだって仕方ないわよ、左京」

「うるさい！　お前は黙ってろ！」

妊婦より不安な顔をしている夫に呆れる亜梨沙です。

「そうか。そろそろ食欲がなくなる頃か……」

こういうのを、「下手な考え休むに似たり」と言います。

「つわりの強い時期です。なるべく食事作りは避け、早めに休憩を」

必死になって知識を吸収するには年を取り過ぎています。

それに左京は、樹里が妊娠何か月なのかも知りません。

只の慌て者です。落語以下です。

「よし、食事の支度は俺がする」

その心がけはいいのですが、左京の食事で樹里が食中毒ではシャレになりません。

「樹里ちゃんが可哀想だわ」

亜梨沙は溜息を吐きます。

左京がいろいろと思い悩んでいるうちに夜になりました。

依頼がなかったので、亜梨沙は定時で帰り、彼一人です。

「あ！」

突然我に返り、大急ぎで家に向かいます。

「食事の用意をしないと！」

左京は大慌てでスーパーに向かい、一体何人家族だ、というくらい食材を買い込んでしまいます。

アパートに着くと、すでに樹里が帰っていました。

「樹里、食事は俺が……」

そう言いながら部屋に入ると、すでに食事はできていました。

項垂れる左京です。

「お帰りなさい、左京さん」

樹里は笑顔全開で言いました。

「樹里、もう食事の支度は俺がするから、無理しなくていいんだぞ」

左京は両手のレジ袋を畳の上に置いて言いました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔です。

左京は今後について話をしようと思いましたが、あまりに料理がうまそうなので、

「頂きます！」

と食べ始めました。そして、樹里の食欲に唖然とします。

（樹里って、こんなに大食いだったっけ？）

樹里は卓袱台に並べられた料理を次々に平らげて行きます。

まるでギャル曽根です。いえ、それ以上かも知れません。

左京は、樹里がおかしくなってしまったのではないかと心配になり、妊婦の本を読みました。

しかし、そんな症状はどこにも書かれていません。

「樹里、そんなに食べて大丈夫か？」

左京は不安になって尋ねました。

「母が、今は二人分食べないといけないと言ったので、二人分食べています」

樹里は眩しい程の笑顔で答えました。

「ああ、そう……」

左京は思いました。

樹里、すでにその量だと、十人分だよと。

御徒町一族は、特殊なのかな、と。

でもきっと、この分だと、丈夫な赤ちゃんが生まれる事でしょう。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、六本木厚子と再会する

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸のメイドです。

今日も広大な庭の掃除を竹ぼうきでしています。

効率が悪いとか言う人がいますが、樹里は気にならないようです。

今日は、五反田氏は仕事に出ており、妻の澄子さんは友人とお出かけ、娘の麻耶さんは学校です。

邸にいるのは、樹里と警備の人達だけです。

警備の人達は、樹里が妊娠しているのを知っているので、何かの時はいつでも病院に連れて行けるように万全の態勢を整えています。

樹里が門の前を掃いている時でした。

「御徒町さん、久しぶりね」

牛乳瓶の底のような眼鏡をかけた、ショートカットの黒尽くめの女性が声をかけます。

「どちら様ですか？」

樹里は笑顔全開で応じます。

「私よ、私。忘れたの？」

女性は必死にアピールします。

「神村律子さんですか？」

樹里は言いました。女性は項垂れて、

「違うって。ホントに忘れちゃったのね……」

「申し訳ありません」

樹里は深々と頭を下げてお詫びします。

樹里と女性のやり取りに気づいた警備の人達が、配置に付きます。

樹里が危険になったら、すぐに女性を取り押さえるつもりです。

「私よ、私。六本木厚子よ」

女性は樹里に名刺を差し出しました。

「そうなんですか」

樹里は名刺を受け取り、厚子を見ます。

「ドロントさんのお友達の方ですよね？」

「いや、友達ではないし……」

何か嫌な事でも思い出したのか、厚子は涙ぐみます。

「そんな事はどうでもいいのよ！　私は貴女に挑戦しに来たのだから！」

厚子はビシッと樹里を指差します。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「貴女が盗まれて一番困るものを盗むわ」

厚子は、間抜けな魔女のような顔で笑います。

「どうして間抜けな魔女なのよ！」

厚子は地の文に突っ込みますが、地の文はスルーしました。

「そうなんですか？」

樹里はキョトンとしました。

「貴女の夫、杉下左京の心を盗むわ」

「そうなんですか」

樹里は全く動じずに笑顔全開です。

「ああ、盗めないと思ってるな！　絶対に盗んでやるんだから！覚悟してなさいよ！」

厚子はまたボンと煙を出して逃げますが、消えるのが早過ぎて、逃走経路が丸分かりです。

「お気をつけて」

樹里は深々と頭を下げて、厚子を見送りました。

樹里は全然気にしていないのですが、警備の人達は慌てます。

「すぐにあの女を追え！」

二人が厚子を追い、一人が五反田氏に連絡します。

そしてもう一人が、左京の探偵事務所に連絡をしました。

厚子を追いかけた二人は、厚子を見失いました。

連絡を受けた五反田氏は、すぐに左京を警護するように警備の人達に指示しました。

当の左京は、警備の人からの連絡で、仰天していました。

「六本木厚子？　誰だ？」

左京は、厚子が以前樹里に自分の事務所の名入りの封筒で予告状を渡し、窃盗未遂で警察に事情聴取された事を知りません。その時は不起訴になったので、厚子は釈放されました。

「六本木厚子は、通称ベロトカゲ。ドロントのライバルを自称する変な女よ」

たまたまなのか、入り浸っているのか、事務所にいた警視庁ドロント特捜班の神戸蘭（かんべらん）が言いました。

「何であんたがいるのよ、蘭？」

グウタラ所員の宮部ありさが尋ねます。

「歩いて来たからよ」

蘭は樹里の得意技で応戦です。ありさは呆れました。

「その女が、俺の心を盗むと言って来たらしい」

左京は椅子に沈み込んで言いました。

「六本木厚子って、美人なの？」

ありさが訊きます。蘭は肩を竦めて、

「さあ。私は面識ないから知らないわ」

「そうなんですか」

今度はありさが樹里の得意技で応戦しました。

蘭は無視します。

「どちらにしても、窃盗犯なのは確かだから、捕まえた方がいいわね」

蘭は真顔で左京を見ました。

「いつ来るんだろう？」

左京は窓から外を見下ろします。

「何よ、左京ってば、会いたいの、そいつに？」

ありさがニヤッとして尋ねます。左京はギクッとして、

「あ、会いたくなんかねえよ！」

と言い返しますが、顔に「会いたい」と書いてありそうな雰囲気です。

ところが、夕方まで待っても、厚子は現れません。

「左京、もう帰るよ」

蘭は飽きて帰ってしまい、ありさも定時なので帰りました。

「ああ、お疲れ」

「疲れてねえし」

ありさは捨て台詞を吐いて帰ります。

ちょっとだけその言葉が胸に刺さる左京です。

「からかわれたのか？」

左京は苦笑いして、椅子に座りました。

厚子は目を覚ましました。

「うん？」

周囲を見渡すと、真っ暗で何も見えません。

「ここはどこ？」

厚子は自分が寝ているのに気づき、起き上がりました。

「いたた……」

身体のあちこちが痛くなっています。

「あ、そうか」

厚子は警備員の追跡を逃れるためにマンホールの中に逃げ込んだのを思い出しました。

「それから……」

梯子を降りている途中で足を踏み外し、下まで落ちたのを思い出しました。

「あれ？」

でも、どうしてそんな事になったのか、全く思い出せません。

「私、何をしようとしていたのかしら？」

必死に思い出そうとしました。

しかし、お腹がとても空いて来たので、考えるのを止めます。

「帰ろっと」

こうして左京は、厚子の「魔の手」から逃れられたのでした。

めでたし、めでたし。

「あれ、私んち、どっちに行けばいいんだっけ？」

オチの後もボケる厚子でした。

樹里ちゃん、容疑者杉下左京を救う

御徒町樹里は、日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

今日からしばらく、五反田一家はアメリカに旅行です。

また企業買収の話があったので、長期出張になる六郎氏に、今回は奥さんの澄子さんと娘の麻耶さんもついて行くのです。

麻耶さんは迷ったのですが、一緒に行く事になりました。

「一ヵ月後には戻れると思う。留守を頼んだよ、御徒町さん」

五反田氏は言いました。

「はい、旦那様。お気をつけて」

樹里は深々とお辞儀をしました。

そして、いつも通りの仕事を始めます。

只違うのは、五反田氏達の食事の支度が要らない事と、お風呂の準備が必要ない事、ベッドメイキングも不要な事です。

でも、真面目な樹里は、三人の寝室を毎日掃除します。

これほど樹里が頑張って働いている頃、夫の杉下左京は、外をブラブラと歩いていました。

「どこかに仕事、落っこちていねえかなあ」

などどバカな事を呟いています。

「うう……」

ある路地を歩いていると、脇道から男のうめき声が聞こえました。

「何だ？」

何となく事件の臭いを嗅ぎ取った左京は、声のする脇道に入りました。

そこは袋小路です。突き当たりには有刺鉄線が張られていて、大仁田さんが喜びそうです。

「わわ！」

路上に中年男性が倒れています。しかも、胸にサバイバルナイフを突き立てられて。

「死んでる」

左京は首筋に手を当てて脈がないのを確認しました。

「きゃああ！」

左京が死体を見ているのを通りかかったオバさんに見られました。

思い切り勘違いされたようです。

「ひ、人殺しーッ！」

オバさんは雄叫びを上げ、逃げ出します。

「あ、いや、違う、おい！」

左京は慌ててオバさんを追いかけますが、間の悪い事にオバさんはおまわりさんと話していました。

「ちょっと、君、話を聞かせてもらおうか」

完全に犯人を見る目のおまわりさんです。

「ち」

左京は、話せばわかると思い、おまわりさんと現場に戻りました。

樹里は部屋の掃除を終え、庭掃除のために外に出て来ました。

するとそこへ警視庁のパトカーが入って来ます。

「樹里！」

蘭と姉の璃里が降りて来ました。

「蘭さん、璃里お姉さん。どうしたのですか？」

璃里は呼吸を整えながら、

「落ち着いて聞いてね。左京さんが、殺人容疑で逮捕されたの」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「いや、笑ってる場合じゃないわよ、樹里」

蘭が呆れて言います。すると樹里は、

「左京さんが犯人の訳がないですよ。大丈夫です」

「……」

蘭と璃里は顔を見合わせました。

そして。ここはある喫茶店の一角。

悪そうな男二人が、顔を寄せて話しています。

二人は決してそういう関係ではありません。

「杉下左京は、見事に我々の仕掛けた罠に嵌りました」

二人のうち、痩せこけた男が言います。

「そうか。これでようやく恨みが晴らせる」

もう一人の太った男がニヤリとしました。

「いらっしゃいませ」

ウェイトレスが水を持って来ます。

「呼ぶまで来なくていい」

太った男が言います。

「はい」

ウェイトレスは水だけ置いて立ち去ります。

「まさか、あのババアも制服警官も、奴を拘束した刑事達も全員、我らの同志とは思うまい」

「そうですね。これで奴もおしまいですよ」

二人は不気味な顔で笑いました。

「いつまで頑張れるか、見ものだな」

刑事が言います。左京は留置場に入れられました。

長時間の取調べで、ヘトヘトになっているようです。

「明日は全部吐いてもらうぞ」

刑事は捨て台詞のように言い、留置場を出て行きました。

「くそ」

左京は壁に寄りかかり、床を弱々しく叩きました。

(何がどうなってるんだよ?)

左京は混乱していました。

蘭と璃里は、樹里が心配なので、樹里を気遣って夜になっても五反田邸に残っています。

しかし、樹里自身はいつものように仕事をこなしています。

「左京の事が心配じゃないの、樹里?」

蘭が呟きました。すると璃里が、

「心配でない訳がありません。あの子はいつもそうなんです。何か悩みがあったり、不安な事があると、掃除をしたり、洗濯をしたりして……」

璃里は涙ぐんでいます。蘭はその言葉にハッとしました。

「ごめんなさい、私、その……」

バツが悪くなり、蘭は口篭ります。璃里は微笑んで、

「いいんですよ。それに大丈夫。左京さんが犯人の訳がありませんから」

「ええ」

蘭はそれでも不安でした。

彼女は、以前執念で逮捕した警視庁の元刑事部長が刑務所を脱獄したと聞いたのです。

（もし、奴の一派が絡んでいるとすると、左京はそう簡単には出られないわ）

樹里はもう終えたはずのトイレの掃除をまたしています。

彼女は決して「トイレの神様」を信仰している訳ではありません。

動揺しているようです。

「あら？」

トイレの便座のフタの上に、ＵＳＢメモリーが置かれています。

「何でしょうか？」

樹里は不思議に思いながら、それを手に取りました。

そして、ここは左京が留置されている所轄署の署長室です。

署長とソファで歓談しているのは、あの元刑事部長でした。

この二人が、喫茶店で密談していたのです。

「今頃あの阿呆は泣きべそ掻いているでしょう」

署長が愉快そうに言います。

「そうだな。我らに逆らうとどうなるか、これでよくわかったはずだ」

その時、ドアがノックされます。

元刑事部長は慌てて別室に隠れます。

「どうぞ」

署長は自分の席に戻りました。

入って来たのは、蘭と樹里と璃里です。

「何だ、君達は？」

署長が憤然として言います。

「ドロント特捜班の神戸蘭警部です」

「ドロント特捜班？　何しに来た？」

署長は訳がわからず、尋ねます。蘭はＵＳＢメモリーを見せ、

「これにとんでもないものが入っています。ご覧になりますか？」

「見る必要などない。出て行きたまえ！」

署長は怒鳴りました。

「駅前の喫茶店の一番奥の席で話している男二人の映像です。それでも見ないと？」

蘭が挑発します。署長はギョッとしました。

「ならばここで死んでもらおう」

別室から銃を構えた元刑事部長が出て来ました。

「く……」

樹里達は絶体絶命です。

「そのＵＳＢメモリーを渡せ」

元刑事部長は言いました。

その時です。

「どうしようもない連中ね、全く」

どこからともなく、女性の声が聞こえます。

「誰？」

蘭が辺りを見回します。

すると、天井の一部がパカッと開き、ストンと例の喫茶店のウェイトレスが降りて来ました。

「お、お前は！？」

署長と元刑事部長が同時に叫びます。

「あんたらのようなクズは、永久に塀の向こうに落ちてなさい」

ウェイトレスはバッと服を脱ぎます。

その正体はドロントでした。

「ああ！」

今度は蘭と璃里が驚きます。樹里は笑顔全開です。

「はあ！」

ドロントは呆然としている元刑事部長の銃を蹴り上げます。

「今よ！」

蘭と璃里が走り、刑事部長と署長を取り押さえました。

「いい加減、観念しなさいよ、オジさん！」

蘭は元刑事部長の右腕をねじ上げて言いました。

「あ！」

ハッとしてドロントを見ると、もういません。

「さようなら」

樹里は廊下まで出てドロントを見送っています。

蘭は項垂れました。

「ドロントに借りができましたね」

署長を縛りながら、璃里が言いました。

「ええ。忌ま忌ましいわ」

蘭はそう言いながらも、嬉しそうです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

そして、左京は留置場で、

「ひもじいよお」

と泣きべそを掻いていました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京を懲らしめる？

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

今日も朝から忙しく働いています。

五反田氏一家は、五反田氏の仕事の都合でアメリカに行っています。

帰って来るのは、五月末頃です。

樹里は妊娠していますが、御徒町家の家訓は「働かざる者、食うべからず」なのです。

出産のその日まで働き続ける予定です。

さて、その樹里の夫である杉下左京は、今日も探偵事務所で暇そうにしていました。

「あーあ、今日も依頼がないのお？」

グウタラ所員の宮部ありさが机に項垂れて呟きます。

「うるさいよ。お前が仕事を取って来い！」

左京は人のせいにしています。

樹里の苦労を全然わかっていないバカ者です。

（どうしよう？　このままじゃ、家賃も払えなくなるよお）

左京は内心非常に不安です。

「そう言えばさ、最近、蘭オバさんが来なくなったわね」

ありさが悪口を言います。

「誰がオバさんだ！」

地獄耳の神戸蘭（かんべらん）が現れます。

「また来たの？　警視庁も暇ねえ」

ありさが嫌味を言います。

左京は、ここまで来たら、もう蘭にすがるしかないと思い、彼女に近づきます。

「蘭、話があるんだ」

すると蘭も左京に近づき、

「私もよ、左京」

見つめ合う二人です。ありさはムッとして、

「樹里ちゃんに言いつけるぞ、左京」

左京はギクッとしながらも、

「な、何の事だ？　俺は蘭に折り入って相談したい事があってだな……」

「その事なんだけど、左京」

蘭が左京とありさの会話を遮ります。左京は蘭を見ました。

ありさが面白くなさそうに蘭を睨みます。

「警視庁に戻って欲しいって話なんだけど」

蘭が切り出すと、左京は嬉しそうに、

「よく考えてみたんだが、俺もそうした方がいいかなって……」

と言いました。すると蘭は何故か、ジョークが受けなかったアメリカ人みたいに肩を竦めて、

「それ、もうなかった事にして」

「はあ？」

左京は唖然としました。

「入って来て」

蘭がドアの向こうに呼びかけると、一人の若いイケメン男性が入って来ます。

途端にありさが涎を垂らします。

「ドロント特捜班に新しく加入した、平井拓司警部補。ちなみに京都大学卒業ね」

「おお！」

ありさの目が、完全に獲物を狙う肉食獣の目になりました。

「さらにちなみに、私の彼氏なの」

蘭は頬を染めて言いました。

「何だとお！？」

ありさの目が、驚愕の目になります。左京は真っ白に燃え尽きそうです。

「平井拓司です。どうぞよろしく」

平井警部補は、動かなくなった左京と強制的に握手をしました。

「では、御機嫌よう」

蘭は高笑いをしながら、平井警部補と去って行きました。

「何なのよ、あの女！？」

ありさは激怒し、塩をお相撲さん並みに撒きます。

「お、俺のこれからの人生が……」

左京は燃え尽きていました。

左京がようやく意識を回復したのは、ありさが帰ってしまった後でした。

すでに外は夜です。

「ああ、いかん、夕食の用意をしないと！」

左京はスーパーに行くために事務所を閉めます。

（これからどうすればいいんだ？　このまま探偵事務所を開いていても、経費がかさむだけだ）

左京は考え事をしながら、駅へと向かいます。

「おい、杉下」

すると彼の目の前に凶悪犯が現れました。

「誰が凶悪犯だ！」

凶悪犯は地の文に切れました。

「だから、凶悪犯じゃねえよ！　警視庁捜査一課の加藤警部だ！」

凶悪犯は警視庁の警部を騙りました。

「いい加減にしてくれ」

加藤警部は項垂れました。この辺でからかうのはやめましょう。

「何だよ、バ加藤。俺は夕食の準備をするためにスーパーに行くんだ」

左京は鬱陶しそうに言います。

「まあそう言うなって。俺のおごりで、キャバクラに行こう」

「そんな暇ねえよ！」

左京は加藤警部を振り払って行こうとします。

「お前、神戸に警視庁復帰を断られたんだろう？」

加藤警部は切り札を切って来ました。

「何でそれを？」

左京は思わず加藤警部を見ます。加藤警部はニヤリとして、

「俺とキャバクラに行って、俺に協力してくれたら、捜査一課長に口を利いてもいいぞ」

「え？」

左京は、加藤警部に借りを作るくらいなら、とかげに借金をした方がマシだと思いましたが、今はそんな贅沢は言っていられません。

「どうする、杉下？」

加藤警部は悪そうな顔で尋ねます。

「わかった」

左京は、背に腹は替えられないと決断しました。

「わかった。協力する」

「よおし、決まりだ。行くぞ、杉下」

加藤警部は、左京の気が変わらないうちにと、タクシーを停め、キャバクラに向かいます。

そしてキャバクラに到着です。

そこは以前、樹里が勤めていたキャバクラより際どい格好の女性がたくさんいました。

左京は目のやり場に困りながら、案内された席に着きます。

加藤警部は常連らしく、あちこちの席の女性から声をかけられています。

「お前、こういうとこ、よく来るのか？」

左京は周囲を見ないようにして尋ねました。

「ああ。それで、気に入った子ができたんだよ」

左京は仰天して加藤警部を見ました。

「おうおう、来た来た」

どうやら、その気に入った子が来たようです。

「今晩はー！　真澄ちゃん、今日はお友達を連れて来てくれたの」

現れたのは、小柄で可愛い女性です。

「あかぎ恋（れん）です。よろしくね」

恋と名乗った女性は、左京に名刺を差し出します。

「ど、どうも」

左京は恋を見ないようにして、返事をします。

「やだあ、この人、照れ屋さんなのお？　可愛い」

恋は左京の顔を覗き込むようにしました。

「いや、俺はいいから、加藤の相手をしてやってくれ」

「まあ、お友達思いなのね。お名前ちょうだいできます？」

「す、杉下左京だ」

左京は目を伏せて答えました。

「あらん、素敵なお名前！　恋、好きになっちゃいそう！」

恋の言葉に、加藤警部は驚愕します。

「お、おい、恋ちゃん……」

「うるさいなあ、真澄ちゃんはあ。恋は今、左京さんと話してるの！」

恋がキッパリと言うと、

「はい」

加藤警部は素直に返事をし、黙りました。

そして一時間後。

すっかり不貞腐（ふてくさ）れた加藤警部。

恋の猛烈なアタックにタジタジの左京。

「ああ！」

時計を見て、左京は驚いて立ち上がります。

「すまん、加藤、もう帰る！」

「ええ！？　恋、寂しい！　左京さん、帰らないでえ」

恋が甘えた声で言いますが、

「すまん、身重の妻が待ってるんだ」

左京は恋を振り切り、キャバクラを出て行きました。

「さあ、俺と楽しもうぜ、恋ちゃん」

加藤警部が言いましたが、恋は、

「私、疲れたあ。休みますう」

と控え室に行ってしまいました。

「恋ちゃん……」

加藤警部は涙ぐんで呟きました。

左京は必死になってアパートに急ぎます。

「樹里、すまん！」

左京がドアを開くと、予想通り、夕食の準備が整っています。

「お帰りなさい、左京さん」

樹里はいつもと変わらず笑顔全開です。

「すまない、樹里。加藤に強引に誘われてさ……」

左京は言い訳をします。

「はい、どうぞ」

樹里は左京に味噌汁とご飯を渡します。

「はい」

左京は食べてから話そうと思い、味噌汁を啜(すす)ります。

「ぐお！」

味噌汁は強烈に辛くなっていました。

（樹里が怒ってる……）

左京は焦ります。

「おお、この玉子焼き！　美味しそうだなあ」

左京は樹里のご機嫌を取るために料理を褒めます。

「うお！」

一口食べると、表は見栄えがいい玉子焼きが、裏は真っ黒に焦げていました。

「ひいい！」

左京はすぐに土下座しました。

「すまない、樹里！　もう二度とキャバクラには行かないから！」

樹里は何も言いません。

「樹里？」

左京は恐る恐る樹里を見ました。

「樹里！」

樹里は卓袱台（ちゃぶだい）に突っ伏しています。

「樹里！」

左京は慌てて樹里の姉の璃里に連絡しました。

璃里がすぐ来て、樹里の様子を看ます。

「眠っているだけですよ、左京さん。働き過ぎなんです、樹里は」

「はあ……」

耳が痛い左京です。

「誰が言っても聞きませんから、左京さんから言って下さい。少し休めと」

璃里が言いました。しかし、左京にはそんな偉そうな事は言えません。

「樹里、起きなさい。左京さんが話があるそうよ」

樹里はフウッと起き上がります。

「はい、左京さん」

無理して笑顔な樹里を見て、左京は心が痛みます。

「樹里、無理するな。少し休め。いいな？」

左京は内心ビクビクして言いました。

「はい、左京さん」

樹里はニコッとすると、そのまま寝てしまいました。

「もう大丈夫です、左京さん。明日になれば、元気になりますよ、

樹里は」

璃里が同じ笑顔で言います。

「ありがとうございます、璃里さん」

左京は璃里に何度も礼を言って見送りました。

「樹里、俺、もっと頑張るよ」

左京は樹里にタオルケットをかけ、言いました。

樹里ちゃん、メイド探偵の小説をもらう

御徒町樹里は、日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

只今五反田氏は、一家揃って渡米中で、邸は警備会社の人達と樹里がいるだけです。

警備会社の人達は全員、樹里の事が好きです。

好きとは言っても、樹里は人妻ですから、そういう好きではありません。

警備会社の人達は、どこかの山路さんと違って、常識があるのです。

あ、伏字にするのを忘れたので、名前のところを指で隠して下さい。

樹里の作ってくれるランチは絶品で、それを自分のブログで紹介している警備員もいます。

しかも最近は樹里と一緒に写っている写真をアップしているので、アクセス数がうなぎ登りです。

とうとう樹里の居場所を突き止めた人達が、五反田邸の周囲をうろつくようになってしまいました。

でも、インターネットをしない樹里は全然それを知らないので、

「樹里ちゃーん！」

と手を振られると、

「おはようございます」

と深々とお辞儀をして挨拶しています。

そんな平穏な日々を過ごしている樹里のところに、人気推理作家の大村美紗とその娘のもみじがやってきました。

「樹里さん、ご機嫌よう」

リムジンから降りるなり、上から目線で挨拶する美紗です。

隣でもみじが苦笑いしています。

「おはようございます」

樹里は笑顔全開で挨拶を返します。

「貴女を取材して書いた小説が出来上がったので、お持ちしましたの」

美紗はもみじが持っている豪華なラッピングのされた箱を見ました。

どうやら、その中に小説が入っているようです。

「ありがとうございます」

樹里は美紗達を応接間に通しました。

「今日はあの子は来ないでしょうね？」

ソファに上から目線で腰を下ろしながら、美紗が尋ねます。

「どなたですか？」

樹里は誰の事かわからないので尋ね返しました。

「私の姪よ」

美紗はイラついて言いました。

「なぎささんですか？」

樹里が言うと、

「その名前を口にしないでちょうだい！　聞いただけで、虫酸が走るのよ！」

美紗は大声で言いました。額に血管が浮き上がっています。

「そうなんですか」

樹里は驚いてしまいました。するともみじが、

「さあ、樹里さん、開けてみて下さい。装丁も奇麗で、母もすごく気に入っているんです」

と樹里に箱を差し出します。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で箱を受け取り、リボンを解きます。

美紗は上から目線で微笑んでいます。

「さっきから、とっても不愉快な気分なんだけど、どうしてかしら？」

美紗は地の文がわからないようです。老眼のせいでしょうか？

「ほら、またよ。何かしら、この嫌な感覚……」

まるでニュータイプのような台詞を吐く美紗です。

「気のせいよ、お母様」

もみじが美紗を宥めます。

樹里は箱のふたを取りました。

するとその中には、色鮮やかに描かれたメイド服の少女の絵が入った表紙のハードカバーの本がありました。

メイド服の少女は、樹里をモデルにしているらしいのですが、雰囲気は大正浪漫です。

でも、決してはい○らさんではありません。

「奇麗な本ですね」

樹里が笑顔で言うと、美紗は、

「そうでしょう？　私が細かく指示して描かせたのよ、樹里さん。その表紙のメイドの子、貴女より奇麗になってるでしょ？」

と結構失礼な事を言います。やっぱり上から目線です。

「そうなんですか」

樹里は全然気にしていないようです。

「お暇な時に読んで下さいな。きっと面白くてたちまち読み終わってしまうでしょうから」

美紗は上から目線で笑いながら、押しつけがましい事を言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

美紗ともみじは樹里の淹れた紅茶を飲み、ケーキを食べました。

そして、二人は帰る事になりました。

「もみじ、あの子は絶対にここには来ないわよね？」

美紗が小声で訊きます。もみじは、

「ＵＳＪの招待状を渡したから、今頃は大阪よ」

「そう」

美紗は嬉しそうに頷きます。

樹里の親友の船越なぎさは、大阪に行っているようです。

大阪の皆さん、なぎさに会っても、決して近づかないで下さい。

「では、樹里さん、後で感想を聞かせてくださいな」

美紗は上から目線で言いました。

「はい、美紗様」

樹里は笑顔で応じます。

今回は、なぎさは最後まで現れず、美紗は上機嫌で帰って行きました。

「お気をつけて」

樹里は深々とお辞儀をして見送りました。

美紗ともみじは、何事もなく自宅に帰りました。

「あの子が現れないと、本当に静かねえ」

美紗はリヴィングルームのソファに寛いで言います。

「そうそう、今日は私が新刊執筆のインタビューを受けたのが放送されるのよ」

美紗はテレビをつけました。

すると画面にＵＳＪが映ります。

「あら、偶然ね。ＵＳＪだわ」

美紗は少しだけ嫌な予感がします。

「私は今、ＵＳＪに来ています」

芸能レポーターが言いました。

どうやら、有名芸能人カップルのデートが目撃されたようです。

「ひい！」

美紗が悲鳴をあげたので、片づけをしていたもみじが驚いて美紗

に駆け寄ります。

「どうしたの、お母様？」

「ひ、ひ！」

美紗は只テレビ画面を指差します。もみじが画面に目を向けると、驚きの光景が映っていました。

「叔母様、もみじ、樹里、見てる？」

レポーターの後ろで三人の名前を書いたプラカードを掲げて大騒ぎしているなぎさがいたのです。

「きいいい！」

美紗はショックのあまり、そのままソファに倒れてしまいました。

「お母様！」

もみじが慌てて美紗を抱き起こします。

なぎさはどこにいても恐ろしい存在でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、置いてきぼりにされる？

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

五反田氏一家は只今渡米中で、樹里は邸の留守を警備会社の人達と守っています。

今日は定期検診の日なので、樹里はお休みをもらいました。

甲斐性なしの夫の杉下左京が車を運転し、樹里を産婦人科まで連れて行きます。

左京は運が悪いので、樹里はあまり一緒に行動しない方がいいと思います。

「うるせえ！」

左京が地の文に突っ込みます。

「地の文のくせに、登場人物に意見するな！」

ごもっともです。失礼しました。

「順調そうで良かったよ」

左京はニコニコしている助手席の樹里に言います。

「そうなんですか」

樹里は左京を見て言います。

「早く会いたいな、俺達の子供に」

左京は照れ臭そうに言います。

「そうですね」

樹里は笑顔全開で言いました。

「そしたら、すぐ次の赤ちゃんが欲しいですね」

樹里のその言葉に、左京は鼻血を垂らしました。

邪(よこしま)な事を考えたようです。

「あ、いや、少しは間を置いた方が……」

左京はシドロモドロになって言いました。

「そうなんですか？」

樹里は不思議そうな顔をして、左京の鼻血をティッシュで拭います。

左京は樹里を送り届けると、珍しく入った依頼のためにクライアントのところに向かいました。

「二時間ほどで戻れると思うから」

左京はものすごく心配そうな顔で樹里を見ながら言います。

「そうなんですか」

でも樹里は笑顔全開です。左京は項垂れて車をスタートさせます。

「やっほー、左京！」

途中でグウタラ所員の宮部ありさを拾いました。

「どう、樹里ちゃん？　順調？」

ありさがニヤニヤしながら尋ねます。

「ああ」

左京は気のない返事です。

「左京も随分溜まってるでしょ？」

ありさが突然とんでもない事を言い出します。

「な、何が？」

左京はきわめて冷静なフリをします。

「私で良かったら、いつでも相手をしてあげるわよ」

ありさは色っぽい目つきと声で言います。

「な、何の相手だよ？」

左京はドキドキして尋ねました。

「あー、今、嫌らしい事考えたでしょ？」

嬉しそうに突っ込むありさです。

「お前がそう仕向けたんだろ！」

左京は怒りました。するとありさは、

「あんたなんかとそんな事しようとは思わないわよ。私はモテるんだから」

左京は鼻で笑って、

「相手は人間か？」

「誰が豚の妖怪だ！」

ありさはシリーズを超えて怒りました。

「蘭の彼氏の平井刑事を狙ってるのよん」

「平井？」

左京はすでに忘れているようです。どうしようもないバカです。

「もう忘れたの？　一度脳の検査してもらいなさいよ、マジで」

ありさは呆れ顔で言いました。

そんなバカ話をしながら向かった先はペットの豚が逃げたというお金持ちの邸でした。

左京とありさは手分けして豚の足取りを辿り、無事発見しました。

ささやかな謝礼をもらい、左京は樹里の待つ産婦人科へと戻ります。

すると樹里が玄関の前で待っていました。

「早かったな。待ったか？」

「いえ、待ちませんでした。今出て来たところです」

樹里は笑顔全開で言います。

「そうか」

左京は樹里を乗せてアパートの向かいます。

「左京さん」

「何だ？」

左京は前を向いたままで尋ねます。

「寄って欲しいところがあります」

「どこだ？」

左京は信号で停まったので、樹里を見ます。

「ホ・テ・ル」

樹里がゆっくりと言いました。

「はあ？」

ホテルに何の用だろうと思う左京です。

「そこを左に曲がって下さい」

樹里が言いました。

「あ、そうか」

左京は交差点を左折しました。

「あそこです」

樹里が指差したのは、ホテルはホテルでも、あのホテルでした。

「何ィ！？」

左京は仰天し、鼻血を噴き出します。

（どうしたんだ、樹里？　おかしいぞ……）

そう思いましたが、ずっと我慢して来たせいで喜びが先行します。

「う、うるせえ！」

また地の文に突っ込む左京です。

「我慢できないんです、左京さん」

樹里が言います。

「お、おう！」

左京の中で遂に欲望が勝利し、車をホテルに乗り入れます。

「さあ、早く、左京さん！」

樹里が左京を引き摺るようにして中に入ります。

（あれ？　樹里、身長伸びたか？）

左京はふとそう思いました。

「もしかして！」

左京は樹里の髪の毛を掴み、グイッと引きます。

「ひゃっ！」

すると髪の毛がそのまま取れ、その下からショートカットの髪が現れました。

「てめえ、誰だ！？」

左京はその謎の女性の腕を振り解いて怒鳴ります。

女性は変装を解きました。

「私は六本木厚子。貴方を虜にするために来ました」

六本木厚子。怪盗ドロントの幼馴染（ドロントは全面否定）で、同じく泥棒。

牛乳瓶の底のような眼鏡をかけ、黒のワンピースを着ています。

「全然知らない」

左京の言葉が無情に響きます。厚子は項垂れました。

左京は隙を突いて逃げました。

「次は逃がさないわよ、杉下左京」

厚子はフッと笑って言います。目的が変わって来たようです。

その頃、樹里はようやく検診を終え、待合室で左京を待っていました。

「左京さん、遅いですね」

それでも樹里は笑顔全開です。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、久しぶりにドロントと会う

御徒町樹里は大富豪の五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

五反田氏一家は渡米中で、樹里はその留守を警備会社の人達と守っています。

今日も樹里は元気に庭掃除です。

「御徒町さん、大丈夫なんですか？」

警備の人が妊娠している樹里を気遣ってくれます。

「大丈夫ですよ」

樹里は笑顔全開で竹ぼうきを動かします。

「あまりお腹が目立ちませんよね」

警備会社の人が樹里のスタイルの良さを称賛します。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「もう何ヶ月なんですか？」

「五ヶ月です」

樹里は笑顔で答えました。

「赤ちゃん、動きますか？」

警備会社の人達は、仕事を忘れて樹里に群がって来ます。

「動きますよ。触ってみてください」

樹里は全然気にする事なくお腹を突き出してみせます。

「ああ、いやいや、そこまでしていただかなくても……」

警備会社の人達は顔を赤くして配置に戻って行きました。

「そうなんですか？」

樹里はちょっぴり寂しそうです。

「ほっほっほ」

するとどこかで鳩が鳴きました。

「違うわよ！」

鳩が切れます。

「だから、鳩じゃないって言ってるでしょ！」

怪盗のドロントでした。

「侵入者です」

警備会社の人達がドロントを取り囲みます。

「仕事熱心ねえ。昭和一桁？」

「そんなに年ではない！」

警備チームのリーダーが言いました。

「冗談よ。ほら、これ予告状」

ドロントは樹里に封書を渡しました。

「じゃあねえ」

ボンと煙が出て、ドロントは消えてしまいます。

「またのお越しを」

樹里は深々とお辞儀をしました。

樹里からの知らせを受けて、夫の杉下左京が五反田邸に現れました。

警備チームの人達が、左京を見てヒソヒソ話しています。

左京はそれが気になりましたが、今はそれどころではありません。

「明日の午後十一時、大江戸美術館から、写楽の浮世絵を盗むだと！？」

左京は予告状を見て驚きました。

ドロントにしては、まともなものを盗むからです。

「よし、この件は俺と璃里さんに任せろ。樹里は妊娠中だからな」

左京は予告状を封書に戻しながら言います。

「そうなんですか」

樹里は悲しそうです。

それを見て、左京は胸が痛くなりました。

「寂しいのはわかるが、お前の身体が心配なんだよ、樹里」

「はい、左京さん」

健気にも微笑む樹里です。左京はまだ胸が痛みます。

左京は早速事務所に戻り、樹里の姉の璃里と合流して、大江戸美術館に行きました。

「わあお。凄く前衛的な建物ね」

奇抜なデザインで知られる建築家の安藤奈津（アンドーナツ）先生の設計の美術館です。

「それより、お前、いつの間に乗ってたんだ？」

左京は置いて来たはずの宮部ありさがいるのに気づき、白い目で見ました。

「これくらい、朝飯前よ」

ありさは江戸っ子のように鼻を擦ります。呆れる左京です。

「この美術館の館長です」

胡散臭いオヤジが現れて言いました。

「ドロントが写楽の絵を盗むと予告して来たそうですが、当館には写楽の絵はありませんよ」

館長が言いました。

「はあ？」

左京は思わず璃里と顔を見合わせます。

「おちょくられたんですかね？」

左京は璃里に小声で言いました。

「それはないと思います。私はむしろ、あの館長が怪しいと思いますよ」

璃里はソワソワしている館長をチラッと見て言いました。

「そうなんですか」

左京はつい樹里の口癖を真似てしまいました。

「受けるう、左京！」

ありさが腹を抱えて大笑いします。

「とにかく、ドロントは予告して来ているのです。明日の夜は、警備に当たらせてください」

璃里が館長に言いました。

「わかりました」

館長は嫌そうな顔で応じました。

左京と璃里とありさは事務所に戻ります。

「様子が変ですね、あの館長」

璃里が腕組みをして言います。

「そうですね」

左京も久しぶりに名探偵の顔で言いました。

後部座席で居眠りしているありさです。

そして、翌日の夜です。

大江戸美術館のロビーです。

仏頂面の左京と、苦笑いの璃里がいます。

何故か、警視庁ドロント特捜班の神戸蘭（かんべらん）と新人刑事の平井拓司（ひらいたくし）警部補がいます。

「どうしてお前らがここにいるんだ？」

左京が蘭に尋ねます。

「宮部ありささんに教えてもらいました。あの方はいい方ですね」

平井警部補が前髪をパッとかき上げて言いました。

「あのお喋りめ」

左京はありさの時給を下げる事を検討するつもりです。

「探偵さんにも申し上げましたが、ウチの美術館には写楽の絵はあ

りませんよ。何かの間違いではないですか？」

あからさまに狼狽えている館長が、汗まみれで言います。

「怪しいですね」

平井警部補がキラッと目を輝かせて言います。

「素敵」

蘭の目が恋する乙女の目になります。

「けっ」

左京は面白くありません。

「おーほっほっほ！」

時間のようです。ドロントの間の抜けた笑い声が館内に響きます。

「誰が間の抜けた笑い声よ！」

ドロントが切れたようです。

「館長さん、嘘はいけないわ。闇ブローカーから写楽の絵を購入して、更にその絵を資産家に裏ルートで売る。差額は全部自分のもの。すごいシナリオね」

ドロントがフワッと舞い降りて来ました。

「う、嘘だ！　そんな事はしていない！」

館長は溶けてしまうのではないかというくらい、汗を噴き出します。

「あら、それなら何故、明日の朝一番の便で、成田を発つのかしら？」

ドロントはニヤリとして館長を見ます。

「どういう事ですか、館長さん？」

蘭が館長に詰め寄ります。

「嘘だ！　全部嘘だ！　そいつを早く捕まえてくれ！」

館長は後退(あとずさ)りしながら叫びました。

「でも残念ねえ、館長さん。貴方がブローカーから購入したのは、偽物の写楽よ」

ドロントはドヤ顔で言いました。

「そ、そんなバカな！」

館長は慌ててある絵の前に走ります。

「しまった！」

璃里が何かに気づき、館長に駆け寄りました。

「その絵ね！」

ドロントはスッと飛び上がり、璃里よりも早く絵の前に着きました。

「そういう事か！」

平井警部補も何かに気づいたようです。

「神戸警部！」

彼は蘭に目配せして走り出します。蘭が慌てて平井警部補を追いました。

「どういう事だ？」

一人だけ蚊帳の外の左京です。

ドロントは絵を額から取り出し、その下から写楽の浮世絵を取り出しました。

「やっぱりね」

璃里が呟きます。

「館長さん、隠し場所を教えてくれて、ありがとう」

ドロントは絵を筒にしまうと、ハンググライダーを出して飛び立ちます。

「逃がさないわ、ドロント！」

璃里がジャンプし、ドロントの脚にしがみつきました。

「こら、放しなさいよ！」

ドロントはバランスを失って降下してしまいます。

「ええい！」

璃里はドロントの腰に付けられた筒を奪い取り、ドロントから離れました。

「しまった！」

ドロントは焦りましたが、取り返すつもりはないようです。

「今回は私の負けね！　今度はこうはいかないわよ！」

そう言って、ドロントは飛び去ってしまいました。

「ドロントめ！」

蘭は悔しがりましたが、璃里と平井警部補はそうでもないようです。

「そういう事のようですね」

何故か顔を見合わせて微笑み合う璃里と平井警部補です。

「何だ？」

左京は何が何だかわかりません。

「ドロントは、最初から盗むつもりなんてなかったのですよ。館長さんの犯罪を暴きたかっただけです」

璃里が説明しました。

「そうなんですか」

左京と蘭が声を揃えて言いました。

「ひいい！」

項垂れる館長です。

こうして大江戸美術館の館長は業務上横領の容疑で緊急逮捕されました。

「またお会いできますか？」

別れ際に平井警部補が璃里に言います。

「どうでしょう？」

璃里は微笑んで応じました。

「ほら、行くわよ！」

蘭はムッとして平井警部補を引っ張りました。

「さすが、お義姉（ねえ）さんです。感服しました」

車の中で左京が言いました。

「そんな事ないですよ」

璃里は照れました。

（照れる璃里さん、可愛い……）

つい、そんな事を考えてしまい、反省する左京です。

（すまん、樹里）

璃里を家まで送り届け、アパートに戻ると明かりがまだ点いています。

（樹里、起きてるのか？）

左京は驚いて部屋に入りました。

「お帰りなさい、左京さん」

樹里が笑顔で迎えてくれます。

「大丈夫なのか、樹里？」

「はい。左京さんを待ってました」

樹里のその言葉に泣きそうになる左京です。

「ほら、赤ちゃん。動きますよ」

樹里は立ち上がり、左京の手を自分のお腹に当てます。

「おお！」

左京は胎動を感じ、号泣しました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、衝撃を受ける？

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

今日も、それほど目立たないお腹を気にする事なく、大きな庭の掃除と、広大な邸の掃除をこなします。

そんな時、樹里の携帯が鳴ります。

相手は母親の由里です。

「どうしたのでしょう」

由里は、最近、樹里の代わりに居酒屋で働いています。

それが縁で、今では店長といい感じなのです。

でも、由里は完全に夜型生活になっているので、早朝に連絡をくれるのは稀（まれ）です。

「はい」

樹里は不思議に思いながら、電話に出ました。

「ああ、樹里？　今ちょっと大丈夫？」

由里の陽気そうな声が聞こえます。

「はい。少しだけなら」

樹里は答えました。

「実はさ、私、結婚する事にしたの」

「え？」

樹里はあまりにも意外な事を言われて驚きます。

「どなたとですか？」

「店長よ。やっと彼、決心してくれたの」

由里はとても嬉しそうです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

「それで、今後の事を話し合いたいから、今夜お店に来てくれない？　もちろん、左京ちゃんも一緒にね」

「わかりました」

樹里は携帯を一旦切り、夫の杉下左京にかけます。

「ど、どうした、樹里？」

最近狼狽えてばかりの左京です。

「母が、結婚する事になりました」

「えええ!?」

左京は腰が抜けるほど驚いたようです。

「ゆ、由里さんが結婚?」

「ショックですか?」

樹里は他意なくそう言ったのですが、

「え、あ、いや、ショックの訳ないだろ、樹里。ハハハ……」

妙に動揺する左京です。

「で、誰と?」

「居酒屋の店長さんです」

「ええ!?」

更に驚く左京です。噂では、店長は「少女趣味(ロリコン)」で、ドロントの部下を狙っていると聞いていたからです。

「いつから、店長は熟女趣味になったんだ?」

左京は思わず言ってしまいました。

「母は熟女ではないです」

樹里が珍しく怒りました。

「あ、いや、そんなつもりじゃないんだ、樹里」

左京は更に動揺しました。

「今夜、話を聞きに行く事になりました。左京さんも一緒にです」

樹里の言葉に左京は心臓がドキドキします。

「な、何で俺も？」

「元婚約者だからだそうです」

左京は嫌な汗を掻いています。樹里は別に嫌味を言ったつもりはないのですが、左京にはそう聞こえてしまいました。

そして夜も更け、樹里と左京は居酒屋に行きました。

お店は早じまいしていて、由里と店長だけがいました。

「璃里お姉さんは呼ばなかったのですか？」

樹里が尋ねました。すると由里は、

「璃里には別の機会に言うわ。だから黙ってて」

由里は店長と顔を見合わせてから言いました。

「まずは、あなた達に伝えようと思ったんです」

店長が言いました。彼の名前は西村夏彦です。思いっきり、推理作家っぽい名前です。

「実はね、私、できちゃったの」

由里が珍しく恥ずかしそうにボソボソッと言いました。

「え？」

左京はキョトンとしてしまいます。

「できちゃった？」

左京は、まさかと思いながらも、店長を見ます。

「その、つまり、少しばかり油断したと言いますか……」

店長はどう見ても由里より年上です。

璃里の夫の竹之内（たけのうち）一豊（かずとよ）氏より上でしょう。

そんないい年をした男が、

「油断した」

とか言うのって、どうかと思う作者です。（お前が言わせてるんだろう等の突っ込みはご容赦の程を）

「でも、遊びで付き合ってた訳じゃないのよ、樹里」

由里はさっきから何も言わない樹里が怖くなったのか、探るような目で見ます。

「樹里？」

由里がもう一度声をかけます。

「すみません、寝てました」

伝家の宝刀を抜いた樹里です。

左京も由里も店長も固まりました。

樹里と左京は、由里が妊娠したために予定の変更を申し出られました。

由里が居酒屋で働く事が難しくなったのです。

「あんたと予定日が二ヶ月くらい違うけど、私、もう高齢出産だからさ」

申し訳なさそうに言い訳する由里です。

「わかりました。翠ちゃんに話してみます」

樹里が言いました。翠とは、今春高校を卒業して、樹里が働いていた喫茶店に勤めている鶯谷翠の事です。樹里の従妹で、樹里に瓜二つです。

「悪いねえ、樹里。翠ちゃんには、私からも話をするから」

すると店長が、

「樹里さんも、子供が生まれたら、また働いてくれるんですよね？」

と恐る恐る尋ねます。

「お断りします」

左京が言いました。店長と由里はびっくりして左京を見ました。

「左京ちゃん……」

由里も、左京の真剣な顔を見て、何も言えません。

「あまりにも虫が良過ぎませんか？　確かに樹里はあなた方に助けていただいたでしょうが、それとは事情が違いますよね？」

いつになくまともな左京です。地球が危ういかも知れません。

「樹里の従妹の翠さんが働きに来れば、それで十分でしょう。樹里には子育てに専念してもらいますから」

左京はスッと立ち上がり、

「樹里、帰るぞ」

と言います。すると樹里は、

「子供が生まれたら、またここで働きますね」

と、あっさり左京の発言を全面否定です。

左京は驚き過ぎて、何も言えません。

由里と店長も呆気に取られています。

「左京さん、帰りましょう」

樹里は笑顔全開で言いました。

「左京さん？」

左京の反応がないので、樹里は左京の顔をジッと見ました。

「どうしたのですか、左京さんは？」

その発言に、更に驚く由里と店長です。

（もしかして、左京ちゃん一世一代の名台詞を、全然聞いていなかったの、樹里？）

さすが母親です。見事真相に辿り着いた由里でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、殺人事件に巻き込まれる（事件編）

俺は杉下左京。五反田駅前に事務所を構える探偵だ。

今日は、大学時代の友人の石動新次郎（いするぎしんじろう）の招きで、長野県の軽井沢町に向かっている。

もちろん、我が愛する妻の樹里も一緒だ。

本当は樹里の身体が心配だったので、新次郎には断りの電話を入れようと思ったのだが、

「是非行きましょう」

と樹里に言われ、行く事にした。

御徒町一族は今、その人数を拡大しようとしている。

樹里のお姉さんの璃里さんは、昨年女の子を出産。名前は実里（みり）ちゃんだ。

そして、樹里も今年の秋には出産。俺の希望で、お腹の子の性別は知らない。

更に、樹里達の母親である由里さんも、勤め先の居酒屋の店長である西村夏彦さんと付き合い始め、妊娠した。

出産は冬になるそうだ。

璃里さんの娘の実里ちゃんも、すでに樹里達にそっくりになって来た。

従妹達もよく似ているらしいから、恐ろしい事が起こりそうだ。

まあ、考えても仕方がないので、やめとこう。

俺と樹里は、関越自動車道から上信越自動車道を走り、長野県に入った。

佐久インターで降りて、しばらく国道十八号線を戻ると、あの有名な避暑地である軽井沢だ。

何故今頃、新次郎が俺を招いたのかというと、脅迫状が届いたからだ。

その脅迫状には、

「石動家の血を途絶えさせる」

と新聞や雑誌の字を切り抜いて作られていた。

「警察に連絡したのか？」

俺はそう尋ねたが、新次郎は、

「只の悪戯かも知れないからな。それにお前が警察辞めて、探偵を始めたって聞いたから」

「ありがとう、石動」

俺は思わず涙ぐんでしまった。

「あれだな」

別荘地の中でも一際大きな建物が、通りの先に見えて来る。

「そうなんですか」

樹里が俺の声に目を覚ました。悪い事をしたか？　でも、もうすぐ着くのだから、いいだろう。

「こじんまりしたお屋敷ですね」

樹里は笑顔全開で言った。

「そ、そうか？」

こいつ、普段でかい邸でメイドしてるから、家の大きさに対する感覚が麻痺してるな。

確かに、あの五反田六郎邸に比べれば、見劣りするが、決して「こじんまり」してはいないと思う。

そんな事を言う樹里は、俺と暮らしているアパートをどう思っているのだろう？

何だか、悲しみがこみ上げて来る。

まもなく、俺の車は新次郎の別荘に到着した。

「いらっしゃい。遠いところをようこそ」

新次郎が奥さんと出迎えてくれた。

久しぶりに会った新次郎は、心なしかやつれて見え、奥さんの今日子さんも老けて見えた。

とは言え、美男美女の二人には変わりはない。

二人は、大学時代に交際を始め、卒業と同時に結婚した。

だから、子供はすでに中学生だ。

俺はふと、俺達の子供の将来を考え、落ち込みそうになった。

「さ、中へ」

俺と樹里は、新次郎の案内で、邸の居間に通された。

居間は、俺のアパートが全部入ってしまうくらい大きい。

その居間のほぼ中央にある黒革張りのソファに並んで座っているのが、この別荘の所有者の石動泰蔵氏と、その妻の美奈子さんだ。泰蔵氏は新次郎の父親。見てくれは、お世辞にも男前ではない。

この人が新次郎の父親だとはとても思えない。

そして、美奈子さんは、泰蔵氏の後妻。しかも、新次郎より年下だ。まだ三十歳くらいだろう。それにしても、艶やかという言葉が似合う人だな。今日子さんとは違った雰囲気の美人だ。

「ようこそいらっしゃいました、杉下先生」

泰蔵氏は、俺を見るとソファから立ち上がって言った。美奈子さんも立ち上がり、会釈した。

「お隣の美しい女性は、お嬢さんですか？」

泰蔵氏は悪気なく言った。俺は苦笑いして、

「妻の樹里です」

泰蔵氏は、美奈子さんと顔を見合わせる。

「本日はお招きいただき、ありがとうございます」

樹里は笑顔全開で深々とお辞儀した。

「ご丁寧なご挨拶、痛み入ります、奥さん」

泰蔵氏は頭を掻きながら樹里に言った。

「奥様のお辞儀のなさり方、素晴らしいですわね。お仕事は何をなさっていますの？」

美奈子さんが微笑んで尋ねる。

「はい、五反田六郎邸のメイドをしております」

樹里が笑顔全開で答えると、ほんの一瞬だったが、泰蔵氏の目つきが鋭くなった。

何だ？　五反田氏と何かあるのか？

そんな考えが頭を過った時、

「お疲れのところ、大変申し訳ないのですが、早速お話させていただいてよろしいですか？」

泰蔵氏が言った。俺はハッとして、

「かまいません。お願いします」

と応じた。

泰蔵氏の話では、脅迫状は先週末、別荘のポストに直接投函されていたという。

封筒には切手は貼られておらず、宛名すら書かれていなかった。

「ここが私の別荘だという事を知っている者の仕業のようです」

「なるほど」

俺は泰蔵氏から封書を手渡された。ごくありふれた市販の封書だ。

取り立てて特徴もない。

中から、便箋を取り出す。

脅迫状だ。そこには、

「石動家に怨みを持つ者である。石動家は滅びよ」

と切り貼りの文字で表現されていた。

「旦那様と同じ糊(のり)を使っていますね」

樹里が鼻をヒクヒクさせて言った。旦那様？　五反田氏の事か？

糊を特定できるって、どんな鼻をしているんだ？

「こんな鼻ですが？」

樹里は俺を見て、真顔でそう言った。

「……」

俺は唖然とした。何故俺の心の声を聞けるんだ、お前は？

しかしその時俺は、樹里のその一言が後に事件解決の鍵になるとは夢にも思わなかった。

一通り、脅迫状が届いた時の経緯を訊いた俺は、新次郎に一階の奥にある客間に案内された。

「今日は泊まって行ってくれ。何だか、危険な感じがするんだ」

新次郎は去り際にそう言った。

「ああ」

俺は新次郎のその言葉を別段深い意味にはとらず、笑顔で応じた。

それにしても。

部屋を見回すと、大きめのダブルベッドがある。

樹里と一緒に寝るのか。

もう子供が生まれるという状況なのに、緊張して来る。

「どうしたんですか、左京さん？」

樹里が不思議そうな顔で俺を見た。

「あ、いや、ベッドが大きくて凄いな、と思ったんだよ」

俺は変な事を想像していたのを悟られたくなくて、そう言って誤摩化した。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じた。

しばらく、樹里と何となく過ごしていると、

「昼食の用意ができましたので、キッチンにいらして下さい」

と、美奈子さんが呼びに来た。

「はい」

俺は樹里と共に部屋を出た。美奈子さんはすでに行ってしまった後で、廊下には誰もいない。

「キッチンはどっちだろう?」

俺がキョロキョロしていると、

「こっちですよ」

樹里がまた鼻をヒクヒクさせて言う。

「……」

また唖然としながら、俺は樹里について行った。

確かに樹里の言った通り、その先にキッチンがあり、新次郎達がいた。

しかし、新次郎も今日子さんも、そして美奈子さんも、何かヒソヒソ話していて、食事の準備が途中のようだ。

「どうしたんですか？」

俺は何かあった気がしたので、尋ねてみた。

「親父の姿が見えないんだ」

「え？」

胸騒ぎがする。

「隠れんぼですか？」

樹里がそう言いかけたのを、俺はすかさず止めた。

「さっきまで書斎にいたのに。どこに行ったのかしら？」

美奈子さんは首を傾げている。新次郎が、

「多分瞑想部屋だよ。そこで最近嵌っている瞑想に耽っているんだ。

全く、お客様がいらっしゃるのに、仕方のない親父だ」

と呆れ気味に言った。美奈子さんが、

「私、見て来ます」

とキッチンを出て行く。

「あ、俺も行きますよ」

決して美奈子さんの美貌に惹かれたのではない。何となく嫌な予感がしたのだ。

「樹里はここで待っているんだ」

俺は何かあると困るので、ついて来ようとした樹里を置いて美奈子さんを追った。

別に何か邪(よこしま)な事を考えた訳ではない。

美奈子さんは、キッチンを出ると、階段を上がり、二階の突き当たりの部屋へと進んだ。

「貴方、いらっしゃいますの？」

美奈子さんはドアをノックした。しかし、応答はない。

「貴方？」

もう一度美奈子さんが呼びかける。しかし、返事はない。

「寝てしまったのかしら？」

美奈子さんがドアノブを回す。

「あら？」

しかし、鍵がかかっているようで、ドアは開かない。

「鍵をかけてしまったみたいですね」

美奈子さんは俺を見て肩を竦めた。ちょっと可愛いと思ってしまった。すまん、樹里。

「仕方ないわね」

美奈子さんは階段へと歩き出す。俺もそれに続いた。

「ご心配をおかけして申し訳ありません」

歩きながら、美奈子さんが言った。

「いえ。あんな脅迫状が届いたので、ちょっと過敏になったようです。何もなくて良かったですよ」

俺は美奈子さんと共に階段を下りた。

「杉下さんはキッチンにお戻りになって下さい」

美奈子さんは会釈すると、泰蔵氏の書斎に行った。

キッチンに戻ると、何故か樹里しかいなかった。

「あれ、新次郎と奥さんは？」

樹里に尋ねた。

「新次郎さんは屋根裏部屋へ、奥さんは外へ行きました」

「ええ？」

樹里を一人残して、何してるんだ、新次郎め。

いや、責められないな。あいつも父親が心配なんだろう。

「どうしましょうか？」

樹里と俺は、顔を見合わせ、考えた。

その時だった。

「いやあアッ！」

美奈子さんの叫び声が聞こえた。

「何だ？」

俺はキッチンを飛び出した。すると、俺より早く樹里が走る。

「え？」

大丈夫なのか、樹里？　そう尋ねる暇もないくらい、樹里は速かった。

美奈子さんがいたのは、泰蔵氏の瞑想部屋だった。

彼女は瞑想部屋のドアを入ったところで倒れていた。

「美奈子さん！」

俺は美奈子さんを抱き起こした。

「左京さん！」

樹里の鋭い声に俺は思わずギクッとして、

「あ、その、別に俺は……」

と言い訳を始めたのだが、樹里を見ると、彼女は俺ではなく、部屋の奥を見ていた。

「え？」

俺はドキドキしながら樹里の視線の先を見た。

泰蔵氏がテーブルに突っ伏しているのが目に入る。

テーブルには飲みかけのウイスキーと思われる液体の入ったグラ

ス。

「死んでる」

首筋に手を当てて確認するまでもなく、目を見開いて動かない姿を見れば、泰蔵氏が生きていないのははっきりしていた。

何という事だ！

俺達は殺人事件に遭遇してしまった。

まるで「名探偵コ○ン」みたいだ、などとは思わなかったが。

樹里ちゃん、殺人事件に巻き込まれる（検証編）

俺は杉下左京。五反田駅の前に事務所を構える探偵だ。

大学時代の友人である石動新次郎（いするぎしんじろう）の誘いで、妻の樹里と共に長野県の軽井沢にやって来た。

そこで俺は図らずも、新次郎の父親である泰蔵氏の変死に遭遇した。

そうだ。変死。まだ、検視した訳ではないので、殺人と断定された訳ではない。

これは明らかに作者の失策だ。頭が悪いからなので、許して欲しい。

「奥さん、しっかりして下さい」

俺は現場である瞑想部屋の入口で倒れていた泰蔵氏の妻の美奈子さんを抱き起こし、声をかけた。

「左京さん」

樹里が言った。俺は思わずギクッとする。

「な、何かな、樹里？」

恐る恐る樹里を見ると、樹里は、

「テーブルの上に鍵がありますよ」

「うん？」

この部屋は、泰蔵氏が中から鍵をかけていた。それは俺と美奈子さんで確認済みだ。

美奈子さんは、泰蔵氏が眠ってしまったと思い、合鍵がある書斎へ行った。

そして、合鍵を持って来て、ドアを開いて、泰蔵氏の変わり果てた姿を見たのだろう。

美奈子さんの持って来た合鍵はドアに挿されたままだ。

「う、うん……」

美奈子さんが意識を回復した。

「奥さん、大丈夫ですか？」

俺は美奈子さんを床の上に座らせる格好で起こした。

「主人が、主人が……」

美奈子さんは途端に泰蔵氏の事を思い出したのか、泣き出して俺に抱きついて来た。

この状況はまずい。

俺はまた樹里を見た。すると樹里は泰蔵氏の遺体に近づいて、あちこち観察している。

俺はホッとすると同時に、あっと思い、

「樹里、入っちゃダメだ」

すると樹里は、泰蔵氏の頸部（けいぶ）を指差し、

「左京さん、こんなところに索溝（さくこう）が」

と言った。その専門用語に俺はギョッとしたが、俺も美奈子さんから離れ、遺体に近づいた。

どうやら、泰蔵氏は絞殺（ひも状のもので首を絞めて殺す事）されたようだ。

「防御創（ぼうぎょそう）がないな。どういう事だ？」

一般的に絞殺の場合、被害者は首を絞めているものを外そうともがき、自分の爪で傷を作るものなのだ。泰蔵氏の遺体の首には、それがない。不自然なのだ。

「俺は美奈子さんを休ませて来る。樹里は部屋に誰も入らないように見張っていてくれ」

「はい、左京さん」

樹里は真剣な表情で応じた。何だか、璃里さんみたいだが、まさかな。

俺はフラフラしている美奈子さんを抱きかかえるようにして、廊下を歩く。

「美奈子さんのお部屋はどこですか？」

「突き当たりの右手です」

俺は面倒臭くなり、

「失礼します」

と美奈子さんを抱きかかえた。

「きゃ！」

美奈子さんはビックリして叫んだ。誤解されそうな状態だが、彼女を歩かせていたら、時間がかかり過ぎるのだ。

俺は早足で廊下を進み、突き当りの右手の部屋のドアノブを回し、中に入った。

そこは夫妻の寝室だった。客間のベッドよりも大きいベッドがある。しかも、天蓋（てんがい）付だ。

俺はそれに美奈子さんを寝かせた。

「待って」

部屋を出ようとする俺を美奈子さんが引きとめた。

「どうしましたか？」

「一人にしないで、杉下さん。怖いの」

樹里に出会う以前の俺だったら、間違いなくフォーリンラブな台詞だ。しかも、美奈子さんは目を潤ませている。最強形態だ。

「大丈夫です。すぐに戻りますから」

俺は美奈子さんの手を振り払うようにして寝室を出た。

これ以上美奈子さんと接していたら、いくら温厚な樹里でも怒るだろうから。

俺は階段を駆け下りて、キッチンに行った。

そこには、外から戻った新次郎の奥さんの今日子さんがいた。

「どうしたんですか、杉下さん？　そんなに息を切らせて？」

今日子さんは俺の呼吸が大袈裟だと思っているのか、微笑んでいる。

「泰蔵さんが亡くなっています」

「え？」

今日子さんはキョトンとした。

「義父がどうしたのですか？」

今日子さんが聞き返す。俺は息を落ち着かせて、

「泰蔵さんが殺されています」

「ええ！？」

今度は通じたようだ。目を見開き、口をポカンと開いている。

「何だ、今日子、大声を出して」

そこへ新次郎が戻って来た。

俺は改めて新次郎に状況を説明し、一緒に二階の瞑想部屋に行った。

始めは怖がっていた今日子さんも、キッチンに一人で残される方が嫌だと思ったのか、同行した。

「今日子さん、寝室で休んでいる美奈子さんについていてもらえますか。遺体を見て、動揺しているので」

部屋に近づくにつれ、今日子さんが震え出したのに気づき、そう言った。

「はい」

今日子さんはややホッとした顔で応じ、美奈子さんのいる寝室へと歩き出した。

俺は新次郎と顔を見合わせて頷き、樹里の待つ瞑想部屋に行った。

「左京さん」

樹里は一人で残されて不安がっていないかと心配したのだが、全然そんな事はなく、

「窓には内側から鍵がかかっています」

と冷静な声で報告して来た。

「何？」

俺はビクッとした。という事は？

「父さん！」

新次郎は変わり果てた父親を見て叫んだ。

「申し訳ないが、お父さんには触らないでくれ。警察を呼ばなければならないから」

「わかった」

新次郎は憤懣やるかたない表情で立ち止まった。

俺は携帯を取り出し、警察に連絡した。

「取り敢えず、ここはこのままにして、階下（した）に行こうか」

俺は新次郎を促し、樹里を伴って部屋を出た。

程なく、近くの交番から警官が到着した。

「この先の交番勤務の柿崎（かきざき）巡査であります」

柿崎巡査はまだ警察官になったばかりのようだ。初々しい。

「現場はこちらです」

俺は新次郎と樹里を居間に残し、柿崎巡査を案内した。

「うわ」

柿崎巡査は、検死には立ち会ったことがあるらしいが、殺人現場は初めてだそうだ。

「まだ死後硬直も始まっていませんから、死後三十分から一時間程度でしょう」

俺が私見を述べると、

「そうですか」

柿崎巡査は、俺が元警視庁の警部だと知って、結構素直だ。

やがて、所轄である元軽井沢警察から黒塗りのセダンと大型バンがサイレンを鳴らす事なく訪れた。

新次郎の頼みでそうしてもらったのだ。世間体を気にしての事らしい。

担当は、刑事課一係の田野倉（たのくら）警部補だ。後から県警の刑事も来るらしい。

俺は事件の概略を田野倉警部補に話した。

「なるほど。密室殺人ですか」

田野倉警部補は、俺の話を聞き終わると、開口一番そう言った。

鑑識課員が現場検証を進める中、田野倉警部補は、

「杉下さんはどうごらんになっておいでですか？」

と唐突な質問をして来た。こいつ、俺を試しているのか？

「自分にはまだ何とも」

俺はそう言ってとぼけた。

「そうですか」

田野倉警部補は苦笑いしてから、

「部屋の壁も隈なく調べて下さいよ。密室なんて、絶対にあり得ないんだから」

と言ってから、俺を見てニヤリとした。感じの悪い奴だ。

俺が警視庁の元警部だというのがお気に召さないのかも知れない。

昔、東京でよく経験した事だ。

所轄と本部は反りが合わないのだ。

む？　今、何かを思い出したような気がした。

何だ？　俺は何か見落としているのか？

そんな事を考えているうちに、検証作業は終了し、遺体が運び出される。

「部屋には隠し扉はありませんでしたよ」

嬉しそうな顔で、田野倉警部補が言った。

「そうなんですか」

俺は嫌味を込めて、笑顔全開で応じた。田野倉警部補はムッとしたようだ。

しかし、だ。

この状況から判断すると、犯人は間違いなく家族の中にいる。

密室殺人の最大の欠点は、容疑者が絞り込まれる事にある。

新次郎と今日子さん、そして美奈子さんの中に犯人がいるのだ。

そこまでわかっていながら、俺はまだ犯人を特定できないでいる。

「そうなんですか」

「わ！」

俺はいきなり樹里に後ろから声をかけられて仰天してしまった。

「私はわかりましたよ」

樹里は笑顔全開で言った。

「え？　な、何が？」

まさか犯人がわかったという訳ではないだろうと思いたい俺は、そう尋ねた。

「犯人がですよ」

樹里は更に笑顔で言った。

「何ーっ！？」

俺は思わず叫んでしまった。

「でも、それは次回で」

樹里がそう言ったので、俺は項垂れた。

樹里ちゃん、殺人事件に巻き込まれる（解決編）

俺は杉下左京。東京の五反田駅前に事務所を構える探偵だ。

俺と妻の樹里は、俺の大学時代の同級生の石動新次郎（いするぎしんじろう）の招きで、長野県の軽井沢を訪れ、殺人事件に巻き込まれた。

被害者は新次郎の父親である泰蔵氏。泰蔵氏は首を紐状のもので絞められて殺されていた。

第一発見者は、泰蔵氏の妻の美奈子さん。

泰蔵氏が殺されていた瞑想部屋は、事件当時、窓の鍵もかけられ、ドアの鍵もかけられた密室だった。

通報を受けてやって来た所轄の田野倉警部補は、

「密室なんてあり得ない」

と言い放ち、鑑識課員に部屋の中を隈なく調べさせたが、隠し扉等は発見されなかった。

俺と樹里は、田野倉警部補達が一階に引き上げて行った後も、部屋の前にいた。

「やはり、密室だったか」

俺はそう思った。

密室殺人の場合、容疑者が絞り込まれる傾向がある。

部屋の特徴や、被害者の行動を知っている者でないと実行できないからだ。

しかし、俺はそこまでわかっていながら、犯人が誰なのか特定できないでいた。

すると、驚いた事に我が妻である樹里には犯人がわかったというのだ。

俺は樹里の洞察力に驚いたが、同時に焦りもした。

まがりなりにも、俺は元警視庁の警部まで勤めた探偵だ。

素人に先(せん)を越される訳にはいかない。

そこまで考えて、俺は自分の浅はかさに気づいた。

樹里は俺の妻だ。そして、我が探偵事務所の所員でもある。今は休職中だけど。

つまり、樹里の推理は俺の推理と同じ事。

何も焦る必要はない。

せこい奴だと思われようと、俺はそう考える事にした。

「同じ匂いがしたんですよ」

樹里は笑顔全開で謎めいた事を言った。

「同じ匂いって、何の匂いだ？」

俺は恥を忍んで樹里に尋ねた。

「糊の匂いですよ」

俺はキョトンとしてしまった。

「糊？　脅迫状に使われていた糊の事か？」

「はい。左京さんからもその匂いがしますよ」

樹里は笑顔全開で言った。俺は思わず自分の服の匂いを嗅いだ。

しかし、何も臭わない。やはり、樹里の嗅覚は尋常ではないようだ。

「あ！」

そこでようやく、俺は思い出しかけていた事がわかった。

「ありがとう、樹里。謎は全て解けた。真実はいつも一つだ」

俺はパクりまくったセリフを言い、樹里を抱きしめた。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じてくれた。

俺は確信を持った。そして、瞑想部屋を離れ、廊下を歩く。

「左京さん、どこに行くんですか？」

樹里がついて来た。俺は前を見据えたままで、

「もちろん、美奈子さんのところさ」

と答えた。

俺はそのまま、美奈子さんの部屋へと行った。

ノックをすると、ドアを開いて、新次郎の奥さんの今日子さんが顔を出す。

「どうなさったんですか、杉下さん？　怖い顔をして」

「すみません、生まれつきなんです」

つい、元同僚で、今はキャバクラに狂っている加藤真澄の物真似をしてしまった。

あいつは今日もあのあかぎ恋（れん）さんに会いに行っているのだろうか？

俺はびっくりしている今日子さんを押しのけるようにして、部屋の中に入る。樹里も続いた。

「まあ、杉下さん」

横になっていた美奈子さんが起き上がる。俺は今日子さんを見て、

「ちょっとだけ、席を外してもらえますか？」

今日子さんは目を見開いたが、俺は強引に彼女を部屋の外に押し出し、ドアを閉じて鍵をかけた。

「どうしましたの、杉下さん？」

美奈子さんは微かに笑みを浮かべて、俺を見上げる。俺は美奈子さんに近づき、

「ご主人を殺害した犯人がわかりました」

と言った。美奈子さんはびっくりしたようだ。

「ええ？　一体誰ですの？」

美奈子さんは声を低くして尋ねる。俺は美奈子さんをまっすぐに見据え、

「貴女です、美奈子さん」

美奈子さんは一瞬唖然としたが、

「何を言っているんですか、杉下さん。私にいつ主人を殺害する事ができますの？　貴方と瞑想部屋に行った時、部屋には鍵がかけられていたのですよ」

「いえ、鍵はかかっていませんでした。あの時、貴女は鍵がかかっているフリをしただけです」

俺の指摘に美奈子さんの顔が一瞬引きつる。

「貴女は俺を証人として、瞑想部屋が密室になっている事を印象づけ、その後書斎にある合い鍵を取りに行くように見せかけた。しかし、あの時すでに泰蔵氏は貴女に殺された後だった」

美奈子さんは何も言わずに俺を見つめている。吸い込まれそうな美しい目だが、樹里がいるので理性が保てる。

「貴女は泰蔵氏に睡眠薬入りのウィスキーを飲ませるかして、眠ってしまった泰蔵氏の首を絞めた。苦しさで目を覚ましたが、泰蔵氏にはもがく余裕がなかった。だから、絞殺体にあるはずの防御創がなかったのです」

俺は自信満々で言った。すると美奈子さんはケラケラと笑い出し、

「面白いお話ですけど、証拠がありますの、私が犯人だと言う？」

出た。犯人の最後に言いそうなセリフだ。俺はフッと笑って次のセリフを言おうとした。

あれ？　証拠？　あれ？　証拠って、何かあったか？

全身から嫌な汗が噴き出す。

まずい。俺は犯人がわかった事で満足し、証拠の事に思い至らな

かった。

これは非常にまずい展開だ。

「事と次第によっては、貴方を訴えさせていただきますわよ、杉下さん」

あの可憐な感じの美貌はどこへやら、今の美奈子さんは悪い魔女にしか見えない。

しかし、それも証拠にはならない。

「証拠なら、ありますよ」

樹里が笑顔全開で言った。

俺と美奈子さんはほぼ同時に樹里を見た。

「これです」

樹里が差し出したのは、大きなガラス瓶に入ったゲル状のものだった。

「何だ、それ？」

俺は樹里に尋ねた。樹里は俺を見て、

「糊ですよ。脅迫状に切り取った文字を貼り付けた」

美奈子さんの悪い魔女顔が凍りついた。

「この糊が証拠です。脅迫状に付着したものと成分を調べれば、ほぼ同一のものとわかります」

樹里は樹里らしくない言葉で言った。もしかして、本当に彼女の姉の璃里さんではないかと思ってしまう。

彼女は続ける。

「そして、この糊は五反田六郎様がお知り合いの方々にお贈りした限定品です。市販はされていません」

「脅迫状を出したのが私だとしても、主人を殺害したのが私だという証拠にはなりませんわ」

この期に及んで、美奈子さんは悪あがきをした。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開だ。余裕の笑みか？

「では、ご主人の手の爪の間にある皮膚片はどうですか？　ご主人の首に防御創がなかったのは、首を絞めている貴女の腕を強く掴んでいたからだと思いますが？」

俺はハッとして美奈子さんの腕を掴み、服の袖を捲った。

そこにはくっきりと爪痕が残っている。しかも、皮膚が一部剥がされていた。

相当強く掴まれたのだろう、指の痕が残っている。

美奈子さんは俺の腕を振り払った。

「あの男は悪魔よ。私を手に入れるために、私の両親を借金地獄にして、返済を肩代わりする見返りに、私を差し出すように迫ったのよ」

美奈子さんは泣きながら喋り出した。

「結局、私があの男と結婚すると、あの男は約束を反故にして、両親を自殺に追い込んだわ」

壮絶な話だ。すると樹里が言った。

「貴女は最初から捕まるつもりだった。そうですね？」

ええ？　そんな事までわかってるのか、樹里？

美奈子さんは涙を拭いながら樹里を見上げ、

「ええ、そうよ。逃げるつもりなんかないわ。あいつを殺せたんだもの、あとは両親のいるところに行くだけ」

俺はその言葉に衝撃を受けた。

「でも、何故今なんです？」

俺は納得がいかず、尋ねた。美奈子さんは俺に視線を移し、

「きっかけを待っていたのかも知れないわね。って言うか、貴方を待っていたのかも」

と言うと、大声で笑い出した。

俺は思わず赤面してしまった。

こうして、石動家の別荘で起こった殺人事件は幕を閉じた。

美奈子さんは田野倉警部補達に取り囲まれるようにして大型バンに乗せられた。

新次郎と今日子さんは唖然としたまま、走り去る警察車両を見送った。

俺は二人にかける言葉が見当たらず、樹里と共に別荘を去った。

俺は高速に乗り、東京を目指した。

「すごかったな、樹里。惚れ直した」

俺は少し顔を赤らめながら言った。

「はい？」

樹里はキョトンとしている。

「すみません、車酔いの薬を飲んでから、眠くて」

「え？」

樹里の返答に驚く。まさか、何も覚えていないのか？

ええええ？　謎が多過ぎるぞ、御徒町一族！

樹里ちゃん、殺人事件に巻き込まれる（解決編）（後書き）

すみません、解決編、誤魔化してしまいました。

申し訳ないです。

樹里ちゃん、推理作家に感想を聞かれる

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

五反田氏はようやくアメリカでの合併協議を終え、妻の澄子（すみこ）さんと娘の麻耶（まや）さんと共に帰国しました。

五反田氏は、樹里の身体を気遣い、もう一人メイドを雇う事を樹里に告げましたが、

「大丈夫ですよ」

と樹里に言われ、断念しました。無理にメイドを増やしたら、樹里の気分を害すると思ったからです。

実際には、樹里は気分を害する事など、生まれて一度もないのですが。

「くれぐれも無理はしないようにね、御徒町さん」

五反田氏は言いました。

「はい、旦那様。お心遣い、感謝致します」

樹里は深々とお辞儀をしてお礼を言いました。

五反田氏が樹里の身体を気遣うのは、樹里が得がたい優秀なメイドだという事もありますが、それ以上に五反田氏を心配させる原因

は、五反田氏と澄子さんの過去にありました。

五反田氏は澄子さんと結婚して二十年です。

でも、娘の麻耶さんはまだ十歳です。

実は、五反田氏と澄子さんの間には麻耶さんのお兄さんかお姉さんになるはずの子がいました。

しかし、澄子さんは流産してしまったのです。

だから、五反田氏は、樹里の身体の事を自分の身内のように心配するのです。

「あんな悲しい思いは、もう誰にもさせたくないし、見たくないよ」

五反田氏は、樹里が仕事を終えて帰った後、澄子さんに言いました。

「ええ。樹里さんには、元気な赤ちゃんを産んで欲しいわね」

澄子さんも寂しそうな顔をして言います。

「辛い事を思い出させてしまったかな？」

五反田氏は澄子さんの肩を抱いて尋ねました。

「大丈夫よ。私達には、麻耶がいますから」

「そうだね」

五反田氏のその時の顔を、合併の交渉相手が見れば、同じ人物とは思わないでしょう。

それほど五反田氏の顔は、優しさに満ちていました。

翌日の事です。

五反田氏は澄子さんと会社に行きました。

麻耶さんは小学校へ出かけました。

樹里がいつものように庭掃除をしていると、リムジンが入って来ました。

高名な推理作家の大村美紗のものです。

リムジンは邸の車寄せの前で停まり、運転手さんが後部座席のドアを慌てて開きに走ります。

すると彼が開く前に、せっかちな美紗が開いてしまいます。

「遅いのよ、貴方！　クビにするわよ！」

「は、はい！」

ドアを開くのが遅かっただけで仕事を奪われるのでは、運転手さんも堪(たま)りません。

美紗は相変わらずの上から目線で登場です。

今日は娘のもみじは学校なので、美紗一人です。

「いらっしゃいませ、大村様」

樹里が素早く庭から駆けつけ、お辞儀をします。

「ご機嫌よう、樹里さん。私の小説、読んでいただけまして?」

上から目線で尋ねる美紗です。

「申し訳ありません、まだ読んでおりません」

樹里は笑顔全開で言いました。美紗はイラッとしましたが、

「そう。いつ頃読み終わるかしら?」

とまた上から目線で尋ねます。

「ここで立ち話では申し訳ありませんので、中へどうぞ」

樹里は美紗を応接間に案内しました。

「紅茶で結構よ」

美紗は樹里がまだ何も言っていないうちにそう言います。

とても上から目線です。

「畏(かしこ)まりました」

樹里は深々とお辞儀をして、応接間を出ます。

美紗は部屋の中を見回しながら、

(私の小説を一体何日読まずに放置していたのよ。失礼にも程があるわ)

と上から目線で怒りを募らせます。

「お待たせ致しました」

樹里が紅茶を淹れて戻って来ます。

「本日はウヴァです。世界三大銘茶の一つです」

樹里がテーブルの上にカップを置くと、見栄っ張りの美紗は、

「そんな事、いちいち言われなくても、私にはわかるのよ、樹里さん」

と本当は全然わからないのに言いました。

「申し訳ありません」

樹里は深々と頭を下げてお詫びしました。詫びる必要はないと思いますが。

「今何かおっしゃった、樹里さん？」

美紗がムッとして尋ねます。地の文に少しだけ気づいたようです。

「いえ、何も申しておりません」

樹里は笑顔全開で応じます。美紗はまたイラッとし、

「それより、いつになったら、私の傑作を読み終えてくださるのかしら？」

と嫌味を言います。

「では、確認してみます」

樹里は妙な事を言いました。

「確認？」

首を傾げる美紗です。樹里は携帯電話を取り出し、どこかにかけました。

「申し訳ありません。お仕事中ですか？　お貸ししている大村様のご本なのですが」

樹里のその言葉に、推理作家なのに他人の推理小説の犯人が全然わからない美紗がピクンとします。

（もしかして、五反田さんに貸しているのかしら？）

長いものにはここぞとばかりに巻かれようとする性格の美紗は、五反田氏を急かしてしまうのはまずいと考えました。

「いいのよ、樹里さん。貸していたのなら、そう言ってくださいな。先方さんも、急かされてはお気の毒でしょう」

美紗の営業スマイルが炸裂しますが、電話の相手には見えないので意味がありません。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。そして、

「では、ゆっくりお読み下さい。大丈夫ですから」

と告げると、携帯を切りました。そして、衝撃の言葉を述べました。

「なぎささんは、読み終わるのにあと一週間くらいかかるそうです」

美紗は硬直しました。

「ひ、ひ、ひーっ！」

美紗は雄叫びを上げ、ソファに倒れてしまいました。

「大村様、どうなさいましたか？」

樹里が驚いて美紗に近づきます。

美紗は白目を剥いて、

「なぎさ、なぎさ……」

と呟いていました。

なぎさは、登場しなくても、美紗を気絶させるのでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京に浮気される？

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

今日もまた、大きな邸の掃除をしています。

先日、図らずも難事件を解決した樹里は、名探偵として長野県全体に知られる存在になりました。

樹里フリークの人が、樹里が軽井沢にいるのをキャッチし、その理由を探り当てたのです。

その人こそ、相当な名探偵だと思われます。

しかし、そんな事を全然知らない樹里は、不甲斐ない夫である杉下左京のために身重の身体をものともせずに働いています。

「今日は洗濯日和ですね」

樹里はギラギラと照りつける太陽を見上げて言いました。

一方、不甲斐ない夫の左京は、今日も事務所で暇を持て余しています。

「今日も依頼がないの？」

グウタラ所員の宮部ありさが尋ねます。

「ない」

机に突っ伏したまま答える左京です。落ち込んでいます。

「どうするのよ、私の夏のボーナスは？」

それに追い討ちをかけるありさです。

「ボーナスが欲しかったら、仕事取って来い！」

左京はありさを睨みつけました。

「はいな！」

何故か素直に返事をし、事務所を出て行くありさです。

「妙だな……」

その様子を見て、左京は不安になりました。

午後になって、ありさが帰って来ました。

「左京、クライアントを連れて来たよお」

ありさの後ろにいるのは、警視庁捜査一課の加藤真澄警部です。

「何でそんな奴連れて来たんだよ!?」

左京は怒りました。するとありさは、

「ボロい仕事よ。加藤君と一緒にキャバクラに行くだけで十万円」

「何!?」

左京は色めき立ちました。そして加藤警部を見て、

「本当か?」

加藤警部はフッと笑い、

「本当だ。但し、閉店までいてくれたらという条件付きだ」

「閉店まで?」

左京はギクッとしました。

キャバクラの閉店までいれば、確実に樹里は一人で寝る事になります。

そして左京は、前回のキャバクラ騒動の時、二度とキャバクラには行かないと誓ったのです。

(しかし、十万円の収入は魅力だ。どうしたらいいんだ?)

左京は悩みました。そして、樹里に電話をします。

「樹里か？　相談があるんだけど」

左京は加藤警部の依頼の話を樹里にしました。

樹里は言いました。

「いいですよ。お仕事頑張って下さいね、左京さん」

その言葉に左京は号泣しました。でも、全米は泣きません。

「すまない、樹里」

左京は電話の向こうの樹里に何度も頭を下げました。

「悪いが、前金でもらえないか？」

左京は恥を忍んで言います。

「構わないよ」

顔は凶悪犯ですが、心は優しい加藤警部は、左京に依頼料を渡します。

「あれ？　九万円しかないけど？」

左京が言うと、

「一万円は、宮部に払ったぞ」

加藤警部は言いました。

左京がハッとしてありさを見ると、すでに逃亡した後です。

「あの女……」

ありさと一度きっちり話をしようと思う左京です。

こうして、左京は加藤警部と共にキャバクラに行く事になりました。

「七時に五反田駅前のキャバクラセイントの前に集合だ」

加藤警部は嬉しそうに帰って行きました。

(何を企んでいるんだ、あのバ加藤は?)

左京はいろいろ考えましたが、何もわかりません。

仕方がないので、アパートに帰り、夕ご飯の支度をします。

米を研ぎ、炊飯器に入れてタイマーセットします。

みそ汁を作り、冷まして冷蔵庫に入れます。

樹里がすぐに休めるように布団も敷きました。

そして思います。

（そう言えば、いつ以来だろう？）

何となく赤面する左京です。

そんな事をしているうちに樹里が帰って来ました。

「お帰り、樹里」

「只今帰りました、左京さん」

樹里は笑顔全開で言いました。

「樹里」

思わず樹里を抱きしめる左京です。

「どうしたんですか、左京さん？」

樹里は不思議そうな顔で左京を見上げます。

「何でもない。じゃあ、行って来るよ」

左京はドアを開きます。

「行ってらっしゃいませ」

樹里が深々と頭を下げるのを見て、左京は胸が張り裂けそうです。

「うん」

彼は振り返らずに部屋を出ました。

そして、左京はキャバクラセイントの前に着きました。

「時間に正確だな、杉下」

加藤警部が現れます。何故かタキシード姿です。

「どうした、仮装パーティの帰りか？」

左京は思わず言ってしまいました。

「依頼をキャンセルするぞ」

加藤警部がムッとします。左京は慌てて、

「冗談だよ」

と言い繕いました。

二人は開店間もない店内に入ります。

「こ、ここは……」

左京は眩暈がしそうです。

前回訪れたキャバクラでした。もう忘れていた左京です。

どの女の子も、際どいミニスカートとユルユルのタンクトップです。

太腿も胸の谷間も見放題です。

加藤警部は男性店員に、

「恋さんで」

と告げました。

「恋？」

何となく嫌な予感がする左京です。

「キャーッ、左京さん！」

予感的中です。

加藤警部が指名したのは、前回来た時に左京が猛アタックを受けたあかぎ恋でした。

「ど、どうも」

人の顔を忘れる名人の左京でも、この強烈な子の顔は覚えています。

（可愛いんだけど、あの強引さは退く）

左京は思いました。

「お久なので、ボトル入れちゃっていい、左京さん？」

恋が笑顔でお強請（ねだ）りです。

「いいって言えよ」

加藤警部が囁きます。左京は頷いて、

「どうぞ」

と答えました。

「キャーッ、嬉しい！」

恋は加藤警部と左京の間に割り込んで座り、左京に抱きつきます。

「お金を出すのは、そっちですから」

左京は加藤警部に抱きついてあげて欲しいと思いました。

「あーん、つれないのお、左京さんてば」

恋はニコニコしたままで言いました。

前回は加藤警部は恋に構ってもらおうと一生懸命でしたが、今回は何も言いませんし、して来ません。

探偵としての左京が、疑問を抱きます。

（今日の加藤は妙だ。何を考えているんだろう？）

加藤警部はほかの女の子と談笑しています。

ますます疑惑を深める左京です。

やがて、ワンタイムが終了し、加藤警部は延長を申し出ます。

「きゃあ、ありがとう、左京さん！」

また恋が抱きついて来ます。左京は困惑していました。

（これで十万ももらえるなんて、どう考えても変だ）

左京は加藤警部の横顔を見ますが、彼はほかの女の子との会話に夢中のようです。

そして、夜は更け、日付が変わります。

でも加藤警部は帰る気配を見せません。

お店は一時までです。

店内が暗くなりました。

ダンスタイムが始まり、左京は恋に強引に連れ出され、ホールで

チークダンスを踊ります。

（昔、蘭と踊って以来だな）

神戸蘭（かんべらん）との過去を思い出す左京です。

「左京さん、大好き」

いきなり恋が左京にキスして来ました。

「むぐ！」

左京は驚いて恋を突き放します。

「きゃは、左京さんとキスしちゃった」

恋が嬉しそうにはしゃぎます。左京は苦笑いしました。

そして、お店の閉店時間です。

「本日はありがとうございました」

恋が外まで見送ってくれます。

「これで、俺とデートしてくれるんだよな、恋ちゃん？」

去り際に加藤警部が言いました。

「え？」

左京は意味がわかりません。

「仕方ないわね。左京さんとキスできたから、してあげる、デート」

「やった！」

喜ぶ加藤警部、唖然とする左京です。

どうやら、加藤警部と恋は左京とのキスができるかどうかで賭けをしていたようです。

そして、賭けに勝った加藤警部は、念願の恋とのデートをできる事になったのでした。

「すまなかったな、杉下。許してくれ」

加藤警部は店から離れたところで左京に頭を下げます。

「まあ、いいさ。頑張れよ、加藤」

左京は呆れていましたが、加藤警部の一途さに免じて許す事にしました。

左京はそのままアパートまで帰りました。

すると驚いた事に明かりが点いています。

「ひいい！」

樹里が怒っていると思った左京は、慌てて部屋に入りました。

「樹里……」

しかし、樹里は明かりを点けたままで寝ていただけでした。

「ふう」

安心した左京でしたが、寿命は確実に縮んだと思いました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、亀島馨と久しぶりに会う

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

現在妊娠六ヶ月ですが、仕事をバリバリこなしています。

「御徒町さん、赤ちゃんは順調ですか？」

五反田邸の警備員さんが尋ねました。

「はい。よく動きますよ。触ってみますか？」

樹里は笑顔全開でお腹を突き出します。

「ええ、ああ、いやいや、それはまずいですよ」

警備員さんは顔を真っ赤にして持ち場に駆け去りました。

「そうなんですか」

寂しそうな樹里です。

その時でした。

「樹里さん」

どこからか声が聞こえました。

「はい」

樹里は笑顔で返事をしますが、声の主はどこにいるのかわかりません。

「樹里さん、ここです、ここ」

ふと声がする方を見ると、邸の門のところにもずくが貼りついています。

「誰がもずくだ！」

もずくは切れました。

「だからもずくじゃないって！」

よく見ると人間のようです。

服は汚れてボロボロ、髪は伸び放題、髭もモジャモジャで、無人島から助けられたもずくみたいです。

「だからもずくから離れろ！」

もずくは言いました。

「その声は、亀島さんですか？」

樹里が尋ねます。何と、もずくは亀島に化けていました。

「違うって……」

亀島が落ち込んだので、この辺で止めますね。

「どうしましたか、御徒町さん？」

警備員さん達がドヤドヤと走って来ました。

あからさまに怪しい姿の亀島はピンチです。

樹里は笑顔全開で、

「大丈夫です。私のお友達です」

「そうなんですか」

警備員さん達は声を揃えて言いました。

樹里は亀島を邸に入れ、お風呂を沸かしてあげました。

亀島は何ヶ月ぶりかの入浴だったので、嬉しくて泣いてしまいました。

髪を後ろに撫でつけてゴムで止め、髭を剃り、バスローブを着ると、ようやく亀島の復活です。

「樹里さん、ありがとうございました」

亀島はその場で土下座します。

「亀島さんには、以前助けてもらいましたから」

樹里は夫の杉下左京と亀島に、自分が殺人犯にされそうになったのを救ってもらった事をしっかり覚えているのです。

「樹里さん……」

亀島は号泣しました。

「こちらへどうぞ」

樹里は亀島に食事をさせるためにキッチンに案内します。

「あれ？」

亀島は樹里の歩き方が以前と違うのに気づきます。

「樹里さん、足を怪我したのですか？」

何も知らない亀島は尋ねました。

「赤ちゃんができたんです」

樹里は笑顔全開で言いました。

亀島は樹里が火星より遠くに行ってしまった気がしました。

（杉下さんとの子供か？　ああ……）

あわよくば、杉下を陥れて樹里と結婚しようと企んでいた亀島のささやかな野望は露と消えました。

なにわの事と同じです（全然レベルが違います　作者）。

しかし、何とか左京に一矢報いたい亀島は、只一つ持っていた財産であるデジタルカメラを樹里に差し出します。

「そこに杉下さんの正体が写っています」

亀島は真顔で言いました。樹里はキョトンとして、

「そうなんですか」

とデジカメを受け取り、そのままメイド服のポケットにしまってしまいます。

樹里はスタスタと歩き出し、キッチンに行ってしまいます。

「えええ？」

置いてきぼりを食わされる亀島です。

彼は慌てて樹里を追いかけました。

「ああ、いやいや、見て下さいよ、樹里さん」

「操作がわかりません」

樹里が機械音痴なのを思い出す亀島です。

そして亀島は樹里に見せたい画像を表示すると、樹里に渡しました。

「ほら、これです。杉下さんが、キャバクラで女の子とキスしてます」

亀島は、万引きをしてからずっと逃亡生活を続けていましたが、あの日偶然、左京がキャバクラに入るのを見かけたのです。

怪盗ドロント仕込の侵入術でキャバクラの天井裏に忍び込んだ亀島は、左京の盗撮に成功したのです。

（さすがの樹里さんも、これには怒るだろう）

亀島は樹里の激怒する様子を楽しみにして、彼女を見ました。

しかし、樹里はそれを見ても無反応で、またポケットにしまってしまいました。

「え？」

亀島は唖然とします。

（しくじったのか、俺？）

樹里はスタスタと廊下を歩き、掃除道具を片づけると、今度は玄関に向かいます。

「樹里さん？」

亀島は樹里を追いかけました。

樹里は携帯を取り出し、五反田氏に連絡しました。

「旦那様、大変申し訳ありませんが、今日は早上がりさせて下さい」

樹里の突然の申し出に五反田氏は驚いたようですが、

「大丈夫ですから」

樹里は言い、携帯を切ってポケットに戻します。

亀島はニヤリとします。

(樹里さんが怒ってる。これで杉下さんとはおしまいだ)

どこまでも姑息なもずくです。

「だからもずくじゃねえよ!」

亀島は地の文に突っ込みました。

樹里がスーツ一式を亀島に渡します。

「亀島さん、これにお召し替えになって下さい」

「え?」

樹里は真顔で亀島を見ます。

「亀島さん、このまま警察に行きましょう」

「えええええ！？」

亀島は仰天しました。そして、とり返しがつかない事をしてしまったのに気づきました。

「さあ」

樹里が亀島の手を取ります。

亀島が震えながら樹里を見ると、樹里は優しく微笑んでいました。

「罪を償って下さい、亀島さん。今のままでは、貴方はダメになってしまいますよ」

樹里は亀島の盗撮に気づいたようです。

樹里はもう一度携帯を取り出し、どこかにかけます。

「左京さんですか？　ダメですよ、キャバクラになんか行ったら。今度から気をつけて下さい。たまたまそれを知ったのが私だから良かったのですよ」

左京は必死に言い訳しているようです。

「はいはい、わかりました。では」

樹里の物言いが妙なので、亀島は呆然とします。

「亀島さん、先ほど樹里は帰宅しました。ちょっと調子が悪いみたいなんです」

「樹里」が言います。亀島はかつての「御徒町ワールド」を思い出しました。

「私は樹里の姉の璃里です」

御徒町一族、恐るべし！　亀島は戦慄し、今度こそ罪を償う決意を固めました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、またしてもドロントと再会する

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

って、間違えました。

御徒町樹里は、日本のみならず世界を股にかけて成長を続ける五反田グループの総帥である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

先日、少し具合が悪くなった樹里ですが、寝て起きたら元気になりました。

今日も大きな庭の掃除から始める樹里です。

「おはようございます」

樹里は警備員さん達に挨拶して掃除をします。

「あ」

樹里がお腹を押さえて立ち止まります。

「どうしましたか、御徒町さん？」

警備員さん達が一斉に樹里に駆け寄ります。

「赤ちゃんが動きました」

樹里は笑顔全開で言いました。

「そうなんですか」

ホッとする警備員さん達です。

その頃です。

いつもなら、不甲斐ない夫の杉下左京の事務所ですが、今日は違う展開です。

作者もたまには別のお話を考えつくようです（余計なお世話です　作者）

警視庁ドロント特捜班に新しい動きがありました。

特捜班は増員され、今では総勢五十名です。皆イケメンなのは班長の指示のようです。

特捜班の精鋭である平井拓司警部補が指揮して、怪盗ドロントのアジトを捜索していました。

そして、八王子市のはずれにあるドロントの隠れ家を突き止めました。

その報告を受けたイケメン大好き班長の神戸蘭（かんべらん）はフッと笑いました。

「そう。遂にあのおばさんも年貢の納め時ね」

おばさんがおばさんをおばさん呼ばわりです。

「うるさいわね！」

地の文に突っ込む蘭です。さすがベテラン、切れが違います。

「ドロントのアジトを包囲し、逃げ場をなくして踏み込めば、一網打尽です」

平井警部補がニヤリとして言いました。

「そうね」

平井警部補にメロメロなおばさん警部が言います。

「誰がおばさん警部だ！」

蘭が切れました。思わず蘭を指差しそうになる捜査員一同です。

そして、ここはドロントのアジトです。

八王子の山奥にあります。

「警視庁にここがばれたですって？」

ドロントは革張りのソファに寝そべっていましたが、部下のヌートからの報告を受けて起き上がりました。

「はい。平井拓司警部補が陣頭指揮を執り、突き止めたようです」

ヌートが深刻な顔で言います。

「じゃあ、ここを引き払って、渋谷に移りましょうよ、首領」

呑気な部下のキャビーが提案します。

「ダメよ。ここを突き止めたという事は、渋谷も、亀戸も、神保町も、聖蹟桜ヶ丘もみんな知られてしまっているわ」

ドロントが真顔で言いました。ヌートとキャビーは顔を見合わせます。

世界を股にかけて活動している割には、隠れ家は東京ばかりのドロントです。

「つまらない事を指摘しないでよ！」

地の文に突っ込むドロントです。

「仕方ないわね。最後の手段に出ましょうか」

ドロントは立ち上がりました。

「夢の島のアジトに行きますか？」

キャビーが尋ねます。

「それじゃ丸っ切りのパクリでしょ！」

昭和のアニメに妙に詳しいドロント一味です。

「では、どうするのですか？」

真面目担当のヌートが尋ねました。

「あの人に助けてもらうのよ」

「え？」

キョトンとするヌートとキャビーです。

ドロントは何故かキャビーを見てニヤリとします。

「な、何ですか、首領？」

嫌な予感がバリバリするキャビーです。

そして、その夜です。

ここは、居酒屋です。

以前、樹里、璃里、由里のローテーションで働いていたところです。

でも決してＡ○Ｂではありません。

今は樹里の従妹(いとこ)の鶯谷翠(うぐいすねどり)が働いています。

そこに女子高生ルックのキャビーが現れました。

でも何故か表情が暗いです。

「いらっしゃいませ」

翠が樹里と寸分違わない笑顔で挨拶します。

「バイトを募集してるって聞いて来ました」

キャビーは精一杯の作り笑顔で言います。

「そうなんですか」

口癖まで完璧な翠です。

彼女が樹里ではない事を見抜いた人はほとんどいません。

そうです。店長は翠を樹里として働かせているのです。

時給を倍にして。

「樹里ちゃんはいないの？」

あっさり見破るキャビーに、ビックリする翠です。

慌てて店長のところに連れて行きます。

「あ！」

店長はすぐにキャビーの顔に気づき、

「感激です。会いたかった」

と言い、握手して来ます。

振り払いたいキャビーですが、ドロントに叱られるので我慢します。

「採用です」

面接もなく、いきなりバイト決定のキャビーです。

「それで、お願いがあるのですが」

キャビーはやんわりと店長の手を振り解きます。

「何ですか？」

店長が笑顔で尋ねます。顔が近いです。口が臭いです。

「私の知り合いもバイトさせて欲しいのですが」

キャビーは後退(あとずさ)りながら言いました。

「構いませんよ」

店長は即答しました。唖然とするキャビーです。

「よろしくお願いします」

そこに現れたのは、ドロントとヌートでした。

二人には女子高生は無理なので（本当は無理なのはドロントだけですが）、ＯＬルックです。

「何か悪口言われた気がする」

ドロントが呟きます。

「ああ、何だ、お姉さんとお母さんもご一緒でしたか」

店長が思わず言ってしまいます。

「誰がお母さんだ！」

ドロントは切れました。

こうして、ドロント一味はまんまとバイトに採用されました。

めでたし、めでたし。

って、そうじゃないです。まだ続きます。

翌日の事です。

五反田氏は樹里が出勤するのを待っていました。

「今日は紹介したい人達がいるんだ、御徒町さん」

五反田氏は言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

そこに現れたのは、ドロントとヌートとキャビーです。

もちろん、五反田氏はそれを知りません。

「新たに我が家で働いてもらう事になった」

五反田氏はドロントを紹介します。

「麻耶の家庭教師の有栖川(ありすがわ)倫子(りんこ)さん」

「よろしく」

ドロントはニコッとしてお辞儀をします。

次にヌートを紹介します。

「世界的な名医の黒川真理沙さん」

「よろしく」

ヌートも笑顔でお辞儀をします。

最後にキャビーを紹介します。

「そして、見習いメイドの赤城はるなさんだ」

「よろしく」

ちょっと引きつった笑顔のキャビーです。

「御徒町さん、よろしく頼むよ」

五反田氏はそう言って出かけました。

樹里は三人を各自の部屋へと案内します。

玄関に向かいながら、樹里が言います。

「お久しぶりですね、ドロントさん」

ギクッとするドロント達です。

「な、何を言ってるんですか？　私達はそんな名前ではありませんよ」

ドロントが冷や汗を掻きながら言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

そして、八王子のドロントの隠れ家に踏み込んだ蘭達は、蛻の殻なのに仰天します。

「情報が漏れてる？」

蘭はそう呟きます。平井警部補は眉間に皺を寄せて考え込んでいます。

「この話、そんなに真剣勝負とは聞いていなかった」

思わず本音を漏らす平井警部補です。

結局、左京は出て来ないで終わるのでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、仲裁する

御徒町樹里は日本の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

先日、怪盗ドロントが五反田邸にやって来ました。

ドロントは五反田氏の一人娘の麻耶の家庭教師。

部下のヌートは五反田邸住み込みの医師。

同じく部下のキャビーは見習いメイド。

会うなり三人の変装を見破ったらしい樹里なのですが、ドロントの全力の否定であっさり追及をやめました。

そして、今日も庭掃除をする樹里です。

「御徒町さん」

警備員さんが声をかけます。

「おはようございます」

樹里は笑顔全開で挨拶します。

警備員さんはその笑顔に思わず顔を赤らめ、

「気になる事があります」

「りんごですか？」

樹里が尋ねます。警備員さんは項垂れて、

「そうじゃありません」

気を取り直して話を進めます。

「先日来た三人の女性なのですが、怪盗ドロント一味ではないですか？」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「三人の体格や声、様々な情報を元にして分析した結果、本人である確率が七十七％でした」

警備員さんは声をひそめて言います。

「おはようございます」

そこに噂の女性の一人である赤城はるなこと、キャビーが現れました。

彼女も樹里とお揃いのメイド服です。

居酒屋の店長が見たら、鼻血を垂らしそうです。

「樹里さん、お手伝いする事はありませんか？」

「はい、ありますよ、キャビーさん」

ギョッとする警備員さんとキャビーです。

「あはは、いい加減覚えてくださいよ、樹里さん。私は赤城はるなですってば」

「そうなんですか。申し訳ありません、キャビーさん」

項垂れるキャビー、キャビーを睨む警備員さんです。

「えっと、お手伝いする事は何でしょうか？」

キャビーは樹里を引き摺るようにして警備員さんから離れます。

「勘弁してくださいよ、樹里さん。私、怪盗とは関係ないんですから」

キャビーは小声で言いました。

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔全開です。

その頃、久しぶりに登場した杉下左京の事務所での出来事です。

「今日も依頼がないの？」

グウタラ所員の宮部ありさが言います。

「ない」

机に突っ伏したままで答える左京です。

すると突然、誰かが事務所に入って来ました。

「え？　樹里？」

突っ伏していたために目が良く見えない左京が呟きます。

「違うわよ、左京ちゃん。元婚約者の由里よん」

左京はその言葉にビクッとします。ありさは唖然としたままです。

「聞いてよ、左京ちゃん」

由里は左京ににじり寄ります。

「ちょ、お義母（かあ）さん！」

左京は慌てて由里を突き放しました。

「とにかく、かけてください。お話を伺いますので」

左京はソファに移ります。

「はいはい」

由里は左京の隣に座ります。

「近いです」

左京は由里の肩を掴んで押し戻します。

「照れ屋さんね、左京ちゃんてば」

妙にテンションが高い由里です。

「お義母さんも妊娠されてるんですから、そういう冗談は控えてくださいよ」

「わかったわよ」

口を尖らせて、向かいのソファに移動する由里です。

左京はチラッとありさを見てから、

「何があったんですか？」

「あいつが、浮気しそうなのよ」

由里は急に深刻な話題を振って来ました。左京はギクッとします。

「浮気」は、左京にもきつい言葉です。

（お、俺のは浮気じゃない。あれは事故だ）

先日の、キャバクラでのあかぎ恋（れん）とのキスを「事故扱い」する左京です。

「私が知らないうちに三人も新規でバイトを採用したのよ。それもみんな若い子ばかりで」

由里から見ると、ドロントも「若い子」のようです。

「その中の一人で、えーと、あかぎ何とかっていう子に、あいつが上せちゃって……」

由里はよよと泣き崩れますが、左京はそれどころではありません。

（あかぎ何とか？　まさか！？）

嫌な汗が噴き出す左京です。

「どうしたの、左京？　顔色悪いよ？」

ありさが心配そうな顔で言います。

「え、いや、そんな事はないよ、宮部君」

名字で呼ばれた事が今まで一度もないありさは、左京の動揺の程度を知りました。

「あいつの目を覚まして欲しいのよ、左京ちゃん」

由里はすがるような目で左京を見ました。

「わかりました。今晩、お店にお伺いします」

左京は意を決しました。

（店長の事もそうだが、俺の事も解決しないと）

彼は樹里のためにもアヤフヤはいけないと判断したのです。

一方、樹里は従妹の鶯谷翠（うぐいすみどり）からの電話を受けていました。

「樹里お姉ちゃん、今困ってるの。由里叔母さんと店長がギクシャクしちゃって」

「わかりました。今晩お店に行きます」

樹里は言いました。

「ありがとう、お姉ちゃん。二人を仲直りさせてね」

翠はそう言って電話を切りました。

そして、夜です。

昼間から暇だった左京は、日が落ちるとすぐに居酒屋に向かいます。

「どうしてお前が一緒なんだよ？」

勝手について来たありさを睨む左京です。

「いいじゃん、たまには。私も生中飲みたいのよ」

嬉しそうに言うありさです。

「飲み会じゃねえんだぞ！」

左京はムッとしました。

やがて二人は居酒屋に到着しました。

「こっちこっち」

由里が奥から呼びます。左京とありさは個室に通されました。

「じゃあ、取り敢えず生中二つ」

ありさがおしぼりで手を拭きながら言います。左京が窘(たしな)めようとすると、

「いいのよ、左京ちゃん。その方が。あいつには内緒だから、お客のフリして」

「そうですか」

左京は仕方なく席に着きます。

「ふう、あつう」

そう言いながら顔と首筋と腋(わき)までおしぼりで拭くありさを唖然として見る左京です。

「こちらへどうぞ」

すると、左京達の個室の前を翠が横切ります。ギクッとする左京です。

（樹里？）

その後から現れる樹里です。

（璃里さん？）

もう意味不明になっている左京です。

「あ、左京さん」

樹里が左京に気づきます。

「ありささんとデートですか？」

あっさり冗談に聞こえない事を言う樹里です。

「ち、違うよ。今日は由里さんに呼ばれてさ……」

左京は慌てて言い訳しますが、

「お母さんとデートなんですか？」

樹里が目を見開きます。

「だからデートから離れてくれ！」

左京は項垂れました。

「そうなんですか」

樹里は翠に促され、別の個室に行ったようです。

「はい、生中お二つです……」

そこに従業員の服を着たキャビーが現れ、左京に気づいてビクッとします。

「うん？」

左京がキャビーを見つめます。焦るキャビーです。

「あ、あの、何か？」

キャビーはどう言い訳をしようかと考え、尋ねます。

「ああ、君があかぎさんなの？」

左京はキャビーのネームプレートを見ていたようです。

「え？　あ、はい、そうですけど」

左京の言葉の意味が理解できないキャビーでしたが、どうやら正体を見破られたのではなさそうです。

「君、店長に何かされたの？」

いきなり核心に踏み込む左京です。キャビーは内心ホッとして、

「はい。セクハラ店長なんですう。困ってるんですう」

と言いました。

「なるほど。そうか、わかった。お兄さんに任せなさい」

左京が言うと、

「お兄さん？」

ありさとキャビーが見事にハモって突っ込みます。

左京は店長にこってり説教をするつもりです。

（店長の相手があかぎ恋じゃなくて良かった）

ホッとしている左京です。するとそこへ、入れ替りに由里がやって来ました。

「ごめーん、左京ちゃん。折角来てもらったのに、用すんじゃった」

「え？」

キョトンとする左京です。

「樹里があいつと話して、万事解決よん」

何故か最後にウインクする由里です。左京は唖然としました。

（樹里もその件で来ていたのか……）

しばらく項垂れる左京です。

そして、知らないうちにたくさん注文していたありさが、既に全部食べて逃亡したのに気づきました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、殺人事件に巻き込まれる　G県編（前編）

御徒町樹里は世界進出もしている大富豪の五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

五反田氏に連れられて、G県のT市に来ています。

ですから、樹里は黒のゆったりしたパンツスーツです。いつものメイド服ではありません。恐らく、マタニティ仕様です。

今日は、G県の家電量販店の買収が目的です。

「どうして私が同行するのですか？」

樹里は出発前に五反田氏に尋ねました。

「先方の最高責任者のご指名なのだよ。申し訳ないね」

五反田氏は呆れ気味に言いました。

「とんでもないです。光栄です」

樹里は笑顔全開で応じました。

やがて、二人の乗る新幹線はT駅に着きました。

相手先企業のCEO（セオではありません）の富田林（とんだばやし）氏が出迎えてくれました。

「遠いところをようこそ」

富田林氏が笑顔で言います。

「ここへ、クックックック」

どこかで鳥が鳴いたようです。

でも、樹里達は気にせずにホームから立ち去ります。

「樹里……」

実は、樹里が「浮気」をするのではないかととんでもない事を妄想した不甲斐ない夫の杉下左京がこっそりつけて来たのです。

仕事があまりにもないため、最近妄想が激しい左京です。

「ああ！」

左京は慌てて樹里達を追いかけます。

樹里達は駅前に乗りつけられたリムジンに乗り、行ってしまいます。

「わわ！」

左京は、推理ドラマのようにタクシーを拾おうとしますが、生憎（あいにく）タクシーはどこにもいません。

「ううう……」

項垂れる左京です。

そんな事は全然知らない樹里は、T市中心部からやや離れたところにある富田林氏の邸宅に着いていました。

「狭いところですが、お寛ぎください」

富田林氏は、謙遜のつもりで言いましたが、

「そうなんですか」

と樹里にあっさり流され、ピクンとします。

（くそう、五反田邸は東京ドーム三個分と聞いた。付き人に鼻で笑われたか）

妄想が左京並みの富田林氏です。

五反田氏と樹里は、応接間に通されました。

絶対王政の頃を思わせる大きくて豪勢なシャンデリアが高い天井から下がっています。

「こちらでお待ちください。すぐに書類をご用意致します」

五反田氏は白い革張りのソファに座ります。

「御徒町さんも座りなさい。今日は君が主役なのだから」

五反田氏が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じ、五反田氏の向かいに座ります。

富田林氏は、怖い事を考えていました。

（五反田の知恵袋は、あの女だという情報だ。あの女を亡き者にすれば、五反田グループは傾く）

富田林氏は、五反田グループとの合併に反対なのです。

取締役会で決定した事なので、仕方なく従っています。

富田林氏は、婿養子なので、妻の真実（まみ）に頭が上がらず、真実の言うがままなのです。

だから、今回の合併話を失敗させ、真実を失脚させるつもりです。

しかし、そうは問屋が卸さないのでした。古くてすみません。

五反田氏は、いつまで経っても富田林氏が戻って来ないので、

「どうしたのだ？」

と立ち上がり、彼の携帯に電話しました。しかし、電源が切られているようです。

「何のつもりだ？」

普段は冷静な五反田氏ですが、樹里まで連れて来させてのこの応対に我慢の限界のようです。

その時です。

ドアが勢いよく開かれ、富田林邸のメイドが飛び込んで来ました。

「旦那様が、旦那様が！」

血相を変えて叫ぶメイドを見て、五反田氏は、

「どうしたんだ？　何があったのかね？」

と尋ねますが、メイドは泣きじゃくり始めてしまい、どうしようもありません。

「こっちですね」

突然、樹里が動きます。

「御徒町さん？」

五反田氏はビックリして、樹里の後を追います。メイドは泣いたままです。

樹里が辿り着いたのは、奥にある富田林氏の書斎でした。

ドアは開けられたままです。密室ではありません。

「うお！」

五反田氏が中を覗くと、富田林氏が頭から血を流して死んでいました。

「あ、御徒町さん」

スイスイと部屋の中に入ってしまう樹里に驚き、五反田氏は止めようとしましたが、ダメでした。

「後頭部に一撃。でも、即死ではなかったようですね」

樹里が言います。富田林氏はメモ帳に何かを書き遺していたのです。

（いつもの御徒町さんじゃない）

五反田氏はドキッとしました。

「旦那様、警察に通報してください」

樹里が言いました。

「わかった」

五反田氏は慌てて携帯をスーツのポケットから取り出し、１１０番にかけました。

程なく、G県警から刑事と鑑識が到着し、富田林邸は騒然とします。

「貴方……」

夫の変わり果てた姿を見て、崩れ落ちるようにしゃがみ込む真実です。

「会長……」

雇い主の死を呆然として見る秘書の間一（はざまはじめ）。

「トンちゃん！」

そこに場違いなキンキラキンの派手な服装の若い女性が現れました。

「貴女は！」

真実がその女性を見て鬼の形相になります。

「よくもノコノコと！」

今にも掴みかからんばかりの真実を刑事の一人が止めます。

「こちらに来る予定だったと伺ったので、我々が呼びました」

「何ですって！？」

真実はまた女性を睨みます。

「三谷朋美（みたにともみ）さんですね？」

刑事の問いかけに、泣きながら頷く朋美です。

「あれ？」

鑑識の中の若いイケメン風の男の人が、樹里を見ます。

「何でしょう？」

この深刻な場面でも、笑顔全開の樹里です。

「もしかして、御徒町樹里さんですか？」

鑑識課員が尋ねます。

「そうです」

樹里は更に笑顔全開で応じます。殺人現場で不謹慎です。

「おい、箕輪、何してるんだ？」

上司らしき年配の鑑識課員に咎められ、

「あ、すみません」

とその若い鑑識課員は行ってしまいました。

「さてと」

刑事が咳払いをして話し始めます。

「富田林氏が、死の直前、書き遺した奇妙な言葉です。意味がわかる方、いらっしゃいますか？」

刑事が掲げてみせたメモ帳には、

「鏡の国でも同じ顔」

と殴り書きされていました。

「ダイビングメッセージですね」

突然現れた左京がボケをかまし、一同に白い目で見られます。樹里を除いて。

「左京さん！」

樹里がその日で一番の笑顔を見せました。

後編があるようです。すみません。

樹里ちゃん、殺人事件に巻き込まれる　G県編（後編）

御徒町樹里は、日本有数の大富豪の五反田六郎氏の邸のメイドです。

今回、樹里は五反田氏と共にG県の家電量販店の買収の話に訪れました。

相手方の企業のトップである富田林（とんだばやし）氏の希望です。

富田林氏は、樹里が五反田氏の知恵袋だと妄想し、樹里を亡き者にしようと企んでいました。

ところが、その富田林氏が自宅の書斎で殺されてしまったのです。

人を呪わば穴二つでしょうか？

G県警が到着して、騒然とする殺人現場に颯爽と現れたのは、樹里の不甲斐ない夫の杉下左京でした。

「誰だね、あんたは？」

刑事が尋ねます。左京はフッと笑って、

「私は先日、軽井沢の密室殺人事件を解決した杉下左京です」

と言いましたが、刑事は、

「おお！　その事件の担当だった田野倉君とは同期で、話は伺っています。いやあ、お会いできて光栄です」

と樹里と話をしています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じていますが、左京は全力で項垂れます。

「私は、G県警捜査一課の赤城です」

刑事は敬礼して言いました。「あかぎ」と聞き、ビクッとする左京です。

五反田氏はすっかり驚いています。

「それは犯人を示すダイビングメッセージですよ、赤城さん」

左京が何とか会話に割り込もうとします。

「それを言うなら、ダイイングメッセージですよ」

呆れ顔で訂正する赤城刑事です。

「細かい事は気にしないでください」

左京はガハハと笑って言います。白い目で左京を見る捜査員一同と五反田氏です。

「左京さんは、犯人がわかったのですか？」

樹里だけが尊敬の眼差しで尋ねます。左京は樹里を見て漫才師のノン〇タイルの気持ち悪い方も逃げ出すような笑みを浮かべ、

「もちろんさ、樹里」

今度は騒然とする捜査員一同です。

左京は赤城刑事が持っていた富田林氏のメモ帳を奪い取り、

「ここに書かれているのは、犯人の特徴です」

左京は次に富田林氏の関係者を見ます。

妻の富田林真実（とんだばやし まみ）。

秘書の間一（はざまはじめ）。

愛人と思われる三谷朋美（みたに ともみ）。

「犯人はこの三人の中にいます」

左京はどこかのヘボ探偵のように断言しました。

「何ですって！？　私が主人を殺したとでも言うのですか！」

真実が涙を流しながら怒鳴ります。

「失礼な。私は社長を尊敬していました。その社長を殺すはずがな

いじゃないですか！」

間も怒りを露（あらわ）にします。

「冗談じゃないわ。トンちゃんは奥さんと離婚して、私と結婚してくれるはずだったのよ！　そんな人を殺す訳がないでしょ！」

朋美は真実を睨みつけてから言いました。

「そんなはずないでしょう！　主人は私を愛していましたわ！」

真実が朋美に食って掛かります。

「まあまあ」

赤城刑事が迷惑そうに左京を見てから、二人を止めます。

「このメモの『鏡の国でも同じ顔』というのが、犯人に辿り着く手がかりなのです」

左京はドヤ顔で言いますが、赤城刑事は、

「どんな風にですか？」

と全く信用していない顔で訊きます。

「鏡は、顔を映すと左右が逆になります。そして！」

左京は鑑識課のイケメン課員からスケッチブックを奪い取り、それに何かを書きます。

「お三方の名前を書いてみれば、誰が犯人か、一目瞭然となるのです」

と一同に見せます。

「意味がわかりませんが？」

赤城刑事が言いました。左京は肩を竦めて、

「よく見てください。お三方の名前で、左右対称の名前があるでしょう。鏡に映しても同じに見える名前が！」

と言い放ちました。

「三人共、鏡に映しても同じように見えますが？」

イケメン鑑識課員が言いました。

「え？」

ギクッとする左京です。そして、改めて三人の名前を見ます。

そして、まるで四六（しろく）の蝦蟇（がま）のように汗を垂らします。

（何て事だ！　三人とも、左右対称の名前だ！）

左京は焦りました。しかし、テンパってしまって何も思いつきません。

「犯人は貴方です、間さん」

突然笑顔全開で樹里が言いました。間はそれを聞いて笑い出します。

「はあ？　私が犯人ですって？　どうしてですか？」

樹里は左京からメモ帳を受け取ると、

「このメモ帳は、富田林さんがいつも持っていたもののようです。そして、何か思いつくと書きとめていました。その証拠に、何枚も破り取った痕があります」

とリングに残るメモの切れ端を見せました。

「これは、ダイイングメッセージではありません。富田林さんが思いついて書いた言葉です」

樹里は相変わらず笑顔全開で言います。間は樹里をせせら笑い、

「だから、それがどうして私が犯人だという事になるんですか？」

樹里はメモを赤城刑事に返して、

「奥さんと朋美さんが犯人であれば、このメモの小細工をする事ができないからです。このメモは、常に富田林さんが持っている鞄に入っていたのですから。それができるのは、富田林さんといつも行動を共にしていた貴方だけです」

間は衝撃を受けました。

「ううう……」

彼はガックリと膝を着きました。

「すぐにこの男の所持品を調べろ」

赤城刑事が鑑識課員に指示しました。

イケメン課員達が一斉に動き出します。

「どうしてこんな事を？」

赤城刑事が間を立ち上がらせて尋ねます。

「そのメモに『朋美を秘書に』って書かれていたんだ。俺はお払い箱にされる予定だったんだよ！」

「それだけの事で社長を殺したのか！？」

赤城刑事が間を睨みつけます。

「違うわ、刑事さん。そいつは会社の金を横領してたのよ。それをトンちゃんが知って、クビにするつもりだったの。でも、そのメモはすぐに破り捨てたはずなのに」

朋美が間を睨むと、間は俯きました。

「社長は筆圧が強いから、下の紙に写ってたんだ。だからわかった」

「貴方……」

真実は床に泣き伏してしまいました。

殺された夫が裏切っていた事を知り、彼女は混乱しています。

「連行しろ」

赤城刑事が部下に指示します。間は項垂れたまま、刑事達に連れて行かれました。

真実と朋美も、事情聴取のために部屋を出て行きました。

「さすがですね、御徒町さん。名推理でした」

赤城刑事が賞賛します。五反田氏も、

「いやあ、大したものだ、御徒町さん。名探偵だね」

と絶賛です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

夫の左京は悲惨全開です。何しに来たのか、わかりません。

「それにしても、どうして間が犯人だとわかったのですか?」

赤城刑事が尋ねます。すると樹里は、

「どうしてでしょう?」

と言いました。唖然とする赤城刑事と五反田氏です。

まもなく、樹里達は富田林邸を去る事になりました。

するとそこにイケメン鑑識課員が来ます。

「樹里さん、サインください。ウチの妹が貴女の大ファンなんです」

「そうなんですか」

樹里は快くサインをしますが、左京は気が気ではありません。

(こいつ、亀島じゃないだろうな?)

亀島が五反田邸に現れたのを知ってから、左京は樹里の事が心配で堪らないのです。

「ありがとうございました、樹里さん」

イケメン課員は嬉しそうです。

「おーい、箕輪、早くしろーい」

ベテラン風の鑑識課員が呼びます。

「はい、宮川さん」

イケメン課員は樹里に会釈して立ち去りました。

そして、五反田氏は、左京の行動に対してお説教し、もっとしっかりするように言いました。

左京は地面に埋もれてしまいそうなくらい恐縮していました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、あの美少女とコラボする？

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

樹里は五反田氏と共にG県を訪れ、偶然にも出くわした殺人事件を解決しました。

その時現場に来ていたG県警の鑑識課員の一人が、樹里にサインをもらいました。

「妹が貴女の大ファンなんです」

その鑑識課員は若くてイケメンだったので、一緒にいた夫の杉下左京は酷く動揺しました。

（あの男、妹にかこつけて樹里に近づくつもりじゃないだろうな？）

そんな時までヘボ探偵の左京です。

「誰がヘボ探偵だ！」

左京は地の文に切れました。

「折角だから、二人で観光でもして行きなさい」

五反田氏の粋な計らいで、左京と樹里はG県観光をする事になりました。

しかも、五反田氏は左京に五万円渡したのです。

「君の奥さんのお陰で私は心置きなく仕事ができる。これで美味しいものを食べて、服でも買ってあげなさい」

五反田氏の優しさに左京は泣いてしまいました。

「ありがとうございます」

しかも、五反田氏は、お金を渡した事を樹里には内緒にするようにと言ってくれました。

（一生ついて行きます）

左京は心の中で思いました。

一生ついて来られても、五反田氏も迷惑でしょうけど。

「行こうか、樹里」

「はい、左京さん」

二人はT駅でR毛線に乗り換え、県庁所在地のM市に行きました。

「懐かしいな、この風景」

左京は、M署の副署長時代を思い出しました。

そして、樹里が妹達と警察の寮に来た事も思い出しました。

危うく鼻血を垂らしそうです。（樹里達がお風呂に入った事も思い出したようです）

二人は新M駅で降り、タクシーでG県名物の焼きまんじゅうの名店に行きました。

「いい匂いだなあ」

左京は妊娠している樹里をエスコートして、お店に入ります。

するとそこには中学生らしき子供達がいました。

「おお！」

そのうちの男子達が、樹里を見て鼻の下を伸ばします。

（どうだ！）

何故かドヤ顔の左京です。

「江原耕司君、後でお話があります」

彼女らしい女の子が、鼻の下が一番伸びている男の子に言いました。

「可愛いですね、あの子達」

樹里が言いました。

「あの男共、樹里を見てヘラヘラしてたんだぞ」

左京は呆れ気味に言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

「い！」

すると何故かさっき男の子に怒っていた女の子が叫び声をあげました。

「変な子だな」

左京は焼きまんじゅうにかぶりつきながら言います。その時です。

「おお！」

お店に「ボン、キュッ、ボン」と音がしそうなスタイルの女性が入って来ました。

黒のスカートスーツを着て、黒縁眼鏡をかけていて、利発そうな顔をしています。

「あ！」

鼻の下を伸ばしかけた左京はハッとして樹里を見ます。

「はい、左京さん」

樹里は焼きまんじゅうを取り分けていたようで、気づいていません。

「お、おう」

樹里に「アーン」をしてもらい、左京は至福の一時です。

「あの人、子供みたい」

左京は、中学生達がヒソヒソ話しながら、自分を笑っているのに気づいていません。

「遅れちゃったな」

そこに、何とあのイケメン鑑識課員とベテラン鑑識課員が現れました。

「遅いよ、お兄ちゃん！　私達、お金持ってないんだからね」

さっきの変な女の子が言います。

「え？」

左京は女の子の言葉にハッとしました。

（そうか、あの変な子が、あの鑑識課員の妹なのか）

「あ！」

すると、イケメン鑑識課員も樹里達に気づきました。

「奇遇ですね、御徒町さん。お父さんとご旅行ですか？」

イケメン課員の心ない一言が左京を切れさせます。

「誰がお父さんだ！」

すると樹里は笑顔全開で、

「いえ、左京さんは夫です」

「夫？」

イケメン課員は一瞬、眩暈（めまい）を起こしたようです。しかし、すぐに立ち直り、

「おい、まどか、この女性がお前の大好きな御徒町樹里さんだぞ」

と言いました。

「ええ！？」

まどかと呼ばれた女の子ばかりでなく、そこにいた中学生全員が驚愕したようです。

そして、しばらく樹里はサイン攻めです。

実は、樹里はネットユーザーには超有名なのです。本人は全く知

りませんが。

しかし、どうした事か、イケメン課員の妹は、気絶してしまいました。

「すみません、好き過ぎて気を失ったようです」

イケメン課員が頭を掻きながら言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「樹里さん、オーラが凄いですね。私のお師匠様よりレベルが上かも知れません」

黒縁眼鏡の女性が言いました。

「そうなんですか」

樹里はその女性にも笑顔全開です。

「今度、お手合わせをお願いします」

黒縁眼鏡の女性が言いました。

「いいですよ」

樹里は何の事なのかよくわからないまま、返事をしました。

「是非、立ち合わせてください」

イケメン課員以下、そこにいた男子中学生が真剣な顔で懇願します。

「あんた達、いい加減にしなさいよ！」

気絶したイケメン課員の妹を看ていた女子が呆れ顔で言いました。

ベテラン課員は、気絶している子をジッと見ています。ちょっと危ない目です。

「全く、男って奴は……」

もう一人の女の子も軽蔑の眼差しで男子を見ています。

樹里は眼鏡の女性から名刺をもらい、お店を出ました。

「小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんか」

思わず覗き込んで確認してしまう左京です。

「左京さん」

樹里が言うと、

「はい！」

左京はビクッとして直立不動になります。

「焼きまんじゅう、また食べに来たいですね。今度は、私達の子供と一緒に」

樹里の眩しいくらいの笑顔に、左京は自分の邪(よこしま)さを反省しました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、猫になる？（前書き）

日頃お世話になっているりきてっくす先生に捧げます。

樹里ちゃん、猫になる?

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

でも、決してCDデビューはしません。

CDは出しませんが、時々おかしな現象に巻き込まれます。

樹里はいつものように狭苦しい杉下左京のアパートの部屋で目覚めます。

不甲斐ない夫の左京は、まだ惰眠(だみん)を貪(むさぼ)っています。

樹里はそんな左京を起こしたりせず、顔を洗うためにお風呂場に行きました。

シリーズ始まって以来です。

左京の部屋には風呂場があるのがわかりました。

樹里は鏡に映る自分の姿を見て驚いてしまいました。

何と、猫の耳が頭に生えていたのです。

「どうしたのでしょう?」

樹里は不思議に思いましたが、そのまま顔を洗って部屋に戻ります。

そして、パジャマを脱ごうとしてまた驚きます。

お尻から尻尾が生えているのです。

「どうしたのでしょう?」

一瞬、ビックリする樹里ですが、朝食の支度があるのであまり驚いていられません。

服を着替えるのに困ると思いましたが、何故か尻尾は全然支障なく、着替えができました。

それも非常に不思議です。

樹里は着替え終わると、料理を始めます。

「ふああ」

不甲斐ない夫が目を覚まします。

非貢献度から言えば、左京は樹里の十分の一の睡眠しかとってはいけない計算になります。

「朝から悪口言われてる気がする」

左京は頭をボリボリ掻きむしりながら、風呂場に行こうとします。

「うん？」

その時彼は、樹里のお尻から尻尾が生えているのに気づきました。

（朝からコスプレかよ）

樹里がふざけていると思った左京は、何も言わずに顔を洗いに行き、戻って来ました。

「ブッ！」

そして、樹里の頭に猫耳が生えているのに気づき、吹き出します。

「おい、樹里、どうしたんだ、朝からコスプレして？」

左京は言いました。

「そうにゃんですか」

すると樹里が猫語のような言葉を発します。

「わかったよ。もういいから。普通に話してくれ」

左京はコスプレに付き合う気はないようです。

「左京さん、朝食の支度ができましたにゃん」

樹里は笑顔全開で言いました。

「だから、もういいって。ほら、耳も尻尾も取れって」

左京は尻尾を掴んで引っ張りました。

「痛いですにゃん、左京さん」

樹里が涙ぐんで言ったので、左京は唖然としました。

「えええ!?」

左京はパニックになりそうです。

（落ち着け、俺。これは多分夢だ。もう一度寝よう）

そのリアクションは以前使ったので、止めて欲しいと思う作者です。

「朝起きたら、耳と尻尾が生えていましたにゃん」

樹里が嬉しそうに言ったので、左京は項垂れました。

「いや、樹里、夢だよ、これは。二人でもう一度寝よう」

左京は無理矢理樹里を布団に引きずり込もうとします。

「ちょっと待て！　その描写の仕方、俺が変質者みたいだぞ！」

地の文に文句を言う左京です。

「夢じゃないですにゃん、左京さん。本当に耳と尻尾が生えたのですにゃん」

樹里が左京に言います。左京は改めて樹里を見ます。

（か、可愛い……）

只でさえ相当可愛い樹里に猫耳とは、「鬼に金棒」以来の無敵マ○オ状態です。

「あ」

左京は鼻血を垂らしました。

「大丈夫ですかにゃん？」

樹里が小首を傾げて尋ねます。それを見て、左京は気絶してしまいました。

「か、可愛過ぎる……」

「左京さん、しっかりしてくださいにゃん」

猫耳をピクピクさせて左京を揺り動かす樹里です。尻尾もヒラヒラ動いています。

「げ」

樹里に揺り動かされて意識を取り戻した左京ですが、ピクピクする猫耳とヒラヒラ動く尻尾を見て、また気を失ってしまいました。

エンドレスになりそうです。

たまにはこんな話もいいものです。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、猫になる？（後書き）

ありがとうございました。

樹里ちゃん、今度こそ推理作家に感想を聞かれる

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

邸には、樹里の他に、家庭教師の有栖川倫子（ありすがわ　りんこ）、住み込みの医師の黒川真理沙（くろかわ　まりさ）、見習いメイドの赤城はるながいます。

「おはようございます」

邸のロビーで、倫子が笑顔で樹里に挨拶します。

「おはようございます、ドロントさん」

樹里も笑顔全開で応じます。

「で、ですから、何度も申し上げていますとおり、私はドロントではありませんから」

汗まみれで全力否定の倫子です。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。倫子は汗を拭きながら、五反田氏の娘の麻耶の部屋に行きました。

麻耶の通うインターナショナルスクールは七月から夏休みで、麻耶は夏期講習を受けているのです。

でも、実は泥棒の家庭教師に勉強を教えてもらって大丈夫なのでしょうか？

「うるさいわね！」

地の文に切れる実は泥棒の家庭教師です。

「ううう！」

倫子はイライラしながら廊下を歩いて行きました。

「樹里さーん」

そこに見習いメイドのはるなが走って来ました。

「どうしたのですか、キャビーさん？」

樹里が笑顔で尋ねます。はるなはそのまますっ転び、素早く起き上がると、

「私はキャビーという名前ではありません！　赤城はるなです！」

と同じく全力否定です。

「そうなんですか」

樹里はそれにも関わらず、笑顔全開です。

「旦那様のお部屋のお掃除、終わりました。次は何を致しましょう？」

嫌な汗を拭いながら尋ねるはるなです。

「おかしいですね。旦那様のお部屋は鍵がかけられていたのですが？」

樹里が言いました。もっと嫌な汗が出るはるなです。

（しまったあ、つい悪い癖が出て、鍵を開けて入っちゃったあ！）

泥棒の習性が抜けないはるなです。

「では、次は奥様と麻耶様のお部屋をお掃除してください」

樹里は何事もなかったかのように話を進めました。

唖然とするはるなです。

「は、はい」

ようやく返事をし、はるなはその場を去りました。

（樹里ちゃんと話していると、寿命が縮んじゃう）

実は泥棒のはるなは思いました。

樹里は駆け去るはるなを見てから、玄関へと歩き出します。

その時、玄関の呼び鈴が鳴りました。

樹里は素早く扉に近づき、開きます。

「いらっしゃいませ、大村様」

樹里は深々とお辞儀をしました。

扉の向こうにいたのは、上から目線の推理作家、大村美紗でした。

「ご機嫌よう、樹里さん。どうして私だとわかりましたの？」

上から目線で尋ねる美紗です。でも、樹里は笑顔全開で、

「タイトルでわかりました」

と掟破りの答えを言いました。

「意味がわからないわ」

美紗はムッとしました。

「申し訳ありません」

樹里はまた深々と頭を下げました。そして、美紗を応接室に通します。

「樹里さん、私の差し上げた小説、読んでいただけました？」

ソファに座りながら、またしても上から目線で尋ねる美紗です。

「はい。大変ワクワクする小説でした。読み終わって、とても感動

いたしました」

非常に優等生的な感想を述べる樹里です。

「そう。それは嬉しいわ。私も差し上げた甲斐がありました」

美紗は悪い魔女のような顔で微笑みました。

「何だか悪口を言われているような気がするわね」

美紗は天井を見渡して呟きます。そして、

「では、犯人はわかりましたか？」

と今度はバカにしたような目で言います。

（こんなボンヤリした娘に見破られるような犯人ではなくてよ）

美紗は更に悪い魔女のようにニヤリとします。

「はい、わかりました」

「え？」

ビクッとする美紗です。

（そんなバカな！　作家仲間にも、編集部の人間にも、犯人を見破った人はいなかったのに、こんな小娘にィ！？）

血圧が一気に上昇して、倒れそうになる美紗です。彼女は「社交

辞令」を知らないようです。

「登場人物の一覧を見て、すぐにわかりました」

樹里が言います。美紗は呆れて、

「そんなはずないでしょ？　一覧を見てわかるだなんて……。嘘はいけないわ、樹里さん」

すると樹里は、美紗も知らなかった真実を言いました。

「大村様は、登場人物一覧の四番目の人を犯人にする傾向があります。ですから、わかりました」

「……」

全身から嫌な汗が噴き出す人ＰＡＲＴ３です。

（私、そんな癖があったの？　知らなかったわ）

ショックで美紗はソファの上に倒れてしまいました。

樹里はそれを見てすぐに部屋の隅にある電話に駆け寄り、黒川真理沙に連絡します。

「ヌートさん、大村美紗様が倒れられました。至急応接室に来てください」

真理沙が何か言っていましたが、樹里は通話を切ってしまいました。

「しっかりなさってください、大村様」

樹里は美紗のそばに跪き、声をかけました。

「ううう……」

美紗は意識を取り戻しました。

「大村様」

樹里がホッとして言います。すると美紗は、

「樹里さん、どうして私にそんな癖があると気づいたの？」

と尋ねました。樹里は微笑んで、

「なぎささんに教えてもらいました」

「な、なぎさ！？」

美紗の血圧が急上昇します。

「ひいい！」

美紗は白目を剥き、また気を失いました。

そこへ真理沙が到着しました。

「お願いします、ヌートさん」

樹里が言いました。

「私は黒川真理沙ですから」

真理沙はそう言ってから美紗を診察しました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

（なぎさに私の癖を見破られるなんて……）

美紗は気絶しながらも、その事を悔しがっていました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、またしても左京に浮気される？

御徒町樹里は日本有数の大富豪で、世界進出も目覚ましい五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

全然目立たなかったお腹も、少し食べ過ぎのりきて〇くす先生くらいになって来ました。

「御徒町さん、だんだん大きくなって来ましたね、お腹」

邸の警備員さん達も樹里の赤ちゃんに会える日を楽しみにしているようです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「それより」

警備員さんの中の一人が小声で樹里に言います。

「何ですか？」

樹里はよく聞こえなかったので、ズイと警備員さんに顔を近づけました。

「おお！」

樹里の可愛い顔が間近に迫ったので、危うく鼻血を垂らしそうに

なる警備員さんです。

「あの家庭教師と医者とメイド見習い、やっぱりドロント一味ではないですか？　この前の夜も、揃って出かけていましたよ」

「そうなんですか」

樹里は現在定時の六時になると帰宅しているので、夜の五反田邸の様子は知りません。

「あの人達は悪い人ではありませんよ」

樹里は何も根拠がないと思われるのにそう言い切りました。

「そうなんですか」

樹里のウルウル瞳とツヤツヤ唇についつい納得の警備員さんです。

その頃、樹里の不甲斐ない夫である杉下左京は、元同僚の加藤真澄警部の訪問を受けていました。

「頼む、杉下、もう一回だけ付き合ってくれ！」

左京の前で土下座している加藤警部です。

「あのなあ……」

しかし、左京は呆れ顔です。

「聞いてあげたら、左京。報酬ももらえるんでしょ？」

グウタラ所員の宮部ありさが無責任発言です。

「宮部もこう言ってくれてるんだ、頼むよ」

加藤警部は涙ぐんでいます。女子なら可愛いのですが、ムサいおっさんの涙目は気持ち悪いだけです。

「俺はもう、樹里に『キャバクラには一生行かない』って誓ったんだ。いくら頼まれてもダメだ」

左京は加藤警部に背を向けました。

「いや、キャバクラには行かなくていいんだ。その上、報酬は二十万円にするから」

思わず振り返る左京です。そして、

「今すぐよこせ。ウチには手癖の悪い奴がいるんだ」

とありさを見ます。ありさはソッポを向きました。

「わかった。頼みを聞いてくれるなら、今渡そう」

加藤警部はスーツの内ポケットから札束を出し、左京に渡します。

左京は念のため数を数えてから、

「で、どうすればいいんだ？」

加藤警部は立ち上がり、

「あかぎ恋（れん）ちゃんとデートして欲しいんだ」

「はあ？」

左京には意味がわかりません。

「新しいプレーなの？」

ありさが尋ねました。加藤警部はありさを見て、

「そうじゃない。左京とデートする事が、俺と恋ちゃんが付き合う第一条件なんだ」

「ええ！？」

左京とありさは思わずハモって驚きました。

（絶対騙されてるよ、こいつ）

左京とありさは加藤警部を哀れみました。

（しかし、それにしても酷い女だ。きっちり説教してやろう）

左京は加藤警部のためにも、あかぎ恋と話をしようと思いました。

そして、左京はその日アパートに帰ると、樹里に加藤警部の事を話しました。

「左京さんがその人とデートをするのですか？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。

「あ、ああ」

左京は胸を抉（えぐ）られるようです。

（もしかして、樹里は本当は怒っているのではないだろうか？）

心配になった左京は樹里に尋ねます。

「仕事とは言え、他の女性とデートするのは心苦しい。樹里はいいのか、俺が他の女性とデートしても？」

「嫌です。でも、いいですよ」

樹里は笑顔全開で言いました。

「え？」

一瞬訳がわからなくなる左京です。

「お仕事なのですし、加藤さんのためなのですよね？」

樹里の言葉に左京は泣いてしまいます。

「すまない、樹里。金に目が眩んだ俺を許してくれ」

左京は樹里を抱きしめました。

「左京さん、苦しいです」

樹里が言いました。

「ああ、すまん。妊娠しているんだったな」

左京は慌てて樹里から離れました。

「あかぎ恋さんとなら、いいですよ。でも、ありささんとなら、許しません」

樹里が笑顔で妙な事を言ったので、左京は混乱しました。

（どういう意味だ？　恋さんより、ありさの方をライバル視してるって事？）

謎が深まる御徒町一族です。

そして、翌日。左京と恋は、東京フレンドランドでデートです。

（ああ。樹里との思い出の地が……）

何とも複雑な思いの左京です。

（しかし、今日はこの女を説教するんだ。今はその事に集中しよう）

それでも、胸の谷間がくっきりで、太腿（ふともも）ムチムチのミニスカート姿の恋を見て、

（お説教はデートが終わったらしよう）

と思ってしまうダメ左京です。

「お待たせえ、左京さん。恋、頑張ってお洒落しちゃった。テヘ」

小首を傾げる恋にドキッとする左京です。

二人は早速乗り物に乗ります。

ジェットコースター、メリーゴーランド、コーヒーカップ、観覧車。

いけないと思いながらも、楽しくなってしまう左京です。

寄りそう恋の胸が左京の腕に当たります。

「……」

鼻血を堪え、左京は次々にアトラクションを楽しみました。

「楽しかった、左京さん」

カフェテラスでコーヒーブレイクです。左京は、一緒に楽しんで

いるうちに、恋の純真さに気づき、説教をするのを躊躇っていましたが、それではあまりに加藤警部が可哀想だと思い、切り出します。

「恋さん、話があるんだ」

「え？　なになに？」

瞳をキラキラさせて左京を見つめる恋です。左京は言えなくなりそうでしたが、

「加藤を弄（もてあそ）ぶのはやめてくれないか」

と思い切って言いました。

「え？　どういう事？」

恋は笑顔で尋ねます。左京は恋を真っすぐ見て、

「加藤に気がないのなら、そう言ってやってくれ。そうでないと、あいつが可哀想だ」

すると、恋の顔から笑顔が消えます。

「さすが名探偵ね、左京さん」

恋は真顔で左京を見ました。

「私、加藤さんには全く興味がないの。あの人に私を諦めて欲しいから、こうしているの」

「え？」

ちょっと様子が想定と違って来た左京は、ギョッとしました。

「私の秘密、教えてあげる」

恋が立ち上がり、左京に近づきます。

「何？」

恋は左京に顔を近づけて、

「ほら、ここ」

と喉を見せました。

「ええ！？」

左京は髪の毛が全部白くなりそうなくらい驚きました。

恋には、立派な「喉仏（のどぼとけ）」があったのです。

「……」

そして同時に、以前恋にキスされた事を思い出し、嫌な汗が出る左京です。

「私、男なの。お店にも内緒で働いてるの。だから、加藤さんの思いには応えられないの」

左京はあまりの衝撃に何も言えません。

「でも、加藤さんがあまりにいい人なので、どうしても言えない…。だから、左京さんに言って欲しいの。私の事を諦めなさいって」

恋は泣いていました。左京もウルウルして来ます。

「あいつ、この衝撃に堪えられるかな？」

左京はやっとそれだけ言いました。

「そうね。それも心配。でも、今のままの方が、ずっと良くないと思う」

恋は溢れる涙を拭いながら言いました。

「そうだな。わかった。俺に任せてくれ、恋ちゃん」

「ありがとう、左京さん」

恋は左京に抱きつきました。

男だと知っているのに、何だかドキドキしてしまう左京です。

（樹里は、恋ちゃんが男だって見抜いていたのか？）

左京は苦笑いしました。ますます侮れない御徒町一族です。

左京は恋と笑顔で別れ、その足で加藤警部が待つ焼き肉店に行きました。

「どうだった、杉下？」

加藤警部は緊張した面持ちで尋ねました。もう何皿も焼き肉を平らげたようです。

「恋ちゃん、大喜びだったよ」

左京は苦笑いして言います。加藤警部はホッとした表情で、

「そうか。良かった」

と呟きました。左京は居住まいを正し、加藤警部を見ます。

「どうした、杉下？」

加藤警部は真顔の左京を見てキョトンとします。

「落ち着いて聞いてくれ」

「どうしたんだよ？」

左京の様子が変なので、少し不安になる加藤警部です。

「実は、恋ちゃんは男なんだ。店にも内緒にして働いているそうだ」

「え？」

加藤警部は目を見開きます。

「だから、諦めてくれと言われた。お前の思いに応える事はできないって」

「嘘だ」

加藤警部は立ち上がります。

（殴られる？）

左京はギクッとしました。

「嘘だーッ！」

加藤警部はそのまま店を飛び出してしまいました。

「加藤！」

左京はびっくりして加藤警部を追いかけようとしました。

「全部で二万円になります」

行く手を阻んだ店の主人が、伝票を突きつけます。

「何ーッ！？」

左京は仰天しました。

そして、樹里に電話し、お金を持って来てもらうという悲惨な結

末を迎えたのでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、久しぶりにドロントと対決する？

御徒町樹里は世界的な大富豪になりつつある五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

五反田邸には、樹里の他に家庭教師の有栖川倫子（ありすがわ　りんこ）、住み込みの医師の黒川真理沙（くろかわ　まりさ）、見習いメイドの赤城はるながいます。

警備員さん達は、倫子達が世界的大泥棒のドロント一味ではないかと疑っていますが、樹里はそうは思っていないようです。

「おはようございます、樹里さん」

倫子が五反田氏の一人娘の麻耶と庭を散歩していて、掃除をしている樹里に挨拶します。

「おはよう、樹里さん」

麻耶も笑顔で挨拶します。

「おはようございます、ドロントさん、お嬢様」

樹里が笑顔全開で挨拶をすると、

「樹里さん！」

倫子が仰天して樹里に近づき、引き摺るようにして麻耶から離れます。

「樹里さん、私はドロントではありません。有栖川倫子です。覚えてくださいよ」

倫子は必死の形相で懇願しました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「どうしたんですか、有栖川先生？」

麻耶がキョトンとして言います。

「ああ、何でもありません。では、お部屋に戻ってお勉強しましょう」

「はい」

倫子は汗を拭きながら、麻耶を伴って去りました。

「樹里さん、お庭の掃除なら私がします。無理しないでくださいね」

見習いメイドの赤城はるなが来ました。

「ありがとうございます、キャビーさん」

樹里がそう言うと、はるなはスッテンと転びました。

「樹里さん、私は赤城はるなです！　キャビーなんていうヘンテコな名前じゃありません！」

はるなはビュンと跳ね起きて言いました。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

「お庭の掃除は終わりましたので、お部屋の掃除をしてください、キャ……」

「はるなです！」

樹里の言葉を遮るようにはるなが言いました。肩で息をしていて、酷く疲れているようです。

「そうなんですか」

樹里ははるなを連れて、邸の中に戻ります。

「外は暑いですから、私がやります。樹里さんは指示するだけで、仕事はセーブしてください」

はるなが言いました。すると樹里は、

「ありがとうございます、キャ……」

「はるなです！」

はるなは涙ぐんで樹里に言います。樹里はそれでも更に笑顔全開で、

「そうなんですか」

と言いました。項垂れるはるなです。

「あら？」

樹里は廊下に白い封筒が落ちているのに気づきます。

「げ」

思わず声が出るはるなです。

（それ、首領が書いた予告状だ。こんなところに落として！）

「ドロントさんからのようですよ、キャ……」

「だから私ははるなです！」

はるなは泣きそうです。

樹里からの連絡で、夫の杉下左京と姉の竹之内璃里がやって来ました。

左京と璃里は玄関のロビーで樹里から予告状を受け取りました。

ドロントの予告状の内容は、

「明日午後十一時に東京ス〇イツリーの最上階から完成記念の碑をいただきます」

と書かれていました。

「意味がわからん。そんなものを盗んでどうするつもりだ？」

左京は腕組みして首を傾げます。すると璃里が、

「きっと、ネットオークションで売るつもりでしょう。マニアなら高値で買うでしょうから」

「でも、そんな事をしたらすぐに足がつきますよ」

左京が珍しく鋭い突っ込みです。

「ドロントほどの大物なら、その辺も考えているでしょうね」

璃里はあっさりと左京の突っ込みをいなしました。

「なるほど」

グウタラ所員の宮部ありさが言ったのなら激怒している左京ですが、いろいろとお世話になったり、秘密を知られている璃里には何も言い返しません。ヘタレです。

「うるせえ！」

地の文に切れる左京です。

「遅くなりました」

そこへ警視庁ドロント特捜班の神戸蘭（かんべらん）警部が来ました。もちろん、エリートイケメン新人の平井拓司警部補も一緒です。

「何であいつらが来たんですか？」

左京が小声で璃里に尋ねます。

「警備員さんが知らせたようです。それに」

璃里は左京をロビーの隅に連れて行きます。

左京は何故かドキドキしてしまいました。

「この邸にいる三人の女性が、ドロント一味の可能性があるんです」

「え？」

左京は思わず樹里の隣に立っているはるなを見そうになりますが、

「見てはいけません」

と璃里に顔を戻されました。またしてもドキッとする左京です。

「あれえ、樹里さん、お姉さんと旦那さんが怪しい事してますよお」

はるなが左京達の行動に気づいて樹里に言います。

「そうなんですか」

樹里はそう言われても全く動じる事なく、笑顔全開です。

そんな事を言われているとは夢にも思っていない左京は真顔です。

「だとすれば、ここで見張っていれば、ドロント達を捕まえられるという事ですね」

「そういう事です」

璃里は樹里と寸分違わぬ笑顔で言いました。またしてもドキドキしてしまう左京です。

（璃里さんて、樹里と違って色気があるんだよな）

どうしようもない事を考えているバカ夫（おっと）です。

蘭達も警備員さんからの情報で、有栖川倫子達を疑っています。

「あの女が多分ドロントね」

蘭は麻耶と共に現れた倫子を見て呟きます。

「では、あの女医がヌートですか？」

麻耶の後ろに立つ黒川真理沙を見て、若干頬を赤くしながら平井警部補が呟きます。

「平井君、何だか嬉しそうね」

蘭は平井警部補のちょっとした変化も見逃しません。

「あ、いえ、その、えーと……」

平井警部補は、実は「女医もの」のHなビデオのマニアなのでした。

ですから、別に黒川真理沙に気がある訳ではありません。

（どうしよう？）

有栖川倫子こと、怪盗ドロントは焦っていました。

（まだ計画途中なのよ、ス○イツリーの仕事は。まさか御徒町樹里に拾われるなんて……）

「どうしたんですか、先生？　汗がすごいですよ」

心配そうに自分を見上げている麻耶に気づき、

「いえ、別に何でもないのよ。心配しないで、麻耶さん」

とドロントは言いました。

（この子を裏切る事になるのか……）

「首領、どうするのですか？」

真理沙が小声で尋ねます。

「計画は中止よ。しばらく大人しくしていましょう」

「わかりました」

真理沙はそのまま倫子から離れます。

「やっぱり怪しい」

蘭は倫子と真理沙の様子を目だけで見ていました。

そして、予告の日の夜、ドロント達は姿を現しませんでした。

「全く、何なのよ！」

ス〇イツリー付近で張り込んでいた蘭はプリプリしています。

「無駄足でしたね」

平井警部補は、機嫌が悪い蘭がしがみついて離れないので、困っています。

(振り解いたら、怒られそうだしなあ)

途方に暮れる平井警部補です。

(帰ったら、女医もの観て気分転換だ)

結構スケベな平井警部補です。

左京と璃里は五反田邸の近くで、彼女達が動くのを待っていたのですが、三人は邸の中から出て来ませんでした。

「思った通りでしたね。彼女達は私達に気づかれたと思って、計画を中止したのでしょう」

帰りの車の助手席で璃里が言いました。

「かも知れませんね。それにしても、五反田氏は気づいていないのでしょうか?」

左京は璃里をチラッと見て言います。

「さあ。あの方がそれほど鈍感とは思えません」

「そうですね」

暗い車内で見る璃里にまたドキドキする左京です。

(樹里、すまん)

心の中で詫びましたが、不甲斐ない夫なのは変わりありません。

樹里ちゃん、なぎさとお茶するＰＡＲＴ２

御徒町樹里は日本の大企業グループを担う五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

最近は、庭掃除や部屋の掃除は、見習いメイドの赤城はるながこなしてくれるので、助かっています。

「樹里さん、庭掃除終わりました」

樹里がキッチンで洗い物をしていると、はるながやって来て報告しました。

「ありがとうございます、キャ……」

樹里が笑顔全開でそこまで言うと、

「私ははるなです、樹里さん」

はるなが涙目で訴えます。しかし樹里は、

「キャベツの千切りを手伝ってください」

ずっこけるはるなです。

その時、壁に備え付けられたインターフォンが鳴りました。

「はい」

近くにいたはるなが素早く受話器をとります。

「船越なぎさです。樹里さんはいますか？」

と声がします。

（船越なぎさって、あのおバカな子ね）

実はドロントの部下のはるなことキャビーは、なぎさが「危険人物」である事を思い出しました。

（ベロトカゲの六本木厚子さんの次に関わってはいけない子だわ）

「はい。お待ちください」

はるなは樹里に受話器を差し出し、

「樹里さん、船越なぎさ様です」

と言いました。

「久しぶり、樹里！」

それよりも早く、なぎさはキッチンに来ていました。

一回転して転ぶはるなです。

（どこから入って来たのよ、この子は？）

「いらっしゃいませ、なぎささん」

樹里は笑顔全開で応じました。

「ああ、樹里、太ったね。運動不足？」

なぎさの相変わらずな意味不明発言に、はるなはまたこけそうになります。

「再来月出産ですから」

樹里はそれでも笑顔全開で応じています。

（さすが樹里ちゃん。根性が座ってる……）

思わず尊敬の眼差しになるはるなです。

「ああ、そうなんだ。じゃあ、出産祝い用意しないとね」

なぎさが言うと、

「ありがとうございます」

樹里はまたしても笑顔全開で応じました。

「あれ、この人は？」

何と、なぎさはようやくはるなに気づいたようです。

「同僚の赤城はるなさんです」

樹里が紹介してくれます。

「ああ、そうなんだ」

なぎさはニコッとしてはるなを見ました。

「よろしくお願いします」

はるなは深々と頭を下げました。

「よろしく、キャビーさん」

なぎさが言いました。はるなはまたこけそうになります。

決して股にコケが生えたのではありません。

「赤城はるなです、船越様」

はるなは涙ぐんで言いました。

「ああ、そうなんだ」

なぎさはケラケラ笑っています。

（どうして、キャビーっていう名前が出るのよ!?　そんな事、一言も言ってないのに!）

はるなは、どこかに隠しカメラがあって、自分が騙されているのではないかと思いそうです。

「本日空輸で届いた紅茶です。どうぞ」

樹里がなぎさに高級紅茶を淹れます。

「ありがとう、樹里」

なぎさはキッチンのテーブルに着き、紅茶を楽しみます。樹里が、

「私達もお茶をいただきましょう、キャ……」

と言いかけると、はるなは、

「はるなです、樹里さん」

と言いますが、

「キャラメルもありますから」

と言われ、シンクに突っ込みそうになります。

「何だか愉快な子ね」

なぎさが小声で樹里に言うのが聞こえ、はるなは心が折れそうです。

（違うのよー！）

心で叫ぶはるなです。

しばらくなぎさは樹里と話をしてから、立ち上がりました。

「また来るね、樹里」

なぎさが言います。

「はい」

樹里が笑顔で応じます。

（もう二度と来ないで）

はるなが心の中で叫びます。

「あ、そうだ」

キッチンから出て行きかけて、思いついたように振り返るなぎさです。

（刑事コロンボか！）

心の中で突っ込むはるなです。

「叔母様の推理小説、この前返したわよね？」

「はい、返していただきました」

樹里が笑顔で返事をします。

「だったら、はるなさんに貸してあげて。きっと仕事の参考になるから」

なぎさの言葉にギクッとするはるなですが、

「そうですね。メイドの仕事が細かく書かれていて、勉強になりますね」

樹里の言葉にホッとします。

「犯人はね、庭師の池上晃さんだよ」

なぎさがはるなに言いました。

「そうなんですか」

一番大事な事を教えられ、はるなはその小説を読むのをやめようと思いました。

「叔母様の小説はね、登場人物一覧の四番目が犯人なんだよ」

なぎさは得意そうに言います。

（大村美紗の推理小説、全部読めなくなった……）

はるなは項垂れました。

「じゃあね、キャビーさん」

なぎさは樹里と共にキッチンを出て行きました。

「私は赤城はるなです、船越様！」

はるなは血の涙を流しながら、なぎさを追いかけて叫びました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、休暇をもらう

御徒町樹里は、世界的な大企業である五反田グループの代表である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

「御徒町さん、見習いの赤城はるなさんも仕事に慣れてきたので、今日はご主人の仕事を手伝ってあげなさい」

五反田氏は、だんだんせり出して来た樹里のお腹を気遣って言いました。

「ありがとうございます、旦那様」

樹里は深々とお辞儀をしました。

「後の事は私に任せてください、樹里さん」

玄関で樹里を見送るはるなが言います。

「はい、キャビ……」

「私ははるなです！」

また素早く訂正するはるなです。

「キャビンアテンダントさんみたいですね、はるなさん」

樹里は笑顔全開で言いました。

「……」

意味不明なので、唖然とするはるなです。

その頃、樹里が休暇をもらって、事務所に来ると連絡をもらった不甲斐ない夫の杉下左京は、あちこち散らかっているのを片づけています。

「全く、左京ったら、だらしがないんだから」

グウタラ所員の宮部ありさは、ノホホンとした顔でソファで寛いでいます。

「お前も手伝えよ！」

左京は切れました。

「うう、持病の癪が……」

急に具合が悪いフリをするありさです。

「江戸時代か！」

左京がすかさず突っ込みます。

「おはようございます」

そこへ樹里の姉の璃里が来ました。

「わわ、璃里さん！」

左京は動揺し、ゴミ箱をひっくり返してしまいました。

「あらあら、しょうがないですね」

璃里はクスッと笑いながら、散らかったゴミをゴミ箱に戻します。

「……」

左京は璃里を恍惚とした表情で見つめます。

（璃里さん、可憐だ……）

ハッと我に返ると、そんな左京をデジカメで撮影しているありさがいます。

「てめえ、何撮ってるんだ！」

「樹里ちゃんに見せちゃおっと」

ありさは素早く動き、事務所から逃げ出しました。

「おい！」

左京はありさを追いかけようとしましたが、

「左京さん、それより片づけをしてください」

と璃里に小首を傾げて言われ、

「あ、はい」

頬を染めて頷く左京です。

「はーい、いい顔」

それもしっかり撮影するありさです。

「この！」

左京は今度こそ追いかけようとしますが、

「痛い」

璃里の悲鳴に近い声を聞き、振り返ります。

「どうしたんですか、璃里さん？」

璃里は何かで右手の人差し指を怪我したようです。血が出ています。

「ああ」

左京は自分の机の三段目の引き出しに入っている救急箱を取り出そうとしますが、

「左京さん」

と璃里に左手で腕を掴まれます。

「え？」

左京が振り返ると、璃里が瞳をウルウルさせて、

「舐めて」

と血が出ている指を左京に突き出します。

「えええええ！？」

左京は仰天しました。

（何だ、これは？　何なんだ、一体！？）

全身から変な汗が噴き出します。

「痛いの。早く舐めて治して、左京さん」

璃里がにじり寄って来ます。

その時、左京は何となくデジャヴを感じました。

（これって、前にも似たような事が……）

そしてある女の存在に思い至ります。

「わかったぞ！」

左京は璃里の髪を掴み、引っ張ります。

「きゃっ！」

すると髪が取れ、その下からショートカットの黒髪が現れます。

「てめえ、前にも変装して俺を騙そうとしただろう！？」

そこまで言って、左京はその女の名前を思い出せません。

女は不敵に笑い、牛乳瓶の底のような眼鏡をかけました。

「さて、問題です。私は次のうちの誰？　A、箕輪まどか。B、西園寺蘭子。C、都坂亜希。D、六本木厚子」

簡単な問題のはずですが、左京は眉間に皺を寄せています。

（全然わからない。箕輪まどかちゃんはこの前会ったし、中学生だから違うのはわかるんだが……）

箕輪まどかだけわかるとは、左京に少女趣味疑惑が浮上します。

「誰がロリコンだ！」

左京は地の文に切れました。

「Dの六本木厚子さんです」

そこに樹里が現れ、正解を言いました。

「樹里！」

左京は喜んで叫びました。

「あと一息だったのに……。私は諦めないわよ、杉下左京さん」

六本木厚子はそう捨て台詞を吐くと、窓を開けて飛び降りました。

「おーい、ここ、五階だぞ」

左京が下を覗き込んで言うと、

「わかってるわよ、左京さん」

厚子はハンググライダーで浮き上がって来て、分厚いレンズの向こうでウィンクしたようです。

「じゃあねえ」

カッコ良く飛び去ろうとした厚子ですが、道路標識に激突し、そのまま舗道にずり落ちました。

「何なんだ、あの女は？」

左京はすぐさま警察に連絡しました。

「樹里、助かったよ」

左京は微笑んで言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開でデジカメを差し出しました。

血の気が引く左京です。

（ありさめえ、覚えてろよお）

「璃里お姉さんの娘の実里（みり）の写真です。見てください」

「そ、そう……」

左京は顔を引きつらせたまま言いました。

（と、取り敢えず良かった……）

左京は実里の写真を見たので、心が和みました。

「それから、これは何ですか？」

樹里が別のデジカメを左京に渡します。

それにはあの六本木厚子が変装していた偽の璃里を恍惚とした表情で見ている左京が写っていました。

（終わった、何もかも……）

左京の血の気は北極点まで飛んで行ってしまいました。

「事務所はもっと普段から奇麗にしておいてくださいね、左京さん」

樹里は笑顔全開で全然違う事を指摘しました。

しかし、すでにイスカ〇ダルまで旅立ってしまった左京には何も聞こえていませんでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、推理作家に書き下ろしの小説を贈られる

御徒町樹里は、日本有数の大富豪で、世界進出も果たした五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

但し、現在は、その仕事の大半を見習いメイドの赤城はるなが受け持っています。

「樹里さんがいつ産休に入っても大丈夫ですよ」

庭掃除を完了して、玄関に戻って来たはるなが言いました。

「そうなんですか」

何故かコケそうになるはるなです。

（何だ、いつもの『キャ』攻撃はないのか）

ホッとするはるなです。

「もう私がいなくても大丈夫ですね、キャビーさん」

樹里はいきなりのフェイント攻撃です。

「そんな事はないです、樹里さん。でも、私ははるなですから！」

謙遜しながら否定するという難しいテクニックです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。はるなは、その時ギクッとします。

「もう私がいなくてもって、嫌ですよ、樹里さん。産休が終わったら、戻って来てくださいね」

何故か、ウルウル来てしまうはるなです。

最終回が近いと思ったのでしょうか？

「はるなさんも、もうどこでも一人でメイドの仕事をできますよね」

樹里は更に笑顔全開で言います。

（私がいなくなるのが前提なの、樹里ちゃん……）

違う意味で泣きそうになるはるなです。

その時、玄関のドアフォンが鳴りました。

「大村様がお着きのようですね」

樹里は腕時計を見て言いました。シリーズで初めて、樹里が腕時計をしている事がわかりました。

「いらっしゃいませ」

樹里は玄関の扉を開いてお辞儀をします。

「あら、樹里さん。相変わらず、タイミングがいいわね」

樹里の言った通り、そこにはあの上から目線推理作家の大村美紗がいました。今日は娘のもみじも一緒です。美紗は大きめのハンドバッグを持っています。

「いらっしゃいませ、もみじ様」

樹里はもみじにもお辞儀をしました。

「お邪魔します、樹里さん」

もみじは苦笑いして応じました。

「お二人を応接間にご案内してください、キャビーさん」

「はい、樹里さん」

ついうっかり返事をしてしまったはるなですが、樹里はもういません。

お茶の用意をしに行ったようです。

「どうぞこちらへ」

はるなは引きつり笑いをして、美紗ともみじを応接間に通しました。

「貴女、新人ね？　お名前は？」

美紗が上から目線で尋ねます。するともみじが、

「さっき、樹里さんが言ってたでしょ、キャビーさんよ」

「変わった名前ね」

美紗は上から目線で言います。はるなはもっと引きつって笑い、

「違います、赤城はるなです」

と訂正しました。

「はるな愛？」

美紗が尋ねます。

「違います」

はるなは全力で否定しました。

「似たようなものでしょ」

上から目線の美紗には、はるなの名前などどうでもいいようです。

はるなは二人を応接間に通すと、逃げるように去りました。

「失礼な子ね、全く」

美紗はソファに座りながら上から目線で怒ります。

「お母様が名前を間違えるから悪いのよ。キャビーさんに失礼よ」

そういうもみじも間違えています。

「メイドの名前なんて、覚えても仕方ないでしょう」

自分で訊いておいて、そんな言い草の美紗です。どうしようもないババアです。

「何かしら？　今、悪口を言われた気がするわ」

美紗は天井を見渡して呟きました。

「そんなはずないわよ、お母様」

もみじが呆れて言います。

「お待たせ致しました」

樹里が紅茶セットをトレイに載せて入って来ました。

「まあ、いい香り」

もみじが言います。すると美紗が、

「今日はダージリンね。私の一番好きな紅茶よ」

と上から目線で言いました。樹里は笑顔全開で、

「本日は中国のキーマンです」

と答えました。美紗はムッとして、

「知ってたわよ。わざと間違えたのよ」

負け惜しみの女王です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開ですが、もみじは呆れています。

しばらくの間、ティブレイクです。

「そうそう、忘れるところだったわ」

美紗はハンドバッグの中から単行本を取り出しました。

「新作ができたので、持って来てあげたのよ。お読みなさい」

美紗は上から目線全開で本を樹里に差し出します。

「ありがとうございます」

樹里はそれを受け取りました。

「残念な事にね、その小説の犯人は登場人物一覧を見てもわからないわよ」

美紗は勝ち誇ったように言いました。すると樹里は、

「犯人は、久本真沙美さんですね、美紗様」

と言いました。途端に顔色が悪くなる美紗です。

（おかしい。おかしいわ。この本はあのなぎさも見ていないもの。どうしてわかったの？）

美紗は動揺しながらも、冷静なフリをして、

「どうしてそう思いますの、樹里さん？」

と尋ねました。もみじも興味津々の顔で樹里を見ます。

「美紗様は、犯人の名前を有名人と同じ名前にするからです」

樹里の答えにまた蒼ざめる美紗です。それにしても、間抜け過ぎる名前の設定です。

（何ですって！？　そんな致命的なミスをしていましたの、私は？）

美紗の顔色の悪さにもみじが驚き、

「大丈夫、お母様？」

美紗は引きつった笑顔で、

「そ、そうなの。なるほどね」

と堪えていましたが、

「それもなぎささんに教えていただきました」

と樹里が言ったので、

「きいいい！」

と雄叫びを上げてソファに倒れ込みました。

（どうしてなぎさは私の邪魔ばかりするのよーーーー！？）

心の中で絶叫する美紗です。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、変貌する?

御徒町樹里は、日本有数の大企業グループを率いる五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

樹里のお腹は、知らない人にもはっきりそれとわかるくらいせり出してきました。

「双子ですかね?」

庭掃除をしている樹里を観察しながら、警備員さん達が囁き合います。

「いやあ、それじゃあ日下部先生のパクリでしょ?」

意味不明の事を言う人がいます。

「じゃあ、三つ子かも知れませんね」

「いや、そういう事じゃなくてね……」

警備員さんにも、天然の人がいるようです。

「樹里さーん」

いつものように赤城はるなが走って来ます。

「どうしましたか、はるなさん?」

樹里が普通にはるなの名前を呼んだので、はるなは勢い余って空中二回転をして転びました。

「大丈夫ですか、はるなさん？」

樹里がはるなに手を差し出します。

「すみません、私ってば、ドジで」

テヘッと笑ってみせて、はるなは樹里を見上げます。

「え？」

何故か樹里は笑顔ではなく、妙に凛々しい顔です。

（あれ、今日はお姉さんと入れ替わってるのかな？）

しかし、樹里の従妹（いとこ）の鶯谷翠（うぐいすだにみどり）と樹里の違いを見破ったはるなですから、璃里でない事はわかっています。

（どうしたの、樹里ちゃん？）

これは新しい悪阻（つわり）かとも思いましたが、樹里はすでに出産間近です。

（むしろ、新しい陣痛？）

そんな事もないと打ち消すはるなです。

「樹里さん、また旦那さんが悪さをしたんですか？」

はるなはこっそり尋ねました。

「そんな事はありませんよ、はるなさん」

樹里は相変わらず凛々しい顔で応じます。

（ああ、何だか、いけない世界に足を踏み入れてしまいそう……）

はるなは樹里の顔に惚れてしまいそうです。

でも、ＧＬにはなりません。

その頃、不甲斐ない夫の杉下左京は、はるなに言われた「旦那さんが悪さをしたんですか？」に反応し、くしゃみをしました。

「ばっちいなあ、左京ってば。ちゃんとマスクしてよ」

グウタラ所員の宮部ありさがあからさまに嫌そうな顔で言います。

「畜生、誰か俺の悪口を言ってるな」

左京は鼻を擦りながら呟きます。

「そんな迷信信じてるの？　ホント、バカね、あんた」

ありさが更に追い討ちをかけます。

「うるせえ！」

左京はありさに切れ、椅子にふんぞり返りました。

その時、机の上の電話が鳴りました。

「おお！」

思わずハモって驚く左京とありさです。

「お電話ありがとうございます、杉下左京探偵事務所です」

左京は感涙に咽（むせ）びながら受話器を取って言いました。

「え？　樹里の様子がおかしい！？」

左京は蒼ざめました。電話の相手ははるなです。

（働き過ぎだ）

別の涙が出て来る左京です。

「樹里ちゃんは基本的に様子がおかしいわよ、左京」

ありさが直接的な表現で言いました。

「お前に言われたくねえよ！」

左京は受話器を置いてからありさに言い返します。

ありさは何故か赤面しますが、左京はスルーしました。項垂れるありさです。

「取り敢えず、俺は五反田邸に行って来る。後は頼んだ」

左京は事務所を飛び出して行きました。

「ムフフ、しめしめ、これで私は悪さし放題と」

ありさが悪い魔女の顔になります。

「やっぱりお前も一緒に来い、ありさ！」

左京が戻って来て、ありさの首根っこを押さえて引き摺って行きます。

「えーん、酷いよお、左京う」

ありさは嘘泣きしましたが、左京は相手にしませんでした。

左京とありさが五反田邸に到着すると、すでに璃里も来ていて、樹里と話をしていました。

警備員さん達は離れて樹里達を心配そうに見ています。

「樹里、どこか痛いところとかない？」

璃里が不安そうに尋ねると、樹里は凛々しい顔のままで、

「いえ、ありません、お姉さん。ご心配をおかけして、すみません」
と頭を下げました。璃里は混乱しているようです。
「左京さん、こんな樹里、見た事ありません。今、母に連絡しましたから、もうすぐ来ると思います」
璃里は涙ぐんでいます。それを見て、左京の不安はＭＡＸです。
（璃里さんにわからないなんて、どうしたらいいんだ？）
「樹里ちゃん、これ何本に見える？」
ありさが指を一本も立てずに尋ねます。
「一本も指を立てていないですよね、宮部さん」
樹里は凛々しい顔で応じました。ありさはゾッとしてしまいます。
「もしかして、妊娠中毒症？」
「アホか！　違うよ！」
左京はありさの突拍子もない推理を一蹴しました。
するとそこへ、居酒屋の店長の車で、由里がやって来ました。
「お母さん、樹里が……」

珍しく取り乱す璃里を優しく抱きしめてから、由里は樹里を見ます。

「樹里、何があったの？」

樹里は由里を見て、

「何もありませんよ、お母さん。私は至って健康です」

と凛々しい顔で言いました。

「ああ、そういう事か」

由里はホッとして言いました。

「樹里はどうしたの、お母さん？」

璃里が詰め寄って尋ねます。由里は苦笑いして、

「只の夏バテよ。この子、夏バテすると、性格が変わるのよね」

左京とありさと璃里、そして警備員さんは唖然としました。

璃里は五反田氏に連絡し、事情を話して樹里と交代しました。

樹里は左京とありさに付き添われ、そのまま帰宅です。

「左京ちゃん、次はちゃんと覚えていて、対応してね」

由里は左京にウィンクして去りました。左京は苦笑いして応じま

した。

左京はアパートに戻ると、布団を敷き、樹里を着替えさせて、寝かせました。

「樹里、すまない。俺が不甲斐ないばっかりに、お前にばかり苦労をかけてしまって」

左京は樹里に土下座しました。ところが樹里はすでに熟睡していました。

「樹里……」

左京は樹里の頬にソッと触れ、その口に軽くキスしました。

「さて、その次は?」

窓から覗いていたありさが言います。

「覗くな!」

左京は窓を閉じて鍵をかけます。

「ごめんな、樹里」

左京は目を潤ませて呟きました。

そして、翌日です。

「おはようございます、左京さん」

樹里が笑顔全開で左京を起こしてくれました。

「おお、樹里、元気になったんだな？」

「はい、お陰様で」

樹里は更に笑顔全開で応じます。

「左京さんにキスしてもらったので、治りました。ありがとうございます、左京さん」

今度は樹里が左京にキスをします。

あまりに嬉しい不意打ちに、左京は鼻血が出そうです。

「おうおう、続きはいつかな？」

また窓からありさが覗いています。

「てめえ、いい加減にしろ！」

左京は切れました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、赤城はるなに仕事を引き継ぐ

御徒町樹里は、日本で五本の指に入る大企業の代表である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

出産予定日である九月十二日まで一ヶ月を切ったので、樹里はメイドの仕事を見習いメイドの赤城はるなに引き継ぐように五反田氏に言われました。

「御徒町さん、無理しないようにね」

五反田氏が会社に出かける前に樹里に言いました。

「ありがとうございます、旦那様」

樹里は深々とお辞儀をします。

「樹里さん、そんなに頭を下げたら倒れてしまうわよ」

五反田氏の奥さんの澄子さんが言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「麻耶も、自分でできる事は樹里さんに頼らないようにしてね」

澄子さんは一人娘の麻耶に言います。麻耶は大きく頷き、

「もちろんよ。私はもう四年生よ。何でも自分でできなくちゃ。有栖川先生にもそう言われているし」

「偉いわ、麻耶」

澄子さんは麻耶を優しく抱きしめました。

「ありがとうございます、奥様、お嬢様」

樹里はまた深々とお辞儀をしました。

「だから、それが危ないのよ、樹里さん」

また慌てる澄子さんです。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

やがて樹里はキッチンに行き、はるなに料理の引き継ぎをします。

「カロリーと栄養のバランス、並びにご家族の皆様の好みを全て把握して、一週間の献立を決めてください」

樹里は笑顔全開で言います。

「はい」

はるなは真剣な表情でメモを取っています。

「食材の購入先のリストはここに書かれています。定休日を正確に覚えて、購入サイクルを組み立ててください」

樹里は更に笑顔全開でファイルを渡します。

「樹里さんが今まで組んで来た献立を参考にしたいので、見せていただけませんか？」

はるなが言いました。すると樹里は笑顔全開で、

「それはできません」

「ええ！？　そんな意地悪言わないでくださいよ、樹里さん」

はるなは思ってもみない樹里の言葉に驚愕しました。

「献立を書いたものはありません」

樹里はそれでも笑顔全開です。はるなは訳がわからなくなりそうです。

「全部捨てちゃったんですか？」

泣きそうな顔で尋ねるはるなです。樹里は、

「違いますよ。書いた事がないんです」

「え？」

はるなは更に驚愕しました。

（献立を全部頭の中だけで組み立てていたの、樹里ちゃん？）

尊敬の眼差しで樹里を見つめるはるなです。

「私にはとても無理なので、これに書いてください」

はるなはメモ帳を樹里に手渡しました。

「いいですよ」

樹里は笑顔全開でサラサラと献立を書き込みます。

「げ」

はるなは顎が外れそうなくらい驚きました。

一週間の献立は、全部で百品以上です。さすが、五反田邸です。

（でも、ご家族は三人しかいないのよね？）

「一食五品、一日三回、それを七日間ですから、それくらいにはなりますよ」

樹里が言いました。それだけ必要な五反田家もすごいですが、それを記憶している樹里も尋常ではない記憶力です。

（それにしては、私の名前をなかなか覚えてくれなかった……）

何となく悲しくなるはるなです。

「そう言えば、料理も全部樹里さんが作っていたんですか？」

「はい」

はるなは怖くなって来ました。

「私に務まるでしょうか？　不安になって来ました」

「大丈夫ですよ。私も一人でこなしていましたから」

樹里は案外あっさりと厳しい事を言います。

「それはそうなんですけど……」

はるなはますます不安になって来ました。

「私が手伝いましょう。栄養学は専門ですから」

そこへ出番が少ない女医の黒川真理沙（くろかわ　まりさ）がやって来て言いました。

「……」

気にしている事を言う地の文に落ち込む真理沙です。

「ありがとうございます、真理沙さん！」

はるなは大喜びしました。

「良かったですね、キャ……」

樹里が言いかけると、

「私ははるなです、樹里さん！」

はるなは素早く突っ込みました。

「キャビアもありますから、たくさん使ってくださいね」

はるなはスッテンとコケました。唖然としている真理沙です。

「じゃあ、私も手伝おうかしら？」

麻耶の家庭教師の有栖川倫子が現れて言いました。するとはるなと真理沙が、

「ご遠慮ください」

と口を揃えて言いました。

「何でよ！？」

ムッとする倫子です。実は怪盗ドロントの倫子は、料理が下手なのです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

こうして、はるなは樹里からの様々な引き継ぎを終えていきました。

「はるなさんも、私がいなくてももう安心ですね」

樹里がそう言うと、はるなは涙ぐんでしまいます。

「早く戻って来てくださいね、樹里さん。寂しいですから」

「寂しくないですよ、はるなさん。ヌー……」

樹里が言いかけます。

「私は真理沙です、樹里さん」

真理沙が慌てて言います。

「ヌーの大移動のＤＶＤを観て元気を出してください」

樹里ははるなにＤＶＤのセットを渡しました。

スルンと滑って転ぶ真理沙と倫子です。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京を親戚に紹介する

御徒町樹里は、日本で五指に入る大富豪の五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

今日も、見習いメイドの赤城はるなに引き継ぎをしています。

「旦那様がお使いのタオルは、柔軟剤は使わず、奥様とお嬢様のタオルには無香料の柔軟剤を使ってください」

樹里は笑顔全開で言います。それを一生懸命メモするはるなです。

（このまま、ここで働くのも悪くないかも）

そんな事を思い始めているはるなは、本当は怪盗ドロントの部下のキャビーです。

しかし、ドロントは、ほとぼりが冷めたらまた泥棒稼業に戻るつもりです。

（首領には恩があるからなあ）

ドロントを裏切る事はできません。溜息を吐くはるなです。

「どうしましたか、キャ……」

樹里が言いかけたので、はるなはすかさず、

「私ははるなです、樹里さん」

と言いました。すると樹里は、

「キャンディが欲しいのですか？」

と意味不明な事を言いました。項垂れるはるなです。

「いえ、欲しくないです」

（本当は私をからかってるんでしょ、樹里ちゃん！？）

心の中で号泣するはるなです。

その時、樹里の携帯が鳴りました。

「はい」

樹里ははるなから離れて話し始めます。

（何だろう？）

気になるはるなは、こっそり話を聞こうと思って樹里に近づきます。

「はい、はい」

樹里は真剣な表情で頷いています。何やら、深刻な話のようです。

相手の声が聞き取れないので、はるなが更に樹里に近づくと、樹里は携帯を切りました。

「間違い電話でした」

樹里に笑顔全開で言われ、唖然とするはるなです。

その頃、すっかり不甲斐ないキャラになってしまった杉下左京は、いつものように事務所の机に突っ伏していました。

「暇だなあ。つまんないなあ」

グウタラ所員の宮部ありさが言います。

いつもなら怒り出す左京ですが、今日はそんな気力すらありません。

「ねえ、左京」

急に色っぽい声でありさが言ったので、左京はビクッとして顔を上げます。

ありさは妖艶な笑みを浮かべ、モンローウォークで左京に近づいて来ます。

「まだ日も高いけど、する？」

「な！？」

ありさのトンデモ発言に驚愕する左京です。思わず机から離れま

す。

「ば、バカヤロウ、そんな事は暇だからするものじゃねえだろ！それに俺には妻がいるんだぞ！」

左京は声を震わせてありさに言いました。ありさはキョトンとして、

「はあ？　何言ってるのよ、左京ったら。酒盛りは、奥さんいても問題ないでしょ？」

「え？」

自分の早とちりに気づき、赤面する左京です。するとそれに気づいたありさが、

「あー、左京ってば、エッチな事考えてたでしょ？」

と嬉しそうに尋ねます。

「ち、違うよ！」

左京は動揺しながらも否定しました。その時、左京の携帯が鳴ります。

樹里からです。更に狼狽える左京です。

「はい！」

直立不動で電話に出る左京です。

「はい、はい」

まるで取引先からのクレームを聞いているような表情で返事をしています。

（樹里ちゃんに出産日離婚を言い渡されたのかしら？）

妙に嬉しそうに左京を見るありさです。

「今日は早じまいだ。俺は出かけなければならない」

左京は携帯をジーパンのポケットに入れると言いました。

「わーい、酒盛りィ！」

ありさが喜ぶと、

「酒盛りはしない。樹里の親戚の人と会うんだよ」

「え？」

ありさはギクッとしました。

「離婚の慰謝料を決めるの？」

ありさの妄想が暴走しています。

「訳のわからない事を言うなよ。熱でもあるのか？」

左京はありさがおかしくなったと思いました。ありさは元々おかしいですよ。

「何だと！？」

ありさは地の文に切れました。

左京は、意味不明なありさを事務所から追い出し、鍵を締めました。

（親戚が集まったから来て欲しいって、何だかドキドキするな）

指定されたのは、某高級ホテルの広間です。

（一体何人集まってるんだ？）

左京は一度アパートに戻り、礼服に着替えてホテルに向かいました。

ホテルに着くと、左京はフロントの人に声をかけました。

「あの、杉下と言いますが、御徒町さんのお部屋はどちらですか？」

するとフロントの人は何故か酷く驚いて、

「ああ、こちらでございます、杉下様」

と五人も連れ立って案内してくれます。

（どういう事だ、一体？）

左京は怖くなって来ました。

「こちらです」

五人のうちの一人が大きな観音開きの扉を開きました。

中に入ってみると、千人は収容できる大広間です。

そこに老若男女がたくさんいて、歓談していました。

「……」

左京は唖然としました。

「あ、左京ちゃん、こっちこっち」

少しせり出し始めたお腹をした義理の母親の由里が手招きします。

居酒屋の店長も一緒です。

「ああ、お義母（かあ）さん」

知った人を見つけて、ホッとする左京です。

「お義母さんだなんて、やめてよ、左京ちゃん。由里って呼んで」

妙に色っぽい声で言う由里です。左京は苦笑いして誤魔化しました。

「それから、この子が樹里の従妹（いとこ）の鶯谷翠（うぐいすだに）ちゃん」

由里が紹介してくれたのは、よく見ないと樹里と見分けがつかないほどよく似ている子です。

「初めまして、杉下さん。翠です。樹里お姉ちゃんの代理で居酒屋で働いています」

翠は樹里と寸分違わぬ笑顔で挨拶しました。

「は、初めまして、翠さん」

左京は狼狽えながら応じます。左京は以前居酒屋で翠を見かけたのをすっかり忘れています。

「で、こっちが樹里の従姉（いとこ）の代々木つかさちゃんよ」

「初めまして、杉下さん。樹里ちゃんの代理で、新聞配達をしています」

つかさも樹里と瓜二つで、笑顔全開です。だんだん怖くなる左京です。

「わーい、杉ちゃん、おひさー！」

樹里の妹の真里（まり）、希里（きり）、絵里（えり）が左京に飛びつきます。

「おう、久しぶりだな。少し大きくなったか？」

「うん！」

三人の妹達は、嬉しそうに左京にじゃれます。

「左京さんが困ってるでしょ、やめなさい」

そこへ、最近左京が傾きかけていると噂の義理の姉の璃里が夫の竹之内一豊氏とやって来ました。

「誰が傾きかけてるんだよ！」

左京が地の文の噂話に切れました。

「左京さん、申し訳ありません。お仕事中だったのに」

そこへ樹里が大きなお腹をさすりながら現れました。左京は複雑な表情で、

「いや、平気だよ、樹里。それにしても、親戚、多いな」

「はい。全国に一万人くらいいますよ」

樹里は笑顔全開で言いました。

「い、一万人？」

左京は仰天して周囲を見渡します。

女性は全員樹里とそっくりで、男性は皆違う顔をしています。

（父親のＤＮＡは受け継がれないのか？　しかも、子供は全員女の子だ……）

恐るべし、御徒町一族。日本最強かも知れません。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、なぎさに恋人を紹介される

御徒町樹里は、日本有数の大富豪の五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

出産予定日まであと二週間程になりました。

「御徒町さん、本当に出産日の前日まで働くのですか？」

邸の警備員さんが大きなお腹の樹里に心配そうに尋ねます。

「そうですよ」

樹里は笑顔全開で言いました。

「御徒町さんは細いから、難産になりそうですね」

もう一人の警備員さんが言います。

「そうなんですか」

でも樹里は笑顔全開です。

「樹里さーん」

そこへ見習いメイドの赤城はるなが走って来ます。

「どうしたのですか、キャ……」

樹里が言いかけると、はるなは慌てて、

「私ははるなです、樹里さん」

と言います。警備員さんが疑惑の目をはるなに注ぎ、嫌な汗がたんまりと出て来るはるなです。

「キャットフードはキッチンの端の戸棚に入っているはずですよ、はるなさん」

樹里の長い長ーいボケにスッテンコロリンと倒れるはるなです。

「おお」

その時、警備員さん達がはるなのパンツを見てしまったのは内緒です。

「船越なぎさ様がお見えです。応接間にお通ししました」

はるなは腰をさすりながら言いました。

「そうなんですか」

樹里はそれにも関わらず笑顔全開です。

「庭掃除は私が代わりますので」

はるなは樹里からほうきを受け取ります。

なぎさに関わるくらいだったら、溶鉱炉に落ちた方がマシだと思

うはるなです。

樹里はなぎさが待つ応接間に行きました。

「いらっしゃいませ、なぎささん」

樹里は深々とお辞儀をしました。

「久しぶりね、樹里」

ふと見ると、なぎさは男性と一緒です。二人はソファから立ち上がりました。

なぎさの連れの男性は身長が高くて、イケメンで、お金持ちそうです。

「紹介するわね。私の彼の片平栄一郎君よ」

なぎさは笑顔全開で言いました。

「片平です。どうぞよろしく」

栄一郎はキラッと歯を光らせて言いました。

「よろしくお願いします」

樹里はまた深々とお辞儀をしました。

「樹里が結婚して、妊娠までしたから、私も焦っちゃって、猛アタックしたんだから」

頬を赤くしながら説明するなぎさです。

「あー、いやいや、アタックしたのは僕の方ですよ、なぎささん」

栄一郎も赤くなって言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。なぎさはキョトンとして、

「あれ、そうだっけ？」

と首を傾げます。そして、

「それにね、栄一郎君は、イギリスのバーモント大学を飛び石連休で卒業したの」

なぎさの紹介は意味不明です。

「あー、いやいや、僕はアメリカのハーバード大学を飛び級で卒業したんですよ」

全然違いました。さすが、なぎさです。

「そうなんですか。カレーが好きなのですか？」

樹里が笑顔全開で会心のボケです。

「ハハハ、バーモントから離れてください」

栄一郎は歯をキラキラさせて言いました。天然に耐性があるようです。

三人はしばらくお茶をしながら歓談しました。

「あ、私、ちょっとおしっこ」

なぎさは恥ずかしそうに応接間を出て行きます。「おしっこ」と言わなくてもいいと思うのですが。

「樹里さんはなぎささんの親友だから、彼女の事はよくご存知かと思いますが、ちょっと不思議な人ですよね」

栄一郎は爽やかな笑顔で言います。

「そうなんですか？　なぎささんはいい人ですよ」

樹里は笑顔全開で応じます。すると栄一郎は慌てたように、

「あー、いやいや、そういうつもりで言ったのではないんです。僕、実はまだ十五歳なんです」

さすがの樹里もそれにはビックリしたようです。

「犯罪になりますか？」

樹里が尋ねました。

「あー、いやいや、犯罪になるような事はしていませんよ」

栄一郎は爽やかな笑顔で、

「なぎささんは、僕の知らない事をたくさん知っていて、とっても楽しい人です。何年先になるかわからないけど、僕はなぎささんと結婚したいと思います」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。するとそこになぎさが戻って来ました。

「じ、時間かかったのはトイレの場所がわからなかったからよ！おしっこしただけなんだから！」

何故か赤くなって弁解するなぎさです。「〇んこ」疑惑をかけられたと思ったのでしょうか？

それにしても、また「おしっこ」と言わなくてもいいと思います。

「ね、樹里さん、なぎささんていい人でしょ？」

栄一郎がクスクス笑いながら言います。

「そうですね」

樹里は笑顔全開で言いました。なぎさはキョトンとして、

「何が楽しいのよ、二人共？」

と首を傾げます。

そんな三人の様子をこっそり覗いていたはるなは、

（関わりたくねえ）

と思いました。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、自己陶酔型推理作家に挑戦される

御徒町樹里は、日本で有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

樹里の出産予定日の九月十二日まで二週間を切りました。

見習いメイドの赤城はるなも、すっかり引き継ぎが進み、いつでも一人でできるほどになりました。

「もう今日にでも樹里さんが出産しても大丈夫ですよ」

はるなは庭掃除を完了したのを樹里に玄関で報告しながら言いました。

「そうなんですか」

樹里は何故か寂しそうです。

「あれ、どうしたんですか、樹里さん？」

はるなが驚いて尋ねました。

「はるなさんは私の事が嫌いになったのですね」

樹里は目を潤ませています。

「えええ！？　ち、違いますよ！　何言ってるんですか、もう」

はるなは慌てて言いました。樹里はニコッとして、

「そうなんですか。良かったです」

「当たり前じゃないですか！　私、樹里さんの事が大好きですよ」

その言葉は、はるなの正体である怪盗ドロントの部下のキャビーの言葉でもあります。

彼女は、五反田邸で樹里と一緒に働くうちに、本当に樹里の事が好きになっていました。

「ありがとうございます、キャ……」

樹里が言いかけます。はるなは慌てますが、

（いつもそこで引っかかるんだから、今日は何も言わないでおこう）

と思い、樹里の言葉を待ちます。

「ありがとうございます、キャビーさん」

ストレートでした。はるなは思い切りコケました。

今日は警備員さんは見ていません。

すると玄関の車寄せに上から目線のリムジンが入って来ました。

言うまでもなく、推理作家の大村美紗の車です。

「いらっしゃいませ」

樹里とはるなは素早く反応し、降りて来た美紗に頭を下げます。

「ご機嫌よう、樹里さん、はるな愛さん」

美紗はまだ名前を覚えてくれないようです。

「いらっしゃいませ、大村様。私は赤城はるなです」

はるなは引きつり笑顔で言いました。

「そうなの。ごめんなさいね、愛さん」

はるなは項垂れそうになりますが、グッと堪えます。

（クソババア！）

心の中で思いっきり罵るはるなです。

「大村様を応接間にお通ししてください」

樹里が言いました。

「はい」

はるなは美紗を応接間に案内して退室しようとしました。すると美紗が、

「お待ちなさい、はるなさん」

「はい」

微妙な名前の呼び方に苦笑いするはるなです。

（どっちのつもりで呼んでるんだろう？）

つい、気になってしまいます。

「貴女、樹里さんが産休の間、ここで働くの？」

ソファに上から目線で寛ぎ、美紗が尋ねます。

「はい。そのように申しつかっております」

はるなは頭を下げて答えました。

「そう。務まるかしらね、貴女なんかに」

美紗は勝ち誇ったような顔で言います。

「鋭意努力致す所存です」

はるなは掴み掛かりたいのを堪え、頭を下げて退室しました。

それと入れ違いに樹里が紅茶のポットとカップをトレイに載せて入って来ました。

「今日こそ、当てるわよ。中国のキーマンね」

美紗が自己陶酔したように言いました。

「いえ、本日はキーマンが終わってしまいましたので、ダージリンです」

樹里は笑顔全開で言いました。美紗はそれを聞くとムッとして、

「わかっていたわよ。貴女に花を持たせたのよ。ありがたく思いなさい」

相変わらず上から目線で負けず嫌いです。生まれはどこでしょうか？

「ありがとうございます、大村様」

樹里は笑顔全開でお辞儀をしました。そして、紅茶を淹れ、美紗に出します。

「いい香りね」

美紗はカップを持って紅茶の香りを楽しみます。

「そうそう、忘れるところだったわ」

美紗は今時二時間ドラマでもしないようなオーバーなリアクションをして、バッグの中からハードカバーの本を取り出します。

「新作が刊行されるので、誰よりも早く、貴女に差し上げるのよ。ありがたく受け取りなさい」

美紗は樹里にその本を突き出します。

「ありがとうございます」

樹里はその本を受け取りました。

「解決編は綴じ込んであります。犯人を推理して、もし当たっていたら、その本の印税の半分を貴女に差し上げるわ」

美紗は自信満々で言いました。

(絶対に犯人はわからないわ。登場人物一覧の癖は気をつけたし、名前は全員ありふれたものにしたわ)

美紗は悪い魔女より悪い顔をしてニヤリとします。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で本を開き、パラパラとページを捲ります。

「そんなところで立ち読みしないで、家に帰ってじっくり読みなさい。でないと、犯人はわからないわよ」

美紗は鼻で笑って言います。すると樹里は、

「読み終わりました」

「嘘おっしゃい！　まだ三分も経たないわよ！」

美紗は怒りの余り立ち上がりました。

「速読術を習ったのです」

樹里は笑顔全開言います。

「な、な、な……」

美紗はあんぐりと口を開いてしまいます。

「犯人は、神村律子さんです」

「な、な、な……」

美紗は驚愕の余り、声が出ません。

そしてそこから樹里の推理が始まりますが、美紗には全く聞こえていませんでした。

「印税が、印税がああ！」

そしてとうとう、美紗は驚愕と怒りでソファに倒れてしまいました。

「大村様、大丈夫ですか？」

樹里が声をかけます。

そんなやり取りを、ドアの隙間から市原〇子のように覗くはるなです。

（ざまあ見ろ）

美紗の様子を見て喜ぶはるなでした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、ドロントに別れを告げられる

御徒町樹里は、日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

出産予定日まで一週間を切った樹里を心配して、五反田氏の奥さんの澄子さんが声をかけました。

「樹里さん、無理しないでね。辛かったら、いつでも休んでいいのよ」

「ありがとうございます、奥様」

樹里は笑顔全開で言いました。

その頃、五反田氏の娘の家庭教師である有栖川倫子（ありすがわりんこ）こと怪盗ドロントの部屋に、女医の黒川真里沙こととヌート、見習いメイドの赤城はるなことキャビーが集まっていました。

「警察の目が厳しくなっているわ。ここの警備員が頻繁に連絡を取り合っているみたい」

ドロントは椅子に座って言いました。

「どうするのですか、首領？」

ヌートは壁に寄りかかって尋ねます。

「潮時かもね。麻耶ちゃんも随分レベルアップしたし、小学校が始まったから、顔を合わせる時間も減ったし」

ドロントは机の上にある麻耶のテストの成績表を見て答えました。

「でも、樹里ちゃんが出産すると、しばらく仕事ができませんよ。私、ここから離れるの、できないです」

キャビーがベッドに腰を下ろして口を尖らせて言います。ドロントはキャビーを見て、

「あんたね、そんな事言ってたら、私達捕まるかも知れないのよ？」

「それはそうなんですけどお」

キャビーは納得がいかないようです。

「いずれにしても、同時に辞めるのも妙な話ですから、まずは首領が辞めて、それから少し時間を置いて私が辞める。そして最後にキャビーが辞めれば、樹里さんの復帰する頃になるのではないですか？」

一味の知性派であるヌートが提案しました。

「澄子さんの容態はどうなの、ヌート？　もう大丈夫なの？」

ドロントはヌートを見上げて尋ねます。

「澄子さんはもう大丈夫でしょう。ここを辞める時は、知り合いの

名医に紹介状を書くつもりです。良くしていただいたお礼として、それくらいはさせてください」

ヌートは真剣な表情でドロントに言いました。ドロントは苦笑いして、

「それくらいかまわないわよ、ヌート。私も、麻耶ちゃんには何かあげるつもりよ」

するとキャビーが、

「お二人共、辞めるの確定ですか？　私は嫌です。ここでずっと働きたいです」

と意を決して言いました。

「かまわないわよ、キャビー」

ドロントがあっさり言ったので、キャビーは唖然としました。

「あんたはまだ若いんだから、人生をやり直した方がいいわ。だから、そのままメイドとして上を目指しなさい」

ドロントの優しい眼差しにウルッと来るキャビーです。

「首領！」

彼女は思わずドロントに抱きつきます。

それを見て涙ぐむヌートです。

「もう、ガキなんだから」

キャビーの頭を撫でながら、ドロントも目を潤ませていました。

樹里はランドリールームで洗濯をしていました。

「すみません、樹里さん、休憩時間をオーバーしてしまって」

はるなに戻ったキャビーが慌てて駆け込んで来ました。

「そうなんですか」

樹里は別に全然気にしていないようです。

「あら？」

樹里がはるなの顔を見て言いました。ドキッとするはるなです。

（泣いたのがばれた？）

すると樹里は、

「はるなさん、太りましたか？」

と途方もない危険球を投げて来ました。

「いえ、太ってません。むしろ痩せました」

はるなは引きつり笑いをして応じました。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

やがて、樹里の終業時間になりました。樹里がメイド服から私服に着替え、玄関から出て行こうとすると、倫子に戻ったドロントが現れました。

「お疲れ様でした、ドロントさん」

倫子は取り敢えず微笑んで、

「お疲れ様、樹里さん。私は有栖川倫子ですよ」

と返します。そして、

「ちょっといいですか？」

「私は仏教徒ですから」

樹里が突然そう言ったので、倫子は何のボケか考えました。

「誰が宗教の勧誘だ！」

一応突っ込む倫子です。

倫子は、玄関のロビーの端まで樹里を連れて行き、話をしました。

「樹里さんは気づいているみたいだけど、私は怪盗ドロントなの」

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔全開です。倫子は項垂れかけましたが、

「だから、そろそろここからおさらばしようと思うの」

「そうなんですか」

反応が一緒の樹里に、挫けそうになる倫子です。

「旦那様には私から申し出ますから、それまでこの事は黙っていてください」

倫子は真剣な表情で樹里を見ました。

「わかりました」

樹里は真顔になって応じます。

「では、お疲れ様、樹里さん」

倫子は樹里から離れ、奥に歩いて行きました。

「お疲れ様です、有栖川さん」

樹里は初めてその名で言いました。ずっこける倫子です。

それを窓の外から見ている者がいました。

ベロトカゲこと、アホのあっちゃんです。

「違います！」

あっちゃんが地の文に切れました。

「私は六本木厚子よ！　間違えないで頂戴！」

あっちゃんは何故か泥棒スタイルです。でも牛乳瓶の底のような眼鏡はそのままです。

「いい事聞いちゃった。この事を週刊誌に売り込めば、私は大金持ちよ」

あっちゃんは早速売り込みをしようと思い、五反田邸を出ました。

「そこまでだ、間抜けな怪盗ベロトカゲめ！」

いきなりサーチライトで照らされ、動揺するあっちゃんです。

ライトの向こうには、警視庁ドロント特捜班の平井拓司警部補が立っていました。

「ああ、イケメン！」

イケメンが三度のカレーより大好物なあっちゃんは、あっさり捕まってしまいます。

「貴方が私を取り調べるの？」

うっとりした目で尋ねるあっちゃんです。

「そうだ。全部話してもらうぞ」

平井警部補は手錠をかけながら言いました。

「痛くしないでね」

あっちゃんのその言葉に唖然とする平井警部補です。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京にお礼を言う

俺は杉下左京。五反田駅の前に事務所を構える私立探偵だ。

しかし、開業して以降、ロクな仕事がない。

その上、最愛の妻である樹里は妊娠し、とうとう明日が出産予定日だ。

お腹の子は順調に育っているので一安心だが、肝心の父親がどうにもならない。

「これからもっと頑張らないと、本当に路頭に迷ってしまう」

俺は決意を新たにし、五反田駅前でビラ配りをする事にした。

「という事だ、ありさ。頼んだぞ」

いつも事務所で惰眠を貪っているだけの腐れ縁の宮部ありさに俺は言った。

「ええ、ビラ配りなんかしても、お客さん来ないわよ。風俗じゃないのよ、左京」

ありさはビラ配りが面倒臭いのか、トンでもない事を言い出す。

「阿呆！　美容室だって、居酒屋だってビラ配りしてるよ！」

俺はいい加減頭に来て言った。

「ミミズだっておけらだってアメンボだってね」

更にふざけるありさの襟首を捩じ上げる。

「真面目にやらねえと、業務上横領で警察に突き出すぞ！」

「ひいい！」

やっとありさはわかってくれたようだ。

「行って来ます！」

バスケット一杯のビラとティッシュを持ち、ありさは事務所を出た。

「全く……」

俺は椅子に沈み込んだ。

（一時の勢いで警視庁（さくらだもん）を飛び出したのは、やっぱり間違いだったのかな？）

そんな事まで思ってしまう。

（いや、そんな事はない。あのまま警視庁にいれば、俺はあの腐れ刑事部長に取り込まれていたかも知れないんだ）

ちなみにその腐れ刑事部長は現在塀の中だ。

更にちなみに、奴の名字は東海林ではない。そして娘の名前は慧璃茄ではない。

「ありさにだけビラ配りをさせるのは可哀想だな」

そう思い直した俺は、事務所を閉めて駅前に行った。

何だか知らないが、人だかりができている。

何だ？　気になったので近づいてみた。

「という具合に、この杉下左京という男は、ロリコンでスケベで、どうしようもないクズなのです」

ありさが俺の恥ずかしい写真をたくさんコルクボードに貼って、おかしな講談をしていた。

「何してるんだ、てめえは！？」

俺はコルクボードを叩き割ってありさに詰め寄った。

「あはは、事務所を留守にしちゃっていいの、左京？　依頼の電話が入っているかもよ？」

玉のような汗を掻きながら、ありさが言う。

「平気だよ。電話は俺の携帯に転送になる。心配せずに警察に行ける」

もう許せない。こいつには昔取り返しがつかなくなるような迷惑

をかけたが、もうそれは関係ない。

「ひいいん、許してよお、左京う」

ありさは得意の嘘泣きで俺を懐柔しようとするが、そんな手に引っかかるような俺ではない。

その時、携帯が鳴った。

「はい、杉下左京探偵事務所です」

俺は華麗に電話に出た。もちろん、片手でありさの首根っこを捕まえたままだ。

「あ、左京さん、樹里が病院に行きました。生まれるみたいです」

璃里さんからだった。え？　生まれる？　何が？　一瞬記憶が混濁する。

「すぐに病院に向かってください。私も母と合流して行きますので」

「は、はい！」

俺はありさの事を完全に忘れ、そのまま事務所の駐車場へと走ると、愛車に乗り込み、樹里が行った産婦人科に向かった。

喜びと不安がない交ぜになり、俺は無我夢中で車を走らせた。

よく事故を起こさなかったと思う。

産婦人科に到着すると、璃里さんと由里さんがいた。

「今樹里は分娩室に入ったところよ、左京ちゃん」

何故かウィンクして言う由里さん。相変わらずだ。

俺達はすぐさま樹里の入った分娩室の前に向かった。

「おぎゃあおぎゃあ！」

いきなり聞こえる赤ん坊の泣き声。えええ？　もう生まれたのか？

隣の分娩室だろ？

「おめでとうございます、女の子です」

中から出て来た樽のような体型の看護師さんが告げた。

「もう生まれたんですか！？」

俺は璃里さんや由里さんと顔を見合わせてから尋ねた。

「はい。ウチの最短記録ですよ、お父さん」

樽さん、あ、いや、看護師さんは笑顔で応じた。

お父さん。そうか、俺、お父さんになったのか……。何だか実感が湧かない。

「樹里に会えますか？」

俺は看護師さんに訊いた。

「ええ、会えますよ。どうぞ」

俺達は分娩室に入った。

「樹里」

分娩台に横になり、隣にシーツのようなものに包まれて寝かされている生まれたばかりの俺達の子供を見ていた樹里は俺の声に反応して、こちらを見た。

「左京さん」

樹里はいつも通り笑顔全開だ。

「頑張ったな。ありがとう、樹里」

「左京さん」

俺は樹里の目に浮かぶ涙を見て、グッと来てしまった。

「樹里、お疲れ様」

璃里さんと由里さんが樹里を労った。

「ありがとう、お母さん、お姉さん」

樹里の目から涙が零れた。俺も泣きそうだ。

「左京さん」

樹里が潤んだ目で俺を見る。

「何だ？」

俺は樹里を見つめた。樹里はまた笑顔全開になり、

「覚えていますか？　二年前の今日、私達は初めて会ったのですよ」

「え？」

樹里の言葉で、俺はあの悪夢のようなファーストコンタクトを思い出した。

あの時は樹里にイラついてばかりいた俺だったが、今は違う。

「樹里、ありがとう。俺はこれからも頑張るよ」

俺は樹里の頬を撫でながら言った。樹里は俺の手に自分の手を添えて、

「私こそ、左京さんに感謝しています。あの時、もしあのまま私が犯人にされていたら、今ここにこうしていられなかったのですから」

樹里の言葉に俺は感動した。

「樹里！」

俺は先生や看護師さん、それに璃里さんと由里さんがいるのも気にせず、樹里に口づけした。

樹里の手が俺の首に回る。

初めてした時より熱い口づけだった。

めでたし、めでたし、だ。

樹里ちゃん、皆にお祝いされる

御徒町樹里は、世界に進出する企業グループの代表である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

樹里は九月十一日、女の子を出産しました。

奇しくもその日は、杉下左京と樹里が初めて出会った日でした。

作者が寸前に気づいて無理矢理こじつけたのは内緒です。

樹里はすでに産婦人科から退院し、実家である母親の由里の家に戻っていました。

夫である杉下左京は、今後の生活費を稼ぎ出すために今日も五反田駅の前でティッシュ配りです。

「樹里、おめでとう。羨ましいなあ、本当に」

親友の船越なぎさが、恋人の片平栄一郎と共にお祝いに訪れました。

母親の由里は仕事に出ていて、いるのは樹里と赤ちゃんのみです。

「ありがとうございます」

樹里は赤ちゃんを抱いたままで深々とお辞儀をしました。

「あー、いやいや、樹里さん、危ないですから、お辞儀しなくていいですよ」

栄一郎が慌てて言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「可愛いなあ。私達も早く赤ちゃん欲しいね、栄一郎」

なぎさがニコッとして言います。

「あー、いやいや、僕はまだ日本の法律では、あと三年は結婚できませんから」

栄一郎は真面目ですから、そんな返答をしてしまいます。

「へえ、そうなんだ。知らなかった」

なぎさは何も知らずに言ったようです。

「明日にでも結婚して、子供を作ろうと思ったのに」

なぎさがあっけらかんとした顔で凄い事を言ってのけたので、栄一郎は鼻血が出そうです。

皆さん、お忘れでしょうが、なぎさはとっても可愛い女の子なのです。性格はあれですが。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「そう言えばさ、赤ちゃんの名前は決まったの？　私も考えて来たんだけど」

なぎさが図々しい事を言いました。

「名前は左京さんがつけました」

樹里は笑顔全開で言いました。

「そうなの？　何だ、つまんない」

なぎさは口を尖らせて不満そうです。

「あー、いやいや、なぎささん、普通子供の名前は親がつけるものですよ」

栄一郎が笑顔でなぎさを窘(たしな)めます。

「ええ？　私の名前は、お祖父ちゃんがつけてくれたんだよ」

なぎさはムッとして言いました。いえ、それでも貴女に名付け親になる権利は微塵もありませんから。

「お名前は何ていうのですか？」

栄一郎が樹里に尋ねました。

「瑠里(るり)です」

樹里は笑顔全開で言いました。

「るり？　普通だね。私が考えたのは、二等辺三角形の等と書いて、イコールだよ」

なぎさが自分が名前を書いて来た半紙を見せます。

等もイコールも、女の子の名前とは思えません。何を考えているのでしょうか？

「なるほど、王偏に留守番の留で、りは里(さと)ですか」

栄一郎は左京が書いた名前を見せてもらいました。

あまりに拙い字なので、もう少しで笑いそうです。

「でも、どうしてこの字なんですか？」

栄一郎が尋ねました。

「瑠は左京さんが考えました。里は、女の子に必ずつけるのが、ウチの仕来りです」

樹里は笑顔全開で言いました。瑠里と名付けられた赤ちゃんは、その間中ずっとスヤスヤと眠っていました。

「いい名前ですね。さすが、杉下さんです」

栄一郎はお世辞でなくそう思いました。

「そうかなあ。イコールの方がいいと思うけど」

なぎさはまだ納得していないようです。

やがて、そこに警視庁の神戸蘭（かんべらん）警部とその恋人の平井拓司（ひらいたくし）警部補が来ました。

「おめでとう、樹里」

「ありがとうございます、蘭さん」

蘭は平井警部補を見て、

「私達も早く赤ちゃん欲しいわね」

と囁きました。何故かむせる平井警部補です。

「樹里さん、遅くなりました」

加藤警部と宮部ありさがやって来ました。

「あれあれ、二人は付き合ってるのかな？」

蘭が冷やかします。

「こんな奴と付き合う訳ないだろ！」

加藤警部とありさの見事なハモり突っ込みです。

「今日は左京は来ないの？」

蘭が尋ねました。

「左京さんはお仕事です」

樹里は笑顔全開で応じます。蘭はすかさずありさを見て、

「あんたは何でここにいるのよ？」

「私は虚弱体質だから」

ありさはテヘッと笑って誤魔化します。

呆れる蘭です。

その頃、左京は駅前で必死になってビラを配っていました。

（今頃、みんな、樹里のところに行ってるんだろうなあ）

左京は溜息を吐き、一休みです。

彼が樹里の実家に行かなかったのは、仕事ばかりが理由ではあり

ません。

瑠里の名前の元にあるのです。

（あの場にいれば、絶対に理由を訊かれるからなあ）

左京は空を見上げて思いました。

（まさか、小松崎瑠希弥（こまつざきるきや）さんからいただきました、とは、口が裂けても言えないもんなあ）

相変わらずどうしようもない夫でした。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、左京と瑠里と三人で出かける

御徒町樹里は、愛する夫杉下左京との間に生まれた可愛い女の子、瑠里（るり）と実家に里帰りしていました。

夫の杉下左京のアパートは環境が劣悪なので、赤ん坊の瑠里を育てるのに適していないからです。

樹里の母親の由里も、再来月の十一月には出産です。

そのため、今から樹里を実家に居着かせる作戦を決行中らしいです。

「でも、たまにはお父さんに会いたいかな、瑠里も？」

由里はベビーベッドで眠る瑠里を見ながら樹里に尋ねます。

「左京さんと出かけていいですか、お母さん？」

樹里は笑顔全開で尋ねました。

「行っておいで、樹里。左京ちゃんも、瑠里に会いたがっていると思うよ」

由里も笑顔全開で答えました。

こうして、樹里は瑠里をベビースリングを使って身体の前に抱え、

由里の家を出ました。

どう見ても母親には見えない樹里は、駅のホームで注目の的です。

「偉いわね、お嬢ちゃん。妹さんのお守り？」

年配の女性が微笑んで尋ねました。

「いえ、私の娘です」

皆がとても驚きます。

「お嬢ちゃん、父親はわかっているの？　養育費は大丈夫なの？」

皆に心配される樹里です。

「大丈夫ですよ」

樹里は笑顔全開で応じます。でも、養育費は不安かも知れません。

そのせいではないのでしょうが、瑠里が目を覚まし、泣き出します。

「お腹が空いたのですね」

樹里は姉の璃里が使っていた授乳用の服を着ているので、素早く授乳を始めます。

それを見て、周囲の人達は本当に樹里が母親なのだと知り、また驚きます。

やがて瑠里は満腹になったのか、スヤスヤと眠り始めます。

樹里は授乳をやめ、眠っている瑠里を優しい微笑みで見つめます。

その姿を見て、手を合わせて拝み始めるお婆さんがいました。

樹里は電車を降り、左京のアパートに向かって歩き出しました。

「樹里！」

そこへ左京が走って来ます。

「言ってくれれば、迎えに行ったのに」

左京はゼイゼイ息をしながら言いました。

「そうなんですか」

樹里はそんな左京を笑顔全開で見て、

「汗が凄いですよ、パパ」

とハンドタオルで左京の顔を拭います。

「ああ、ありがとう、樹里」

左京はタオルを受け取り、顔を自分で拭きながら、

「え？」

と思い返します。

「さっき、パパって言った？」

左京は樹里に尋ねます。

「はい。ママではありませんから」

樹里は笑顔全開で言いました。

「それはそうなんだけど……」

しばらくぶりに樹里にイラッとしそうになる左京です。

二人はそのまま公園まで歩きました。

「重くないか？　俺が抱こうか？」

左京は樹里を気遣って言いました。

「大丈夫ですよ、パパ」

また樹里が言ったので、ニヘラッとする左京です。

「あのベンチで休もうか」

左京は樹里を支えながら、ベンチに座らせます。

「まだそんなに経っていないはずなのに、大きくなった気がするなあ」

左京は眠っている瑠里を見て呟きます。

「二百グラム体重が増えましたよ」

樹里が言います。左京は、

「それくらいでわかるものなのかなあ」

「わかりますよ。左京さんは瑠里のパパですから」

樹里が笑顔全開で左京を見ます。何故かその樹里の顔にキュンとなる左京です。

（可愛いな、樹里は……）

相変わらずエロい左京です。今にも押し倒しそうです。

「誰がそんな事するか！」

左京は地の文に切れました。

そんな左京の邪な考えを感じたのか、瑠里が目を覚まします。

「おお！」

泣き出した瑠里を見て、璃里の娘の実里（みり）に泣かれた事を思い出し、ビビる左京です。

「もうお腹が空いたのですか」

樹里が泣いている瑠里に話しかけます。

「はい」

左京は瑠里の顔を覗き込んでいたので、樹里が授乳するために服の脇を開いたのをふと見ました。

「ぶ！」

左京は仰天しました。目の前に樹里の「マシュマロ」がニュッと見えたからです。

「おおお！」

慌てて身体を起こし、樹里から離れます。

そこからは樹里の「マシュマロ」は見えません。ドキドキしている左京です。

左京は周囲に覗きがいないか見渡します。

「どうしたんですか、パパ？」

樹里が不思議そうな顔で左京を見上げます。

「いや、何でもない」

空を見上げるフリをして、間近に見た樹里の「マシュマロ」のせいで出そうになった鼻血を誤魔化す左京です。

（俺は何を考えているんだ？　樹里は授乳という神聖な行為をしているのに……）

自分の邪さ加減に項垂れる左京です。すると鼻血が出そうになったので、また空を見上げます。

「パパは面白いですね、瑠里」

授乳を終えた樹里が、下を向いたり上を向いたりしている左京を瑠里と一緒に見ていました。

二人の笑顔はまさしくそっくりです。

めでたし、めでたし。

樹里ちゃん、瑠里と共に仕事に復帰する

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

只今、育児休暇中で、娘の瑠里と共に実家である母親の由里の家にいます。

「そろそろ辛くなって来たわ」

由里も妊娠しており、十一月に出産予定です。四十路なので、高齢出産ですが、璃里、樹里、真里、希里、絵里と五人も産んでいるのでベテランです。

出産には不安はないのですが、やはり高齢なので、体力的にきつくなるのが早いようです。

父親である西村夏彦氏は、居酒屋を従業員に任せて駆けつけていました。

「由里たん、大丈夫か？」

西村氏は、由里を気遣っています。

「ええ、大丈夫よ、夏たん」

二人はバカップルのような会話をかわします。

「という訳だから、私はもう産休に入ります」

由里は照れ笑いをして樹里に言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「左京ちゃんの事務所も暇そうだし、璃里も育児が一段落したみたいだから、また二人で居酒屋を盛り立ててよ。翠（みどり）ちゃんだけだと、厳しいでしょ？」

相変わらず調子のいい由里です。翠は樹里の従妹で、樹里の代わりに居酒屋で働いています。

「わかりました」

樹里は二つ返事で承諾しました。そして西村氏を見ると、

「居酒屋は璃里お姉さんに応援してもらわなくても私と翠ちゃんで大丈夫です」

「そうなんですか」

思わず樹里の口癖を真似てしまう西村氏です。

こうして樹里は、早くも職場復帰です。

居酒屋で働き始めるのに、メイドの仕事を休むのはまずいと考え

た樹里は、五反田氏に連絡しました。

「ええ？　もう復帰するのかね、御徒町さん？」

五反田氏は驚いているようです。

「はい。もう大丈夫ですよ」

「そうか。御徒町さんが大丈夫なのなら、是非お願いしたいのだが」

五反田氏は言いました。樹里は更に、

「瑠里を連れて行ってもよろしいでしょうか？」

「ああ、もちろんだよ。すぐにベビーベッドや必要なものをあつらえよう。ほとんどは娘の麻耶のもので足りるだろうがね」

五反田氏の心遣いに樹里は、

「ありがとうございます、旦那様」

とお礼を言いました。

樹里は、翌日、五反田邸に行きました。

樹里が瑠里を連れて来ると聞いている警備員さん達は全員集合して、門の前で待っていました。

「おおお！」

そしてスヤスヤとベビースリングの中で眠る瑠里を見て感動する警備員さん達です。

「可愛いですね」

「ありがとうございます」

樹里は笑顔全開で言いました。

「樹里さーん！」

見習いメイドの赤城はるなが手を振りながら駆けて来ます。

「ああ、キャ……」

「私ははるなです、樹里さん！」

どうせ違う事を言われるのだろうと思っても突っ込むはるなです。

「ああ、キャビーさん、ドロントさん達はお元気ですか？」

はるなはスッテンと転びます。そして、また警備員さんにパンツを見られました。

「そのままですか！」

でも、久しぶりに樹里と会えて嬉しいはるなです。

「有栖川さんと黒川さんはここを辞めました。有栖川さんはアメリカへ、黒川さんはイギリスへ行きました」

はるなはそう言いながら涙ぐみます。ドロント一味ははるなことキャビーの更生を願い、彼女だけ五反田邸に残して去ったのです。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。はるなはちょっとだけ引いてしまいましたが、

「わあ、可愛い！」

と眠っている瑠里を見て叫びます。その途端、瑠里が目を覚まして泣き出しました。

「ああ、ご、ごめんなさい、樹里さん」

はるなはオタオタしましたが、

「お腹が空いたのですね」

と樹里は言い、さっと授乳を始めました。

「うおお！」

警備員さんは樹里の手際の良さと、チラッと見えた「マシュマロ」に感動しました。

「わあ」

はるなはおっぱいを飲む瑠里の様子を見て感動しています。

やはり女の子は反応が違うのです。

（にしても、樹里ちゃん、おっぱいがでかい！）

樹里が隠れ巨乳なのを知って少しだけショックなはるなです。

「ああ、そうだ、ベビーベッドを客間の一つに設(しつら)えましたから、赤ちゃんはそこに寝かせてください」

はるなは思い出したように言いました。

「そうなんですか」

樹里は授乳を終えて、笑顔全開で言いました。

瑠里をベッドに寝かせ、樹里は早速はるなと共に仕事を始めます。

「いいのですか、ここに残って？」

二人きりになった時、樹里が突然言いました。はるなはビクッとしましたが、

「な、何の事ですか、樹里さん？」

と惚けます。樹里は笑顔全開で、

「ドロントさん達とお別れして、いいのですか？」

「あ……」

樹里に尋ねられて、はるなは思わず涙してしまいます。

「樹里さーん、私も寂しいんだよお！　でも、首領とヌートさんが優しくて……」

はるなは樹里に抱きついて泣きじゃくりました。

「そうなんですか」

樹里も心なしか、涙ぐんでいるようです。

「でもね、はるなさん、私は思うのです」

樹里は真顔で続けました。

（樹里ちゃんの真顔、初めて見た気がする……）

はるなは何故か感動しました。

「生きていれば、またきっと会えます。そして、ドロントさんとヌートさんも、きっと泥棒さんをやめていると思いますよ」

樹里ははるなの手を握って言いました。はるなはキョトンとして、

「どうしてそう思うんですか？」

すると樹里はまた笑顔全開になり、

「きっと探偵事務所を開業していると思いますよ」

「はあ？」

意味不明なはるなです。完全に内輪ネタです。

その頃、不甲斐ない夫の杉下左京は、あるチラシを見て唖然としていました。

「み、水無月探偵事務所ォッ！？」

それは女性スタッフのみの探偵事務所のチラシです。

そこには、見覚えのある顔の女性が写っていました。

グウタラ所員の宮部ありさです。何故かベテラン探偵となっています。

「そう。そこで働く事にしたから、辞めるわ、ここ」

ありさは笑顔全開で言いました。

「おい、ここの所長、何か見覚えないか？」

人の顔をすぐに忘れる左京に言われ、ありさは、

「はあ？　何訳のわかんない事言ってんのよ？　バッカじゃない」

と言い捨てると、事務所を出て行きました。

左京はありさが辞める事に関しては全く異存はないので、引き止めませんでした。

「おかしいなあ。絶対にこの女、会った事があると思うんだけど」

左京が見ているありさと一緒に写っている女性はドロントとヌートです。

「住所は……」

よく見ると、目の前のビルです。

「何ーッ！？」

驚いて窓の向こうを見ると、手を振っている女性がいます。

「貧乳、てめえ、何でそんなとこで探偵事務所開いてるんだよ！？」

左京は窓を開けて怒鳴りました。するとドロントらしき女性がフッと笑って、

「さあねえ」

と肩を竦めて惚けました。

「うおお！　どうなっちまうんだ、俺の事務所は？」

左京は項垂れました。

めでたし、めでたし。

「めでたくねえよ！」

地の文に突っ込む左京でした。

樹里ちゃん、高名な推理作家に訪問される

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

娘の瑠里を出産して二週間ほどで仕事に完全復帰です。

瑠里は五反田氏の好意で作られた部屋のベビーベッドで大人しく眠っています。

いつものように樹里と見習いメイドを卒業してメイドに昇格した赤城はるなが広い庭を掃除しています。

そこへ上から目線の大きなリムジンが現れました。

言わずと知れた高名な推理作家の大村美紗のリムジンです。

今日は何をしに来たのでしょうか？

「ご機嫌よう、樹里さん、愛さん」

美紗はリムジンを降りると、上から目線で言いました。

「いらっしゃいませ、大村様」

樹里とはるなは深々とお辞儀します。

（このクソババア、まだ私の名前を覚えられないのか？）

はるなは頭を下げた状態で思いました。

「娘のもみじから聞きましたの。お子さんが産まれたのでしょう?」

美紗は「この私がお祝いに来てやったんだよ、ありがたいと思え」という顔で言いました。

「はい。お陰様で無事に産まれました」

樹里は笑顔全開で言いました。美紗は悪い魔女のような顔で笑い、

「お子さんに会えるかしら?」

「はい」

樹里は早速美紗を瑠里がいる部屋に案内します。

「お名前は何てつけましたの?」

廊下を歩きながら、美紗が尋ねます。

「瑠里です」

樹里が答えました。

「るり?　どん字を書きますの?」

美紗が更に尋ねます。

「王偏に留守番の留で、りは里です」

樹里は笑顔全開で言いました。

「瑠と里ですの」

また美紗は悪い魔女のような顔で言います。

あ、元々悪い魔女顔でしたね。

「何だか、このお邸に来ると、悪口が聞こえる気がするのは何故かしら？」

美紗は天井を見渡して呟きました。

「瑠里という名前は、女の子の名前にはあまりよろしくないわね、樹里さん。字を変えた方がよろしくてよ」

美紗は急にバッグから本を取り出して言いました。

「そうなんですか」

そんな話をしているうちに瑠里のいる部屋に着きました。

「申し訳ありません、まだ眠っています」

樹里が言うと、美紗は、

「いいのよ。顔を見たかっただけだから」

と言い、そっとベビーベッドに近づきます。

すると、さっきまでスヤスヤ眠っていた瑠里が、まさしく火が点いたように泣き出しました。

「ひ！」

シャレではありません。美紗はいきなり瑠里が泣き出したので、びっくりして後退りました。

「お腹が空いたみたいですね。失礼します」

樹里は瑠里を抱き上げて、授乳を始めました。

すると魔女顔の美紗が自分の娘のもみじが赤ちゃんだった時を思い出し、涙ぐみます。

魔女の目にも涙でしょうか？

「いくつになっても、女は赤ん坊がおっぱいを飲むのを見ると嬉しくなるわね」

「そうなんですか」

樹里は授乳しながら笑顔全開で応じました。

「さっきはごめんなさいね、名前を変えろなんて言ってしまって」

美紗は涙をハンカチで拭いながら言いました。

美紗が謝るなんて、天変地異の前触れでしょうか？

「お気になさらないでください。私の母も占い師ですので、瑠里の名を変えるように言われました」

樹里は授乳を終え、「マシュマロ」をしまいながら言います。

「でも、瑠里の瑠は、夫が考えてくれたものですから、変えられないと母には言いました」

樹里はまたスヤスヤ眠り始めた瑠里をベッドに寝かせながら言いました。

「そうなの。樹里さんはご主人の事が大好きなのね」

美紗が言いました。すると樹里は笑顔全開で、

「はい。大好きです」

と答えました。夫の杉下左京が聞いていれば、号泣している事でしょう。

でも、樹里は知らないのです。左京がある高名な美人霊能者の名前から「瑠」をいただいた事を。

しばらく樹里と美紗は赤ちゃんの事で話をしました。

「あらもうこんな時間。帰らないといけないわ」

美紗はスイス製の高級腕時計を見て言いました。彼女はしばらくこれ見よがしに時計を樹里に示しますが、樹里は、

「そうなんですか」

と言ったきりで、何の興味も示しません。

美紗は軽くショックを受けますが、彼女は知らないのです。

樹里は五反田邸の一室にある「時計コレクション」を毎日見ながら掃除をしている事を。

そこには美紗の時計の何十倍も高い時計が幾百とあるのです。

ですから、樹里には美紗の時計はごく一般的な時計にしか見えないのです。

「か、帰りますわね」

美紗はショックを隠し切れず、項垂れたまま玄関へと向かいます。

そこへ「追い討ち」が登場します。

「あれえ、叔母様！　いらしてたの？　全然知らなかったわ」

船越なぎさが、彼氏の片平栄一郎と現れたのです。

「ひいい！　なぎさ？　なぎさ？」

美紗は廊下に倒れてしまいました。

「あーいやいや、しっかりしてください、大村さん！」

栄一郎が慌てて美紗を抱き起こします。

「な、なぎさ、なぎ……」

美紗はそのまま気を失ってしまいました。

「叔母様ったら、おふざけが過ぎるわよ、もう」

美紗が冗談で気を失ったフリをしているだけだと思っているなぎさは大笑いしています。

「そうなんですか」

樹里も笑顔全開です。

「あーいやいや、大村さんは本当に気を失っていますよ、なぎささん、樹里さん」

一人で慌てている栄一郎です。

めでたし、めでたし。

「めでたくなんかなくてよ！」

気を失ったままで美紗が叫びました。

樹里ちゃん、様々な人と再会する

御徒町樹里は、日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

今日も愛娘の瑠里を抱いて、五反田邸に出勤します。

「おはようございます、樹里さん、私は赤城はるなです」

見習いメイドから専属メイド二人目になった赤城はるなが、樹里のボケを封じようと先手を打った挨拶をします。

「おはようございます、キャビーさん」

先手は無駄でした。樹里は暴投して来ました。項垂れるはるなです。

「庭掃除は私がしました。お部屋の掃除をこれからするところです」

それでもはるなは笑顔全開で言いました。

「はるなさん」

樹里は庭に落ちていた紙くずを拾い上げてはるなに見せます。

「い！」

まさか樹里にそんな姑（しゅうとめ）のいびりのような事をされると思わなかったはるなは蒼ざめました。

「折角掃除してもらったのに、瑠里が汚してすみません」

樹里は申し訳なさそうに言いました。

瑠里が持っていた紙が落ちたようです。

「……」

魂が抜けてしまいそうになるはるなです。

瑠里に授乳をしてベビーベッドに寝かせると、樹里は掃除に取りかかりました。

（何度見ても樹里ちゃんのおっぱいは大きいなあ）

自分のと比べてショックが隠し切れないはるなです。

それはそうです。見るたびに大きさが変わったらホラーです。

樹里とはるなは午前中に邸の半分の掃除を終えました。

「二人だと仕事が捗りますね」

はるなは額の汗を拭って言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「ところで、ドロントさんは探偵さんになったそうですね」

樹里がいきなり核心に触れたので、はるなは顔を引きつらせました。

「あ、はい。首領は私を更生させる為にここに残らせるって言っといて、自分達はちゃっかり違う仕事を始めて……」

はるなは話しながら涙ぐみました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「でも、私ははるなさんが残ってくれて、嬉しいですよ」

樹里にそう言われて、はるなは遂に泣き出してしまいます。

「樹里さあああん！」

はるなは樹里に抱きつきました。

「はるなさん」

樹里はちょっとだけ驚いたようですが、優しくはるなを抱きしめました。

さて、そのドロント達はと言いますと。

「勢いでここに事務所を開きましたけど、これから先どうするつもりですか、首領？」

黒のスカートスーツがやけに似合う黒川真里沙ことヌートが尋ねました。

「ほとぼりを冷まして、また仕事を始めるわ。ここにいれば、あのヘボ探偵の動きも、警視庁の特捜班の動きもわかるしね」

アイボリーホワイトのスカートスーツを着た水無月葵こどドロントは言いました。

「なるほど」

ヌートは窓の向こうに見える「杉下探偵事務所」のカッティングシートの文字を見ます。

するとその動きに気づいたのか、杉下左京が窓を開けてこちらを見ました。

「おはようございます」

ヌートはニコッとして挨拶します。何故か左京は顔を赤らめて、

「お、おはようございます」

と言うと、慌てて窓を閉じて離れました。

「どうしたのかしら？」

ヌートは、左京がヌートがあまりに美人なので恥ずかしくなったのを知りません。

「貴女とあのヘボ探偵、顔を合わせた事がなかったっけ？」

ドロントがヌートの隣に来て言いました。

「そう言えば、そうかも知れませんね」

するとそこへ、宮部ありさが現れました。

「おっはようございます！」

左京の事務所には、ラフな格好で来ていたありさも、水無月探偵事務所では、グレーのスカートスーツです。

「おはようございます」

ドロントとヌートが挨拶します。

「こいつも使えるから、うまく利用してね」

ドロントはヌートに耳打ちしました。

「はい」

ヌートはありさに微笑んだままで応じました。

左京は、ヌートと目が合ってしまったので、慌てて窓から離れました。

（結構美人だなあ。あの子も泥棒なんだろうか？）

つい鼻の下を伸ばす左京です。

「おっといかん、仕事だ」

今日は珍しく仕事があります。ビルのオーナーの飼い猫がいなくなったのです。

左京は捜索を一日一万円で引き受けました。

（なるべく見つからない方がいいな）

そんな姑息な事を考える左京です。（姑息の使い方が誤用なのは承知しています　作者）

やがて夕方です。

「お疲れ様でした」

樹里は瑠里を抱いて邸を出ました。

「また明日ね、瑠里ちゃん」

はるなはスヤスヤ眠る瑠里に小声で話しかけます。

「お疲れ様でした」

樹里ははるなに挨拶し、警備員さん達にも挨拶して帰りました。

「いいなあ、赤ちゃん。私も欲しいなあ」

はるなは言いました。

「私で良ければ、協力は惜しみませんよ、キャビーさん」

どこからか声が聞こえます。

「誰？」

はるなはキッとして周囲を見渡します。

「私ですよ、キャビーさん」

すると門の外にあの亀島馨が立っていました。

「亀ちゃん！　もう出て来られたの？」

はるなは懐かしくなって近づいて尋ねました。すると亀島は、

「刑務所には行ってません。不起訴ですよ。ある人が助けてくれましてね」

と後ろを見ます。そこには、あの六本木厚子が立っていました。

「ああ！　アホのあっちゃん！」

思わず指差して叫んでしまうはるなです。

「失礼ね！　私は六本木厚子よ。有名な空間クリエーターよ」

ない胸を張る厚子です。

「貴女だって、この前特捜班に逮捕されたはずでしょ？」

はるなが指摘すると、厚子はニヤリとして、

「不起訴よ、不起訴。何の証拠もないんだもん」

と言ってから、

「でも、あのイケメンさんの取り調べ、もっと受けたかったなあ、厚子は」

クネクネして恥じらってみせたので、思わず吐き気を催すはるなです。

「ドロントに伝えて。貴女が潜伏している間に私が天下を獲るってね」

厚子はまたすぐに消えてしまう煙幕を張り、亀島と共に逃走しました。

「何なのよ、あの人達？」

首を傾げるはるなです。

「こんばんは、亀島さん」

樹里は逃走する厚子と亀島を見かけて声をかけました。

「うわっと、樹里さん！」

亀島は名残惜しそうに駆け去りました。

「忙しそうですね、亀島さん」

樹里は笑顔全開で言いました。

左京は、結局猫を見つけられず、誰からも猫を見つけたという情報も入らず、嬉しそうに事務所に戻りました。

「あれ？」

誰もいないはずの事務所に明かりが点いています。

（もしかして、ありさが何かを盗みに来たのか？）

そんな事を思う左京もどうかと思いますが、そんな風に思われてしまうありさもどうかと思います。

そっとドアを開くと、樹里が瑠里を抱いてソファに座っていました。

「樹里！」

左京は嬉しくなって声をかけました。

すると、その声に驚いた瑠里が目を覚まし、泣き出しました。

「わわっと！」

焦る左京ですが、樹里は、

「お腹が空いたのですよ、左京さん」

と言うと、ひょいと「マシュマロ」を出して授乳を始めます。

「……」

角度的に完全に樹里の「マシュマロ」を見てしまった左京は鼻血を止めるため、机の上のティッシュを詰めました。

奥さんの「マシュマロ」を見て鼻血を出す夫って、変態ですね。

「うるせえ！」

左京は地の文に切れました。

「それより、今日はどうしたんだ、樹里？　何かあったのか？」

左京は鼻ティッシュのままで樹里に尋ねました。

「今日、亀島さんを見ました」

樹里は瑠里を寝かしつけながら言いました。

「亀島？」

左京はまた瑠里が起きると困るので、小声で尋ねます。

「はい。確か、六本木厚子さんという方と一緒でしたよ」

樹里の言葉に左京は仰天しました。

（あのバカ、今度はベロトカゲの所に行ったのか……）

左京は項垂れてソファに座りました。

ドロントが探偵になって、アホのあっちゃんが亀島と組み、左京は猫を探す。

いよいよ見逃せない展開です。（違います　作者）

樹里ちゃん、ベロトカゲと対決する

御徒町樹里は日本有数の大富豪である五反田六郎氏の邸の専属メイドです。

更に最近では、居酒屋の料理人としても復帰を果たしています。

久しぶりの「樹里ちゃんスペシャル」を食べようと、マニアが列を成し、デモと勘違いされて通報されたそうです。

皆さん、通報には注意してください。逆恨みで通報される事もあるようです。

樹里の復帰で、近所の居酒屋が危機感を抱き、通報したらしいです。

証拠はないので、店長とその妻である樹里の母親の由里はどうする事もできないようです。

そして今日も、五反田邸での仕事を終え、樹里は居酒屋に向かいます。

「また明日よろしくお願いします、樹里さん」

出番が少ない赤城はるなが涙ぐんで樹里を見送りました。

「お疲れ様でした、キャビーさん」

最後に爆弾を投下して去る樹里です。はるなは項垂れました。

でも最近、それが快感のはるなです。

「違うわよ！」

はるなは地の文に切れました。

樹里がベビースリングで眠っている瑠里と共に居酒屋を目指していると、

「ホーホッホ」

夜なのに鳩が鳴きました。宇宙鳩でしょうか？

「誰が鳩山由紀夫だ！」

声が切れます。

「私よ、私」

牛乳瓶の底みたいな眼鏡をかけたショートカットの黒尽くめの変な女性が現れました。

「誰がメーテルよ！」

どんだけポジティブなんですか、貴女は？

「六本木厚子さんですね？」

樹里が笑顔全開で言いました。厚子はフッと笑って、

「そう。またの名をベロトカゲ。ドロントに代わって夜の世界を席巻するわ」

と妙なポーズをとって言います。

「牛乳石鹸ですか？」

樹里が尋ねました。

「その石鹸じゃないわよ！」

厚子は切れました。牛乳瓶の底のような眼鏡がギラッと光ります。

「今度は優秀な部下の亀ちゃんがいるから、貧乳のドロントには負けないわよ」

厚子の後ろに黒のつなぎを着た亀島が現れました。

「樹里さん、杉下さんに伝えてください。貴方の探偵事務所は私達が潰しますと」

亀島はニヤリとして言いました。

（樹里さんは杉下さんと子供まで作ってしまった。もう私は失うものは何もない）

亀島は「杉下左京憎し」で凝り固まっているのです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「じゃあね！」

厚子がまたすぐに消えてしまう煙幕を出し、亀島と逃走しました。

樹里は、居酒屋で姉の璃里と交代する時に厚子達の事を話しました。

「そうなの。亀島さん、反省していないのね。というか、そこまで左京さんが憎いのかな」

璃里は亀島を警察に引き渡した時、今度こそ更生してくれると思っていただけに悲しそうです。

「直接対決して、左京さんが亀島さんを説得するしかないわね」

璃里が言いました。

「そうなんですか」

樹里はアパートに帰ると、左京に話をしました。

「そうか。あのバカ、そんなに俺が憎いのか」

左京は怒りよりも寂しさを感じました。

(確かにあいつの事は大嫌いだが、あいつに恨まれる覚えはないぞ)

左京は、亀島が未だに樹里の事を忘れられないのを知りません。

恋の恨みはそう簡単には晴れないのです。

「しかも、向かいのビルには貧乳らしき探偵が入って、あのバカ女が転職しやがったしな」

左京はまだ整理がついていない元グウタラ所員の宮部ありさの机を見ました。

「ありささんはスパイとして潜入したと言っていましたよ」

樹里が笑顔全開で言います。

「ええ?」

衝撃の事実を知る左京です。

(いや、あいつに限ってそんな殊勝な考えは持たない。樹里は騙されているんだ)

疑い深い左京です。主人公に相応しくないので、降板させましょう。

「何だと!?」

地の文に狼狽える左京です。

そして、そのありさは、水無月探偵事務所の歓迎会で居酒屋にいました。

樹里が働いている居酒屋ではありません。「〇民」です。

ちなみに〇の中には「自」は入りません。

すでにありさは酔い潰れており、ドロントとヌートの二人で対ベロトカゲ会議中です。

「あっちゃんたら、亀ちゃんを拾ったらしいわね」

ドロントは呆れ顔です。ヌートも首を傾げながら、

「六本木さんもよくわかりませんが、亀島さんもよくわかりません」

「抜けた者同士が知恵を出し合ったところで、私達には敵わないわよ」

ドロントはフッと笑いました。

「そうかしら?」

そこに突然現れる厚子です。何故か〇民の制服を着ています。

「わわ！」

ドロントとヌートは仰天しました。

「どうして貴女がここにいるの！？」

相手が樹里ではないので安心して訊くドロントです。

「貴女達をずっと監視していたのよ」

厚子はドヤ顔で言いますが、眼鏡が邪魔でよくわかりません。

本当はたまたまバイト先にドロントが現れただけですが、それは内緒です。

「今度は私が貴女達を追い詰めてあげるわ。楽しみにしていて」

そう言いながら、

「ご注文の生中と鶏のから揚げですう」

としっかり仕事もして行く厚子です。

「何しに来たのよ、全く。やっぱりアホだわ」

ドロントは去って行く厚子を見て呟きました。

「六本木さん、また皿を割りましたね。今日も時給から相殺です」

厨房で店長にお説教されている厚子です。

めでたし、めでたし。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2762j/

御徒町樹里ちゃんがゆく

2011年10月10日14時41分発行